文人藝術

良友十二月號

附 …大衆


純國産
ヘチマクリーム
若々しく美しい……
お肌を御望みなら ヘチマクリーム
用ひ遊ばせ 特殊の製法によつて造られ
ましたヘチマクリームは 不思議な美粧
作用を持つて居ります
アレ止めに
粉おしろい下に
HECHIMA
FACE CREAM
ヘチマクリーム
G.AMANO&Co
TOKYO
大瓶 七十五錢
小瓶 五十錢
小瓶 三十錢

ア・ネミロフ著
池田壽夫譯
村田意裝

女性の生物學的悲劇

定價金八拾錢
送料金八錢

新ロシアに於て、權力が勞農の手に移行するや、性道德に關するすべての古い考へは自ら崩壞し、歷史的發展はその新法則を探求しつゝある。資本主義國家に於いて女性が、男性快樂の手段であり、利潤の源泉でしかない時においてそこで女性は、對等の權利を持つ同志だ。かくて性の生物學と性慾學とが性道德の基礎となりつつあることは瞭然だ。本書はかかる觀點より世の男性に女性生殖細胞の所有者たる女性に對する注意と顧慮の周到なるべきことを理解せしめるに役立つ名著だ！

ボローヂン夫人著
石井秀平譯
村田意裝
三百頁美本

支那獄中鬪爭記

定價金壹圓
送料金八錢

本書は支那革命に君臨した彼のボローヂンの愛妻が、支那軍閥の手に逮捕せられ、牢獄に呻吟しながらも、プロレタリアートの不撓の意志で、頑強に獄中鬪爭を敢行した、血のにぢむ記錄だ。支那軍閥の內面、支那の獄舍の暴露を通じて、革命家ボローヂンの面目躍如たるものがあり、ローザの獄中よりの手紙よりも切々として吾々に迫るものがある。更にボローヂン監禁に關する法廷記錄と、ソヴエート公使館と支那外交當局との交涉文を添加してあるので、ソヴエート外交の新戰術を學ぶに絕好な名著である。

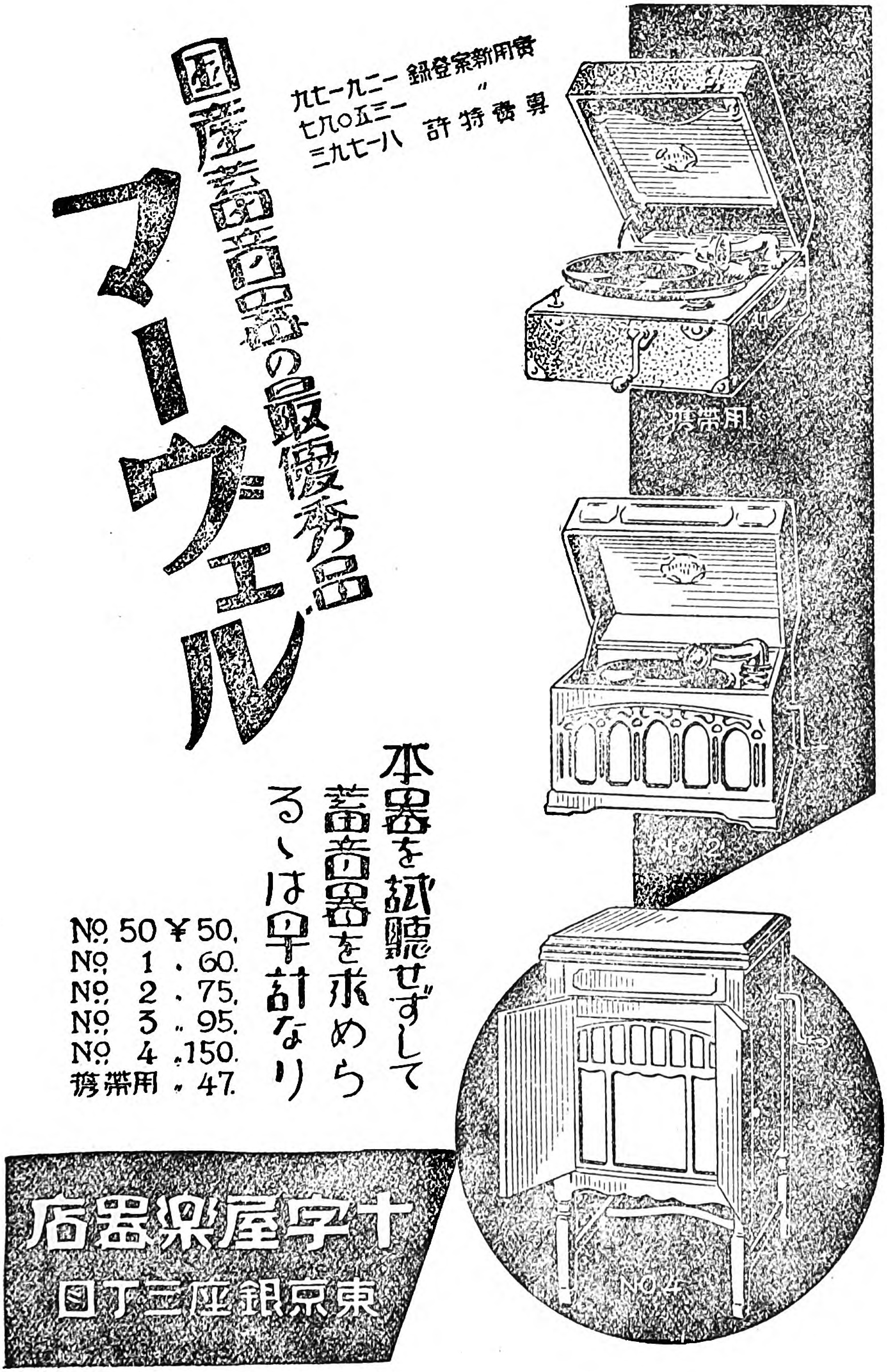
東京市牛込區市ヶ谷田町三ノ二十一
世界社
電話牛込五八六八
振替東京七一五一五八



女人藝術第三巻十二月號目次

――禁轉載――




國產蓄音器の最優秀品
マーヴェル
實用新案登録 一二九一七九
〃 一三五〇九七
專賣特許 八一七九三
携帯用
No. 2
No. 4
本器を試聴せずして蓄音器を求めらるゝは早計なり
No. 50 ¥50.
No. 1 〃 60.
No. 2 〃 75.
No. 3 〃 95.
No. 4 〃 150.
携帯用 〃 47.
十字屋樂器店
東京銀座三丁目



去る四月二十五日完成されたトウルクシープ鐵道の開通式に於けるトルキスタンの建設者達





上、右　キルギス農村風景





下　右　トゥルクシーブ沿線にある電化された農場

左　鐵道開通を見に行くトルキスタン婦人の群

上、中　トウルクシーブ鐵道の枕木を
並べ且つ連結してゐる所









最近非常に盛になつた婦人參政權獲得運動の爲に集合中のアンゴラ婦人の群

女人藝術



十二月號

文藝思想 秋夜講座 ―の二― 女人藝術

英國文藝について

木村毅

一昨年私が英國に居る時に、注目すべき二冊の本が出ました、一はヘリープライスのもので、これは、戰後資本家の施設宜しきを得て、資本主義はこゝで一通り安定したといふ觀點から、ヨーロッパのいろ〳〵の經濟問題を論じたものであります。

それと時を同じうしてオイケンハルネルの本が出た、ところがこれは、資本主義は今行詰て居るといふことを論じて居るのです。一方は資本主義は安定して居るといふ見方をして居る一方は行詰つて居るといふ見方をして居る、同じ材料を扱ひながら、見方が全く違つて居る、これがヨーロッパで非常な評判になりまして、囂々たる世評を呼んだわけであります。

その頃第三インターナショナルの實行部でも議論が二つに別れた、一時指導理論家であつたブハーリンなんかは、資本主義はこゝで一時的安定を得るのではないかといふ觀點を取つたが、スターリンは資本主義は行詰つたといふ觀點を取つた、私共英國に居つて英國を眺めて居ると、失業者を澤山擁して居つて、資本主義は行詰つて居るやうに觀られるのでありますが、眼を轉じて米國を見ると、米國のやうな鐵や石炭、石油等を無限に豐富に惠まれて居る國では、マルクスの公式は當篏らぬ。資本主義は無限に發達して行くのではないかといふ氣持がします。ところが去年の九月十二三日頃でありますが、有名な取引所のあるウオール街に大恐慌が起つて、資本主義の行詰つて居るといふことが如實に表現された。

それに勢を得たのは第三インターナシ ナルの實行部である、自分達の議論は間違つてゐなかつた、資本主義は行詰つて居る。第三インターナショナルの實行部の方針を躊躇する所なく世界に宣傳しなければならぬ、それには先づ何よりも英國をやツつけなければならぬといふので、今やロシヤの宣傳的主力は、非常な勢で英國に注がれて居る。モスコーの革命博物館に行つて見ると、大きな世界地圖がある、それはモスコーを中心として、第三インターナショナルの實行方針を宣傳しようと思ふ所へ電光のやうな印がつけてある、それは日本にも來て居るが、最も多く行つて居るのは英國です。非常な勢で英國へ宣傳しようとして居るのです。

さういふ工合で今まで英國には共産黨の日刊新聞が出たことはなかつたのですが、去年の十月か十一月に、英露の通商が元へ戻ると共に、ロシヤでは金を出して、デーリーウオーカーといふ日刊の宣傳の機關紙をロンドンで出して居る。さういふ工合に第三インターナショナルの實行部では、この資本主義の行詰りの時機に英國を大にやツつけなければならぬといふので、今英國に主力を注いで居る、さういふ意味から言ふと、英國の文學を問題にすることは興味が無くはないと思ふのです。

吾々がよく聞きますことは、英國にはプロレタリア文學はないといふ事です、日本の批評家はさう言ふのです、私

も丸善なんかで向ふの本を取つて居つたのですが、やはり無いやうな氣がした、向ふから來た人に聞くと、英國のプロレタリア文學者としてはバーナードショー、ポリゾール、ウエルス等があるといふ、しかしどうもあれでは物足りない、あれほど勞働運動の古い歷史を有する英國にプロレタリア文學が無い筈はないと思つた、私は向ふへ行つてから、サウスウエールスの炭坑夫の組合と鐵道從業員の組合が立てゝ居る大學へ入つたのですが、その大學へ入ると一週に二度づゝ夜學を敎へに行かなければならぬ、さういふことから組合の人と接觸する機會を得たので、その事をきいて見たら、英國にはプロレタリアの手によつて、プロレタリア解放のために生れた文學は澤山あるのであります、それはゴリゾールウエルスやバーナードショーとは全く違つたものである、私はその文學のお話をしたいと思ふのでありますが、時間が二時間もあるのですからこの邊から迂廻したいと思ふのです。

一國の經濟的機構が變ると共に、その機構の條件である所の文學も變つて行く、現代の英國のプロレタリア文學といふものが發生するまでに英國の經濟的機構の變化と共に、文學がどういふ風に變つて行つたかといふことを、次へ〱と見て行つて、現代文學に及びたいと思ふのですが、あまり前からやると面白くないから、十八世紀あたりからやつて見たいと思ひます。

十八世紀の中で、世界を通じて大きな事件はアメリカの獨立であります、次はフランスの大革命であります、次にイギリスに於ては、十八世紀の終りから産業革命が現れ始めた、これらの大きな事柄を通じての中心的イデオロギー、指導理論は何であつたかといふとフランスの三色旗に象徴されて居るやうに、自由と平等と博愛であつた、これは政治的、産業的の方面でありますが、文化的方面では今まで、なかつた所の經濟學といふ學問が英國のアダムスミスによつて打建てられた、又同じ英國に於て、今まで文學的形式として存在しなかつた小說といふものが出た。

アダムスミスの經濟學は——私はよくは知りませんが——個人主義經濟學、手取早く言へば個人の自由に任せて置きさへすれば、人間の慾があるから、その慾心に驅られて、一ばん金の儲かる事をやつて行くから、それでいゝのだ、

國家が干渉してはいけないといふのである、個人主義の經濟學である、又自由主義の經濟學である、それは小說に於ても同じことなのです。今まで文學の中樞を成したものはシエクスピヤーの劇であつた、劇にはいろ〳〵むづかしい法則がある、詩もさうです、ところが小說は散文といふ一ばん自由な形式で描かれて居る、產業上、經濟學上の自由主義は小說が散文といふ一ばん自由な形式で描かれて居ることによつても分るのであります。

ところがそれまでの文學は、例へば叙事詩を見ても、ダンテの神曲を見ても、ルイシアダスなんかを讀んで見ても、個人は問題になつて居らぬ、國が興るとか、滅びるとか、大きな階級、大きな民族が問題とされてゐた。日本でもさうです、平家物語などを讀んで見ても、源氏が勃興するとか、平家が滅びるとか、一つの大きな階級、大きな民族が問題になつてゐて、個人は問題になつて居ない、祇王が出て來たり、那須與市が出て來たりするけれども、それは源氏の勃興といふ大きなオーケストラの中の端役として出て來るのであつて、個人が問題になつて居らぬ、英國も同じであります。ところが十八世紀に現れた小說を見ると個人が問題になつて居る。

さういふ風に、フランス革命に、アメリカの獨立に、又アダムスミスの經濟學に現れた自由主義、個人主義は自ら文學にも現れて、それまで無かつた小說が現れて來た、その先頭を切つたのはロビンソンクルーソーである。あの物語は、小さな無人の孤島に流れついたロビンソンクルーソーが、船からいろ〳〵の道具を持つて來て、家も造れば器械も造る、食物も、何もかも自分で造り出すといふのですが、あれを見ても、勃興せんとする資本主義が自ら文學に反映したといふことが分るのです。

もう一つ面白い事は、あの頃の手工業による生產が盛になりかゝつた時である、まだ近代的の大工業の機械は發明されなかつたけれども、鉋とか、斧とか、手工業の器械を用ひてやる所の生產が豐富になりかゝつた時代であつた、ロビンソンクルーソーの出たダニエルデホーは最も手工業の盛な所で、英國の手工業に重要なる地位を占めて居つた、そのダニエルデホーからウエルスの旅といふ本が出た、それは鑿とか、鉋とかを愛好する男の事を書いたもので

すが、さういふ事からロビンソンクルーソーといふやうな物語も出たので、あの頃から器械といふものの威力が現れかけて來た、自ら小說に現れた、それからだん〳〵に近代の資本主義、ブルジョアの勃興初期に於ける資本主義の小說を生んだのであります。

尙英國では、ビクトリヤ王朝に入つて政治小說が現れた、これも注目すべき事で、田山花袋さんの小說作法を見ると、日本の小說の解題をして居る、私は子供の時に一番の手本のやうにして讀んだものですが、あの中に佳人の奇遇を解題して、文學の鑑賞眼の幼稚な時には政治小說が出ると言つて居る、私も長い間それを信じて居た、私の書いた明治文學史にもさういふ事を書いた、ところがオックスフォードの大學では、政治小說に就て詳しい硏究を出して居りますが、それを見ると、文學に對する鑑賞眼の幼稚な時代に政治小說が出たのではないといふ事が分る。

英國ではその頃だん〳〵と產業革命が現れて來た、ワットやスチブンソンが蒸氣機關や、いろ〳〵の機械を發明する、第一に綿絲紡績が發達した、マンチエスターを中心とした綿絲紡績は、英國の產業の中心となつた、それからバーミンガムを中心にして鐵工業が發達して來た、今度は產業の中心が鐵に移つて來た、ところがマンチエスターの綿絲中心の時代からバーミンガムの鐵中心の時代に移ると、從來の自由放任主義一本槍では工合が惡くなつた、今までは自由放任主義で押通したけれども、鐵中心の產業時代になると、外國に鐵を賣つたり、鐵道を敷いたり、鐵の販路を廣めるために、外國貿易を主としなければならね、外國貿易を主にすると、どうしても國家が干涉しなければ鐵の產業は發達しない、そこで自由放任主義を棄て、國家が干涉するといふやうな主義に變りかけて來た、自由黨が自由放任主義を執るに反して、保守黨は國家干涉主義を執り始めた、この經濟思潮の變化は自ら文學にも反映して來た。

その頃英國には、ビクトリヤ女皇に可愛がられたグラッドストンとか、ヂスレリーとか、有名な政治家が出た、さうして文學の方面では政治小說が生れた、田山さんの言はれるやうに、文學の幼稚な時に政治小說が出るといふものではない、日本では明治十四五年の頃に、代議政體にしなければならぬといふ議論が、大隈その他の人々によつて

英國文藝に就いて

盛に唱へられた、伊藤博文は明治十五年にその調査のためにドイツへ出掛けた、それから一二年後に政治小說が現れて居るのであつて、決して文學の鑑賞眼が幼稚だから政治小說が出るといふのではない、政治小說はもう少し外の見方から見なければならぬと思ふのです。

その頃に英國の文學に現れた顯著な例は、海を題材にしたもの、海洋文學であります、その頃まで英國では植民地の重要性はあまり認められてゐなかつたが、貿易がだん／＼進むと共に、植民地は自國の安定を圖る上に重要なものであるといふことが分つて來た、明治三年から四年にプロシヤとフランスが戰爭をやつて、その講和の時に、プロシヤのビスマークはフランスに向つてアルサス、ローレンをよこせと言つた、しかしフランスはどうしてもアルサス、ローレンはやりたくない、佛領の印度支那で我慢しろと言つたが、ビスマークは印度支那では我慢しないで、とう／＼アルサス、ローレンを取つてしまつた、なぜ印度支那を取らないで、アルサス、ローレンを取つたか、それはビスマークのやうな慧眼な政治家でも、明治三年、四年頃には海外植民地が如何に重要なものであるかを知らなかつたからです、明治十七八年頃に伊藤公がドイツへ行つて、ビスマークに法螺を吹かれた時には、ビスマークも植民地の大切なことを知るに至つたといふことですが、それは普佛戰爭から十五六年も後であつて、明治三四年頃には、ビスマークのやうな政治家でも植民地の重要なことを知らなかつた、何所の國もさうであつたが、英國は早くから植民地の重要であるといふことに氣づいて居つた、それで頻りに海外を蠶食した、アフリカへ行つてひどい事をしたり、印度を取つてしまつたり、濠洲を取つてしまつたり、盛に海外を蠶食したものですが、それは文學には現れなかつた。

ところが植民地の重要性が認められると共に、次へ／＼とさういふ文學が現れて來た、小說ではありませんが、私共小學校時代に、スタンレーがリビングストンの行方を搜すといふ物語が讀本にあつた、なぜあゝいふ事を讀本の中に入れたか、不思議に思つて居つたのですが、スタンレーやリビングストンの冒險談が暴風の如き勢で現れたために、無意味に日本の小學校の讀本に入れたものだと思ひます。それから神近市子さんが譯して居られるオリーバーシ

ライナといふ、アメリカの百姓の事を書いた實話みたいなものも非常に讀まれた、が何と言つても、一ばんのはやりつこはスチブンスンであつた、スチブンスンのものでは寳島といふ小說が最も賣れた、それかキツプリング（日本へも來たことがある）も物語を書いた、その外次から次へ〱とさういふ物語が出て、それが吾々の想像も及ばないほど賣れた、さういふ風に、英國の文學は、植民地の重要さを知ると共に　海洋文學、植民地文學が非常な勢で榮えて來た、それから世界大戰後のプロレタリア文學といふ順序になるのであります。

どうして英國にプロレタリア文學が生れるやうになつたかといふと、それは勿論プロレタリアの擡頭がそれを促したのであるが、しかしプロレタリアの擡頭のためだと言つても、好景氣時代には現れなかつた、例へば世界大戰の際などは、小學校を卒業して一二年經つた位の者でも、炭坑夫になると一週間五磅以上取れた、日本の金にすると五十圓でありますから、一ケ月四週間として三百圓からの賃金が取れた、さういふ好景氣時代にはプロレタリア文學なんか書かうといふ人はなかつた、ウエルスとか、ショーとか、勞働者出身でなく、知識階級の人が書いて居つた、さういふものが比較的指導的の役目を勤めて居つた。

ところが戰爭が濟むと失業者が出て來た、その失業者は餘剩勢力のやりばがないために、自分の才能を、今まで試みたことのない文學に現はすやうになつて來た、それが現在英國のプロレタリア文學の盛な一つの理由であります。

英國にプロレタリア文學を發生せしめるに至つた失業者の事、失業狀態を少し詳しく述べて見たいと思ひます。英國の主要產業の中で、一ばん世界に廣まつて居るのは毛織物業、一ばん重要なのは石炭、その次は鐵と綿絲であつた、ところがその毛織物は、世界に廣い販路を持つて居りながら、だん〱衰微して來た。それは思はざる事から衰微するに至つたのです、女のスカートが短くなつたといふことが英國の毛織物業を衰微せしめたのであります、じようだんのやうに思はれるか知れませんが、決してじようだんではない保守黨のバルフオアー●──今年の五月に死にましたが、總理大臣を暫くやつて居つて、後に樞密院議長になつた人です、このバルフオアが失業者が澤山出來て仕方がな

い、どうしてこんなに出來るのかといふことを調べるために、バルフオア委員會といふ經濟調査の委員會を作つた、これは今も續いて居つて、最も權威のある經濟調査委員會でありますが、この報告の第一に、英國の毛織物業が不振になつたのは、女のスカートが短くなつたことが原因だと書いてある、日本で言へば大藏省の報告のやうなものにさういふ事が書いてある、ビクトリヤ王朝時代には、女のスカートは下の方がひろがつて地を引きずるやうに長かつた、それが短くなつて、脛が出る位になつた、それで洋服を作る毛織地が非常に少くて濟むやうになつた、數字ははつきり覺えませんが、洋服を作る毛織地が三分の一位は節約出來るやうになつた、それも英國一國だけの產業であるとか、少しばかり外國へ輸出する產業なら影響はないけれども、英國の毛織物は販路を世界に持つて居る、それが假りに女のスカートが三分の一短くなつたとすれば、それだけ需要が減るわけであるから、勞働力は三分の一だけ要らなくなる、英國の毛織物業が三十萬人の勞働者を擁して居つたとすれば十萬人は要らなくなるわけである、それが英國に失業者を多く出した有力な原因であります。

次は炭坑業であります、勞働者の半分は炭坑夫である、その炭坑夫がどうして失業狀態になつたかといふと、世界大戰の頃は、ドイツもフランスも死に身になつて戰爭をやつて居つて、石炭を掘ることが出來ない、イタリーは石炭は出ない、オランダも、ベルギーも石炭は出ない、それで英國の石炭はヨーロツパのあらゆる國へ賣れた、戰爭後も、フランスの北部の炭坑は、ドイツの爆彈のために打壞されたので、フランスの石炭工業は復活する望がないだらうとさへ言はれて居つた、その頃英國の炭坑の榮えたことは非常なものだつたさうです。

ところが戰爭が濟んでしまふと、ドイツはすぐに石炭を掘り始めた、又石炭ばかり使つたら高くなるといふので、煉炭を多く使ふので、英國の石炭は賣れなくなつた、又フランスの北部の炭坑は、ドイツの爆彈のために打壞されたけれども、土を掘り起して、坑をよく直して行くと思ひがけない拾ひ物をした、といふのは、爆彈で壞されたために、そこに最新式の機械を備へつけて石炭を掘出すことができる、そのために石炭一噸に對する勞働力は英國の半分で濟

むといふことになつたのです、撫順の炭坑へ行くと露天堀をやつて居りますが、あゝいふ方法は工合が好いのです、さうでないと、炭坑内の換氣法もやらなければならぬ、炭坑内に瓦斯が起つて火事が出るから、それを防ぐ設備もしなければならぬ、又河床を掘つて行くと、水が地の隙間を漏つて坑内に入つて來る、坑内に大洪水を起して何百人、何千人といふ坑夫が死ぬことがあるので、それを防ぐ設備もしなければならぬ、それから英國のやうに、二百年來炭坑を掘つて居る所では、底へ〱と掘つて行くので、石炭を地上に引揚げるだけでも大へんな勞働力を要する。

ところが、フランスの炭坑は爆彈で壞されてしまつた跡であるから、火災の豫防をする必要もない、洪水の豫防も要らない、換氣法も必要がない、その上便利な機械で引揚げるから、安く石炭が掘れるやうになつた、高い英國の石炭なんかは買はなくなつてしまつた。

英國の石炭がさういふ工合に世界中に賣れなくなると、英國に取つては死活の問題である、勞働者の半分を持つて居るといふ石炭が振はないために、英國の產業狀態を暗くする所の大きな原因になつて居る。

次に鐵の方面を見ると、鐵も振はなくなつて來た、英國は世界で一ばん初に鐵道の發達した國であります、ビクトリヤ王朝時代には英國は金持の國であつたから、外の國で鐵道を敷く場合には、英國から金を借りて、鐵道の材料を買ひ技師を雇つて鐵道を敷いたものである、金を借りれば利子を拂はなければならぬ、技師を賴めば報酬を出さなければならぬ、結局英國から借りた金は又英國へ吐出してしまふ、英國はまるで盜人のやうなものであつた。日本でも明治五年に東京、橫濱間に鐵道を敷いたが、やつぱり英國で外債を起し、英國から原料を買ひ、技師も賴んで敷いたものである、かういふ事を外の國もやつて居つた、ドイツもロシヤもさうであつた。

ところが、いつまでも英國にばかり儲けさせるわけに行かない、ロシヤでも日本でも、アメリカは言ふに及ばず、どの國も英國の世話にならないで鐵道が敷けるやうになつた、英國では後進國が自分で鐵道を敷けるやうになつたので前のやうには儲からなくなつた。さうすると今度は植民地を大事にするやうになつた、植民地は成るべく未開の狀

態にして置いて、金を貸付けたり、鐵を賣りつけたりして、植民地の搾取方法を考へるやうになつた、それが英國が植民地の重要さに感づいた最大原因であります。

しかし植民地も無限に鐵道を敷けるものではない、英國の世話になることもだん〳〵少くなつた、今日では英國の鐵を賣込まうといふ望のある所は支那だけである、さういふ風に英國の鐵も振はないやうになつた。

綿絲も振はなくなつた、綿絲は日本の綿絲に負けてしまつた、日本では武藤山治氏のやつてゐた鐘紡でも、どの紡績會社でも、働く時間を長くして、勞働賃銀を安くして女工を搾取する、英國はそれに引換へて嚴密なる八時間勞働制、賃金も勿論日本より高い、紡績のやうに、勞働技術をあまり必要としない産業では、英國は日本と太刀打はできないわけである、その上に世界大戰中、知らぬ間に南洋方面、支那方面、即ち今まで英國の販路であつた方面を日本がすつかり取つてしまつた、綿絲も英國は駄目になつてしまつた。

英國の主要産業たる毛織物、鐵、石炭、綿絲は皆駄目になつてしまつた、この主要産業の一昨年の統計を見ると、一年の利率は百分の一・三で、つまり百圓に付て一圓三十錢しか儲からぬ、銀行利子よりも安い割合になつて居る、これでは英國の資本家も悲鳴を擧げるわけであります、工場などは成べく閉鎖し、石炭坑は廢坑にして、持つてゐる金は海外へ貸付けるといふ狀態になつて居る、英國の産業は全く行詰つてしまつた、さうして失業者は增加するばかりである、ところがこの産業の行詰り、失業者の增加といふことが、やがてプロレタリア文學を非常に勃興せしめるに至つたのであります。

失業者も日本のやうに全く食へなくなつてしまつたならば、プロレタリア文學を書く餘裕もないのですが、英國では失業者は失業保險の金が貰へる、日本の金にして一週間に二十何圓か貰へる、失業者としてサインをして政府に屆ければ、政府から一週二十何圓か貰へるのだから、食ふだけは食つて行ける、ハイドパークの公園に行くと、勞働者が草の上に澤山寢て居る、一週間二十何圓で暮さなければならぬのだから、あまり動くと腹が減つて金が掛るから、

寢るより、外に方法がない、しかし食ふだけは食へるのだから、その餘剩勢力で小說を書いたり、詩を書いたり、或は劇の方へ進出したり、映畫の方へ進出したりする者が次から次へと出て來る、これが今の英國の文壇に於て一つの顯著な事實であります。

英國の文壇ではもう一つ顯著な例は、女流作家の輩出であります、これは失業問題とは大して關係はないのだらうと思ひますが、失業者が增加してプロレタリア文學が盛に現れて來ると共に、それと殆ど時を同じうして女流作家が現れて居る。何故さういふ風になつたのか、はつきり分りませんが、一つは英國のジャーナリズムの結果である、英國の新聞の發行部數が非常に增加したのは、女の讀者層に注目するようになつたからで、それはデーリーメールあたりが一ばん初だつたさうですが、新聞紙はその頃まで女の讀者に特別に注意することはなかつた、ところがデーリーメールが女の讀者層を目指して婦人欄を設けて見たら、それが大へん興味を惹いて、新聞が非常に賣れるようになつた、すると外の新聞もそれに倣つて、婦人欄を設けるやうになつた。この婦人讀者層に注目したといふことは、ジャーナリズムの上に一つのエポックを成すものでありますが、それも初は育兒欄とか、編物欄とか、料理の欄とかいふものであつたのですが、後には小說を載せるやうになつた、婦人といふものは存外小說を好むものである、昔は女の好きなものはいも、たこ、なんきんと言つたが、今はたこやいもは好んで食べるかどうか知りませんが、多くの女は物語や芝居を好みます、そこで或る婦人新聞が、今まで載せなかつた小說を載せ始めた、ところがそれが非常に歡迎された、男の書く小說では、着物の事なんか間違つて書いたり、うまく書けなかつたりすることがある、それを女に書かせると、そして、例へば今年の秋はかういふものが流行してゐる、パリーではかういふものが流行して居るといふやうな事を小說の中に取入ると婦人讀者層に非常に歡迎される。それで各新聞社では、女の小說家にいろ〳〵の事を書かせるやうになつて來た、さういふことから、數ははつきり分りませんが、今では中くらゐの作家では、男の小說家より多いと思はれるほど女の小說家が出て來た。

英國文藝に就いて

中には零落した者もあります、ウエルスといふ女の作家などは、三十幾冊も小説を書いて居つて、かなり有名な作家だつたが、今は小説では食へなくなつて、街頭へ出て詩などを書いては一錢、二錢と抛つて貰つて食つて居ります、ロンドンのペーブメントを歩いて見ると、失業者がほかけ船を書いたり何かして、通行人から一錢二錢の金を貰つて居るのを見受けますが、ウエルスも今日さういふ境遇になつて居ります、しかし女の小説家は、今日に於ても尙厚遇されて居ります。

女流作家の輩出とは關係の無い事ですが、もう一つ注目すべきことは、プロレタリア作家が澤山出て來た事であります、これがゼネラルストライキ以後に於ける英國文壇の特相ではないかと思ひます、私がこれからお話しようと思ふのも、そのプロレタリア文學、特に勞働黨の代議士、エレン・ウイルキンソン女史の事なのであります。

現在英國の議會には、女の代議士が十一人居ります、レー・ジー・アスター夫人、元保守黨の領袖で、有名な政治家であつたカーゾン卿の娘さんで、レヂン・モズレーといふ人の夫人になつて居る人、それから、まだ二十四歳のゲニー・リー孃で、去年二月補缺選擧に當選したお孃さんです、もう一人有名なのはレツドガールと言はれて居るウイルキンソン女史、この人は三十位ださうですが、二十三四にしか見えない、この人は髮の毛が赤いのと、いつも赤いジヤケツを着てゐるのと、もう一つ思想が赤いためにレツドガールと言はれて居るのです、このウイルキンソン孃が千九百二十六年のゼネラルストライキを題材にしてクラツシュ——「崩壞」とでもいひますか——といふ小説を書いた、この小説は作者が女であるために、讀書界の要求して居る女らしい所があるのと、レツドガールの名を辱めないプロレタリア的の要素がある、私がこれを題材に選んだのはそのためなのです。

ウイルキンソン孃は勞働組合の地方支部の、支部長の秘書のやうな事をして居つたのですが、ゼネラルストライキの時に、地方の代議員として選ばれてロンドンへ出て來た、ロンドンではゼネラルストライキが起つて居るのですか

ら、新聞社などは血眼になつて居る、その時に金持のお孃さんで、社會主義に同情をして居る人があつたが、ウイルキンソンはよくそのお孃さんの所へ行く、さうすると其所へよく來る新聞記者があつたが、ウイルキンソン孃がストライキの間を潜つて、テキパキと活動して居るのを見て、ウイルキンソンをつまり想ひそめるのです、その金持のお孃さんといふのは、ストライキに同情はして居るのだけれども、それはほんとうのプロレタリアに對する同情ぢやない、クラッシュにはブルンスベリーソシアリストといふ字が使つてありますが、ブルンスベリーといふのは日本でいへば麹町のやうに、辯護士とか、知識階級の人が多く住んで居る所で、其所へウイルキンソン孃が每日のやうに行つて活躍した、クラッシュはその時の經驗を書いたものであります、從つて出て來る人間もほんとうの名前を書いてある、ロイドジョーヂとか、マクドナルドとか、ボールドウインとか、政界巨頭の名前をそのまゝ出して居る、議會でやる演說なんか、公文書をそのまゝ引いてある、一つはそれで評判になつたのですが、小說として讀んで見ても割合に面白い、ゼネラルストライキがなぜ負けたかといふ理由も、或る程度まで分るやうに書けて居ります。

私がそれを讀みながら一寸面白いと思つたのは、主人公のウイルキンソンが、方々へ行つてアヂの演說をやつてひどく疲れて、ロンドンへ歸つて來た時の事です、ゼネラルストライキで鐵道は通じない、電車も通じない、たゞ通じて居たのは自動車だけです。實をいふと、あのストライキでは、ロンドンを食糧攻めにすれば勝てると思つたが、自動車をストライキさせることに氣がつかなかつた、そこで時の內閣は、トラックを總動員して食糧品を運んだので、存外ストライキ破りが早く成功したのですが、ウイルキンソンもトラックでロンドンへ歸つて來る、ヘト〳〵に疲れて歸ると、ウイルキンソン——つまりその小說の主人公に想を寄せて居る新聞記者もやつて來る、新聞記者も材料取りに步いてヘト〳〵に疲れて居る、金持のお孃さんの家では風呂を立てゝくれたので、風呂へ入ることになつたが、誰が先へ入るかといふことが問題になつた、結局ウイルキンソンが遠くから歸つて來たのだし、疲れてゐるからといふことで、先に入つた、次に新聞記者が入つた、向ふの風呂は一遍々々に湯を流してしまふのですから、日本とは違

ひますが、女の入つた後で湯に入つた男の心理解剖をやつてゐる、今から五分と隔てぬ前に若い女がこゝへ入つた、その後に自分が入つてゐると――スルリングといふ字が使つてありますが、突刺すやうな感覺的の喜びを覺えるといふやうなことが書いてある、私はレーバーカレーヂの友人に、かういふ感覺描寫があるが、どう思ふかといふと、ヴエリーナチユラルだと言ひましたが、日本では同じ湯へ、男と女と同時に入るやうな事もあるので、さういふ感覺はないやうに思ひますが、それはエピソード的興味でありますけれども、さういふ些末な描寫の上に於ても、男の人の看逃すやうな感覺的描寫があるので、一寸面白いと思ひます。

それから、その新聞記者はストライキの間にも、ウイルキンソン孃にいろ〳〵言ふのですが、その男には妻子がある、ところが妻子は離別して一緒になりたい、そして階級鬪爭の戰線に立つて働きたいと言ふので、ウイルキンソンも迷ふのです、ほんとうに夫婦にならうか、しかしさうすると、その人の細君はみぢめなことになる、又階級鬪爭の戰線に立つて戰ふといふけれども、もと〳〵新聞記者である、新聞記者はいろ〳〵の情勢が分り過ぎる位分つてゐる、いろ〳〵の情勢が分り過ぎるとニヒリストになる、ものに信仰を持たない、日本でも新聞記者諸君は、吾々無產黨の人が何か働くと、聲援はしてくれるけれども、若しやり損ふと漫罵を浴せる、つまり新聞記者といふ一つのものになつてしまつて、強い信念を持つてゐない、新聞記者は皆ニヒリスト的傾向を持つて居る。

そこでウイルキンソン孃も迷ふのです、細君を離別して一緒になつたところで、他の女性にさういふ犧牲を拂はしたところで、この新聞記者が階級鬪爭の戰線に立つて勇敢に戰ひ得るかどうか、疑問であるといふので、とう〳〵その要求を拒絶して、元の田舍の勞働組合に歸つて働くといふやうな筋であつたやうに思ひます。

そのストライキは、世界中に曾てなかつたほどの大仕掛の、ゼネラルストライキであつた、去年八月に出たインターナショナルの十年記念號には、インターナショナルの運動の報告が載つて居りますが、それを見ると、彼等の最も見込違ひであつたのは、西に於ては英國のゼネラルストライキの失敗、東に於ては支那南方政府樹立の時に共產黨の

放逐された事であると書いてあります。あらゆる所から注目されたゼネラルストライキであつたけれども、とう〲失敗した。

それはそれとして、英國のプロレタリア文學の話をだん〲進めて行きたいと思ひます。英國のプロレタリアは、これを政治的に別けるならば三つになります、一つは勞働黨、一つはアイ・エル・ピーと言はれる勞働黨の中の左翼、一つは一ばん左翼の共産黨である。この三つが英國の政黨としてのプロレタリアートである。併しあなた方の中に左翼の方があるならば、英國の勞働黨はプロレタリアの勞働黨ではないと言はれるか知れませんが、それならばそれで結構です。

この英國の勞働黨を支持する組合は、日本で社會民衆黨と總同盟が組合つて居ると同じやうに、勞働黨はテー・ユー・シーと言はれる世界一ばんの勞働組合が支持して居る、アイ・エル・ピーは知識階級の政黨であるから、勞働組合の支持は全然ありません。共産黨を支持して居るのは アイノリス・ムーブメントと呼ばれるその組合一つであります。

勞働黨の方から出るプロレタリアの小説家で一ばん有名なのは、ウエルシーといふ、炭坑夫上りで代議士になつて居る人、もう一人はエレン・ウイルキンソン孃であります。この人は勞働者出身ではありません。女學校位は出て居ると思ひますが、勞働組合の運動に入つて代議士になつて居る人で、この二人が勞働黨の方で有名な小説家であります。

左翼の共産黨の方で有名な作家はハロルド・ヘスロツプで、私の入つて居つたレーバーカレーヂの、四期ほど前の卒業生なのです。英國では勞働組合に入つて二ケ年間勞働したならば、誰でも試驗を受けてレーバーカレーヂに入れるのです。ヘスロツプも炭坑夫をして居つて、試驗を受けてレーバーカレーヂに入つて、在學中に小説を書いたが、出版してくれる者がなかつた、ところが不思議な事には、それがロシヤ語に譯された「世界の門」といふのですが、エ

レン孃のクラッシュと前後して出た、これも千九百二十六年のゼネラルストライキを書いたものです。

この「世界の門」はヘスロップの自叙傳なのですが、讀んで見るとクラッシュよりも面白い、ヘスロップは小學校を卒業して炭坑夫になつた。その炭坑に一人の女の子が居つた、それはヘスロップと同じ小學校で、女の組の一ばん成績の好かつた子供であつたが、未だ仕事に慣れないので、ヘスロップは大に優越感を以ていろ〳〵と敎へてやる所なんか書いてある、そのうちに一人の戀人が出來た、それは炭坑夫ではない近所に在るチーズ工場の女工であつたが、ヘスロップは十八歳の時にその女と結婚してしまつた。

ところがその細君は、美人ではあつたが、どうも自分の運動に理解がないので、いつも不滿に思つてゐた、それから私の入つて居たレーバーカレーヂで出して居るプレーリスといふ機關雜誌のメムバーになつたり、又頭の良い男であつたから少壯でありながら、勞働組合の演說に賴まれたりして働いて居つたが、或る演說會で一人の女を知るようになつた、その女はアイ・エル・ピーの會員であつた、ヘスロップはレーバーカレーヂのイデオロギーで養はれたので、唯唯物的である、ところがその女はアイ・エル・ピーの會員だから、唯心的、精神的の傾向がある、その點が氣に入らなかつたけれども、女でこれほど勞働運動に理解を持つて居る人はないといふので、とう〳〵戀愛關係にまで進んだ、それから演說會などにはいつも一緖に出て、夜も遲くまでいろ〳〵やつて居る、それを細君が感づいて、とう〳〵子供を連れて出てしまふ。

そのうちに、千九百二十六年の大ストライキが起つた、ヘスロップは地方の代議員となつてロンドンへ出て來るのですが、このゼネラルストライキの描寫が面白い、ウエストミンスターの廣場で、何度も〳〵會議を開いた時の描寫なんか面白いものです。英國の勞働組合から選拔された代議員が、それ〴〵の意見を以て演說をやる、蜂の巢をつゞついたやうな狀態になる、ところが明日のストライキの方針はどうしようかといふことを論じて居る際に、ウルトラ左翼の人達はその問題には觸れないで、千八百年にカールマルクスは斯う言つた、何年にエンゲルスはあゝ言つたと

いふやうな演説をやつて居る、それを馬鹿野郎とか、いろ〳〵の事を言つて彌次る所なんか面白く描寫されて居る、レーニンを小説に書いたものは澤山ありますが、カールマルクスの名前だけでも小説に出たのはこの「世界の門」が始めてゞあります。

又ウエストミンスター會議を終へて、ハイドパークの公園で前の細君にあつた、「あなた何しにロンドンへ出て來た」と言ふから、「ゼネラルストライキで、吾々は今食ふか食はぬか生死の境なんだ」と言ふと、「さうか、それでは私のために少しの時間を割いてくれないか、コーヒー店へでも入らう」と、その元の細君は、ヘスロップをコーヒー店へ連れて行つて、うまさうなものを頻りに取つて食べさせるので、ヘスロップは心配した、ヨーロッパでは男と女がさういふ所へ行つた時は、男が勘定を拂はなければならぬことになつてゐる、ところがヘスロップは金を持つてゐないので、「そんなに取つて拂ふ金はない」と言ふと、「あなたに拂はせようとは思はないから、心配せずにおやりなさい、と言ふのでヘスロップは朝からウエストミンスターの會議で腹が減つてゐるので、みんな食べてしまふ、美人であることは變りはないが、金のあるのが疑はしいので「お前この頃何をしてゐるか」と言ふと、「それはきいてくれるな、又話さなくてもいゝでせう、それよりもあなたは子供に會ひたくはないか」「會ひたくないことはない」「それぢや行きませう」といふので、二人で自動車に乘つて女の家へ行くと、子供がお母さんと言つてやつて來る、「これがお前のお父さんだよ」と言ふと、子供はよそのおぢさんだと思つて變な顏をする、女は可愛がつて、おもちやをやつたり、菓子をやつたりする、それからヘスロップに向つて「一體私は誤つた道を取つたと思ふか」と言ふ、「いや別に誤つて居るとは思はぬ、お前は大へんによくしてくれるのでうれしい」「さうか、それでは私の職業をお話しよう、しかし話さなくても分つたらう」と言ふ、つまりその女は、ヘスロップの所を出てロンドンへ來たが、外に生活の途が無いのでストリートガール、になつたのです、それから「今夜合宿へ歸らなくてもよければ、私の所へ泊りなさい」「泊らう」といふわけで、この主人公はストライキの間、夜は元の細君の家へ泊つて、非常にエロチックな生活をする。そ

のエロチックな描寫のために小説は面白くなつて居る。

ところがそのストライキは失敗に終つた、代議員はそれ〴〵地方へ歸ることになつた、ヘスロップも自分の所へ歸つたが、元の細君の事が思はれて仕樣がない、ぼんやりして考へ込んで居る、さうするとアイ・エル・ピーの細君は、鋭敏な女の第六感を以て看破した、「ヘスロップ、あなたは元の細君に會ひましたね」かう言はれるとヘスロップも仕方がない、「會つた」と白狀してしまふ、するとその細君は何も言はずに、ヘスロップの所を出てしまふ。

それからどうなつたか、覺えて居りませんが、最後はこんな風になつてゐる、或る日炭坑の中へ入つて、カチンカチン掘つてゐると、炭坑が大洪水になつた、一體英國の炭坑には火事はない、今日の新聞に火事で二百人死んだといふ事がありますが、さういふ事は英國では珍らしい、日本では珍らしくない、麻生君の「父よ悲しむなかれ」といふ小説を見ても、北海道で起つた火事の事が書いてある、炭坑の中に瓦斯が溜つて燃え出す、しかし炭坑夫を救出すと金が掛るので、見殺しにするといふやうな事は、私達の記憶して居る所だけでも數回ある。英國ではさういふ事はないが、河の底から水が滲み出して大洪水になるといふ事は、地質の關係ですか、しば〳〵ある、この小説も結末はさういふ所になつて居る、みんなでかん〳〵石炭を掘つて居ると、向ふの方からけたゝましい叫聲が聞えたと思ふと、逃げる遑もなく、坑内は大洪水となつた、ヘスロップは奧へ〳〵と逃げて一ばん奧の坑まで逃げた、それでも水は踵の所まで來たので、もう駄目か知らんと思つたが、幸に水はそれ以上來なかつた、そのうちに誰か逃げて來たらしいので、暗い坑の中で「君は誰か」と言ふと、それは偶然にも、アイ・エル・ピーから來て居つた細君の弟であつた。「大變な事になつたが、此所で我慢しよう」といふので眞暗な坑内で何日か過した、勿論日が暮れたのか明けたのか少しも分らぬ、そのうちにだん〳〵腹が減つて來て仕樣がない、何か腹に詰めなければやり切れないので、洋服をむしつて食つたが、どうもうまくない、最後の手段として石炭を舐めて何日か過した、といふ所でこの物凄い小説は終になつて居るのです。

この小說が出た時には――英國では共產黨と勞働黨とは仲が惡い、日本でも社會民衆黨と非合法運動の連中は仲が惡いが、英國もさうなのです。勞働黨の方では、この小說には勞働黨のダラ幹振りが描かれて居るので默殺してしまつた。それで共產黨の新聞に出たといふのですから、有名にならなかつた。ところがロンドンタイムスとならんで有名な、自由黨のマンチエスターガージヤンが新刊批評をやつた、私達がこれを讀んだのも、同じカレーヂの卒業生といふ事よりは、マンチエスターガージヤンにその批評が載つたから讀む氣になつたのです。

小學校を卒業して炭坑夫になる所などは面白くないので馬鹿にしたが、第二章になると面白い、又書き方が新しい、英國の英文といふよりは、アメリカの英文といふ書き方である、英國の文章は、うどんの伸びたやうな讀みにくいものですが、アメリカの文章はテキパキして、齒切れがよくて面白い、ジヤズスタイルといふのですか、そばが切れたやうな、二三行でピチ〳〵と切れて居る、さういふ點で面白い、そこにプロレタリアの新しい文體が勃興して居るやうに思はれる。

もう一つ注目すべきものは、やはりゼネラルストライキを書いたエッチ・ジー・ウエルスのミンホワイルであります、ウエルスは知識階級出であるから、個人中心――英雄崇拜ではないが、個人に傾き易い、ところが、ゼネラルストライキをしてあれほど力あらしめたのは大衆の力であつたが、ウエルスは大衆の壓力を描かうとした、それがミンホワイルの面白い點であります。それから英國では類例のないジヤズスタイルを採つた事も注目すべき點であります、ウイルキンソンのクラッシユと比較して讀んだならば、ゼネラルストライキの狀態なんかもよく分ると思ひます。

支那時局

武藤丸楠

支那のことは、始終毎日の新聞に出て居りますので、皆さんの御注意を惹いて居ることゝ思ひます。つい此間も今までの南京政府と云ふものゝ外に、新たに北京政府と云ふものが出來た。閻錫山と馮玉祥、此二人の將軍に依つて成立したので、南京と北京と、一つの國の中に二つの政府が對立することになつたのです。處が奉天に居る張學良と云ふ先生が武力調停をやりまして、其爲に折角出來たと思つた北京政府が仰々しい宣言を發したり何かして中々華やかにやつて居つた北京政府が一月も經たない中に潰されてしまつた。ちよつと他の國では見られないやうな大きな芝居があるのです。それから七月の末頃には長沙と云ふ所で共産軍と云ふものが暴ばれ廻つた。長沙と云ふのは楊子江の沿岸にある洞庭湖の南に湖南省と云ふ日本の長野縣位の大きさの省がありますが、此省は山國で、而も物資が非常に豐富でありまして、米や鑛産物なんかゞ澤山出ます。其首府が長沙でありまして、此處を共産軍に占領されてしまつた。當時朝日新聞とか日日新聞とかの支那通信を見ますと、一晩の中に政府軍が共産軍に打破られて、長沙は勞働者の天下となつた。さうして共産軍が非常に亂暴したと云ふやうなことが出て居ります。長沙は人口が三十萬もあつて支那では二流所の可成り大きな町です。此處に共産軍がソビエート政府と云ふものを立てた。是は可成り吃驚させ

るニュースです。當時東京朝日の論説記者は、是は全世界を震駭させる大事件だとか、支那近代史上に於ける劃期的の事件だとか、北清事變以來の國際的の大問題になるだらうと云ふやうに、非常に大きく書き立てたのであります。さう云ふ風に一般の新聞社あたりでは可成り表面のことだけは書き立てるのですが、併し實際にはそれがどうなつて居るのか。又さう云ふことが我々の直ぐ傍の國で起きて居るのはどう云ふ意味を持つものだらうか。さう云ふことに付ては殆ど分らないやうに書いてあるのです。我々も毎日見る新聞と云へば日本の新聞に限られて居りますし、亞米利加や英吉利の新聞を見ても大體日本と同じ立場の國ですから、其主張は似て居るのです。偶々亞米利加の新聞あたりで自分の方に都合のいゝ、他國に都合の悪いことを曝露することもありますが、それも本質的にはお互の立場は違ひはないから、本當の意味で曝露をして居ないのです。併し支那と日本との關係は昔から同文同種だとか色々なことを云はれて居る通り、非常に深いものであります。日本の國際的の地位、外交的の地位と云ふものは可成り支那に關係を持つて居るのです。大體日本は國際的に三つの重要な國と關係を持つて居るのですが、第一は亞米利加です。

それはちよつと經濟的の方面を見ただけでも分るのです。之に付て大塚さんあたりからお話があつたと思ひますが、昨年亞米利加が恐慌に襲はれると、忽ち日本の生絲が賣れなくなつて、信州の山の中のお婆さんが繭を賣りに出た所が一貫目五十錢とかしかしなかつた。餘りの話に嘘だらうと思つて、何軒聞いてもさうだつたので、遂に呆れ返つて賣りに出た繭を捨てゝ歸つてしまつたと云ふ話がある。さう云ふ具合に直接日本の經濟界に影響して來るのです。それから海軍の問題にしても、亞米利加と日本との間には非常に微妙な關係がある。此間の軍縮會議に於ても色々な問題があつたのは皆さんの御承知のことゝ思ひます。それから第二は支那です。是も貿易關係から見て行つても分ることですが、支那で最近のやうに戰亂が絶えない人民が疲弊して物を買ふ力がなくなる。さうすると忽ち日本から支那に行く所の紡績製産物と云ふやうなものが賣れなくなつて、それが日本の紡績業の操短となり、工場を働かして行けなくなるから、失業者が巷に殖えると云ふことになる、支那も殆ど日本の貿易額の三分の一位の關係を持つて居る重

要な國です。そればかりでなく、支那の南の方で共産軍が暴ばれたり、南北兩軍が戰爭したりして居る中はいゝけれども、若し北京とか滿蒙方面とか日本に近い地方で騷ぎが起きると、日本の利害に特に關係を持つことになる。それからもう一つ日本に重要な關係のある國はソビエート・ロシヤであります。露西亞に付ては神近さんのお話があると云ふことを承はつて居りますが、是も北洋漁業の問題などで、オホーツク海で日本が漁業權を持つて居りますが、ソビエート・ロシヤで五年計劃をやつて日本の漁業權を侵略して來る。其爲に兩國間に可成りやかましい問題が起きて居ります。さう云ふやうな三つの重要な國際關係の一つを成す支那であります。所が我々の支那に對する考へ方と云ふものは、從來可成り幼稚であつたと云ふことが出來るのです。私達が子供の時には「日清談判破裂して」と云ふやうな歌が流行つて、支那人はチャン〳〵坊主と眨しめると云ふやうな空氣の中に育てられて居た。私は小さい時丹波の笹山に居りましたが、丁度自宅の前に軍人が居りまして、支那人の子供を連れて歸つて來て大變可愛がつて居りました。身體も僕の倍位あつて好い子供でしたので、平常は仲善く遊んで居るのですが、喧嘩なんかすると直ぐチャン〳〵坊主と云ふ言葉が出る。さうすると非常に口惜しさうな顏をします。そんな具合で可成り間違つた考へを植ゑ付けられて居たのです。普通の新聞社なんかでは支那に對する考へ方は可成りリベラルなものですが、支那專門雜誌外交雜誌などを見ると可成り植民地扱ひにして居る點が多いやうに思はれます。それで結局私の強調したい所は支那を今までの日清談判破裂して式の見方で見ないで、もつと現狀を正視すると云ふ癖を付けて行かなければならぬ。それには支那で起つて居る色々の複雜な事件がどう云ふ風になつて居るのか。それを科學的に、客觀的に、何物にも捉はれない立場から分析し、批判して行かなければならぬと思ひます。支那で起きて居る色々な複雜した事件の底にある色々の要因、それにはどう云ふものがあるかと云ふことを考へて行かなければならぬと思ひます。

その爲には大體支那の國內に張つて居る政治的の大きな力として三つのものを考へることが出來ると思ふのです。第一は支那が植民地化されて居ると云ふ事實と、それから來る帝國主義諸國の力、それが考へられる。之には經濟的

の力と政治的の力とあるのです。第二は支那の國內で支配權を握つて居て而も互に戰爭なんかをして居る軍閥、それから軍閥を支持して居る所の封建的の地主階級、それから元は軍閥反對の運動をやつて居たに拘らず、現在ではすつかり軍閥の下に屬して居る所の支那の民族ブルジョアジイ、是等の力が第二の要因として數へられる。それから第三の要因としては現在南支那の方で暴ばれ廻つて居るプロレタリヤ農民の運動です。それで此の三つの力が色々と組合せられて今日の複雜な支那の事件が起きて來る譯ですが、先づ帝國主義諸國の力と云ふものが如何なる影響を支那に及ぼして居るかと云ふことを少し考へて見たいと思ふ。英吉利とか亞米利加とか云ふ資本主義國が或る程度まで發達すると、其力が段々國外に延びて來ます、第一は殖民地と云ふものを持つて、殖民地の人民に自分の國で出來た紡績絲とか、其外の商品を賣り付けて利潤を搾り取る。第二に支那のやうな國に豐富にある工業原料を安く買ひ取る。詰り原料地として支那のやうな國を利用する。それから第三に支那のやうな國では勞働者の生活程度が低くて賃銀が安いから、支那に工場や何かを立てゝ其國のプロレタリヤを搾取しやうと云ふことになる。さう云ふ具合に或る程度まで資本主義が發達すると殖民地或は殖民地に似たものを持つやうになるのです。さうして資本主義國として一番先にさう云ふやうになつたのが英吉利であります。卽ち十七世紀から十九世紀の中頃にかけて英吉利は段々東洋に手を延ばして來たのです。先づ十八世紀の終り頃、丁度英吉利の產業革命と時を同じうして印度を完全に自國の殖民地にしてしまつた。それから段々印度支那、馬來半島方面から遂に支那に來た。丁度今から九十年ばかり前に、阿片戰爭と云つて英吉利の資本家が印度で阿片を栽培して、それを支那に賣り付けて支那人を阿片患者にする爲に戰爭を起した。其結果支那をして香港を開港せしめた。是がそれまで鎖國主義を執つて居た支那が資本主義國に開國した初めであります。それから二十世紀に入ると孫文なんかゞ起しました所謂第一革命、丁度日本の大正元年が支那でも中華民國元年に當るのですが、千九百十二年から支那は中華民國と云ふことになつたのです。それで此頃から是まで支那を支配して居た封建的の中心と云ふものは段々搖らいで來た。さうしてそれまで一通り一國として纒まつて居た支那が、

今度は北とか南とか東とか西とか、方々に色々な軍閥が分れて割據するやうになつたのです。一昨年頃まで生きて居た張作霖なんかも其一人で、彼は奉天を根城にして滿洲の馬賊を支配して居つた。それから吳佩孚と云ふのは歐洲戰爭直後頃亞米利加英吉利の尻押しで支那全土統一と云ふことを試みて北京あたりで活躍した。其外此間別府に逃げて來た孫傳芳とか張作相、斯う云ふ人達が大地主階級を代表して、而も非常に大きな武力を持つて居た。武力と云ふのは主に傭兵軍隊ですが、斯う云ふ傾向は吳佩孚の全國武力統一策、あの頃から特に盛んになつて來たので、丁度歐洲戰爭以後列國が歐洲の天地で戰つて居たのを止めて、又再び自分達の國の資本主義經濟を再現する爲に新しい殖民地を必要として來た頃、詰り支那に對してもつと積極的に進出しなければならなくなつた其頃から、支那の軍閥間の戰爭と云ふものは段々激しくなつて來たのです。さうしてどの軍閥は何國系だと云ふことが始終云はれるやうになつて來たのでありまして、詰り各軍閥と云ふものは國內では支那四億の農民を支配する封建的な支配階級の代表者であると共に、又國外の列强ともさう云ふ風な關係を結んで居ると云ふことになつた。即ち列强の對立が支那軍閥間の鬪爭を起すと云ふことになるのです。而してそれと同時に歐洲大戰辛亥革命と云ふものを起して一時勢力が盛んであつた所の孫文一派の國民黨の力が延びて來ました。それはベルサイユ條約とか何とか國際的の大きな事件があつたのにも依りますし、又經濟的から云へば戰爭中支那に對して外國の手が少し緩んで居た間に、支那でも非常に産業的の發展が行はれた。さうして支那自身のブルジョアジイと云ふものが生れて來て、自國の産業を保護する爲に或る程度まで外國の勢力を防がなければならぬとか、關稅の自主權を得なければならぬとか、治外法權を撤廢しなければならぬと云ふ要求を持ち出して來た。是はベルサイユ條約締結の際にウイルソンが民族自決主義とか何とか云ふことを云つたので、支那の民衆は其結果に非常な期待をかけて居た所が、それが期待通りにならなかつた。さう云ふ事實に對して支那の民衆、特に學生とか小ブルジョア、インテリゲンチヤと云ふやうな人達は、支那を資本主義から脫出させたいと云ふ希望を持つて來たので、軍閥政府に對抗する爲に國民黨の下に指導されて、國民革命運動となつたのです。

其國民革命運動と云ふものは千九百二十五年大正十四年の五月三十日に起きた五・三〇事件でありまして、上海の共同租界で支那人に依つて起されたのです。此時には商人は店を閉めて外國人に品物を賣らない。勞働者はストライキを起す。大資本家大銀行は外國との取引を中止する。さう云ふやうな事件が東洋第一の開港場と云はれて居る上海で起きて非常に緊張した時局を呈したのですが、それを發端として非常に國民黨の力が强くなつた。さうして國民黨は其頃ソビエートロシヤと手を握ると云ふ政策を孫文が取り出した。それから其當時まだ非常に勢力の弱かつた中國共產黨と云ふものを國民黨に併合して、一緒に國民運動をやつた。先づ千九百二十六年支那の一番南の方にある廣東と云ふ所に、廣東政府と云ふものを樹てまして、さうして國內の反動軍閥を倒せ、外國の資本主義を倒せ、打倒帝國主義、打倒軍閥と云ふ二つのスローガンを揭げて北伐を開始した。此開始される少し前に孫文は死んでしまつたのですが、其後を引繼いで、今の南京政府の首領になつて居る蔣介石が北伐を進めた。當時の國民黨には其當時の支那國內の進步的な要素が全部入つて居たのです。地主の中の急進的の要素、勞働者、ブルジョアジイ、手工業者、學生、殆ど封建軍閥を除いたあらゆる層が廣東政府を支持して居た。其爲に初めは勢力の弱かつたにも拘らず廣東政府と云ふものは、千九百二十六年の半頃から北伐を起して、其年の中に楊子江沿岸まで勢力を延ばして來たのです。斯う云ふことが出來たのは、主に勞働者農民が國民政府に依つて自分達が解放されると云ふことを信じて、國民黨の北伐を支持したからでありますが、其後千九百二十七年の初めになりますと、ブルジョアジイが反動派に寢返つて蔣介石を懷柔して軍費として何千萬圓であつたかを蔣介石に出して、早く勞働者農民の勢力を削つて呉れと云ふことに妥協が出來まして、千九百二十七年の四月に南京政府と云ふものが出來て、さうして間もなく國民黨と中國共產黨は緣が切れて、是まで一緒に手を取つて戰つて來た國民ブルジョアジイと勞働者農民の勢力が對立するやうになつて來たのです。さうして國民ブルジョアジイは是までの封建的な軍閥と妥協して、お座なりの北伐を續けまして、千九百二十八年の中頃に遂に南京政府が全國統一をやりまして、一時支那の兵亂は治まつたやうに見えたのです。もう支那は軍閥

の支配下にあるのではない、進歩的な國民黨が支那の政權を握つたからには、もう支那の民衆は軍閥の爲に苦しむことはない。戰爭なんかは決して起きない。外國の資本主義の力も弱まつて行くだらう。支那の關稅の自主權も得られるだらうし、治外法權なんかも撤廢されるだらう。斯う云ふ風に國民政府は非常に宣傳したのです。所がそれから半年經つか經たない中にもう國民政府の下で軍閥間の戰爭が起きた。それからずつと今日に至るまで、戰爭は續いて居ります。最近は奉天派が乘出して出來かゝつた北方政府を流產させてしまつたと云ふやうなことになつて居ります。さう云ふ風に支那の國民革命が完成して國民黨が支配權を握つたやうに見えたにも拘らず、支那の軍閥支配と云ふ事情はちつとも變つて居ない。又國民黨の政治家達が云つたやうに、國內が統一されて外國の經濟的勢力が追拂はれれば支那はどん／＼資本主義國として發展しなければならぬ。所が支那は世界中で最も强い恐慌に現在見舞はれて居るのです。支那の貨幣制度は銀本位でありますが、其銀が非常な下り方をして居る。それから支那の產業が發達して居るかと云ふとさうでない。支那の紡績工場とか硝子工場とか云ふものは上海邊に隨分出來たのですが、それがどん／＼倒產して、工場の權利はどん／＼外國人に買はれて居るのです。又支那に豐富なる鐵とか石炭とか云ふ礦產物などは大抵五十パーセント以上、中には七八十パーセントまで外國人の手中に落ちて居る。而もそれが國民政府の時代になつてからさう云ふ風になつて來て居るのです。さう云ふ風に國民政府になつたにも拘らず支那の資本主義的な發展と云ふものが全然見込がないと云ふことを現實に見せ付けられて居る。それから斯う云ふやうに國民政府が出來たにも拘らず、それが安定して居ないと云ふもう一つの事實は、最近の勞働者農民の運動の發展です。之に付ては色々な之に關する專門雜誌がありまして非常に詳しい報道が載つて居ります。勿論其見方は非常にブルジョア的でありますが、我々は是等から可成りの知識を得ることが出來ると思ひます。支那の勞働者農民運動と云ふものは蔣介石の下で非常な壓迫を受けたのですが、現在湖南省とか湖北省、江西省と云ふ方面では殆ど全地域の八分通りが農民勞働者の支配下にあると云ふやうな狀態になつて居る。結局斯う云ふ風に軍閥戰爭が益〻激しくなつて行く傾向がある一方に

は勞働者農民の勢力と云ふものも意外な位の勢ひに發展して居る。此二つのことが絡み合つて今後も矢張り支那に色々なことが起きて行くだらうと想像されるのです。それに付て紐育タイムスの記事をちよつと引いて見ますと、是は勿論亞米利加の金融資本家の意見を代表して居るものと思はれるのですが、それが可成りハツキリした見通しを立てゝ居ります。之を參考の爲に拾ひ讀みをして見ますと、「自暴の國民は死物狂ひの呪ひを試みる。今日支那人大衆は惡政と厚顏無恥なる搾取の結果略ゝ千九百十七年――を捉へしと同樣絕望の淵に在る」。斯う云ふ風に非常に事件を重大視して居ります。それから「支那國民即ち農民苦力幾千萬の勞働者は事態の變化を望んで居る、若し辯口爽やかなるものが斯く斯くの道程を執ることを彼等に敎へ、其結果として無上の幸福と見ゆるに相違ない時代を約束せば蒙昧なる大衆は、共產主義宣傳者が彼等に敎へた所を、即ち手筈を定めて蜂起し、劣紳土豪を殺し、小作料納入廢絕の爲に土地を分配し政府の抹殺に依りて、種々なる軍閥の野望の目的自體の爲に年々苛重となる賦課の重荷から解放さるるを願ひて、政府及び支配階級抹殺を行ふのである。」即ち農民苦力幾千萬の勞働者は現在の窮境から逃れやうと思つて事態の變化を望んで居る。それから支那四億の人民中少くも三千萬が過激なる革命運動をやつて居る。さうして其勢ひは段々擴大しやうとする重大な樣子が見えて居る。で、此ことがどう云ふ風な影響を持つだらうかと云ふことに對して斯う云ふことを云つて居る。「若しソビエツト支那が軍閥支那と協調して活動するに至つたならば、滿洲に於ける日本の地位は國家的危機として用心を要する。北京外交界、上海租界等も危險になる。さう云ふ風な事態になるならば亞細亞の大半に對する影響は非常に深刻危險なるものがあるだらう。」斯う云ふ風に結論して居ります。斯樣に現在支那で起きて居る事件と云ふものは非常に重大味を帶びて居ると云へるのです。我々は事件の進行に對して始終注意を怠つてはならないと思ひます。是で終りに致します。

五ケ年計畫とは何か

——二——

神近市子

四

世界の資本主義國家が、全世界の六分の一にわたる國家に於いて社會主義が建設され資本主義の支配と存在とが破壞されて行くのをヂーッと見てゐることが出來ない事はいふ迄もありません。武力干渉は失敗に終りました。信用貸付によつて買收しやうといふ希望も、ロシヤの經濟的復興が案外早い爲めに水泡に歸して了ひました。最後の切札はタツタ一つです、それはロシヤを戰爭によつて打ちまかす事です、現在ではまだ資本主義國家は、自分達同志の爲に種々な利害の對立があつて共同してロシヤの社會主義國家に當るといふところ迄行つてゐませんが、さういふ時代が來る事は明かであります。ロシヤはそれを知つて居ります、だからそれに對して供へなくてはならないのであります。

　ロシヤが今國を擧げて五ケ年計畫の實現に熱狂してゐるのはこの爲めであります。國民はこの國際的情勢をよく理解して居ります。それで國家の計畫をたすけてこの五ケ年計畫を四年に或は三年半の中に實現せしめやうとして一つの工場内に、或は一地區乃至は一地方の工場間に競爭して與へられた數字を實現し、或はそれより以上出やうと努力して居ります。彼等は社會主義の世界と資本主義の世界とが、決定的な鬪爭を始めるのはたゞ時の問題だと考へてゐます。それ迄の現在のこの平和な時間は、全力をあげて利用しつくされなければならぬと見てゐるのです。この間に後れた未開の農業國を資本主義世界の全經濟的軍事的の攻撃に反抗することのできる一大工業國に變へなければなら

ないと考へてゐるのです。そしてこの戰爭を五ヶ年計畫が完成する迄のばすことが出來れば、大體に於いて自分たちの方に有利に展開せしめることができると考へてゐるのであります。

五

それでは五ヶ年計劃はどんな風に進歩してゐるのであるかと云へば、着々として實現しつゝあるのであります。この九月をもつて第二年度が終るのだつたと思ひますが、昨今世上に現はれてくる數字は一年半の成績を示すものであります。

過日はアメリカでロシヤが二千萬噸だつたかの小麥のダンピングを行つてアメリカの小麥の値段を狂はしたと出てゐました。フランスもロシヤの貨物の氾濫に悲鳴を上げてゐます。その他一九二九年十二月以後英國に輸出された穀物九十七萬五千噸、石油は（昨年中）二億一千七百萬ガロンに及んで居ります。今日でも毎週三十艘の船が貨物を滿載してロシヤの港を出ると云はれてゐます。

今日では、五ヶ年計畫は大體四年間——物によつては三年或は二年半——で出來ると考へられてゐるやうです。

左に擧げたのはスターリン氏が五ヶ年計畫の成績について今年六月二十八日からモスコーで開かれた聯邦共産黨第十六回大會の席上で發表した報告から拾つたものであります。

	五ヶ年計畫の既に實現されし部分	第一年の成績によつて豫定年數は遙かに短縮された
石油	八割三分	二ヶ年半以內
泥炭	同前	

機械生産工業……七割……二ケ年乃至三ケ年

農業用機械の生産工業及び電氣事業關係の工業……五割―五割六分……三ケ年

農事（戰前を基礎とする指數）

今年の播種面積……十割五分一厘

總收穫高……十一割

市場に現はれる穀物……七割三分（昨年は市場に現はれる穀物は五割七分それに比較すれば成功である）

綿花……十八割二分八厘

亞麻……十割一分三厘

甜菜……十三割九分四厘

植物性油……二十二割

尙ほ五ケ年計畫による國營農場の播種豫想面積は五百萬ヘクター（一ヘクターは一町二十步）でありまして、それが今年は既に三百八十萬ヘクターが播種され、一九三一年には八百萬ヘクターが播種されるに到ると考へられて居ります。

尙ほ共同經營農場の方は、一ケ年二千六百萬ヘクターから二千七百萬ヘクターの播種を見ると豫想されてゐました。それが第二年たる今年は、既に三千六百萬ヘクターに達して居ります。即ち二年で既に一倍半を超過してゐることになります。

六

こんなに大仕掛けな工業化農業化の結果として、勞働者の需要は非常に增加しました。前に申上げた共產黨第十六回大會のスターリン氏の報告にも、今年度は失業者は四割二分減じたといふことが報告されてゐました。

失業者の世界的の增加については、大塚氏から別の時間にくわしくお話があつたと思ひます。一九二七年にはイギリスの失業者は三百萬、ドイツには二百萬ありました。が、二九年にはドイツは四百萬——全勞働者階級の三分の一が失業者でありました。アメリカは最近まで二百萬、二百五十萬、三百萬等々とまち／＼な數字が傳へられてゐたのですが、大塚氏は八百五十萬といふ數を出して居られます。日本については正確な數字は分りませんが百萬を突破してゐると云はれてゐますが、これらの數字はどこの國に於いても日一日と上騰してゐるのであります。

この世界到るところで失業者が氾濫してゐる狀態にある最中に、ロシヤだけが反對に逐年失業者を減少して行つてゐるのであります。

左の數字は從業勞働者の數を示した物ですが、從業勞働者の增加は、その儘失業勞働者の減少となるのであります。

	從業勞働者數（百萬人）
一九二七—八年	一一・八
二九年末	一二・〇
三〇年末豫定	一三・〇

尙ほこの數は次の施設が益々廣汎にわたつて行はれる結果、漸次向上する筈であります。

(1) 七時間勞働制の擴大

七時間勞働制は一九二八——九年度から實施され、本年初頭には六十五萬人の勞働者に適用されてゐました。十

月には百十萬から百五十萬人に適用される豫定となつて居ります。

(2)生產設備の無休運轉と勞働者の交代回數の增加（卽ち五日一週制の實施）

これは一方生產設備の作業率を向上せしめると共に勞働者の收容數を增加します。これは一九二九年十月には全工業勞働者の中二四パーセントだけに適用されてゐましたが、本年二月には五七パーセント、現在では六四パーセントに適用されてゐます。

しかし、こんな努力は爲されてはゐますが、まだ現在相當の失業者はあることゝ思ひます。しかしプロレタリヤ國の失業はブルジョア國家の失業のやうに生產過剩によつて起された失業ではありません。反對に生產手段の不足──機械とか工場とかゞ全勞働者を收容するに足りない爲めに生じた失業であるので、五ケ年計畫が工業の促進──卽ち生產手段の生產に快速力を出して進んでゐる以上、この計畫の實現と共に失業者も減小し、全國民が就業しうるといふ時代が近い將來に於いて實現されることゝ思ひます。

特に五ケ年計畫のあとにすぐ引つゞいて計畫されてゐる十五ケ年乃至は二十ケ年計畫によると、その終了期には工業生產年額は十三年目には二十八倍となり十八年目には今日の百倍──卽ちアメリカ合衆國が今日生產してゐるものの五倍となるのであります。勞働者の賃銀は今日の四倍から五倍となり、反對に勞働時間は六時間から五時間となり、二十才以下と五十才以上の人はすべてあらゆる勞働から解放される豫定であります。この時代に至つたらソヴェート國內、おそらく一人の失業者もゐなくなるでありませう。

七

もうおそらく餘り時間がないと考へますから、婦人に關する施設について少しばかりお話を致します。

『女人藝術』の九月號にゼシカ・スミスといふ人のロシヤに於いての『母子保護に關する施設』を紹介して置きまし

たが、あの紹介は革命後のロシヤが婦人の爲めに何をしたかに關して大體の輪廓をお知らせしたと思ひます。

前にお話したやうに社會主義は都會と農村との對立を揚棄することを一つのプログラムと致します。又それと共に男と女との間の不自然な人爲的な差別をも揚棄することを目的として居ります。しかるに婦人の能力の發達を最も多く阻害したものは家事と育兒とでありました。それ故新しい國家の施設が、この點を見過してならないことも當然なことであります。

ロシヤの指導者達は、個人主義的な料理と育兒とが、社會の進歩を阻害するといふ輿論を國內に喚起することに努力して居ります。手工業時代は既に早く終りをつげやうとしてゐるのに、家事と育兒とが何時までも手工業的に止つてゐる間は、形式的な婦人の解放がいかに完全に行はれても實質的な婦人の進歩は望みがたいといふことを國民にのみ込ませることに努力しました。そしてこの二つの集團化といふことを極力奬勵して來ました。

無論五ケ年計畫もこの範圍にあつても相當爲すところを持つてゐます。それはこんな數字によつて表はされて居ります。

ソヴエート社會主義共和國だけで、一九三二——三年度には四十萬の兒童が幼稚園に收容され、約百萬の兒童が遊戯所に收容される筈です。

農業婦人のためには、五ケ年計畫の終りには集團經濟農場では一〇五〇の永久託兒所ができ、これによつて集團經濟農場の半分は託兒所をもつことになります。コムミユンでは一萬五千の兒童に對して五〇〇の託兒所に計畫され、勞働組合では同數の兒童に對して約四百五十の託兒所が計畫されて居ります。

この外集團經濟農場やコムミユンの永久的託兒所の外に夏期託兒所が三千六百設けられることになつて居ります。これで五年目の終りにはソヴエート社會主義共和國には全體で九千の夏期託兒所を有することになります。

共同食事のことについては、この夏浦鹽に一時に五萬人だかに給食することの出來る國營食堂が出來上つたといふ

五ケ年計畫とは何か

ことが、日本の新聞にも報道されて國民の眼を聳だゝしめたものでした。事實ロシヤでは國民の生活の劇變と共に共同食事をとる人の增加は甚しいもので、一九二九年には既に七百二十の食堂で四十二萬食が賄はれてゐました。

五ケ年計畫の最初の豫想は毎日二百十八萬四千食、約五百六十萬人に給食するといふことでした。ところが最近の共同食事の發展は非常なもので、一九三〇年の始めには既に百四十萬食を給食する事が出來ました。そこで豫想は非常に高められまして、五ケ年計畫の終了する頃には二千萬人に給食するといふ事に目標が立てかへられて居ります。

かうして育兒と食物調理――家事の大半が社會化されて、婦人が家庭と育兒とから解放される時に、我々は眞實に我々の時代を出現せしめることができるでありませう。それ迄はいかに形の上の同權利が充分に與へられませうとも婦人はまだ實質に於いて遙かに男子に劣るのであります。

スターリン氏は、

『我々は今や數世紀にわたるロシヤ式退歩を後に殘し、快速力をもつてソシアリズムの方向へ工業化の道を辿つてゐる。我國は金屬工業化の國、自動車化の國、トラクター化の國とならう。ソヴエート聯邦を自動車にのせ、農民をトラクターにのせた時、文明を自慢にしてゐる資本家共が我々と競爭ができるか。やるならやつて見やう。その時、我々はどの國が後進國になりどの國が先進國となるか、まあ見てやらうぢやないか』

と、傲語したといふことです。

今ロシヤの經濟的再建がかうして着々と實現して行くのを見る時、私共はスターリン氏の傲語が決して理由のない單なる傲語ではないといふことを感ずるのであります。

今や恐慌は深刻化し、愈々世界的な農業恐慌時代を出現し始めました。昨今の新聞で見られる通りです。此際、世界唯一のプロレタリヤ國家であるロシヤ丈けが私共と全然逆なコースをとり、賃銀は上り、失業は減少し農村は各種の文化施設によつて世界の歴史に例のない開發が行はれてゐるといふ事は、注目すべきであると思ひます。

豫告

文化の黎明今や四方に孕み、曙光すでに薔薇色の希望をもたらし、赫々たる未來の光明を力強く約束しつつある。その一九三一年初頭の本誌は

「目覺めゆく東方婦人號」

として特輯する。その鮮かなる進出と、そのいさぎよき女性擡頭とは、必ず諸氏の期待を裏切らぬであらう。

支那時局と婦人　藤枝・丈夫



★★★

時評・相互檢討・職場の叫び・實話・論文・小說・其他例月記事滿載



實話四篇

港

松本艶子

青澄んだ海、外國通ひの汽船の輻輳、亂れ飛ぶ鷗、汽笛が鳴る。天を摩すビルデング、毛色の違つた異人が通る、等等、これがまだ見ぬ人の畫く風景です。私もその一人でした。丁度資本家が世間の人達からある意味において尊敬されて、彼等をその地位に保たせてゐる、吾吾無産者が省り見られないと同樣に、人人の心に繪く港も亦、繪の樣に奇麗なものです。私達が港に行つて最初に目につくものは、二萬、三萬と云ふ大きな汽船でもなく、變つた姿で空を幾つにも區切つてゐる起重機、又は色の黒い印度人でもなく、おかしな節廻しで流れてくる仲仕達の掛聲です。つかれきつた身體で重い荷物を引ずる樣に運んでゐる。それ等の仲仕達の中に、色のついた臭氣のある手拭を姉さん冠りに働らいてゐる女の人達です。

渦巻いてゐる塵埃の中で、色の黒い、併し黒いと云つても繪に見る幽靈に墨を塗つた樣な青黒い不健康な、目のどんよりと濁り、痩せた女の働らいてゐる樣は、私が幼い時分に叔母さんに連れられて、お寺で見せてもらつた地獄とやらの繪よりも、まだ〱ぶ氣味な、慘酷なものです。

私達が學校を卒業る時、世間といふものが、如何なに恐ろしいものか、虚僞で構成されてゐるかと云ふ事はよく聞かされた事ではありましたが、それより以上に恐ろしい、生きんが爲めにその身をむしばまれて行く人達が、こんなに大勢いやうとは、聞かされた事もなく夢想もした事はありませんでした。

「用事もないのにそんな所に立つてゐると、邪魔になるさかい彼方に行きなはれ！」

耳の端で大聲にどなられたので、振り

返へると、三十歳前後の女が濁んだ目に角を立てて私をねめつけてゐた。「お前はん達のくる所じやない！」散々に怒り散らした上、黒い埃りのまじつたたんを私の足に吐きかけて、その女は行つて了つた。私は大きな倉庫を廻つて海邊の方に出た。陽をさえぎつた倉の端で、此處にも前と同じ様な人が二十人近くも、ふしだらな恰好で寢轉んでゐます。船や、岸壁の起重機や、馬車、トラクター等の鼓幕を破る位の音響の中で、よくもあんなに平氣に轉寢が出來るものかと不思議に思つた。彼等は私の騒音に消し取られる微かな足音に氣がつくと皆申し合せた樣に一時に目を覺したが不意の闖入者が私と云ふことを知ると、恐ろしい目付でねめつけて又横になつた。――後で知つた事ですが監督と間違へたとの事、それ程までに彼等の疲れ切つた神經は足音のみに對して過敏です――私は急に恐ろしくなつて足音に氣を付けて走るやうにしてそこを逃げ出した。と――皆とは離れて一人で働らいてゐる私と同年輩位の人がゐた。私を見るとなつかしさうに微笑むで又仕事に掛かつた。私はふなれな手付で運んでゐた仕事の終るのを待つてその人に近づいて行つた。

「隨分暑いですね」

「えゝ、ほんとに」

その人は勿論ですが、少し位歩いたのに、日蔭の所に立ち止ると急に身體中から湧き出てくる汗は止めどもなかつた。背中の襦袢が身體にくつついて心地の悪い事つたら。

稍々話してゐる中に體驗した事や、又聞き知つた事等色々と教えてくれた。綿の大部分が印度や米國から輸入される事は知つてゐましたが、色々と品名の異つてゐるのには親切に教えてくれたものゝ、記憶の悪い私には皆目何にが何んだか解らなかつたが快活な話振りにつひ釣り込まれて、此方からも色々と問ふた。その人の話によつて、波止場に働らきに出てまだ日の淺いことを知つた。名前が絹子と云ふ事も自分から教えてくれた。大部分の人が（皆と云つてもよい程と絹子さんはつけたした）過激な勞働と、塵埃の爲めに肺を犯されてゐる事をも話した。

「――その上大抵の人が婦人病なんです」

と、絹子さんは聲を落して顔を顰めた。

「貴女達から見れば、ふしだらな、人でなしの樣にお思ひになるでしよう。貞操觀念のない獸の樣に……でも一概にけなす事も出來ませんわ、悪いと云ふ事は本人達も自覺してゐるのですよ、併しね、生きんが爲めです。そうしなければ餓死するだけです。死んだ氣――眞實にそんな氣持があるとすれば、あの人達の事を云ふのだと思ひますわ」

「失禮ですけどお給金は？」

ぶしつけだと思ひながらも大膽にたずねて見た。

「そうですね、人に依つて違いますけど、いゝ人で（長く勤めてゐるとの意）八十錢、始め四十錢位です、私もその口ですの、毎日働らいても知れきつたもの

です。それに近頃は休まねばならない方が多いのです。働らくにも仕事がないのですから」

私は活動寫眞でよくある工場長等に取り入つて給料や待遇等のよくなる事を話した。

「他處では知りませんが、此處では餘り聞きません。全然ない事もありませんけど、何處の組にしても、給料の事は主に頭さん（店主）直接ですから、幾分かは小頭さん（現場長）の報告も參考にしてゐられるでしようけれどそんな事問題ぢやありません」

「あの荷物で幾何程の目方ですの？」

絹子さんの淋しそうな顏を見ては話題を變えねばなりませんでした。私達の處から半丁程はなれて、港を壓する樣な五階建の鐵筋コンクリートの四階目の穴から、一本のワイヤロープが下がつて、モーターの音だけ騷々しく、漏れ果てたものゝ樣に三梱の綿を重そうに徐々に引き揚げてゐる。

「平均四百ポンド、三百斤ですわね、隨分重いですよ、私達がいくら力一杯で動かそうとしても少しも動きませんの、綿と云へば輕い樣に思ひますのにね、そう／＼十日程前でしたわ、ついそこでね」

と、絹子さんは五、六間向ふの入口の處を指して

「晝少し過ぎでした。引き揚げてゐる中に、物凄い音と共にロープが切れまして下で働らいてゐた仲間の一人は頭の上に落ちてかゝつても一人は足の上に轉つてきて見てゐてもゾーつとしましたわ、どれが手か、足か、見分けがつかないし、ほんとに二目と見られた態ではありませんでしたわ」

思ひ出した樣に絹子さんは身震いした。私しも急に恐ろしくなつて、今にも落ちてきはしまいかと、こわ／＼倉庫を見上げて安全そうな蔭の處にもぐり込みました。

奇麗に着かざつた紳士、夫人、令孃等を乘せた自家用自動車が飛び過る。卷き立てゝ行つた塵りの中から仲仕達がうらめしそうに見送つてゐた。歐洲航路の汽船が出るらしい。

「あの女の化粧代だけかせげたらなあ………」

「あら小頭さんが來たわ」

溜息と一緒に仲仕の一人がつぶやいた。

塵煙と騷音に包まれた、夏の眞晝の風景の中から、何か最初に期待をかけてゐた程のものでなくとも、幾分なりとも滿足出來る繪の港を見出さうとつとめてゐた私の耳に、絹子さんの聲が響いた。振り返へると絹子さんはぶきやうな手付で仕事を始めてゐた。

「小頭さんが來るよ、そんな所に座つてゐるとしかられるから早く御歸りなさい」

で、私も急に好きになつた絹子さんに、左樣ならをした。

振り返へつてみると絹子さんの傍に一人の男が立つて、私の方を指して何か話してゐます。あの男が小頭だなと知ると、絹子さんがしかられてゐるのではないかと心配になつたが、稍々するとその

男は別の方に去つた。門の處にがんばつてゐる税關官吏がえらそうに、胸を張り出してゐるのが急に腹立たしくなつて──人の事だのにおかしな處に腹立てると、お思ひになるでしようが、此れが私の性分です、誰れでも意張つてゐるのを見ると無性に腹が立つのです──わざと大手を振つて通つた。

「お前達も吾々と同じ様な無産者じやないか！」

門を過ぎると戸板に乗せられた男が苦るしさうにうなりながら朋輩にかつがれて通り過ぎた。絹子さんの話してゐた事が今日は又私の前に如實に現われて來たのです。可愛想に、父母が待つてゐるかも知れない。妻や子が戸口に待ちわびてゐるだらうに……。

それ等の人達は食を奪われて今日にも路傍に漂泊わなくてはならないだらう。

私は遂に絹子さんが終りに言つた事を、口の中で何度も〱繰り返へした。

「運送屋と言へば世間の人達は盗人商賣の様に思つてゐます。運送屋と人間が喧嘩したこと丶、云ふ位に私達運送屋に勤めてゐるものは人間視されてゐないのです。勤めてゐる私達が自覺のない事が原因でせうけれど……」

鹿島立つ人の幸福を祈り、吾々勞働者を罵るかの如く、勢いのいゝドラが山彦となつたが、すぐとすさまじい騒音に消し取られて了つた。焼きつく様なアスファルトの上を見送りに行つてゐたらしい人々を乗せて次から次へと幾台もの自動車が私の汗せばんだ顔に埃りをあびせて行つた。

誰が悪い？

×子

M市──

それは町の小さい事と、そうしてマッチ箱の様な汽車で、その昔漱石氏の坊ちやんで有名である。

この猫の様な市にとつて、このマッチ箱の様な汽車は一寸も不調和でない、M市の城山からこの汽車の走るのを見ると微笑まないではゐられない、丁度子供が玩具の汽車を動かしてゐる様な可愛いゝ感がする。

この市から約一里許離れた所にある縁起祭の日である、働かなくてもいゝ運が向きます樣には昔の事だ、今では就職口でもと願ふ樣な人々で、この祭はこの小さな町に似合ずとても素晴しく人出が

多い。

今しも乘客を貨車にまで滿載した汽車が驛長の合圖とゝもに勢よくM驛を發車した。

たとへどんなに小さくともこの汽車はこの市にとつての唯一の交通機關である、客車に收容しきれない乘客を貨車に滿載したものゝ——貨車といつたところでトロッコの大きい位のもの——次から次から人は增す許で、さすがに慣れきつてゐるはずの驛員も整理しかねて、この寒さに汗さへ流してゐる。

だがその汽車の發車後未だ數分もたゝぬうちに無氣味な非常汽笛がなつたかと思ふと汽車は停車した、そうしてたちまち澤山の人々が集つた。だが擔架が運ばれ負傷者が病院へ運ばれ、生々しい血が砂で蔽われると後は又何もなかつた樣に往來は賑つた。驛の待合室では

「一體何事なのだ」

「飛込自殺でもあつたのか」

「女か、男か、」

「死んだのか、生きてるのか」

など丶聞き傳へに色々話合つてゐた。

森夫は胸の鼓動を靜めよう〳〵と焦れば焦る程、息苦しくなるのを感じた、他の車掌達が彼を取りまいて、

「一體誰だ、負傷者は」

「お客か？ 乘務員か」

「駄目なのか助かるのか」

と、一齊につめかけて來るのを答る丈の元氣もなく今にも氣が遠くなりそうだつた。

「石井がやられたんだ」彼はやつと云つた、

「石井？」と、他の車掌達が聞き返した。

「石井は今の列車に乘務したばかりじゃあないか、」車掌になつてまもない彼にとつて最初のこの事故はあまりに强くひゞいた。

非常汽笛を聞いて森夫が主任とゝもに馳せつけた時、兩大腿部を切斷された人間が汽車の下から這ひ出樣ともがいてゐるのを見た。森夫はギクッとした、生れて始めて見る人間の姿だ。

「おいッ、石井しつかりしろ、しつかり」

と、主任が叫ぶ聲に石井である事を知ると、體がふるへるのを覺へた、兩大腿部を完全に切斷されて多量の出血をどうするすべなく病院へはこんだその事實を、彼は見ながら疑はないでは居られなかつた。まして他の車掌達が信じないのも無理はなかつた。

こうした事故があると、乘務員達は勿論驛員はお互に一分のすきもない樣に緊張しきつてゐる、安い給料である事も、危險も忘れて仕事に從事するこんな場合の彼等の氣持はめりこむ椅子にこしかけてシガーを吹きながら運輸收入許案じてゐる、所謂おえらい方とやらには到底分り得ない。働く者の氣持は働いてこそ分る、そうしてこのおえらい人の收入予算をすつかり狂はせる雨が夕方になつて降り出した。

乘客が少くなると、ストーブを圍んで車掌達の詰所では石井の事を勝手に想像

しながら話し合つてゐた。
「一體どうして又轢かれたんだらう、汽車に乘つてゐる者が汽車に轢かれるなんておかしいじやあないか」と、若い車掌が云つた。
すると古顔の車掌は笑ひ乍ら、
「乘つてゐたつてどんな場合があるか分らないよ、兎も角も森夫君の話から想像してみるとデッキからふり落されたらしい、凡て汽車なんかはその前部でふり落された場合どうしたつてたゞではすまないよ、後部だと助かる時があるけど」
「だがM驛を發車した許で別に列車の前部へ行く必要もなかつたはずだがね、」
「それは本人以外には分らないが、今迄の色んな事故から想像すると、どうもそうらしいあの強いカーブを石井が知らないはずはないし、忙しいので取りのぼせたかな、まあ兎も角もお互に一つしかない命だ、氣を付ける事だ」
「石井の奴どうにかしてやればいゝがなあ」
誰かゞ云つた。

石井の話が一通すむと車掌達はこんな場合はこうしろのと議論し合つた。森夫はそんな事は一寸も耳に入らない、あのうめき聲が、あの痛ましい姿が忘れられなかつた。
おれだつていつあんなになるか分らない。
彼は頭がガーーンとなるのを覺えた。
「石井の所は兄弟が多いんじやないか？」
古顔の車掌が聞いた、今迄石井の事許考へてゐた森夫は彼の家の事を思ひ出した。
「石井を頭に六人もゐますから大變ですよ」
「そんなに困るのか」
「この間も親爺が長女を娼妓に賣るといつて、きかないんだと泣き出しそうな顔をして云つてました、だからずい分苦しいんでせう」
「どこも同じ事だなあ」
古顔の車掌が溜息を吐いた、

院長も助手も看護婦も緊張しきつてゐる、兩大腿部を切斷されて手術室に置かれた石井の姿はあまりに悲慘だ、看護婦は絹糸の樣なもので、切斷面の血管をくゝつて出血をふせいだ、院長はその冷靜な頭で、落ち付き拂つて命令する、だが誰しもがどうしたつて助かり得ない事を直感した、體の方の手當がすむと切斷された二本の足を別の手術臺にのせて助手も看護婦もそれを取りまいた。
めちや〱の切斷面を鋭いメスで肉を切つて平面にすると切り取つた肉を看護婦達はガーゼに包んでゆく、手術室に立ち會つた主任はこれ以上見る事が出來なかつた、輕いめまひを感じ乍ら待合室へ急いだ。
人間の肉が丁度牛肉の樣なのを始めて知た。待合室には父親が生活に疲れきつてゐるどんよりした瞳に不安をみなぎらせ乍ら待つてゐた、主任がはいるといきなり父親は
「駄目でせうか」と聞いた。
「どうせ駄目ならせめて息をしてゐる間

に會ひ度いものですが未だはいれませぬか」

だが主任は到底あの悲慘な姿をこの父親に見せ得ない。

「もうすぐですよ。今あちらもとりこんでゐるから手當がすんで行つた方がいいですよ、何そんなに心配しなくても大丈夫ですよ」

と、云つたもの丶今の樣子ではどんな手當をしても助かりつこはないのである。

だがこんなにまで子を案じてゐる父親に駄目ですとは云ひ得ない、輕い足音が待合室の前でとまると看護婦が顔をのぞかせ乍ら、

「意識が明瞭です、今の内にお會ひ下さい」

と、云ひ乍ら忙しそうに出て行つた。

「今の内に、今の内に」父親は吾子の到底助かり得ないのをはつきり知つた。

出血多量のため石井の顔は蒼ざめてゐる。

父親が近づくと彼は長い間求めてゐたものにぶつ丶かつた樣にじつと父親を見つめた。

「し、し、しつかり、な」

父親は胸がつかへて云ひ得ない、唇が、ふるへ、涙許り流れた。石井はうなづいた、何か云ひ度そうではあつたが疲れきつてゐる體では意識が明瞭であつても話す事が出來ない。それから五時間後、完全に息を引取つた石井の死體は彼の家へ送る可く再び汽車に乘せられた。雨は止みそうにもない、驛員達のかざす青いカンテラの光が氣味惡く動く、死體を乘せると一同は取りまいた。

「おい最後だ、みんな御別をしよう、」誰かゞ云つた。

「皆さん見てやつて下さりませ、變つた姿になりました」父親は顔の布を取つた。

青いカンテラの光にその顔はゾツとする樣だ。「石井君」森夫は吾を忘れて死體にすがつた。

手を合せて拜む者、男泣きに泣いて、その死を悼む者、それ等を殘して汽車は再びM驛を發車した。

生れ乍ら何一つ滿たされた事のない十九の短い生涯だつた、ほんとうに生れ乍ら、どうしたら食べて行けるか許しか考へなければならない彼だつた。家に着くといきなり死體に取り付いた母親が半狂亂の樣にわめくのを誰しも止め得ない。この痛ましい有樣に近所の人達も慰さめ得なかつた。

數日後會社から送られた、金二百圓——

それは曰く何、曰く何々の手當と凡てを計算しての金額だ、父親は溜息を吐いた。

長女が賣られ次女が女工に三女が町に子守奉公に出されたのはそれから間もない事だつた。森夫はたつた一人の親友の家のこの有樣を見て泣いた。何故だ。何故だ。誰が一體あの一家を不幸にしたんだ。

彼はじつとしてはゐられない衝動を覺へた。

生活戦線

森川みつる

ハツ子はＦ新聞社の婦人記者として、希望通り入社が出來た、ハツ子は長い間の理想を一朝にして獲得しただけにその活躍振りは潑剌たるものであつた、彼れ此れ二ヶ月は經過した、そして間もなくハツ子の腕前に自信が付く頃に成つた時、突如支局へ廻された。

今度新しく出來るＳ支局でハツ子は一人で讀者の勸誘と記事と廣告を取らなければならなかつた。財界の不況の爲め社内の緊縮と言ふ事であつた。それがため十二三は首になつた。

「今月から君は支局へ行つてもらひます、本當は首になる處ですが君の様な腕のある人には新開地とも言ふべき處でやつてもらふ事にしたから、そのかわり、給料は今迄とは違つて自分の腕一つでやつてもらはねばならぬのだ、その事だけは充分知つて置いてもらひたい」

恰度恩に着せられた型であつた。

「局長さんとても私には廣告なんか…」

「いや君の様に腕のある人に廣告位取れない筈はない、あれ位の記事を取れる君に廣告の一ツや二ツ取れない筈があるものか、兎に角やつて見給へ」

「でもそれは」

「出來なければ仕方がない止してもらうより」

だが、ハツ子にはこの社を止めれば明日へのパンに事を缺かゝばならなかつた。

それを考へると支局行きを返事せねばならなかつた。

「では、兎に角行つて見ませう」

ハツ子は風船玉の様に成つて下宿へ歸つて來た、何から考へても之れと言つて手の付け様もなかつた、下宿の部屋は空らつぽのまゝに古いダリヤの花が下を向いて顏をしかめてゐた。

（電車も自動車も汽車も工場も皆んなペシヤンコになつてしまへッ）

ハツ子は口の中でこの世の中を呪つて見たくさへなつた。二十五圓や三十圓の月給さへ充分吳れないで（腕があるから廣告で食つて行け、籍だけは社に入れて置く）何と言ふ言葉だらうか、ハツ子は幾度となく叫んだ（女々しい男、それでもお前は大新聞の局長なのか）

ハツ子は仰向けに倒れたまゝ一時は身動もしなかつた。

（朝の八時から午後の六時七時迄こき使

つてその上まだ足りないと言ふのであつた。その上腕があると見れば月給は出さないで廣告を取らせてその歩合でやつて行けと言ふのだ、ハツ子は何時迄も電燈とニラメツクラをしてゐたが、目の方がまけそうだつた。

「チクシヨウ――」

ハツ子は兩眼からハラ〳〵と涙を落した。翌日局長はハツ子に命じた如く支局行きの認を取つた、ハツ子の齒はギリギリと嚙み合つてゐた、今度の社内の整理は十二人の馘首があつた、そのうち九人の婦人記者が三人に成つた、その三人と云ふのが編輯長と特別の關係があるとか重役と緣故があると言ふ樣なものばかりであつた、ハツ子もその人達より腕があつても社の幹部連とは何等の關係を持つてゐないだけに首になる處であつたが、腕があると言ふので支局へ廻された、その變り支局では月給が出ない、ハツ子は兎もかくS支局へ赴いた。

S支局　それは靜かな田舍の都會であつた、電車の音もなければ自動車の土煙もなかつた、だがハツ子は靜かな一つ動かない空氣の中で生活をするのにはあまりにも遠い人間だつた。

家賃が十五圓、生活費二十圓どう切り詰め樣としても三十五圓だ、その上足袋下駄、日用品に五圓は必要だ、四十圓はなければならない、今日からの生活費は廣告でやつて行くのだ、ハツ子は最初の日に七圓廣告を取つた。

それを社に持つて行くと、一行十五錢で七圓三十行と見て三圓は社の方へ納めた。すると、殘りの四圓は支局長と二等分したのだ。

結局ハツ子は嫌な思ひをして二圓しか手に這入らなかつた。

そうした廣告は毎日歩いても、一週間に二度位しか取れなかつた。

ハツ子はいよ〳〵生活の恐怖を感じない譯には行かなかつた。

或る日ハツ子は某醫學士夫人を訪問した、そして訪問記を書いた、間もなくその記事は載せられた。

朝六時半

ハツ子は床の中で突如聞いた言葉、それは支局長が言つてゐるのだ。

「大和田さんの記事が出てゐる、ね守山さん、守山さん、訪問記が出ましたよ」

ハツ子は別に嬉しいとも思はなかつた

「そうですか」

「そうですかじやありませんよ、今日は早速大和田さんの處へ行つて奥さんに少しもらつて來て下さい、こんないゝ廣告をしたのですから十圓や十五圓は呉れます、そうすれば半分はあなたに上げませう」

「何の爲めに行くのですか」

「何の爲めつてあなたも案外わからない人ですね、無料で記事を書く必要があるものですか、こんなに大きく載れば十圓位は下さいと言つてもいゝですよ」

「私にはそんな事は出來ませんです」

「そんな馬鹿な事があるものか」

「いゝえ、とても記事を書いたからとてそんな料金は頂きに上がれません」

「そんな事では仕方がない、而し兎も角

行つて見てはどうです」
「私は今迄にも二三の新聞社にゐましたが、そんなものを頂きに上つた事はありません」
「そんな事があるものか、何處の記者でもやつてゐる、軟派と硬派と二つあつて、今の樣な場合は軟派と言ふのです」
「私は今迄に何百回となく訪問記を書きましたが、そんな事は一つも知りません」
「今迄どんな大きな新聞社にゐたのか知りませんが、そんな社は一つだつてありませんよ」
「ですけど、私は知りません、不幸にして、そんな事をした覺えもなければ、言はれた事もありません」
「馬鹿な――」
「――」
支局長はぷり〳〵怒つて出て行つた。
ハツ子は、どうしても立腹せずにはゐられなかつた。
もう首になつた方が幸福だ。こんな馬鹿な話しはあつてたまるものか、大新聞社は婦人の教養の良き伴侶となるのでなく、婦人の恐喝犯人を作る社の樣なものだ。これが現在の大新聞の持つ德なのか知ら、笑ひたくなるのだ、時には支局長の顏の一つもなぐりたい樣な氣にさへ成つて來た。
間もなく田舍の町内には守山ハツ子の名は花火の樣に擴がつた。
そんな事から、二週間も經たかと思ふと、守山ハツ子の名刺を見ると玄關拂ばかり喰わされてゐる樣になつた。ハツ子は今更ながら袖をしぼつた。時には、
「女の新聞屋さんだ、新聞なら家はもう結構です」
大家の玄關で女中に追拂はれるハツ子の胸はハリサケる樣な思ひであつた、玄關を背にして門を出る時には思はず淚が地上に轉んだけれ共、食わんが爲めに足をすりこ木の樣にして步いた、而し、もう駄目だつた。
狹い町の噂も何時の間にかハツ子の耳に這入つた、ハツ子は夜の來るのも忘れて泣き通した、一夜は淚で明けてしまつた。
「失敗だつた、こんな處へ來のが」
ハツ子はもだへた。
「私の一生の失敗だつた、何んだつてこの町の人が私をそんなに恐がるのか知ら、私は何をしたのか知ら、そんなに人に嫌はれる樣な事を正しい廣告を取つて步いたのに何の不思議があるものか、誰れだつてそんな事位は、――一體全體どうすればいゝのだ」
ハツ子は日夜犯人の樣に泣いた、町の者は寄るとさわると指を指すのだ
「女の新聞屋―」
何と言ふ冷たい言葉だ、考へれば考へる程悲しくなつて來るのだつた、たまりかねたハツ子は言つた、
「もう私は廣告は一切取りません、小使は入りません」
「それでは折角あの土地に紙を增そうと思つてゐたのに記事も廣告も取らなければ駄目ぢやないかね」
「それじや私は食べるだけで結構ですから食べさして下さいまし、そうすれば記

事だけは書きますから」
「困りますよ、廣告位は取れるでせうが」
「取れません、はじめから廣告は駄目だと私は言つてゐました」
「それではあなたの月給がありませんよ」
「そんな馬鹿な話しがあるものですか紙數が增す、記事を書く、私に給料がもらへないなんて、……」
「けれ共、社の方も事情が許さんので」
「たとへそれにしても少し位は出るでせう」
「まあそのうち何とかなるでせう、兎に角廣告を取つてもらわなければ」
「困りますね廣告は、今後は絕對に取りませんから……」
「君なんか口がうまいから廣告位は取れない筈はないんだがなあ」
「私の口がうまいつて御存知ですか、私は今迄にも廣告を取るには泣きの涙で取つて來るのです。もうそれにはたへられません」
「それやあどうも仕方がない、じやあ食ふだけは支局の方で何とか致しませう、……」
ハツ子はどう考へても自分を知りもしないで搾らうとしてゐる支局長がにくらしかつた。
それから間もなく兎に角食ふ事だけは支局長の方で食はして呉れる事になつた。ハツ子は少し氣も落付いた。
數日後の事であつた、この町に出てから友人になつたKがハツ子の家にやつて來た、Kは每日の樣にハツ子の家を尋ねてゐた、ハツ子を女らしいと見て呉れたのはK位だつた。動きやすい女の心はこれ又Kを信用してゐた、そのKが、今日も又、ぼか／＼と晩秋の日當を背にしてハツ子に話した。
「この間もねハツ子さん、僕がO醫院へ行つたのさ、そうしたら君の事を言つてたつけ」
「私の事とは、どんな事……」
「隨分すごい腕の女だつてさ」
「えゝッ」
「近頃婦人記者で斷髮でこの町を押してゐるそうだつて言ふのですよ」
「まあ、——私が、………どうしてでせうか」
「で、僕は言つてやりましたよ、あの人をすごいなんて言ふのは少し可愛想ですね、成る程斷髮はしてゐるけれ共、優しい人ですよ、僕は家內も共に近しくしてゐますけどね、それはちと言ひ過ぎぢやありませんかと言つてやりましたがね」
「私の事をそんな風に……」
「實に町の奴等は服裝や頭でツベコベ言ふのですからね、洋服を着たり斷髮をしてゐるのがすごい腕なら、誰しもが出來る事ですよ」
「この町へ來てから嬉しい事なんてありませんわ、每日涙の元ばかり作つてゐます」
「全く、そんな事を言はれると殘念ですね」
「町の人達がそんな事を言つてゐるの

も、皆私の出方が悪い時だつたのです
よ、廣告を取つたのが悪いのですよ」
「廣告位が、なんの事です」
「私もまさかこんな町だとは思ひません
でした、私がアバズレ者だと言はれたの
は此處へ來てはじめてです。何も知らな
い人達に言はれるのが殘念です」
「よくそれでも今迄やりましたね」
「もう私は馘首されても構いません」
「それにしても接角造りかけた、婦人同
盟はどうする積りです」
「私は、私は、どうせ人の犧牲に成つて
行く積りですから出來るだけの事はやり
たいと思ひます、こんなに皮肉を言はれ
てその人達の爲めに、運動や仕事をする
而かも無料でやる私の身は心を切られる
樣な苦痛です」
「僕はなぐさめる言葉さへ出ない」
「私をこんな不信用にさせた支局長をう
らみます、ほんとうに誰が私をそんな風
にしてしまつたのだ」
「わかつてゐます」
「O町の人達も今少し考へてほしいと思
ひます、私の裏にゐる奴等を考へて下さ
い、私の悪口を言ふ前に私を使つて涼し
い顔をしてゐる奴を……何も知らない
で私を苦しめるなんて……」
ハツ子はKのゐるのも忘れて泣いた、
秋の空よ雨になれ　雨になれ、
私は雨が大好きだ　大地をそして
なぐり伏せてしまへ、
その頃から夕立氣味を見せてゐた雨は
夜に入つて激しく降り出した、
雨よ降れ、　そしてこの町を
流してしまへ、
ハツ子は叫ぶ樣に雨の夜の町の中を彷
徨してゐた。
秋の雨よ、もつと降れ、もつと降れ
降れよ降れ、もつと降れ秋の雨よ、

故里へ歸つて

福田美智

國の税金が出來るんですか――光はお
づおづ兄に聞いた。
――あるもんか、お前の汽車賃さへや

うやうなんだ——つゝぱなされた樣な返事に光の餘算が古壁の崩れる樣にグタグタ崩れた。

——草履が欲しいな、せめてコルクの安つぽいのでも——魚町筋の下駄屋で見た昨夜の草履の事がまだ忘れられなかつた。

——けれど草履なんて言つてゐる時期ぢやない赤いコルクの夢なんか捨てしまはう——

秋雨が濕つぽくとたんを叩いてゐる。

——早く晩が來て夜が明ければいゝな——

そしたら桶屋のわがえの音もミカンスイ屋のびんの音も左官の健さんとこの鼻たれぼうずの泣き聲も聞へなくなるんだ汽車に乘つて郷里に歸つたら年甲斐もない馬力屋の金さんの色氣でジユク／＼した、ひやかしなんてありはしない、戀しいお母さんの所で思ひつきりあまへて見たいな、自分の親しいものは久し振りに會ふ母だけだ。田も畠も他人のものだし村の娘達だつて大概地主の子だからむね糞がわりい、なんでもいゝ、たゞ、あしたあしたあゝ嬉しいな——光は子供の樣にはしやいだ。光が喜ぶ理由が他にたつた一つあつた、それは同志の水島が同じ村に歸つてゐる事だつた。

水島は光と同級だつた。生れつき頭のいゝ二人はいつも首席を爭ふてゐた、小學を卒へると各々の境遇に依て無關心に別れてしまつた。何年か經て光は製糸工女をしてゐた。盆の休業で村に歸つた時同じく夏中休暇で歸國してゐた水島とめぐり合つた、水島は○市の外國語學校の生徒として社會學を傍研究してゐた。

水島は役に立ちそうもない專門學生の白い手の悲哀を光に嘆じた、水島のはなしを聞いた光は自分達も貧乏のどんづまりに對する憤激と制へつける權力の辱しめにぶちまけてなるものかと思つた。

其の後光の工場が閉鎖した、經營困難でまゆも機械も借金の抵當に分取られて、光たちは、賃銀と少しばかりの手當をもらつて默つて歸らねばならなかつた。

それから光は○市で女中を轉々とした。此の春から兄の家に來て女中代りにこき使われた。義姉は光の物に動じない落付きを人に怖けない冷たさを横着だとののしつた。兄は本を見る事を生意氣だと言つて燒きすてた。

周圍の壓迫が激しければ激しい程彼女の心の芽はグン／＼伸びて行つた。光はすべての不滿を心の奧に培つた儘じつと耐へた。自分たちが造り出そうとする明日のタイムが——彼女を張り切つた生活に生かしてゐた。

——今に見ろ——

漆くひ鏝を砂でみがいてゐる兄のしやくどう色に燒けたエリアシを見つめ乍ら何に依つて湧いたかわからない憎惡をかみころして微笑した。

貧乏人にやたらにおつかぶせる税金等どちらにしたつてかまやしない——

光は机の引き出しから國の村役場がまわして來た怠納調書に眼を通した。

宅地と地層割で十五圓也。

今の彼等に取つてかなりの大金だつた

一體どう言ふ譯でこれ程の稅金がかゝつてくるのか！

　何十人かの乘客を乘せて一日に何回もK驛からS驛へ通ふぼろ馬車の栗毛の馬と諸ろがほのをやぢだけは變らなかつた。舊式なぼろ馬車は時代のスピードにはとん着なくをやぢは陽氣に鼻で唄ふ。

　じうたんの綺麗に禿げた腰かけに光は三四人の乘客とのつた。

　ザーッと降つて來た土砂降りが硝子の拔けた窓から降りこんで來た。

——雨がかゝるな、はゝあん硝子がねえのか——五十前後の善良そうな男が始めて氣付いたのか度の強い眼鏡の下からにごつた眼をチラと投げた。

——ヘエ硝子をはめ樣と思ふんけんど大分かゝりますんで——

　おやぢが正直に辯解した。

——アッ上が漏るぜ——中年の男が滴のかゝつた頭を制へて體をねぢけた。皆一勢に上を見上げた。

——どうもすみません今日はあんまり雨が激しいもんで——

　をやじが油のギラ／＼浮いた氣毒そうな顏をして振り向いたがみんななれた顏をしてゆられてゐるのを見て安心して馬に一むちくれた。

——をぢさん下りは何時かな——

——十一時頃のが丁度よからうぜ——

　停車場へ着いてもまだ雨は止なかつた。料金十錢也を拂つて、光は日豐線の下りにのりかへた。車內は授業始めの女學生や中學生が、大分乘てゐた。

　變な眼づかひをしてガヤ／＼言つてゐる者があつた、明らかに異性への媚だと思つた。彼等は大聲で猥談を飛ばしてゐた、スシにパクついてゐる者があつた、どの顏を見ても

——自分たちは——と言ふ樣な理性を喰われたほのめきが漂ふてゐた。

——役に立たないブルの卵だ——

　光は苦々しいかんじがした。

　今に見ろだ。おれ達の鐵鎚がどんな工合に振りおろされて行くか——

雨がまだ、窓を叩いてゐる。光は水島が借してくれた古本をトランクから出してソッとひろげた。

　今歸りました——古びた我家の戸口をズイとは入つた時、父のない家は淋しかつた。台所から母が待ち兼ねた樣に前掛けで汚れ手を拭き乍ら出て來た。

　——さびしかつたかの——ヨボ／＼の眼にたまつた淚を汚れまみれの袖口で拭いて我が子の姿を見下した。

　光は汗でしつとりとした着物を脫いで半裸體になつた。ガランとした廣い家に賣り殘のまゆが惡臭を放つてゐる。掃除の行きとゞかない部屋の隅つこに襁褓が轉つて久しく使はない光の机の上には埃がボッコリ溜つてゐた。

　蜘蛛がけんたいに巢を張つた天井に數個の繭が取り殘されてふめば落ちそうな納戸の床板が、氣味の惡い程グラついた

　光が子供時代大きい女だつた母は背が曲つて低くなつてゐた。うるしの樣だと自慢してゐた髮が赤茶氣て白毛がまぢつて、にごつた眼に白い眼やにが絕へずま

つわりついてゐる。
我子のために合所で熱心に動く母をじつと眺めて光はすまないと思つた。
休んだらえゝに――母の言葉を押し切つて光は合所へ下りた。流の上に黑い鍋ずみがたまつて久しく使わないしやく子や小鍋に埃やねずみの糞がたまつてゐたが光は汚ないとも思わなかつた。母は畠から南瓜と茄子をもいで來た。部厚い土鍋で煮えたごちや煮を母子は麥飯に添へて食つた。久し振りに美味かつた。
母は役にもたゝない雜談を次々と引つぱり出した。光はうるさいと思ひ乍ら一一親切に答へた。
――アッお母さんあぶら虫が――
たね油に浸した樣な濃褐色の翅を光らしながら戸だなの醬油びんをはつてゐるあぶら虫を見て光は大ぎように聲を擧げた。開き戸のすみからもゾロ〳〵とはつて來た。
――こん畜生、晝でも出てくさる
母が平手でドシンと板敷を叩いた。

變化のない眠つた樣な此の村に盆が來た。不景氣はこゝにも魔の手を延ばして村の小作人は木枯しの樣な吐息をつく樣になつた。
まゆが甚だしく暴落してまゆを町に賣りに行つた村人は今年は町から買つて來る中元ものをへらした。
收入が少ないのに稅金はぎやくにふへた。
過酷な稅金の徵收は財產差押へ、競賣となつて、貧乏人の蠶具や農具が運び去られた。村人の大部分はたのしまない憂うつな氣分で、盆なりと――半ヤケだつた。
緊縮が今始まつた樣に、初盆會の新佛に供へる今までの習慣だつた菓子袋と香料を廢止しようと云ふ議論が起つた。併しそれは佛に對して敬けんの情がない。祖先の祟りを受けると恐れる者が反對した。而し舊十三日になつて見ると廢止論を起した者も菓子袋と香料をもつて、初盆のある家の戸口をはいつてゐた。
――光や墓へ參らうや――

うどんを打ち終つた母が折よく掃除を終つた光を呼んだ。
光は線香を持つて母の後に從つた、一二間後れた光は萩のおほひかゝる足許を踏みしめながら佛を迎へに行くと云ふ此の墓參りを遵奉する自分が馬鹿らしく思へた。
林立した墓石がブル地主とプロ小作人との懸隔を明らかに示してゐた。
枝振りの好い松を背景にした一番大きい自然石の墓が、村一番の分限者で信用組合を起した豐田義次の墓だつた。
信用をモツトーとした彼等の組合が全くそれと矛盾して現在では肥料代の前借に迫われた小作人たちは、拂込金を調達するのに、煉獄の樣な苦しみで餘したわづかの麥や米を六、一（つまり質）銀行に書きこんで金を工面したそれから起る影響は正月の月から米を買わなければならなかつた。それでもブルジョアイデオロギーにこり固つた村人は、彼等に對して不滿を起す事を知らなかつた。墓石に麗々しく書き列べた功績は村人が、自然

石をかつぎ上げて、そして村人が承認して書き込んだものだつた。それと並んで頭くわくを拔いてゐる墓は皆櫻田一門の墓だつた。

光は父と言ふ二尺高さ程の墓石の前にぬかづいで手を合わした。幾年前にか死んだまだ墓石を立てゝない兄弟の古づかに線香と花をさしてまわつた。

光等は歸りに孝助爺さん達と一しよになつた。八十才になつても達者な老爺はもつれ糸を引き出す樣にボツリ〳〵と話した。

――全く不景氣になつたもんぢやな、十年前が一番景氣が良かつたぜ、五圓位は立つたまま借り出しよつた。が今もう俺見たいなもんにや十錢のぜニだつて借し手はねえ、

俺達が若けえ時にや手織りの木綿着物が一張羅だつた。食物なんぞ、あら麥の引き粉が今のメリケン粉よりもてたんぢやからな、

あんまり若けえ奴等がぜいたくすぎたから罰があたつたんぢや、みんな、おぶげん樣の眞似をしやがるから天から制へられたんぢや――

資本主義社會の悪影響とも知らないで孝助爺さんは神罰だと信じてゐた。

舊十三日の圓い月が蒼く澄んで秋をかなでる虫のコーラスは以前と變らない。川ばたの竹やぶがにぎやかだつた。盆踊りは農民の慰安と享樂だつた。踊りの太鼓が若い娘子供の感情を躍らした。

貧乏も壓迫もない、生活苦から脫け出した安さだつた、歸つて一度も會わない水島と會われそうな氣もした。

――光さん――光が板べいのかどを曲らうとした時、たしかに聞き覺へのある水島の聲だつた。誰か青年が立つてゐると思ひ乍らも無關心で通り過ぎ樣とした光はびつくりした。

――いつ歸りましたか――

――四五日前歸りました――

光は水島について步いた。

二人は熱心に話した。水島がグループをつくつて村の青年達を啓蒙して行く計畫が實現して、四五人の同志の出來た事を話して聞かせた。

水島さん盆に佛が歸るつて墓石の前で手を合わさなければならない必要がありますか――光はやぶから棒でこんな事を聞いた。

それあそうですよ、祖先を敬ふと言ふ美點にあるんですからな、即ち私達は私達の子孫の祖先だ、私達の祖先は私達をよい社會に生かそうと思つてこう言ふ資本主義社會を造つてくれたんだ、我々の造り出そうとする社會が、果して遠い後の彼の子孫に良いか悪いかそれは解らないが、我々は今のタイムが通れないんだ、おほひかゝつた資本家の手も足も出ない此のカラを打ちこわさねば生きられない時が來たんだ、而し私達のために犧牲にまでなつて封建制度や資本主義社會制度を守つてくれた祖先に對して、我々は大いに感謝しなければならないと思ひますねハ、、、、、――

水島は本當を言つてゐるのか冗談を言

つてゐるのか解らなかつた。

翌日光は二里程はなれたA村の雄辯會に水島から誘はれた。光は近所の男乘りの自轉車を借りて十一時頃出かけた。

落ち込んだ樣な僻村のこんな所に、めざめた青年があるだらうかと思はれた。

會場は青年の會合所となつてゐる學校の空住宅だつた。續々とよつて來た青年達の顔は壓迫の鐵板を突き破るに充分な活氣がみち〳〵てゐた。

人數のそろつた頃——ゴツ〳〵やつて來た。

——奴また來やがつた——拂つてもすぐ止まる糞ばへの樣に何所へ行つても此奴ばかりはつきものだ。

幾度かの中止をへとも思はず盛んに氣炎をあげた。一番終りに水島が立つた。

地主撲滅！

中止！ 尖鋭化した青年達の顔に殺氣があつた。ガヤ〳〵したどよめきの中に會は終つた。

何かに化けて踊らう、以前から考へてゐた事だつた。

夕方になつて光は女學生用の上衣と短い碁盤縞のスカートと、ブルジョアのをやぢがかける樣金縁な眼鏡を借りて來た。それを着込んですまし却つて踊場へ飛びこんだ。

——誰のでもいゝから帽子を借りて下さいな——

——よし來た——一人の青年が氣輕に何所からか鳥打帽子のスマートなのを借りて來てくれた。光は手早く毛髮を中へ卷き込んで帽子をかぶつた。其の上から手拭をほゝかぶりにした。

光はバットを一本もらつて、火を點けた。踊り乍ら煙草を吹かすおどけ姿が村人の目から見ると極度なパクレン者に見えた。光の横をすり拔けて行つたのは、さつき帽子と煙草をくれた渡邊と言ふ青年だつた。其の後から下駄の緒を切らした水島が手拭をくびにかけてびつこを引きながら從いて來た。

下駄の緒を立て終つた水島は挨拶を打ち拂ひ乍ら光の前を通り拔け樣とした。

——水島さん——光は頬かむりを解いた。

間もなく中息時になつた。主催部の青年達が酒やお八つを運び出して來た。光は水島の方へ行つた。他の青年も一緒に立つた。同志かもしれないと思つた、光は帽子を脱いで眼鏡をはづした。うす暗い裏瀬戸を拔けて廣い路に出た。

頬かむりをはづした。二人の青年は水島の兄、政宜と光より一級下だつた河野と言ふ青年だつた。

——光さんその服あんたのかね——

水島が後から聞いた。

——いゝえ借りて來たんです——

——いゝ女學生だな——

——女學生に憧れてゐましたからこんな時でもならなけりやなる時はない思つて——

併しもう女學生も嘲りたい。憧れも崇拜も去年の雜草の樣に枯れてしまつた現在の光だつた。

——汚ないが私んとこでも——

光は案内した、四人を六疊の一間へ招じて障子を明けた。サツと蒼い月光が流れこんだ。
先づ話題の前提は昨日の雄辯會の事だつた。
此の村にも青年の集合所を置いたらいゝなあ、どうだい、あの學校の住宅の校長の奴を追ひ出したらあそこがいゝ集合所だと思ふが――
――うんそうだの俺たちが小學時代にや、あそこにや校長は置いてなかつたんだ、村のものだからかもうもんか――
あそこを集合所にして、青年の集合機會を多く造るんだ。一週間に一變位集つたら大分いゝだらうな――
此の村は自作兼小作農の者が多いから困難だと思ふな――農村はどんづまつてしまわんとめざめるのがおそい――
――併しもう縣道筋は全部T町の野村と言ふ金融資本家に抵當に入れてあると言ふぢやないか、自作農はすぐに沒收する時が來るよ、そしたら殘るのは、四つの親玉だけだ、豐田に村長の渡邊に酒屋の喜八に農會長の溝浦だけだ。
今秋は八割率の年貢米を五割値下げの要求を叩きつけ樣ぢやねいか奴等がグツグツ言へば鬪爭だ。
――それ迄に青年會館を造つて盛んにしたい――
そんな統一のつかない雜談的なものだつたが誰れも意氣はしつかりしてゐた。
暫く沈默が續いた。
高い天井から釣り下つたコードの先に豆ランプの樣な十ショクの電燈が淡い光を放つてゐる、壁にうす茶色の家漏りの斑點が異樣な地圖を描いてゐた。
皆は、煤煙ですゝけた天井をにらんで焔の樣な希望を、もつと上手に表現したかつた。
いつの間にか太鼓は止んで時計は十二時を打つた。納戸に寢た光の母の引き摺る樣なね息が、とがつた各々の神經をかすめた。
――もう歸らうや――
河野が促した。
――それぢやまた集りませう――
――それ迄みんな考へてをくんだ。さあ手を出せ、ダンケツだ――
水島が言つた。八つの手が熱く固く握り交された。
道路を三人の下駄の響が聞えなくなる頃――夜の靜寂を破つて三人の歌ふ勞働歌の線の太い肉聲が流れ出した。

原稿募集!

實話、職場からの叫び、その他の原稿を、どしどし送れ。
文章はまづくても、字は下手でも眞實の叫びをかいて送れ。

職場からの叫び!!!

九才から働いた

一製本工女

毎日毎日幾萬となく澤山の本を造つてゐる私達の仲間には自分でこしらへてゐる本の表題すら讀めぬ人が澤山あります。何故でせう。それは家庭工業の發達して現在に至つた製本業なるものは、いはゆる徒弟制度が現在でも多分にあります。そして十歳位にして、ガムシヤラな親方の下に搾取される樣になり夜學にすら通はしてくれないからです。私も家が貧しい故に九歳の時に親の手をはなれて或家へと働きに行かされました。最初の約束として義務教育だけは卒業させてやるし工場以外の仕事は絶對にさせないと云つたのでしたが學校などは夜學でさへも通はしてくれず、朝は五時に起し炊事の手傳ひをやらされ、九歳の私には出來ない樣な事迄無理にやらされました。工場の方も忙しい時には夜中の十二時一時頃迄やらせるのです。居ねむり等をしようものならなぐる、ける、の虐待です。こんなひどい目に逢つて誰が反抗心をもたない人があるでせう。十五六歳になつた頃には分らないながらも此の世の中を呪ふ樣になつてしまひました。そしてふとした事から或人と知り合になりその人に依つてこの資本主義社會の矛盾した事を敎へられました。それからの私は一生懸命に、字を習ひました（そうした事を本に依つて知りたいと思つたので）今ではどうやら本位はよめる樣になりました。永い封建時代の夢をむさぼつてゐた私達の仲間も今ではやうやく自分達は今後どうしなければならないかと云ふ事がだんだんと判つてきた

讀者通信

東京　中島たつ子

私は府下に居住するあはれな荷馬車挽の娘です。生れは上州ですそこでガタ馬車や（乗合馬車）をやつてゐましたがまもなく東武鐵道が出來たため懷しの故鄕を後に私達は十二年前に流れてきたのですそして荷馬車屋を始めたのです。

大正七八年頃は景氣がよく一日に三臺位は運送が出て居りましたが、今では不景氣な上にトラック等が出來た爲に父一人でさへも遊び勝です。トラックの爲に運賃は下げられ荷主はあらされるし無能な荷馬車挽はこの先どうしたらよいのか分りません、たまに荷がある時は私達にとつてはキリスト以上に救ひの神です。近頃ハマグリ賣や、新しい魚賣が殖えましたがあれは皆トラックに追はれて干上つた馬子のあはれな姿です、家ではどうしてこんな文明に逆つた商賣ばかりやるかしらとつくづくと考へる事もあります、而し之も運命で致方も御座いません、私は生れるとすぐから馬とは切つても切れない間柄といつかなつてしまつ

様です。女藝は二三ヶ月前から讀みだしましたが非常にいゝ本だと思つて居ります。只もう少し實際運動に關した記事をのせて頂きたいと思ひます、そうしてこの本をインテリゲンチャ婦人にではなく勞働婦人に力強い働きかけをされん事を希望します。

派出婦

吉村美津子

「派出多忙會員募集」こんな廣告が毎日の新聞の廣告案内にはきまつて三つや四つは出て居ります、それを見て失業苦をなめさせられてごろ〳〵して居た私は遂に派出婦になるべく一つの廣告主の家に行きました。

そこでは會長が私に派出婦は立派な職業婦人でありますから決して女中同様な生活ではありません、若し貴女が入會したい様なお心でしたら身元引受人と戸籍謄本を持つて來て下さいますればいつでも入會できます。

そしてお金はどれほど一ヶ月に取れませうと重ねたのに對しまあ平均一ヶ月二十五圓位ですねと云はれました。

では明日持つて參りますからとの言葉を殘して次の日に入會した私でした。

が今私は、入會する時に會長に聞された月二十五圓位の金は元より月々一ぱいにもやつて行かれないで借金を殘して行く有様なのです。入會した當時も十三日目にやつと派出した有様です、その間の心細さ、たくわへもない殘り少い財布は日毎日毎にしなびて行きました。

三日四日派出すれば十日や十五日は出られません、その間は何の用も手に着かず明日こそは明日こそはと待ちかまへて居なければなりません。あまりのたいくつに少し良い着物に着かへて外出をしやうとすれば派出婦がそんな華美な風をすると派出先が嫌がるし外に出る時でも目を着けられますからと注意をされてしまひます。

會長の言葉通りに職業婦人として取扱はれて居るならばたまの外出の着物の小言は不用だと思ひます。

派出しましても私達は普通の女中のと同じ

たのです、父の荷馬車を挽く姿を見てはあゝ氣の毒だ、何か樂で金になる商賣はないかしらと思ひます、そして、自分の意氣地なさが情なくなり涙がとめどもなくながれます、夏の暑い日にも父は東京へ荷物を取りに行きますあまり遅くなつても歸らない時は馬が電車にでも驚いてかけ出したのか知ら、今怪我したと知らせが來やしないかしらと家を出たり入つたりして心配でなりません、そういふ時はきつと先年大怪我をした時の事を思ひ浮べてゾットしてしまひます、父が無事に歸つた姿を見ると引しめた心が一時に緩んで私は何の役にもたゝない自分の身を考へて父に濟まないと思ひます、荷馬車挽は命がけです、實に悲慘です「稼ぐに追ひつく貧乏なし」なんて古くさいお人善の言葉は空想したくとも馬鹿〳〵しくて出來やしません、私達勞働者は働いても〳〵貧乏に追ひつかれてしまひます、私はよその針仕事等をして得た報酬を月に十二三圓家へ出すので餘な本一冊買つて讀むことすらできない境遇です。

文明が惡いのか資本家が惡いのか貧しい私の腦では判斷が出來ませんがトラックといふ便利な副產

に働いては居られません。一ヶ月二ヶ月も無精して山とたまつて居る洗濯物が、少しのひまもなく働かせます。
食事時だと思つてゆつくりも食べて居られません。あれをして下さい、あそこを何々しておいて下さい、そして後でこの洗濯物を、とひつきりなしに用があります。
朝起きるからねるまで少しのひまもない私達の生活ぶり、ほんの少しの夜の時でもきまつた樣にお裁縫。
私は出來ませんからとはね返してやりたい樣な氣が致しますけれどそれをして歸れば後で會長から叱られる事は解りきつて居るのを考へてはしぶ〳〵ながら袖の一つも仕上げなければなりません。
やつと山の洗濯は片づいた頃はきつとこれでいゝから歸つて下さいと云はれます。
こんな有樣が私達の派出狀態です。
そして歸される 私達は又會に歸る路すがら、又十日や十五日の失業狀態を考へて居ります。四日で得たこの金も會に居ればすぐ飛んでしまふ、いつ貯金の出來ることだらう。そしておまけに會員同志のいがみ合、女ばかり小さな處にごろ〳〵して居る果はきつと小さな事に毛が生えて大きな惡口になつて居る。ほんのわづかの事も大きくして各々怒りぽい顔を向け合つて居る。
こんな事を考へて居ると歸るのがたまらなくなる。
歸會すればその日からもうすぐ食費はどんどん重なつて行きます。
やつと少し働いた金で會費と寄宿費を拂つてほつとして居る間に他の費用はどん〳〵重なつてゐる。
その費用の半分は大抵その日の借金同樣になつてゐる。
一日働いたわづかの金から步合を取る。食物はまづい物を食べさして一定の金を取る會費、夜具代、寄宿費、これだけでも大した收入になつてゐるのに、今月は幾圓缺そんだ等と私達にきまつて聞かせる。
まづい物を食べさせ 金は一定の 額だけ取る。
これで足りない理由が私達には解らないのです、私達の悲しいところを考へてくれないで自分の事のみ考へて居る會長は會員を少しにして早く派出する樣に考へてはくれないで後から後から、一人、二人と入會をさせて居ります。
毎月毎月私達が、足りなかつた金を考へて

物が出來たために荷馬車挽は今までの倍も働かねば一家を飢えさせないだけの報酬が貰へないのです勞働者は實にあはれです、身體は機械の如くすりへらされてもパンの爲に一生を終へねばならないのです、私等下層階級の者は何處へ行つたらよいのでせうか？

初めてお便り致します。

大阪 太田 靜江

私は大阪の或病院に勤めてゐる一看護婦ですが皆樣と共に同じ道に進みたいと思ひます。
御誌八月號を或友より借りてから力强く感じ九、十月と二ヶ月發禁で遺憾に思つて少し落膽してゐましたが十一月號發行してゐると云ふことを聞いて飛び立つ思ひで早速買ひ求めて讀んで居ります。
勤務の暇々診察室の片隅で讀んで居りますと先生方や友達からも惡思想の本とか赤いのだとか隨分非難の聲を耳にしますが反つてこうしたことによつて御誌は私の心を引きしめて常に正しい道へと導き熱と力を添へてくれます。
鬪爭なくして進步なし……私達は各自自己の立場を自覺し私達プロレタリアの解放に努力致したいと思つて居ります。

岐阜 富×み×る

苦んで居る事を知らない、多くの人々は新聞廣告につられて毎日一人や二人は申込に來ます。

少し年を取つた人はことはられてすごく歸つて行きます。そしてその人達は入れてくれない會長をうらんで居る樣をはつきり表はして行くのです。　何も内容を知らない中がいゝのです。

寄宿と云つても八疊の部屋一つに十人も十三人も寢るのです。眞夏の暑い蚊の來る時も蚊帳をつることは出來ません。

大ぜいの息でむし返す樣な暑さの中で一晩中うめいてゐる有樣です。

そして朝起きても皆言ひ合せた樣にあゝ今日で十日よ、私八日だから未だ未だね等と云つて居る。

一日暑い日中財布を氣にして過ごし又次の日を向へて居ります。

こんな有樣にある私達ですけれども未だ未だ駄目です。

いくら會長に取られ樣と金持の家に行きくさつた樣な家の樣子を見て來てもその金持等について考へ樣とは致しませんで不景氣が早くなくなるといゝのね、とこぼして居ります

たまに私が口を出せば吉村さんは左よ。

私は社會主義大嫌ひ、等とんでもない事を云つて皆に笑はれてしまひます。

景氣の原因を考へないで金持の奧樣の美しい着物には何の不思議も感じない人ばかりなのです。

不景氣が早く好景氣になればいゝなどの考へに結んでゐるのが會の中の大部分であります。

役所から

蒼野尚

私達の働いてゐる××局は、小綺麗な建物と役所特有の溫情主義とで、醜い總てを蔽ひかくしてゐるのだ。

單に表面のみ見たとしたら、かなりの自由をも與へられてゐる此處に働く私達を、むしろ幸福にさへ思ふだらう。だがそれは違ふの

私は寫眞屋に厄介になつてゐる一無産婦人です、當地は半農半商の田舍の小さな町です、そして養蠶と繭で出來る物だけが産物です冬は信州の近くなので寒いから外仕事が出來ないので此れから私達若い者の勉强するに一番好い時です。愛讀者は小學校の女敎師二人、中産階級の商家の婦人二人、百姓家の婦人一人ですが、やがて十人程にはなりませう。來年の三月頃に御社の先生方に來て頂いて講演を開いて、當地の若い婦人達の眠りをさましたいと願つてゐます。

愛知　加藤武

私は地方讀者です斷然聯盟に入會をします、本誌に對しての希望は營利的でなく友愛的に、希望社の樣に親密な全國的のグループを作り誌友照會出來る樣にして下さい。同所に居ながら知らないで居るとか全國同志が交際の出來ない樣では又本社同人と誌友とが餘り隔りが有りはしないかと思ふ、本誌中心として全國的に親密なグループを作り友愛的に團結して希望に向つて進みたいと思つて居る。

川路すみか

反動の秋〃その波に乘らなければならぬ生活を、多忙に多忙に過

貯金局から

一女事務員

だ。ちつとばかしの自由なんて、結局みんなの瞳を盲にして了ふのに役立つ程度のものなのだ。それは奴等の前に、より以上奴隷的にする事だ。――山と積まれた、事務に始終追ひ立てられて、能率〳〵とあくせくしなければならない私達なのだ。肺を害ふ者も決して少くはなかつたけど。それに對して係長は一週間の休暇さへ、拒むのだ。彼は我身可愛さから、スパイ的行動を毫も恥ぢずにとつてゐる、至極忠實な番犬なのだ。

そして此度、局では危險思想の名の下に冷酷な眞の本性を暴露して、横暴な彈壓の斧を振りかざして、無慈悲にもどし〳〵首切りをやつた。有爲な若者を、――それも單に、意識を持つてゐるのみにすぎない者をも、――何の躊躇もなく、叩き出したのだ。奴等は、根絶やしにしなければ承知出來ない意氣込だ。「お上の貴い事業にたづさわつてゐる中に、危險思想を抱いてゐる者のあるのは實に悲しい、とか、やめてもらはなければならない」とか、ぬかした。

しかしこれは、彼等の眞實の泣事かも知れぬ。女事務員――仕事ときたら女工と何の變りもないのにこの言葉の持つプチブル性が彼女等を滿足させもし、みぢめな位、無自覺にもさせたのだ。男よりずつと安い給料で、男のそれよりずつと溫順で、よく働く女に、彼等は眼を付けずにはゐなかつた。

首切りの後におこる當然の缺員には、男の變りに馬鹿な位無抵抗で、しぼりいゝ、まして思想的になんか、何の心配もない女を、雇ひ入れる狡猾な彼等の意圖なのだ。

そしてその計畫、着々と進行されつゝ、あるのだ。――

だがいくら彼等が、根絶やしに仕樣と、やつき、となつてさわいでも、それは結局無駄な事だ。

はげしい彈壓の後には、より以上、力強い芽が、ぐん〳〵のびて、やがて一ぱいになるといふ事を、彼等は知らないのだらうか？

してゐます。

笑ひながらあほうのやうに……

道化役者です。

之が忍從と言ふものかも知れぬ、靜かに侍たう。

そう一人ごちながら泣いてるピエロみたいな毎日を送ってゐます。女人藝術が段々と力强くなつて行くことが、唯一のよろこびです。御奮闘をいのります。

日暮里　永岡　みつ

女性ばかりの雜誌女人藝術に對する希望を申し上げます。

面白くて爲になる記事の多い事いろ〳〵の方面にわたつて居る事。知識の交換機關でありたい事等です

女人藝術は他の雜誌に異り女性の知識の向上發展を助け自覺を促すを目的としたい一般女性の讀物である故多く女性の心に合致するやう注意するが大切であると思ひます非常にむつかしい面倒なことは多くの女性には適しません。あらゆる種類の女性の心に合致したしかも正しい人類の進歩に矛盾せぬものさうしたものが理想的だと思ひます。

岩手　松村　春枝

御誌を讀み始めましてまだ日も淺いんで御ざいますけど、今迄解

終業のベルが事務室の空氣をふるはせる。――今日も暮れた。腦天がづきづき疼く。昨日からわたしはアレがあるのだ。又この一週間、いやな氣持で十露盤をはじかなければならない。

わたしは思ふのです。せめてこの時だけでもお役所を休ませて貰ひたいものだ。いやいや、そんな事を思ふだけわたしはいけないのかも知れない。しかしわたしは決して無理な考へとは思はないのだけれど。

わたし獨りがこんな事を考へたつてどうにもならないのだからだ。工場の人々のやうに何故貯金局の人は元氣がないのかしら、矢張りインテリ、そしてプチブル性だからなのだ。

春山さんはわたしに較べれば勇敢だと思ふ。だつて、何時も休んでしまふんですもの。尤もわたしも春山さん位强いのだつたら、自然出られなくなるのだ。

私はすれば我慢も出來る。しかし、この居殘り……之はなんとかならぬものかしら。工場のやうに分がつくでなし、くだらない御奉公だわ。

手當なんて言つたつて、考へやうによつては、隨分人を馬鹿にした査定の仕方だし、殊に女なんて、言ひたい事があつても泣き寢入りするより途がないわ、だつて古い女性道德で固まつてゐる班長さんなんか相手にしたつて仕方がないし。

こんな風に、消極的に考へてくると、何もいゝ考へなんか泛んで來やしない。

わたしのお友達のKさん――あの人は勇敢だと思ふ。あゝしてジミな仕事を、元氣でやつてゐらつしやるんだもの、工場の方がどんなにいゝだらう――わたしはKさんを想ふといつもさう思ふ。

わたしには、教養もないし、勉强も足らないから、深い理論はわからないけれど、貯金局の人だつて、リーダーのしつかりした人さいゐてくれたら、この妄迷なわたしたちを、も少し何とか眼をあけてくれる筈だと思ふんだけれど。

女のお友達と言へば、活動俳優のこと位しか話題にしないのだし、ほんとにぢれつたくなつちまふわ。少しすゝんだところで、西條八十、令女界、全くいやんなつちまうわ。

少しは生活、向上と云ふ事を頭において欲しいと思ふ。玉の輿にのることを考へてゐる人達のことを思ふとヘドが出てしまふ。

これ以上、もつとひどく、女といふものを低下したいのかしら、尤も自覺のない女にと

け得なかつた何かゞ分つて來ます同時に、非常に力强く感じられ今迄淋しく思つたりしましたが今はたゞ御誌の發行日が待たれます、小さき芽を養つてくれる唯一の友です終に聯盟の方皆様によろしく。

朝鮮　×下　芳子

此頃はもう重性の金缺病でなか／＼全快しないんです、血みどろで金策中です、九月號發禁に紋いて又十月號發禁とおたよりで知りましたが――でもこんな事で恐れる様な女人藝術でない。秋だ！と思ふときあの深くすんだ、靑空の中にあらゆる障害をのりこえて私たちの女人藝術よ、力ある限りのび上つておくれ！

文藝思想講座――きゝたいな。と一人で歎息して居りました。

こんな田舍に居る私たちの爲にその變　うれしいたよりのレポ送つて下さい。何だかこのごろあまり頂きません。内地の妹に女人大衆を送つてやつたら、マユの安くなつたわけがわかつたと、かいて來ました。

京　英美子

二ケ月に渡る發禁に驚きました。

田舍で私の歸つたため小いさな

つては、そんな事を夢見るのが關の山だらうけれど、やりきれないわ。

ほんとうに正しい生き方――プロレタリアにとつては、實在の位置から自分を解放するといふ事より外にないのだとわたしは思ふのだけれど――を欲する××家にはとてもわたしは今のところなれさうもないけれど、ローザのやうな女性はわたしの心を、しつかりとつかんで離さない。貯金局の圖書館にはあの人の手紙を譯した本があつても、女の人はまことに讀者が少ないのだ。

文學全集とか、講談全集なんてのが一番廣くよまれてゐるんですもの、なさけないと思ふわ。

もつとも、あんな閲覽槧を基礎に、ブラックリストでもつくられるだんとしたら、この邊は少し考へなければならないのだし。

資本論の出た頃、その購讀者を、庶務あたりで、内密に調査したらしいなんて事を、男の人が話してゐるのをきいた事があるのであつてみれば、なにをやるかわかつたもんでないと思ふのです。

この貯金局では、御用組合同様の從業員會さへ許されないのですから、まして思想的に動くものなどは表面的にはつくれない事は解つてゐる。

あの頃、わたしは入りたてだつたし、子供だつたから、會の意味なんてものがよく、はつきりわからなかつたけれど、この頃のやうに、自分の不平などが起つて來ると、始めてわかるやうな氣がするのです。

矢張り男の人は、いろんな本をよんだり勉强してゐるだけに、中には先覺者がゐるのだと私は思ふ。

こんな事を書いて、女人藝術でのせて下さるかどうか、見當がつかないのですけれど、一寸思ひうかんだまゝをかいてみました、貯金局の中でわたし以外に本誌の讀者があつて、この下手な文章をよんで下さつたら、そして共鳴して下さる方がありましたらわたしは蔭ながらあなたに熱い握手を送ります。

そして何時か、何かの折に、仲よくなりたいと思ひます。

展覽會の盛況を支持せよ！

讀者諸氏の愛情を示せ！

力强き後援の事實を示せ！

茶話會を開いてくれて、その時一つ女人聯盟を作ろうと話が決つた樣な譯で、×××が何か思ひちがひをして女人藝術を買はせない樣にと書店のを取り上げたではないかと日が一緒であつたものですから、そんな子供の樣な考へもしてみました。

私も田舍に歸つても床の中に伏せて居るのが多かつたものですから、本もよまないでボンヤリ暮らしました。聯盟も、私は作り上げたい、私の力でとは思ひましたけど、あとで活動して下さる人の意志通りにさせました。ほんの出來たといふ名ばかりの集りですし、聯盟を作り上げる事にはづかしく思ひました。

それで私は本をよんで下さい。そしてよく、女人藝術を知つて愛して下さいといつたら、本だけは六七人買つてよむことにされたとのことでした。十一月號は私はその人達から、買ひまして歸京致しました。

十一月一日、新聞見學へ是非行きたいと思つて居ます。

此の頃すつかり、家庭に追れて忙しい、平凡な、ひからびた頭になつて、何の勉强も、出來ないつまらない者になりました。



二章

江口章子

憂鬱なる秋

黒き眉毛に
はひあがる
黒き蟲あり

人知らず
吾れまた知らぬ
秋の憂鬱

落葉を敷きて
一夜眠むれば
身はやせし秋の簑蟲

枯葉にむすぶ
黄なるゆめあり
吾れはその山繭(やままゆ)つくる

憂鬱の銀の糸巻
一日また一夜めぐりて
紬ぐは白き息(いき)の菅(すが)の緒(を)。

人形師

人形の
人形の
秋のくるしき
息づかひ

いのちしぼりて
人形師は
秋の素肌を
ぬりつぶす

さみしき女
みづからを
人形の如く
いとしみつ

その人形と
みづからを
たゝきつぶして
しらじらし。

病める悲哀

北山雅子

『思ひ出ははるかなりしですネ』
遠い南葛の野から
はるばると、舞ひ込んできた
ハガキの一枚

親切なともだちの
優しいアイロニーだ。
そのはるかなる間
私は逃げて來た。逃げてきた。
水枕の蔭に――。
體溫計の蔭に――
『寒くなりました。

友に叫ぶ

窪田貞

友よ
今カツ〳〵と燃える炎をみつめて
私の胸は異様な歡喜にふるえてゐる
一本のマッチから成つたこの火が
どんなことを仕出かすか知れないのだ
誰かこの火の仕事を豫言出來やうか
誰かくだらないと嗤ふだらうか
友よ
自己卑下のみが能ぢやないんだ
自己嘲笑のみが役立つ筈はないんだ
弱いからと自認してゐては
あの憎い力が強くなる許りだ



ぼくは、歯磨も買へません、』
豊多摩からの便り。
差入れはしたいが
私の肝油は今日も空つぽ。
噛み殺したせうりよは
脳膜に甦る。

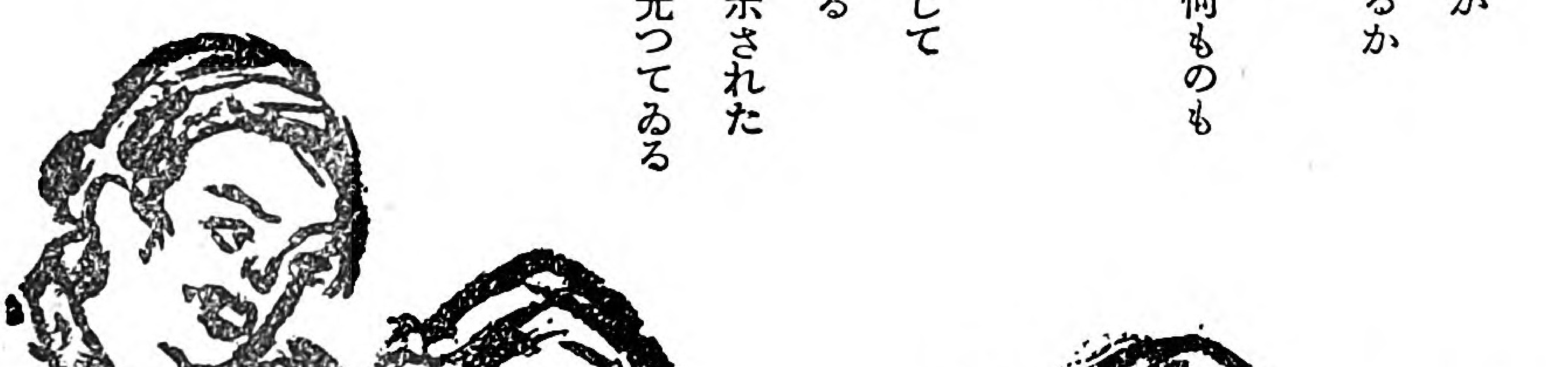
同志よ。
友達よ。

思ひ出は
思ひ出ははるかなりしだらうか、

友達よ。
同志よ。
思ひ出は
はるかなりしだらうか。

一九三〇　一、二五

私達が弱からうが
ちつぽけな存在であらうが
どんなことの導火線になるか
嗤ふことは出來ない筈だ
この體内に湧き上る力は何ものも
突破せずにはおくものか
友よ
過去一切の記錄を炎に投じて
私は今日を期して起ち上る
そして私の瞳は幾度か指示された
一點に向つてラン／＼と光つてゐる
友よ
火だ！　火だ！
熱だ！　熱だ！
しつかり兩手を握つて
あの一點目指して
サア敢然と進むんだ



相互検討

侮辱されるな農婦人會諸姉

青山幸子

全國農婦人會諸姉に告ぐる。

私共は私共の機關として設立したる農婦人會を再び私共の手で作り換えなければならない。地方の女子青年會が希望社の泉の花の支持機關としてその存在の價値がある様に、現在の農婦人會も二三の幹部であるブルジョア婦人の御機嫌を取つたり、生臭坊主達の珠數の玉でも數へ立ててゐさへすればいいのであつた。宗教家として大谷一味は成程ゑらく、尊いかも知れないが、人間として、自然人としては決して尊い人ではないのである、日日の新聞紙が報道するが如くに法廷に呼びつけられて下らない階級及人々からあざけりを飛されつつあるではないか、實際宗教家ほど搾取するの口上を作るに上手な人は無いと思ふ。最近の噂を實際と信じてその一端を公開すれば、七月下旬の頃である。大谷御裏方智子の方が三條別院へ臨席されて、一寸新潟へ立寄られし時の如き（最も新潟縣立高等女學校長華房氏が智子の方の舊師）農婦人會は特別會費を徴收されて『拜顔』に出掛け、『拜顔料五十錢』『拜聽料三十錢』と、まるで映畫スターに對して熱狂したファンの樣な雜踏を呈したさうである。參觀した婦人が明日でも棺へ片足突込みさうならまだしもいゝが、十代の娘さん達、二十代の若夫婦が多いのであつた。

『衣飾が惡いと失禮に當るから出來るだけ着物や履物の選擇に努めて下さい。着物や履物が直ちに××村の農婦人會の名譽にかかることですから』

こんな訓令が幹部から出された。

しかし見詰めよ現在の農村の狀態を？お米を作るお百姓たちの家に一ヶ年の飯米を蓄へてゐると言ふのが村で指折る程しかない、中農者以上でなくてはそれは出來ない事なのである。小作人たちは麥飯、カテ飯（大根の葉を入れた飯のこと）マキ飯（惡質の米を碎いて普通の米と混じて作る飯）を喰ふのが普通であつて、畑の作物が米の出來るまでの命のつなであるのに、最近に至つてはナスが十錢で二百個、三百個（新潟市場では）一車、汗水を切つて押した所で五十錢そこそこ位しかにならない。

そこへ持つてきて農婦人會の御事業ときたら、西瓜の試食會、漬物講習會（奈良漬、甘漬、凡てプル階級の常食となるべきもの）大谷御裏方拜謁會（特別會費の取立）縣營試畜場見學、そのついでにバタ牛の何んとか、等等等、數へ立てれば際限のない程のこの反動振り。欺瞞ぶり。

八月二十日朝まだ早い五時頃である。私がいつもの道を突いて工場へ急いでゐると後方より十五六名の婦人連が、まだ若い十七、八位の女も居た、が、元氣よく道々キナコのついた握飯をぱくつきながらやつて來た、中には子供を背負つた者が二三名、後から背廣の紳士が二名と水色の袴をはいた若い女が三名、きやきやと笑ひ乍ら停車場へ行く。尋ねたら、××村農婦人會の前衞隊で縣試畜場へ行く一行ださうで、背廣の紳士は技術員と會長兼書記で女事務員らしいタイプは役場の給仕連と一名の幹部ださうです。私は元來、背廣階級には餘り好感を持つていないから技手等の後を追つて行つた。

技手達は私のぼろ〳〵の着物の上に度度視線を飛ばす。だが何んの存在もないやうにしてゐたのだ、そして既に濟んだ漬物講習會などの話で持ち切つてゐた。

『要するにね、僕達の立場としても、それに農會當局の立場としても、一寸氣のきいた催し物と、事業年度で何か一つでも會員に印象を與へさへすればいゝのですよ、見ろ、石井君（以前の技術員）などの時代に農婦人會などは年二回、春は加治川の櫻見に、夏は彌彦公園、翌年は新發田聯隊見學。それに蓄音器購入、凡てそれが石井君の印象と紀念になつてゐる譯です。今僕達が試畜場へ連れて行つたところであまり印象にも紀念にもならない。何んとか來年から方針を代へてみたらどうでせう。つまり新潟の芳尾だつてまだ見た事のない者が相當あるし、幹事を引いてカフエーなども一寸面白いでせう』

こんな話である。

彼等の事業なんて言ふことは目茶苦茶に印象さへ與れば濟みさうに言つてゐた。茶化しさへすればいゝのであつた。

私は思はず毆りつけてやりいた衝動を感じた。それより私は農婦人會について急轉直下的な調を進めて極めて簡單ながら以上の如き反動振りと欺瞞を發見することが出來た。

現在の農婦人會たるものが結局プル階級婦人に對して御氣嫌を取り、一つのサービスの役割を演ずることゝ、それのみ

か反動的に、農婦人會なるものがブル階級の訓令の下に、勤勞プロレタリヤ婦人に對して大きな侮辱を投げかけるに最も適確なる機關に過ぎないと言ふことを知つた。私達は斷然取戾さねばならぬのだ。

『俺達の樣な貧乏者の娘が漬物の漬方や御裏方を拜んだつて何もならない、いつそ行つてみないで田の草を取つてゐたがいゝ』

貧困なドン底の人々のこの言葉に對して幹部達は口を揃へて

『ごうざらしだ』と侮辱をあびせかけてゐる。だが私は目醒めてゐる農婦人會諸姉に訴へる。

『ごうざらし』が果して如何なるものかをはつきりと嚙み分けよ。それは働くものに對して大きな侮辱以外に何にものもないのである。

そんな侮辱を受け續けてゐるより田の草を取れ？ ブルのサロンに納る奧樣とか孃さまとかにお仲間入をするのは直に彼等に砂丘に等しいブル根性を植つけられ、はてはブル、ブルと成つて行かなければならない。

彼等がサロンに納つてゐる豪華な生活を眺めると同時に自己の貧しい生活を突き詰めて見詰めよ、銳く見よ、そして如何に農婦人會たる名稱の下に彼等ブル婦人がサロンより離れてはせ參じたかを。なぜ農婦人會の名稱の下に自分達がブル婦人と仲間にならねばならなかつたかをハツキリ見極める時こそ、如何に現在過去共に農婦人會が腐敗してゐたか又今後も腐敗し行くのである事が判るのだ。

諸姉よ、欺されるな、ブル婦人がサロンより招く手に、やさしい聲で呼びかける農婦人會の幹部諸君の手に。決して、決して。否。

斷然反動的な御事業に對しては銳く彈ぜよ、バクロせよ。その時こそ彼等は抗し切れない壓力にその欺瞞の正體をバクロするのだ、そしてこの社會が如何に欺瞞に埋つてゐるかを負けおしみに言明して了ふのだ。諸姉よ、その社會へ視線を銳く射し込むことだ。仕事が、誰れの肩にかかつてゐるかをハツキリ見定めければならない。

「ブル・マル男をうつ」號を観る

日種明子

組合の可愛らしい若い同志が、私への土産だと言つて、私が如何に喜ぶであらうかを期待しながら（彼は私にさういつ

た）特に念入りなセリフを以て私に呉れたプレゼントが「婦人解放」十月號、標題の男をうつ號であつた。私は彼を失望させたくなかつたけれども、他の同志は此の雜誌を買つた彼に對して、一齊に攻擊の聲をあびせかけた。彼は失望と悲しみの表情を全面にたゝえながら、激昂する同志達の顏をみて隅つこに小さくなつてゐた。そして最後に、彼は委員長及幹部によつて、此の雜誌に對する批判を聞かされた時、彼は何故か大聲をあげて泣いたのだつた。純情な少年が、彼の小さい頭から割り出した純な贈物が、只今彼樣な結果を齎した光景をみた時、私は、今までしのび續けてゐた、婦人戰線なり、婦人解放に對する、斷然たる清算をうながさずにはおかれないはげしい感情にうたれた。或同志が「之は無産大衆の敵だ！」とまで言つたが、かゝる無産大衆の名に於て、無産大衆を瞞着せんとする者に對して、勞働組合が如何に寛大であつたかを知らねばならない。

我が無産大衆婦人よ！ 吾々は此の際斷然自重せねばならない。吾々の同志の間には、無政府共産主義者の思想行動が如何なるものであるかも解せずして、或は忌憚なき處の批判を爲し得ずして、彼等の唱導する婦人權力の擴大への夢に引込まれてゐる者がないとも限らない。彼女等は自分の英雄主義と婦人特有のことにインテリ婦人に多いヒステリカルな潔僻性を滿足させんが爲に徒らに叫んでゐるヒステリーの絕叫であつて、何等の實なきものである事を悟られたい。

「婦人戰線」が創刊された當時、先づ最初に私共の間に於て問題にされたのは彼等が標示する「無産婦人藝術聯盟」の名稱であつた。之こそ、彼女等が常に排斥して已まない處の彼女等の敵の左翼黨たる吾々勞働組合の者が常用する名稱でないか？ 吾々は何故にクロが「無産婦人藝術聯盟」といふまぎらわしい言葉を使用したかといふ事に就いて、彼女等が潔僻性であるだけに解釋に苦しむ。正しく云へば彼女等は「黑色無産婦人藝術聯盟」と名稱しなければならない筈だらう。處で此の問題も「無産婦人」の名稱は何も勞働組合の專賣特許であるわけのものでないから、彼女等を責める道具にならないといふ事で鎭つたものであるが、「無産婦人藝術聯盟」の好餌につられる甘い連中も多々あるらしく、彼女等はその廣告に決して、此の言葉をひつこめてゐない。その後吾々は此の雜誌に對して絕えず批判を怠らなかつた。それが爲に、危ふく、彼女等一黨に味方せんとした、組合のヒステリカルなインテリを喰ひ止める事が出來たわけであつた。

之等の雜誌をみると全面を通じて、抑壓されて來た二千五百有餘年來の日本婦人の鬱勃たる憤怒がはじめて爆發した痛快さを感じて、吾ながら胸が躍るのを感ずる。併し、之は感情の遣り場であり、感情の棄て場にすぎない。鬱憤は晴し得れど、それを具體化する方法を知らない。そこで彼女等は、無政府共産社會を昇ぎ廻つてゐるが、それは彼岸の寶を目あてに一生の生計をみつもつてゐるのと同じく、全くその方法に於て誤つてゐる

ものである。

成程無政府共産黨社會になれば、婦人は完全に解放されうる。併し彼女達が無政府共産社會でなくては婦人が解放されないと斷言する根據がわかりかねる。何故に婦人が過去二千五百有餘年の永い年月、屈辱と忍從を强いられて來たか、婦人の有勢な古代共産社會が如何なるものであつたかを科學的に探究したならば婦人抑壓の現象が、何に起因するかを知る事が出來る。吾々はその原因を除去することによつて、初めて婦人が解放されると信ずる。從つて强ち無政府共産社會のみが婦人を解放するものであると斷言する事は誤謬でありはしないか。又クロイ人達は地球上の凡ゆる建設を破壞して、その上で無政府共産社會を建設しやうとしてゐる。それが爲彼等は常に「破壞しろ！　破壞しろ！」と言ふが、假りに彼等が世界の總人口を動員し得たとしても、世界中の既建設物は到底破壞し得ないであらう。例へ破壞したとしても、その無政府共産社會の新な建設の過程に於て、又特種な强制社會が、最も野蠻な醜い形に於て現はれて來る事は否定し得られない。之等の點に於て、彼女等のいふヒステリカルな、半狂的な××は斷然排斥しなくてはならない。處でクロイ人達は、ボル一派の××に對して、「火事場泥棒」よばわりをするけれど、此のボル派の××より、全くの規律と秩序とによつて、靜に爲し得られる××は他にあり得ない。組織の重要性は此處に主唱されねばならない。いたづらなヒステリー革命は損多くて益少し。彼女等が如何に泣き狂ひ罵倒しやうと、吾々は斷然ボルの××を支持し援力しなければならない。「火事場泥棒」の御言葉はヒステリーの叫びだ、罪のないものであるから强ちとがめはしないが吾々は何も泥棒は働いてゐない筈だ。現在ブルジョアが私有視してゐる凡ゆる文化文明が、君等にはブルジョアのものであるやうに思召されやうが、決してさうではありません。これ等は吾々の祖先が一萬年前の昔から血と汗と命を賭して建設して來たものであつて、それ等は全部吾々プロレタリヤの所有物である！　何も火事泥の汚名を被せられる理由は絶對にない！　と共に、吾々は、祖先の尊き犧牲を紀念すべき多くの文化、文明の廢物を破壞する事には斷然反對しなければならない。寧ろ吾々は、それ等の凡ゆるもの〳〵を愛護し、行末長くあれかしと祈るのである。クロイ人達が共産社會といふものが、農村にのみ行はれるといふ偏見から都會を破り、大工場を壞さうと企んでゐるが、それは寧ろ笑止千萬な事である。吾々は古い昔の共産社會を希んではゐない。都市もあり、農村もある人類究極のパラダイスたる第二十？　世紀の無政府共産社會をこそ希望してゐるものである。人類の自然な生活が此の社會が實現されてこそ眞の平和が地球上に見出される事になる。吾々は無政府共産社會が一日も早く招來するやうに努力しなければならない。しかし、その過程に於てクロイ人達のやうな過つた道はとらない。吾々は先づ資本主義の撲滅を企て、共産强制社會を認め

る。プロレタリアートの獨裁社會を實現せしめ、かくて、幾千、幾萬の昔より壓迫され續けた最下層の人々によつて、最もほがらかに「自由」が叫ばれねばならない！ かくて、社會は無政府共産へと推移してゆき。かくて不自然が、最も合理的に取除かれる事になる。

目的は同一ながら、その過程に於て、各々異つた行動を主唱する姉妹が争ふ事は全く悲しむべき現象であるが、同じき同性として、彼女等一派の前途に幸多かれと祈らざるを得ない。

婦人戰線と婦人解放は同じ社から同じ内容を以て發行されてゐる表題のみ違ふ雜誌です。

女性の階級的進出

逢阪喜代

男性と女性とを問はず、現代人通有の政治的、經濟的、社會的關心は空に囀る雲雀アルプスの高峰の如く昂つてゐる。

圓本全勢時代のマルクス、エンゲルス熱は冷へたりと謂ど、具體的生活より出發する階級的觀念は昔のその如く、單なる流行性、ファン性、モボ モガ氣分を蹴散らしてプロレタリア的な眞摯性が漲つて居る。

それは資本家地主―政府の×××××準備の爲の産業合理政策の强行、その徹底が基因する處の勞働者階級の窮乏、これらの具體的な經濟生活の不安こそ彌が上にも總ての現代人をして各々の立場より、從來の個人主義的觀念を打破り、又は浮動的、遊戲的模倣階級意識のカラを破つて、闘爭の裡に生れたる階級的政治觀、經濟、社會觀をいだかさしめたのであり、斯かるマルクス、レーニン主義を現代思想の主流となさしめたものであらう。

然もそれらの現象が成年男子のみを對照として存在し得ずその滔々たる流れは婦人勞働者は無論所謂無智なる女を抱き込み、家庭を搖がしたり、センチメンタリスト、文學少女、マダムに迄浸透して行く。

最早近代女性は階級戰線への總行進曲を意識的にも無意識的にもせよ奏すにはをられないのである。

大阪の友禪工が數年前ストライキをやつた。大阪くんだりから和歌山迄爭議團全員が決死的覺悟を以て乘込んだ。

爭議團全員の目的は和歌山にある友禪機械製造工場を――――――叩き潰して仕舞ふ事だ。

近代文化の産む一切の機械は勞働者の生活を低下させる怪物だから。

大阪の友禪工場に据へ附けられる友禪機械は手工業的製産に從事して居る五千有餘の熟練工の一切の誇りを奪つて、人員淘汰＝解雇熟練工の故に得てゐた給料の減收等々を將來させる親方の道具なのだ。

産業の合理化、生産の合理化はこの怪物をより多く登場させ、魔風さへ伴つて工場、職場其他一切の經營にのさばり返へるのだ。

筋骨たくましい、そうして十數年を要して克ち得た熟練工としての技術を持つ成年勞働者の虎の子も夜來の雨に散る櫻花の如く慘じめにも名殘を街頭に殘すのだ。

一人前の職人そんな者の價値はガタ落ちだ。幼年工や少年工で結構だ。

また女も居るのだ。

工場と云ふ工場には入れ交への聲が起る。

一、成年勞働者の馘首に依る青少年婦人勞働者の代置絶對反對！

二、青少年婦人勞働者使用に依る賃銀低下絶對反對！

三、青少年婦人勞働者の六時間制獲得！

四、同一勞働に同一賃銀を寄越せ！

五、自主的青年部萬歳！

六、自主的婦人部萬歳！

七、日本××青年同盟の旗の下に！

等々のスローガンを掲げ××勞働組合が決死的に鬪ふのが思ひやられる。

要するに婦人勞働者は資本主義最後の段階としての××主義＝第三期的狀勢の特徴であり。産業合理化の大童の時代に於て不可避的な存在なのだ。

ブルジョアジーの醉眼は一勢に家庭の小娘やお內儀さんに向けられてゐるのだ。

吾國の重要産業である紡績、化學、交通、通信、食糧等々の工場經營に於ける婦人勞働者就業率は殆ど男子勞働者を凌駕せんとしてゐる。

世は急テンポに移り變る。

最早婦人は經濟的に社會的に、更に政治的に重要な要素なのだ。

傳統的に從順、貞淑を押しつけられて來た女性も近代的舞臺に登場する限りに於てその限界は高められ、視野は無限に押し廣げられて行くのだ。

勞働婦人よ未來はおんみのものだ。

會社にタイプをいそしみ、ペンを握り、商店に算盤をはじき學校、病院、デパート等に働く非筋肉婦人勞働者としての女性、その目は異様に？ 輝やき、頭腦はブルや封建サムライ御禁物の「赤」味さへ覺へてくる。

學生、生徒、インテリ婦人にも「赤き風」は襲つて來た。女子××××××青年同盟に解消される。

マダムだつて、箱入娘だつてぢつとしては居られない。

無味乾燥な家庭生活にあきたらない。男子や、家庭の道具としての奴隷に御辛棒出來ない。人間らしさが欲しくなる。

そこを刺激するには充分に色んなものが備つて居る。

曰くプロレタリア文學、短歌、プロキノ、プロ美術、ブルジョア新聞さへ商品價値を百パーセント昂める爲に、ストライキ、デモ、大會、演說會、秘密結社檢擧、不穩計畫發覺等と鳴物入りで報道しなければならない。

近代女性は斯くしてイデオロギイ的に、實踐的に階級的進出を余儀なくせられる。

■

東京市電三萬の兄妹のストライキ＝催涙ピストル＝東洋モス、鐘紡、岸紡、柏原紡、京織、レート、村尾ドックの家族、松澤病院、曾根崎新地の藝妓、信濃橋食堂のウエートレス等と婦人勞働者の鬪爭は日々に吾々の目に耳に這入る、無產婦人同盟、社會民衆婦人同盟、勞働婦人女熟、無產派婦人辯士＝總選擧時分に流行した＝其他種々雜様の婦人の活躍振りはブルジョア式や各々の機關紙で報道される。

プロレタリア文壇にも男そつちのけの平林たい子、窪川、中本、松田、林、等等の婦人作家の名がキラメク。

福本を廻る十人の女、ばかりぢやないあらゆる鬪爭の表裏に、三、一五．四、一六、樺太××事件、全××鐵分會檢擧、大阪×××局の左翼分子檢擧等々に必ず女性の活躍振りがうかゞはれる。

如斯、近代女性は經濟的、社會的、政治的に幾多の壓迫をハネ返へして男性と同一の線に於ける戰ひの人となつてゐる。

■

女性の階級的進出＝のみに限らず全プロレタリア勢力の進出活動には必ず、その對立階級たるブルジョアジーの物凄い防戰、抗戰が伴ふのだ。

古臭い施設だが、處女會、修養團がそれだ、愛國主義を假面に階級鬪争の抑壓、殊に婦人の階級的進出を阻む、重要なブルジョア機關なのだ。

最近處女會は女子×××に改編せられ、、そのファッショ化は急テンポで進んでゐる。

要するに婦人の解放は經濟的解放を無視してあり得ない。

從つてプロレタリアートとの共同の運一の鬪爭こそが解放の曙光を女性にもたらす。

又プロレタリアートも自己の陣營に女性を獲得せずして解放は不可能だ。

あだかも小市民階級を勞資兩階級が自己の利益の爲に爭奪の鬪ひを演ずる如く、現代の女性もブルジョアジーの沒落を引延ばす爲の道具であり、重要な勢力として支配階級は可能な限りの僞瞞や買收を行ふ。

內務省が最近鳴物入りの宣傳で婦人に公民權を附與するとか、治安警察法の改正に依る結社權を婦人にも認めるとか御

馳走政策で婦人をプロレタリアートから切り離して御家萬泰を企てゝゐる。

單にそれ計りではない女性の最近の能動性を利用し無力化する爲に、矯風會、禁酒會、宗教團體、社會事業團體、又は新設の交通安全協會、愛國婦人會の活用、看護婦組合の結成等に力を盡しプチブル的グループを通じて婦人の階級的進出を標的外れの彼方に追ひやらうとして居る。

母子保護法獲得デーだとかなんとかいつて騷ぎ廻る、社會民衆婦人同盟や、無産婦人同盟はより忠實にブルジョアジーの御用を努める機關なのだ。女性大衆の最も鋭くブルジョアジーと對立する場面をそらす爲の。

階級的女性の幾多の進出に比例して反動的保守的、進歩的にもせよブルジョアジーの女性抑壓、僞瞞網は張り廻らされるのだ。

婦人勞働者、貧農婦人、俸給生活者、學生、主婦、娘、失業者、足並揃へて黎明の彼岸へ突進せんとする女性。

壓迫、被壓迫階級の益々尖鋭化する對立を目前に見て、又自己の職場に、農村に、學校に家庭に捲き起る矛盾—等々のもたらす女性の階級的總進出の具體策は？

ユダヤ民族が救を主イエスに求めた如く現代女性は闘爭の具體策を求めて居る。

全婦人勞働者、職業婦人は斷呼たる決意を以て勞働組合に這入つて行く事だ。

改良主義勞働組合、總同盟、總聯合、全國勞働、總評議會等々にだまされず××の旗の下に戰ふのだ。

工場、經營、農村、××、學校、家庭から足並揃へて總行進だ。

其處に輝やける全女性の自由の日が待つて居るから。一九三〇、十、十五

暴露實話號寸評

—女人藝術に對する要望—

後藤かつ子

切角送つて下すつた十月號か、途中で沒收されて了つたので、これはつひ二三日中に、東京での茫漠とした生活の中で讀んで見た。だから批評らしいことも云へないし、また私などに、その一篇々々の持つよさや惡さなどが解らうとも思へない。

だから此の批評も個々に就いてと云ふよりも、全體的な、女人藝術に對する貧

弱な要求なり愚評なりに終つて了ふかも知れない。

私は此の實話號を大變興味深く讀んだ。だが實話として示されたこれ等の記錄に對して、私等他人が何を云へるだらうか？と云ふおそれもある。

たゞプロレタリア文學の道程が、現在、報告文學、レポート文學、又は暴露文學等の形式に依つて表現されてゐる以上、――その藝術的立場と價値はとにかくとしても――これ等實話も當然創作として批評さるべきものだと考へる。そして私は甚だ雜パではあるが次の諸篇をつかまへさせて頂いた――。

流れて行く――小野あづさ氏。
村の人の生活――靑山幸子氏。
階級に育てられる女――藍川陽氏。
次の部署へ――土田途子氏。
道子のことづて――沖しづ子氏。
火群――大田洋子氏。

ただ之等を總かつ的に見た感じは、實話には違ひないだらうが、暴露と云ふ冠詞が必要なものか否かと云ふ事である。

皆なそれ〴〵資本主義社會の一週に生存してゐる女性の姿が、或は慘落して行く、或は激しい反抗にたい頭して行くその線を、きわめて器用に、――實際手際よく――表現されてゐるが、それが果して資本主義社會の裏面を暴露し、それに痛烈な一矢を報いてゐるか？が問題である。或る一つの生活なり過程なりを、如實に表現はしてゐるが、それは單なる述懷的なものであつて――淚つぽい普通の述懷とは違つて、訴へ樣とする、呼び掛け樣とするイデオロギツシュな强さはあるが――暴露すると云ふ程の、確固とした足場と、効果的な眞實味の面白さに乏しい。これはあまりに創作的立場から事件を小說化して了つたからだ。本當の暴露實話的立場から見れば、「希望社保健部にゐたプレー」（山本みち子）とか、少し極端な云ひ方だが、社會時評（永島暢子）等の方が、はるかに根據があつて面白い。

各々の生活樣式と經濟狀態に依つて各各の鬪爭が違ふ樣に、現在のプロレタリア小說が落ち込んで行かうとする千遍一律的な公式的な面白くなさから脫するのには、各々の生活樣式の特殊點と、經濟的な數字を、もつともつと眞實に書き立てる必要がありはしないか。

『次の部署へ』『道子のことづて』の兩篇は、そのイデオロギーがほゞ同一方向に伸び樣としてゐる。だが之等は何を暴露してゐるか？

前者は單なる女鬪士としての意氣だけしか感じられないし、後者は或る街頭分子と姉妹の戀愛を描いてゐるだけだ。之等に依つて私等は、鬪爭から遊離してゐる現在のプロレタリア小說の、必然的に落ち込んで行くところの行きづまりを指示されるだらう。實踐的鬪爭から離れた、想像的なものからは、單に作者の意氣だけしか買へないと云ふ事が斷言出來るだらう。現在のプロレタリア小說が、千遍一律的に同じ型をくりかへしてゐて、何等それが眞實の鬪爭の要求や方向を指示してゐないのも、要するに作者が

眞實の鬪爭から遊離した層にゐて、單にイデオロギーをもやしてゐると云ふことから來る問題ではないか。

私等は、プロレタリヤ作家としての意氣と觀念論だけでは、眞に正確な鬪爭を書く事は出來ないと云ふ事を考へさせられる。

この兩篇の如きは、單に女鬪士と云ふがい念的な姿を挿入したに過ぎない――。

『階級に育てられる女』――タッチは一番確つかりしてゐるし、まとまつたものだ。だがそれは創作の手法的立場から見た批評だ。

貧しい階級の子供の心理と、資本主義の壓力に押し流されて、他國のプロレタリアートの中に入つて行く子供の姿がよく出てゐる。

が單にそれだけであつて一讀後とるべき何物も見出せない。

『村の人の生活』――これは誇張された事實と云ふ感じが深い。小說的に誇張された――墮落した村の青年の放縱な性慾生活と、都會から歸つた青年の戀愛遊戲等のくどい描寫にそれを見るだらう――イデオロギー的に無理な不自由なこじつけた樣な素晴らしく燃え上つてゐる反抗心を抱いてゐる女の行動も、要するにそれが一人よがりの、見榮坊的なものであつて、流行的な『プロレタリア文藝ものを書き、資本論を讀んでゐる』姿なのだ。『女子青年會と反對の演說をする』その女、『金持で甘い男とでも結婚し樣かと思つたり』

とにかくかなり無理强ひに、觀念化されたいや味がある。村長の宅に女中に雇はれて行く時、『プロレタリア傑作集と原稿用紙を持つて』行く女だ。そこに何か本當に貧窮しだらくしてゐる農村の實生活から遊離し浮動した、思ひ上つた觀念だけしか受取れない。

私等はコウした觀念化されたイデオロギーの濫發よりも、もつと確固とした實生活的なものを望み度い。

私等は暴露の次に、それに適應した鬪爭を持たねばならない、と云ふ事を忘れてはならない。どれもこれも、同一形式の鬪爭ではないのだ。完全なる鬪爭手段は、正確なる暴露から始まるのだ。

『階級的憎惡なくして階級鬪爭はない――レニン。』――プロレタリヤ階級は自らの××獲得のためには徹頭徹尾階級的憎惡に依つて武裝しろ』これは本號、佐野京子氏の論文『正義の背後に踊る』の一節だ。

しかし、私等は憎惡を無理に造り出し、俳優の樣に誇張する必要はない。もり上る憎惡はどしどし暴發させろ。しかしない憎惡をもやす必要はない。

私は近頃の本誌が、この造り出した憎惡とイデオロギーを、俳優の樣にクローズアップしてゐるのを感じる。

本誌もやつと方向が明示され、色彩も統一されて來たのは嬉しいが、又それも、その色彩のあまりにも仰々しい濃厚さ、丁度立看板の赤インキの丸々の樣なあまりにも宣傳的な騷々しさには辟易する。

それはアヂテーションの立場から見れ

ば効果的かも知れないが、たゞ上滑りした馬鹿ばやしよりも、しみじみと訴へる様な音調が、よりよく人の胸を引つかみ得ると云ふ事を忘れてはならない。

この意味から私等はもつと言葉のあやと表現形式に就いて考へ、學ばねばならないだらう。正しい表現とタッチ。これはいやしくも文筆を取る者の先決的な問題ではないか？

やたらな闘爭的言辭のられつよりも、眞から人を動かす藝風のよさを研究すべきではないか？

その意味で『流れ行く』はかなりよかつた。魚群を追つて資本を下し、ふくれ上つて行く大網元と、彼等に生活資料の海を荒しぬかれて凋落して行く漁村の空氣。それ故に身體を賣つて生きてゐる村の娘等の生活が、自然にヒタヒタと涙をもよほす様なタッチでかきこなされてゐる。

しかしそれもあまりに、慘落して行く小石の様な、悲慘な一女性の姿をあくまで鮮明に描寫する事にのみ終始してゐはしないか？　心に沁み透るうまさはあるのだが。——

『火群』——これは前者と同じ様な女性の生活を描いてゐるのだが、大變ほがらかで自由だ。タッチもほん放で新鮮味がある。しかしそれはこゝの人物の進退が、前者の陰慘な漁村にくらべて、盛り場の、ブルヂョアジーのシャンデリアーを浴びてゐるせいだらう。

都會の生活條件から來た華やかな空氣だ。

どの階級からも輕蔑されるボヘミアン的白色ドレイ群の中の一女性の、伸び上らうとするイデオロギーを大變尊重した作品だ。

その生活は單に『父や弟等を食はせるため』であつて、自分は常に女工になり度く思つてゐるとその女の、あまりに詳細過ぎるイン從の生活記だ。その中からプロレタリアートの『團結した火群の中へ』とにもかくにも一度は『頭を突込んで見なくては氣が濟まない』と云ふ他愛のない彼女の反抗だ。

頭を突込んで見て、又もとの慣れた生活に舞ひ戻るかどうかも？　それはまだ解らない。

彼女の闘志は全然未知數なのだから。それは時代の流行的に、現在の若者の誰れもが持つ、熱に浮かされた様な、火群に對する憧憬と關心なのだ。これは噓ではない。

好奇的な、さう、本當に好奇的な要求なのだ。だから他愛もないと笑つては了へない。たしかにそれは關心を持たないよりはいゝ事に違ひないのだから。

大變いゝ加減なものになつて了つた。過言はおゆるしして戴き度い。

十月二十七日夜

前號口繪ノ内　プロレタリア小學校及紛爭議の寫眞は朝日新聞社寫眞部の好意による旨記載洩れに付こゝに記します。

今號實話欄の「誰が惡い」の筆者名、原稿に記してないため殘念ながら失名

鬪爭!!!

女子大學
津田英學塾
東京女子齒科醫專
至誠病院

至誠病院爭議鬪爭記

零　不二子

一　發端まで

目覺めた病院の看護婦さん達によつて結成された勞働組合へ當時の名は、關東病院從業員組合であつたが）は十月に、日本醫務勞働組合と云ふ全國的單一組合に成長した。今度の至誠病院の爭議は、院長吉岡彌生が、組合員を不當にも、組合員だからと云ふ單なる理由から何一つ仕事上の落度のない看護婦さんを解雇したために發生した。

以下看護婦と云ふ代りに病院での通用語であるプレ（Pflegerin の略）を用ひる。

東京至誠病院のメムバーＫ君が府立松澤病院の餘波を受けＫ署によばれたのは九月二十五日だつた。「國風の美化」とやらを志してゐる院長はＫ君に對し

「泣いて後悔して自分の膝元にひれふし、謝罪するなら許しもしよう」

とそこらあたりの靑坊主の云ふやうな事をほざいたが、勇敢なＫ君は斷じて、私達のやつたことは惡くないのだ！　と折れなかつた。

その結果は病院追ひ出しだ。

この突然の犠牲はこれで止まつたらうか？

至誠會、日本女醫會、東京聯合婦人會、牛込婦人會等の會長であり、大日本女子青年團愛國婦人會理事、婦人同志會及び國際聯盟協會の委員と云ふ種々樣々な肩書を持つてゐる院長、吉岡彌生は自分の病院に組合が結成されたと知つて恐怖した事はまつたく豫想外であつた。彼女が、自他共に、うぬぼれ家で許してゐたと云ふ事だけでもその狼狽振りが想

像されるであらう。

院長の恐怖は、無茶苦茶なプレの解雇として立ちもどつて來た。

至誠會千歳村分院のT君、

宮比町本院のK君前出、外S、H君、A君等のプレがこの犠牲になつた。

2　不當解雇絕對反對

更に、本院（東京至誠病院）のプレS・S君が解雇を言ひ渡されるに及んで、組合は遂に立つた。こんな無茶な首切りをやらせてたまるか！　組合が活動し出すのが遲れたのは組合に對する連絡が斷たれてゐたためであつた。

被解雇者團は病院從業員姉妹に向つて先づ次の如く聲明書を發表した。病院の待遇が記されてあるので全文を示すことにする

僞善家、社會事業家の名にかくれて、永いこと從業員を搾取して來た吉岡彌生は去る九月二十五日以來、明確に僞善家資本家の正體を現した。

家族主義、溫情主義と口に宣傳しながら實際の從業員に對する待遇はこうだ——

朝から晩迄ブッ通し制限なしの酷使、それも看護婦見習の名義で炊事、子守、女中等意のまゝに酷使してゐる、

之が吉岡彌生自稱の「人間養成」の道だとホザイてゐる。そして看護婦產婆の技能を何一つ學ばせないまゝ三四年を隷屬させて置くのだ。食事は營養價値など問題にせずたゞたゞ經費の減少を計つてゐる、私達宮比町本院六十名近くの一日の食事は院長の一日の食費にヒッテキする事實を見よ。

過勞と營養不良の結果は肺病だ！

肺病になると院長經營の療養所に收容するどころか、ドンドン親元へ引きとらせる、

こうしたやり方が果して社會事業家であり病院長である人のとるべき態度であらうか

私達は肺病にならないため、過勞營養不足等からのがれるためにはどうしたらよいのか！

私達は次の樣に改善して貰ふために相談し合つた。

最低給料十五圓くれ（現在五圓）食事を改善してくれ（炊事場はまるで油虫の巣だ）勤務時間を八時間にしてくれ・附添勤務を改善してくれ（附添手當は院長が全部橫領）月二回の公休をくれ、肺病に對しては責任療養をしてくれ（肺病になつて歸された姉妹は數へ切れない）外出外泊を自由にしてくれ、寄宿舍を設立してくれ、

これは果して院長の云ふやうな不當なそして過激な（一たいどこが過激だらう！）相談だつたらうか！

院長が私達を危險視し、罪惡視するのは結局、院長の利益が減少するのを恐れてゐるからだ、だから院長はこの私達の當然な相談に對して「思想惡化だ、院習に合はないといふ理由で（こんな理由がどこに成り立つ！）プレに對する待遇は從前通りの酷使を續けると明言し、同時に、卑怯にも裏手から親元に對してあなたの娘さんには警察の手が伸びてゐるとウソ八百を並べたおどし手紙を出して純朴な農村の親たちをだまし親たちを通じて引きとらせようとしたのだ、院長は「ハハキトクスグカヘレ」のウソ電報による病院追ひ出しの一手が公開されるのを恐れて一人一人秘密のうちに追ひ出さうとしてゐる。公然とやらないのは社

會教育家である院長が、その待遇の劣惡な事が世間に知れるのを恐れてゐるためだ。私達の行動が正しいと云ふ事は、いまや院長の卑劣な行爲が證據立ててゐるのだ！

親愛なる姉妹よ！

姉妹は一時も早くみんなで團結して、その力を以てこの境遇をかへるべく行動するのを私達は期待してゐる。

一九三〇年十月二十日

東京至誠病院被解雇者團

日本醫務勞働組合東京支部東京至誠病院分會では、この機に次いで、解雇反對鬪爭の中心勢力を東京女子醫專附屬病院のプレとして附屬への働きかけに起つた、卽ち吉岡系支配の勢力關係は、次表の如く

名稱	看護婦數
東京女子醫專附屬病院	八五
東京至誠病院（宮比町）	三五
至誠病院（飯田町）	一八
同府下千歳村分院	一四

であつて附屬が決定的な力となるべきであるからである。

東京至誠病院分會が、附屬の姉妹に呼びかけたビラの大要は

「人間らしい生活を望むと院長吉岡はすぐ追ひ出すのだ、これが私達が過去何年を身を粉にしてつとめた報ゐだと云ふのか？

私達は私達のより良い生活を得るために本院（宮比町）の姉妹を援けなければならない、解雇絶對反對だ」

と云ふのであつたが、九月上旬腐つた豚肉で中毒した附屬の姉妹は、この呼びかけに應ぜずにゐられなかつた、

III たたかひ

十月二十四日、日本醫務勞働組合東京支部のビラは、行動隊の手によつて、附屬、至誠會のプレの手にくばられた。

「さア姉妹たち晩の食事後の座談に、直に本院姉妹の解雇問題をとりあげて、その他の要求と共に決議し歎願書をつくれ！ 組合は姉妹の鬪爭を全國看護婦、全婦人勞働者の問題として鬪ふぞ！」

給料を十五圓にしろ！ 肺病には責任療養させろ！ 本院の姉妹を卽時復職させろ！ 等々の組合スローガンのどこが惡いのだらう？ プレさん達はこんなら組合に入らうと話しあつた。

社會教育家、慈善家の假面をヒンムカレ非人間的な「人間養成」をしてゐた事が暴露された吉岡彌生は、いまや全國勞働婦人の攻勢の的となつた。この吸血鬼（プレさんはそう呼んでゐる）は今回の爭議が市中新聞に載るや否や牛込四ッ谷の辻賣及び取次店の新聞の買占をやつたり、本院プレの持物檢査などと云ふあらゆるヒレツなことをやり出した。

この記事が載つた主なる新聞を擧げれば『無産青年』（十月三十日號）『國民新聞』（二十二日付夕刊）『時事新報』（二十五日付夕刊）『萬朝報』（二十二日付朝刊、十一月五日付朝刊）『東京毎夕新聞』（二十五日付）『東京毎日新聞』（二十二日、二十五日、三十一日）『二六新報』（二十二日）『中央新聞』（二十五日付夕刊）『タンク』（三十一日）

新築病院の移轉を前にして、吉岡は一般勤務制にしようと云つてゐるが、組合東京支部の至誠病院爭議鬪爭委員會はこれを直に附屬病院のプレさん達にアピールした

「吉岡が新院移轉と同時に一般勤務制にするとい てゐるが、その黑い腹の底は

1、時間や規律を一層嚴重にしてプレを縛

りつける。

2、院内プレの附添中止による附添料收入減の埋め合せは當然看護婦を犠牲にして捻出する、その結果は

イ、給料の値下げ、昇給の停止、
ロ、看護婦人員の整理(解雇)
ハ、勤務負擔の增加(勞働の强度化)
ニ、食事其の他待遇の惡化

等となる。こうしたやり方で院長は不景氣切抜けをやるんだから、洋モス、市電、鐘紡、等の資本家達と全く同様な惡辣なやり方なのだ、新院移轉と共に行はれる大量馘首(大々的人べらし)のたくらみに對しプレはプレ自ら守れ、本性を現した彌生の温情主義に頼るな、仲間同志がガッチリと腕を組め!」(大要)

八十萬圓の工費をかけた新院の建築が落成した。新しい設備とよい體裁とで新患を吸收しようとしてゐる院長の計畫に對して、更に東京支部至誠病院爭議鬪爭委員會は附屬の姉妹に呼び掛けた

「新院になつても諸姉の待遇が一寸でもよくなるだらうか?事實は却つて一層の酷使だ

イ、手當(給料)は相變らず五圓だ
ロ、一番惡い病室をプレの室にする、
ハ、二ケ年の養成所通ひも認可がないからプレ產婆の資格がとれない、
ニ、舊病院(フライ施療)新院(有料)と病室は多くなつてもプレの人數は增さない。
ホ、肺病は國元追ひ返しだ」(大要)

4、プレと學生との提携

特に宮比町(本院)のプレは院長の本據(自宅になつてゐる)だけに苦しい鬪ひを鬪つてゐる。組合東京支部至誠病院爭議鬪爭委員會は、吉岡を校長に戴く東京女子醫專八百餘名の姉妹に訴へた、曰く

「僞善者吸血婆吉岡彌生が今度何の不正もない本院の看護婦を五名首切り、更に危險思想(?)のある者を不景氣失業の只中にかまはず突き出さうとしてゐるのだ。サンザン無茶に搾りこき使つて、それで一言でも不平を言へば首にするのだから、そんな狸婆の方がどんなに危險思想(?)の持主だかわかりやしない」。溫情主義とは文句を言はせずにいつまでも奴隷にして置こうとする事だ、目覺たる生徒は酷使のなやみから

プレの解放に援助して貰ひ度い!(大要)

このアッピールによつて、日本女子大、東京女歯、津田英學塾等の各校の爭議で暗示されるように女子專門學校のインタースクールの條件は熟してゐた、東京女子醫專でも從つて宮比町のプレさんの不當解雇に對し、

解雇絶對反對、卒業基金百五十圓徵收の全廢!食舍費三割値下げ、校風會費、至誠會費の値下げ

等を中心スローガンとして動搖した。校長吉岡彌生は大狼狽をなし、二十五日午後二時から女醫專校風會の席で約一時間半も長いこと全校生徒に對し、病院爭議の事實を認めた上で

「卒業基金百五十圓を全校生徒に前納させたのは惡かつた、今度の騷ぎは身の不德の致す處で何とも申譯ない」

とペコペコあやまつて生徒の不滿をまるめ込んでしまつた。

十一月三日、東京女子醫專の記念祭だ、赤蘭會の輝ける歷史を持つ同校先輩の有志は、至誠爭議委員會と共同署名のもとに、學生に對して左のビラを撒いて激勵した。

「記念祭のお祭騒ぎ、あれは一體誰のお祭りだ、君達自身のか？そうじやない、あれは吸血鬼吉岡彌生が一代に身上を築き上げた記念祭だ。五十萬圓の身代と十五萬圓の年收は彌生が四十年に亘つて若きプレと學生と世間をゴマ化し、搾り太つた結果でなくて何だ、

口を開けば借金で首が廻らぬと云ふが所有不動其他八十八萬圓の資産に對し負債はその擔保借入金其他で三十八萬圓に過ぎない實習費、試驗料、入學金等の名目でまき上げた金は丸儲けなのだ、それなのに食舍費は一寸も下げず、板の間にウスベリをしいたきりの狹い處に、ギッシリ押し込み不衞生極まりない。東京市の物價は日本銀行の調べだとその指數は大正十四年平均（寄宿舍の建つた頃）二一二、二から今年の八月には一三九、六と七割二分六厘も下落してゐるのに當時から少しも下げず待遇も改善してゐない。

食舍費三割値下げ！

各種名目による强制徵收金絕對反對！

婦人同志會强制加入絕對反對！

附屬看護婦との共同戰線のもとに闘へ！

寄宿出舍を自由にしろ！

かくて學生とプレとの提携は結ばれて行く。

5　プレはプレて

至誠爭議が一般に知れるや、東京では府下〇〇病院、東京××病院、市×××病院、本鄕東京××病院、市立××病院其の他、關西では大阪市、京都市、名古屋市のプレさんが其の他橫濱に、水戶に秋田に續々と日本最初のプレ爭議應援のカンパニヤが展開されてゐる。大阪のプレさんからのメッセージは何と云つてゐるか？

結束を堅くして最後まで戰へ！

東京至誠病院從業員諸姉妹！

諸君が待遇改善のため最低要求を相談し合つたら慈善家社會事業家なる吉岡彌生は赤化思想だとぬかして隱險な手段によつて戰闘的諸姉妹を解雇したとの報導を受けて大阪の諸同志は自分のことゝして憤激し血を湧かしてゐる。お互のよりよき生活のために相談する事が赤化思想なら赤化思想とは最も正しい眞實の事なのだ。そして慈善家社會事業家といふものは狼の樣に若い姉妹の骨髓までもシャブらうとする資本家の別名なのだ。

親愛なる東京の諸姉妹！

病院といふ所は何か特別な超階級的な仕事をでもやつてゐる樣に思はれてゐるがそんなことはありはしない！

今日の病院は立派な營利機關だ。病院經營者や院長は私達姉妹を安い給料でコキ使ひ乍ら患者から高い治療費をせしめてゐるブルジョアなんだ。彼らは紡績工場で幾萬の姉妹の血を吸ふてゐる資本家とちつとも違ひはしない無產者病院以外のあらゆるブル病院はやれ仁術だとか、やれ社會事業だとか如何に盛裝してゐようと結局其本質は金儲け手段か乃至は大衆を欺瞞する手段かに過ぎないのだ。相手は資本家だ。我々の生活を少しでもよく仕樣と欲するなら是非戰ふより外に方法はない、私達の生活の解放はたゞ闘爭を通じてのみ！（中略）如何に遠くはなれてゐやうと私達の胸には東京の諸姉妹と同じ血が流れてゐる？（中略）諸姉の勇敢な闘爭は私達への鼓舞であり敎訓である。私達は滿腔の熱情を以て諸姉の勝利の

ために最大限の支持應援を誓ふ！

全東京の看護婦を動員して戰へ！

ギ善者吉岡彌生の面皮をひきはげ！

日本醫務勞働組合擴大强化萬歲！

9　院長、校長、吉岡彌生

最近に於ける吉岡彌生の資産は次の如くで一代でこれだけ太つたのだからスゴ腕だ。

資産八八〇千圓		負債三八〇千圓	
內譯		內譯	
所有不動產	七五〇	不動產擔保借入金	三五〇
藥品	五		
銀行預金	一〇	未拂金	三〇
未收入金	一〇	貸家敷金	三
醫療機械器具	七〇		
電話(?)、具什器			

牛込一の庭園のある邸宅を十七萬圓で買收した、息子博人の遊興費は毎月千圓に近 。こんなゼイタクな生活は誰がさせてゐるのだ？馬鹿らしい彼女の言ひ分にまげて時をはぶいて見ると、彌生は女醫界二二號に云ふ、

「只一途に支配階級に反抗して、呪ひの聲のみ高い××黨の人達は（彼女は誰れも知らないのだ）破壞(?)映畫トウルクシブに於ける輝ける建設を見よ）××を叫んでゐますが、其結果はどうなると云ふ考へを持つてゐる人は恐らくないでありませう（彌生はそうだらう）——そして直譯の思想にかぶれ國體の尊嚴をも忘れすべてを物質に結び付け、その目的とする處は、社會を改良するのでなく、攪亂（君達だけが攪亂される）するがためであるかのやうです。（中略）尤も今までの如く虐げられた日本の婦人、又はあまりにに甚しい勞資の懸隔、斯うした封建制度の遺風（勞資の懸隔も封建制度の遺風？）は、徐々に（然り徐に！）改めて行かねばならず、又改められつゝありますが（何處に！）それを呪ひの聲を以て一時に打破しようと云ふのは無考へであります（どつちが？）事實を曲解すると。（實は正解すると）すべてが不平不滿で人と親和して行く事も出來ず、これでは醫者として最も不向きである故（誰と親和するんだ！）萬一本校生徒に、假にもさうした組織に引き入られて、本分を（資本家的本分を）亂るやうな人があれば、一刻も早く除かねばならぬと思つてゐます」

どうです、如何に、有名なブルジョア婦人運動のリーダーたる彼女が無智であり反動であるかを見られたい。引用文括弧以外は全部原文通りだ、更に文章の結論に云ふ。

「人間は感情のみに走つてはならぬもので多勢の人の利害を考へ、平等の愛を向けて（どんなものか）美しい友情を以て、集團生活をよりよく築いて行き度いものと思ひます。」

さて、吉岡先生よ！美しい友情を以て集團生活をよりよく築いて行くためには、まづ多勢の人の利害（日本人の九八％が無產者だ！）を考へて、よく考へて（決して感情のみに走つてゐませんよ）君に斷乎として反對しなければならないとはまことに氣の毒なことだ。

7　自己批判

最近決められた日本醫務勞働組合の運動方針書の草案に云ふ。

「（前略）最近數ケ月間にたける組合員の不當解雇は、いづれも組織された分會の攻勢的氣配に恐れをなした病院資本家側からの追放であつたが、組合分會が大衆を獲得してゐなかつたためと、鬪爭未熟のためによる敗北であつた。

組織病院の紛議續出と他病院への組織の擴大は、醫務勞働者の階級的自覺と、戰鬪化を示すものでなければならない。)

女人藝術讀者諸姉！プレさんの組合を支持し、その組織擴大强化に助力の手をのべられよ

（一九三〇、一一、七）

東京女子齒科醫專『ストライキ』の眞相

一學友

府下大井町にある、東京女子齒科醫專の學生達が去る十月十一日、ストライキに入つてから、十一月初めの現在、大井町水神下にある、同校寄宿舍には、全部學生が退舍して猫の子一匹ゐず、門は、固く、とざされて學生達の團結の固さを示してゐるが如く見える。

學生側の委員長は、今年三月に、同校を卒業した西森ふみ子氏で、このストライキの導火線をなすものは、先づ今年六月、平野前校長が、同校が財政上非常に困難な狀態にあるため、平野前校長が、紹介した、同校の講師に、報給を仕拂ふ事が出來ないやうな狀態にあつたのを、自分の責任であるとして辭職し現大井町長である名輪氏が同校々長となつた事――。この時學生の一部が、動搖し出したのであるが一部、學生達の信任の厚い教授達の、時期尚早說によつて、その時は無事に、すんだのである。

しかし、名輪校長就任と共に、理事兼主事となつた、羽根と云ふ人物に對する學生達の憎惡は、非常なものであつた。彼は一種の學校ブローカーであつて、決して、同校の理事兼主事として適當な人物ではないと云ふのである。しかし、主事である彼には、一切の權利があるわけで、突如去る十月十日、平野前校長辭職の際に時期尚早說をなして、學生の動搖を制した、西村附屬病院長以下十數授を、理事との意志疎通の爲と云ふ原因で解職したのである。

そこで學生達は、動搖し出した。彼女等は、先づ學校の財政に、不審の目をむけた。

每年々々、半年分・豫科は五十圓、本科は七十五圓と云ふ、授業料（實習費をも含む）を拂ひ、又附屬病院で、實地治療にあたつてゐる。專攻科生は、九月の新學期のはじめに二百十圓の實習費を、學校へ、仕拂つてゐるにもかゝはらず、十月になつても、實地治療に必要な、機械が、附屬病院に、運ばれて來ないで、患者の治療にさしつかへるので、機械を、學校へ、いれる商人に問合せてみると金が仕拂はれて、ゐないから、いれるわけに

は行かないと云ふ。生徒側から二百十圓の大金を仕拂はせておきながら、商人にはその金を仕拂はず、從つて、患者の實地治療にも、さしつかへるやうな不便をあへてさせておく學校の態度に、學生達は、憤激して、學校側に詰問すると金は仕拂つたのであるが、解職教授と、商人がケツタクして、學生達をこまら る算段をしてゐると云ふのである。全く話しにならない。

そこで解職教授の後押しで、時期到來とばかりに、校友及び學生が「期成會」なる、會を組織して、同盟休校を、つゞけ、學校側に、「財團の廓清」及び「解職教授の復職」を要求してゐるのであるが、學校側の態度強固で、未だいつ解決するとも豫想がつかない狀態である。——と云ふのが、この東京女子齒科醫專の、今度の「ストライキ」の大略である。しかしながら、この「ストライキ」の特色は、非常に、その指導者及び指導方法が、小ブルジョア的なものであると云ふ事である。

この場合當然、學校側に、もち出すべき第一の要求として、先づケースの問題があるのである。このケースの問題と云ふのは本科を終へて、附屬病院で、患者によつて實地治療に、あたる專攻科生は教授に、よつて、定められた數だけの患者によつて實地にあたらなければ、いかに學力がすぐれてゐても、卒業する事が出來ない事になつてゐる。しかるに東京市中ならいざ知らず、あゝした、不便なところでは、患者の數が、非常に少くて、どうしても定められた、數に、みたない。それでは、どうしても、卒業する事が出來ないので止むなき學生達は、男子に、むかつて、客引き女の如く、あらぬ媚態を賣つたり菓子箱を持つて、勸誘に奔走しなければならないやうな悲慘な、狀態にあるのである。それで、このケースの患者を、學校の責任として、學生にかうしたいまはしいまねをさせないやうにとの要求を、出さうとすれば、委員長西森ふみ子氏は（彼女は、同校の特待生であつたさうである。）

「私達の、神聖な行動を、工場ストライキと、混同されてはこまる」と稱しケースの問題をもち出さうとする、一部の學生達を、赤化分子と、名付けて、學生大會の席上でも、發言權を、あたへないさうである。そして「正義のために！」「醫師會廓清のために！」の、スローガンをかゝげて、前記の二つの要求を、學校側になしてゐるさうであるが、この「ストライキ」は、一面より見れば解職教授の復職手段として、學生が利用された、觀がある。これら解職教授達の打算的な（己等の復職の手段に學生を利用した）態度が、大井の町民達によつて、感知された事を知つて彼等はたゞ「財團の廓清」をのみ、學生に學校へ要求させやうとしてゐるさうである——、

はじめ、この「ストライキ」の、はじまつた頃は、官憲の警戒が非常に、嚴重であつた、さうであるが、今やその本質（單なるお孃樣のサワギであると云ふ）をみきはめた、彼等はもはや一人として同校へはよりつかないさうである。

これを、委員長西森ふみ子氏は

「私達の、神聖な、行動を、官憲がよく理解して下すつた」と、云つて、隨喜の涙を、流さんばかりであるさうだが「ともかくおはづかしいストライキです」と一部の學生は云つてゐる。やがて彼女等は、このあいまいなお孃樣委員長を、ケトバしてたつであらう。

津田英學塾木村講師免職問題眞相記

一學生

木村講師免職の問題は、去る十月二十三日東京日々、大阪毎日の兩紙に依つて「友愛結婚を說いて教壇を追はる」といふ見出しの下に、大要左の如く報導された。

「東京麹町五番町津田英學塾講師木村まつよ女史は教室で社會學の授業中同塾の三年生に友愛結婚と產兒制限について講義したことから去る十七日塾長星野愛子女史から勸告されて辭職した。このことが生徒に知れ三年生百名は木村女史に同情し、試驗中にもかゝはらず級會を開き、委員を擧げて塾長にその理由を質したが、要領を得ないのでさらに結束して木村女史の留任運動をすることになり、この成行如何によつては同盟休校に移らんとする形勢である……」

既に右の記事を記憶されてゐる讀者は、此の問題の發生の原因が那邊にあるかを感じて居られるであらう。何故なれば學校當局の表面に掲げられた理由は、一講師の任免を左右するものとしてはあまりに馬鹿げ切つてゐるからだ。それで此の際我々は此の問題の眞相をこゝに報告することによつて、津田英學塾の內幕が如何なるものであるかを明らかにし、進んで女子高等教育發展のために、廣く世の識者の關心を喚起しておきたいと思ふ。

現在の星野塾長は、津田先生の隱退後、その後を受けて塾長代理となり、昨年津田先生の歿後は名實共に塾長として學校の權力を握ることゝなつた。我々學生が學校に對して不滿を抱くやうになつたのは、今にして始まつたのではない。星野塾長が塾長代理として就任してから、每年或は不可解なる退學生を出し、或は意義なくして無試驗檢定證の下付を拒否し、或は選科行きを強制し、或は就職問題に對して公平を缺く等々、塾長の感情的占斷と不誠意とは全學生の周知の事實となつてゐるのである。從つて此の度の木村講師の免職問題が、全學生の憤激を買つたことは、決して偶然ではない。日常の學生の不滿が、此の問題を契機として勃發したに過ぎないのである。事實我々學生の奮起が一講師としての木村先生に對する私情よりなされたものとすれば、常に權力を以つて臨む星野塾長に對して、我々があくまで戰はんとするの意志を表示するが如きは到底なし得なかつたところであらう。

去る十月十八日、三年生一同は木村講師より左の如き別れの辭を送られた。

三年生諸姉へ

「甚だ突然ではありますが、今日から皆さんと御別れしなければならなくなりました。ゆつくり御話する機會がありますとよろしかつたのですがあまり突然ですので、こういふ型で御別れの言葉を申上げる次第で御座います。

　昨日午前十一時頃星野塾長から突然辭職の勸告を受けたのであります。其の理由として塾長の云はれますには、

　數日前三年生の父よりとして…

木村講師は社會學の教室で、講義をそつちのけにしてコムパニオネート乃至産兒制限の問題を話し、生徒を墮落せしむるやうな言論を肆にしてゐるから斯る講師を置く學校には娘をやつておけない故、塾長に於て斷固たる處置に出てもらひ度い…といふ意味の無記名の手紙が來て居ります。こんな手紙を受け取つた以上其の教師を學校に置く事は、學校がその思想を支持する事になるから、この際社會學は勿論、其の他の一切の學科を中止して直ちに辭職してもらひ度い

といふことでありました。

勿論生徒の父兄から無記名の手紙を受ける事又塾長がそれを機會として辭職を勸告すること等は、要するに私の不德の致すところでありまして、何とも慚愧に耐えないところであります。併しながら、問題が講義の內容に關することでありますから、責任を以て講義を進めて參りました關係上、塾長の勸告のまゝ辭職するに當りまして、一言申述べて私の立場を明かにさせて頂き度いと思ひます。御承知の通り、私はコムパニオネート乃至産兒制限を取扱ひ　したのは社會學講義中社會制度進化の一項目として現代家族制度諸問題批判中に取扱つたものでありまして、丁度學期末の一時間が殘りましたので、特に餘分に時間を充てるやうになつたのであります。而も私がそれを取扱ふ態度としては、繰返し申上げましたやうに、自分がそれを支持してゐるといふわけではなく現代の一傾向を批判的に申上げたまでであります。若し私がかやうにして取扱ひましたのを誤解してそれを現在の皆さんに奬勵してゐるかのやうにとられますならば、コロンタイズムの話をされる講師がコロンタイズムを奬勵してゐることと同じ意味になるのであります。從つて何事も批判的に學問の對象となし得ないことゝなり、終には客觀的事實を學問と分離させなければならないことゝなるのであります…

　もう試驗が始まつてゐますのに、私がこういふ型で申上げねばなりませんのは、責任の明記されてゐない一片の手紙を根據としてその內容の檢討されることもなく、浮草のやうに去らねばならない私の個人的な問題乃至氣持からではなく、何故に斯の如き問題が問題とされるのか？たれがそれを問題としたのか？といふ疑問を皆さんに殘しておき度い愛校の精神から來てゐるのであります。

　いろ〳〵親しくして頂いた事は永く忘れることが出來ないでせう、どうぞ、御健全で、勉學にいそしまれんことを祈ります。」

　昭和五年十月十八日　木村松代

　右に依つて我々は木村講師辭職の事實を知り、更にそれが、何故學期試驗を利用して行はれたかを知つたので、塾長の獨斷とその常套手段に憤激して、こゝに始めて木村講師留任運動をなすべく、決意を固め猛烈なる運動

を起さんと火蓋を切つたのである。試驗終了後我々は直ちにクラス會を開いて復職運動を開始すべく滿場一致を以つて決議した。ところが、この事實を知つた塾長は、直ちに三年生一同を講堂に集め「父兄の手紙が動機ではないこと、木村講師が、教室で友愛結婚産兒制限を宣傳したのがいけない。」と取消をなした。其後三年生は再びクラス會に移り、二名の委員を擧げて、全クラスは同講師の講義が決して、宣傳に非ざることを證明する旨を委員に托して塾長にあたつた。塾長の解答は、宣傳の問題には觸れず「社會學の講義に友愛結婚や産兒制限を取扱ふべきか否かの見解の相違である」とのことであつた。委員の報告が終るや、二三の學友會役員、女子基督教青年會員十數名は直ちに退散し多數の不滿にもかゝはらずクラス會は閉會を餘儀なくされるに至つた。

二十日月曜日の試驗終了後、三年生は、再びクラス會を持つた。そして五名の調査委員を擧げて先づ木村講師に辭職されるに至つた眞相を質すことにした。

二十三日、三年生第三回のクラス會に於いて三年生は委員によつてもたらされた木村講師の回答書、及び星野塾長よりの説明書を審議した。木村講師の回答書は左の如きものである。

「十月十七日に私は星野塾長から左の理由及び動機によりまして辭職を强要され、免職となつたのであります。

一、教室をコムパニオネート及びバスコントロールの宣傳に使 したこと。

二、右の理由發生の動機は三年生の父よりとして責任の所在のない一通の投書があつた爲めであること。

理由と動機は右の通りであります。然らばそれが如何なる手續きをとつて私のところにもたらされたか？先づ星野塾長が手紙を受取つてから、それを實證する爲めに二三人の三年生をお呼びになつて講義の内容を調査し、右の調査を基礎にして吉川幹事、蟹江教授、ハッホニ先生　マクドナルド先生に相談した結果諸先生は塾長によつてもたらされた前述の第一の理由「教室を宣傳に使用した」といふ事を正當と認め辭職に贊成されたこと。其結果去る十七日午前十一時、塾長は私に始めて會見を求めたのであります。其の會見に於て、私は終始一貫未だかつて自己の主義として、何物も宣傳せぬこと、且つコムパニオネート及び産兒制限は、社會問題の一部門として、批判的に取扱つたまでであると云ふことを申上げたのですが、それでも教室を宣傳に使用したと認めるとの理由でお聞入れな辭職を强要せられますので遂に私も決心し退職すること になつたのであります。

免職の理由が、「教室を宣傳に使用した」とされて居ることは右に依つても知られますが之れを裏付けるのは、ハッホニ先生から私への十七日付の私信によつても明かでありますその内容は、私信でありますからこゝに公開をはゞかりますが、左にその箇所だけを譯出て見ますと、

『貴女は英學塾が何を標榜して居るか知つて居るではありませんか、而して如何なる教師も、たとへ彼自身が如何に信じて居るにせよ、プロパガンダ(宣傳)のために教室を用ひ得ざるものであることを知つてゐるではありませんか、それは教師にあるものゝ倫理にもとるものであります』

ハッホニ先生は、「私が教室を宣傳に使用した」といふ風に思つて居られる事が肯かれるのであります。

●コムパニオネート及び産兒制限のことに關しては、私は、去る昭和三年度の女子英學塾同窓會會報（粕谷先生の御編輯になれるもの）に於て、紹介してあることでありますし、又殊に今年は皆樣御承知の通り、産兒制限の實際問題の講義は除外して居たのであります。

……

なほ去る十月十七日に、星野塾長との間に大略左の如き會話がありましたが、それによつても塾長と私との間に、産兒制限を三年の社會問題講義中に含ませるか否かに就いて意見の對立を見たとはどうしても認められません。その内容は

塾長「何故産兒制限を教へましたか」

木村「専門學校の、而も最上級の學生であつて數ヶ月後には、實社會に出る人達に取つては必要な常識と思ひ ましたから」

塾長「私はその必要を認めません。未だ結婚しない而して感受性の强い女學生に教へて惡感化を與へると思ひませんか」

木村「無智で實際の問題に出會ふ時には失敗を招き易い。豫備知識を持つ事は惡感化ではなく自己を保護することになると思ひます」

塾長「でも此の學校ではそんなことを教へて頂きたくありません。」

木村「今年は教へることになつて居ませんし若し學校の精神に反するといふことならば、將來その項目は社會問題講義の中から除外してもよろしうございます。」

塾長「然し、あなたを信頼出來ませんから。」

木村「それでは先生の名譽の爲めに私は社會學の講義は止めませう。」

塾長「止めて頂くのは勿論です。而してあなたが此の學校に居續ける事は學校が貴女の思想を支持することになりますから英作文も譯も同時に辭めて頂きたい。」

右の會話によつて明かで御座います樣に、産兒制限を三年の社會問題講義に含ませるか否かの問題に就いては私の方が讓歩して居るのですから、これに關する意見の相違又は對立は成り立たないのであります。

免職の理由及び經過はざつと右の樣なものであります。これは何時でも如何なる人にでも公言し得る所であります。私にはどうしても正當な理由と思はれません。此の氣持は恐らく將來とも變らないでせう。」

以上

昭和五年十月二十一日午後五時四十分

木村松代」

星野塾長よりは

「木村講師の友愛結婚の講義が、批判の範圍を超えたるものにして、且つ教育上面白からぬ影響を及ぼす事を認めたること。」

以上に依つて我々は、木村講師免職の理由が、全く根據なきものであり、かゝる薄弱なる理由によつて講師の任免を左右することは學生として絕對に不滿であるとなして塾長に對して、簡單なる歎願書を提出すると同時に全校の問題として復職運動を開始することを決議した。同日のクラス會に於て、學友會及びキリスト教女子青年會委員其他十數名の學生が、明らかに議事の進行を妨害し、實行委

員の選出を拒否するが如き行動に出たのは、こゝに特記すべきことであらう。彼等は十八日の自らの憤激も忘れて、第三回クラス會に於いては、明らかに復職運動の妨害をなし、塾長の番犬と化して吠える騷ぐの醜態を暴露した。

此より先二十二日試驗終了後、蟹江教授は豫科一年二年の各教室を廻りて慰撫の豫備行動として實に憤飯に價する訓示を與へたのである。曰く、產兒制限は、口にするも恥しい問題であつて、友愛結婚は米國の貧民窟で行はれる事である。產兒制限の如きは、衞生に害ありとして專門家の間には反對意見を唱へるものある事、尙塾の生徒の如き良家の子女には此等の問題は必要ではない等。我々學生は啞然として質問を發する事さへも出來なかつたのであつた。此の間に三年生の熱心なる運動の餘波が一年、二年にも傳つて來た。一年は木村講師の現在の譯及英作文の熱心なる教授振りに直面してゐたので、復職を熱望する純眞な感激に燃えたつて、數度のクラス會を開催し、五人の委員を擧げて當局に當つたのである。二年は最も晚くクラス會を持つたのであるが、意見のまとまり方は最も敏速で直ちに實行委員を擧げて強硬な要求書を呈出した、この結果各クラスの得た當局よりの解答は・曰く主義の相違、曰く講義が批判の範圍を超えた等々實に、不明瞭なものであつたこゝに於て學生は、塾の主義とは何ぞやと反問したが結局滿足し得る回答は得られなかつた。最強硬なる態度をもつてゐた二年生は、全學生合同の上再度歎願書を提出する事を提議したのである。其は十一月一日の事であつた。此朝早く卒業生有志より「木村講師の友愛結婚產兒制限の講義は何等宣傳煽動の意味を含まず又、產兒制限の實行方法を教へたにあらずして、單に實際問題を批判したのみである」と云ふ聲明書が學生一同に配布された。この日の一、二、三年合同クラス會に於ては各クラスの代表がそれ〴〵のクラス會の經過を報告し・併せて若干の感想を述べた。三年代表は大體、「廿三日に提出した歎願書は木村講師が堅實なる津田の主義と相容れざる理由によりて、拒否された。併して今迄得られたる當局の回答によりて示さるゝ如く、生徒は學校當局の誠意を認める事は出來ないのである。かゝる薄弱なる理由の下に木村講師を免職するならば問題は一人木村先生のみに止まらず講師全般に押し及ぼさるべき問題となつて來る。塾長に人事の問題が託されてゐる限り、かくの如くにして將來我々が、よき教師を失ふ事は明らかである。我々學生はあくまで學生の誠意を示し、目的の貫徹に努力し、學生の意志の容れられる生徒と當局と一體なる理想的な學校の建設に向つて進まふではないか。」との意味を述べた。二年代表は、津田精神と學生の本分に就て述べ、今度の運動は、このいづれにも決してもとるものでないと結論した。

略述するならば、「第一、塾長は學生ありての塾長である。塾長が、學生の意志を無視ししかも卒業生及在校生一同が、木村講師の講義を宣傳でないと認めてゐるにもかゝはらず無責任なる一父兄の手紙を動機として木村講師を免職したる事實は不合理極まるものである。

かゝる不合理に對して我々眞理の探究者なる學生が立つ事は實に當然すぎる事である。第二、學校の創立者たる津出先生は實に當時

の先覺者であつた。當時、英語を專問とせる女子の高等教育施設は僅に一大英斷として世人の耳目を衝動せしめた、其以來先生と學生が、共に新しき時代を歩むものとして如何に結合されて來たであらうか？今木村講師は既に現在擴く流布されてゐる社會問題の一つを取り上げて學生に正しき批判を與へたが故に學校を追はれたのである。之果して現塾長が津田先生の精神を正しく理解して居られるかどうか疑はざるを得ないのである。」云々。一年も又數回のクラス會を開いて努力したにも關はらず、當局の解答は要を得ぬ物であつた事を簡單に述べた。

一年及三年の委員は單なる使であつて實際何等の權威を持たぬものであつた故に、こゝに委員改選をなし、各クラス十名づゝの實行委員を上げた。かくて合同クラス會の議事は進行して行つたのであるが、この際興味を索いた事は某高等科生二名がヒステリックな狂聲と共に突如闖入し來り、議事の妨害を試みたのであるが　彼等が、學生大會の權威を認めないものとして學生の憤激を買ひ、彼等は遂に、彼等の明確な聲明もなし得ずほう／＼の體で逃げ歸つた事である。其他無知蒙昧なる一味の學生はひたすらに塾長の志に從はんものとあせり出し明白なる理由も示さずに脱退した者も數名あつたが、議事は着々進行し遂に大略次の如き歎願書を提出した、「木村講師が津田精神と一致せざるものとは生徒は認め得ざる故に、合同クラス會の決議を經て再度木村講師の復職を歎願する次第である。」

是に對して塾長は「遺憾乍ら學生の希望には副ひかねる。私共の對度ははつきりと定つて居りますから此上の運動は無益です。」等あつさり答へた。此處に到り學生一同の苦心は遂に空しく水泡に歸したのである。

事の始めよりかへり見るに學校當局の掲げる理由は實に不明瞭不誠實なるものであつてしかも幾度もの變遷を見て居るのである。

一、教室を產兒制限友愛結婚の宣傳に使用した事、

一、社會學の中に此等の問題が含まるゝか含まれないかの見解の相違。

一、友愛結婚の講義が批判の範圍を越えた事、

一、今年の社會學の講義を問題とせず過去二年間の產兒制限の實際問題の講義が問題となつてゐる。

一、津田の堅實なる主義に反する事、

我々全學生はかゝる薄弱な理由の下に、木村講師を辭職さしたる塾長並びに學校當局の態度、かくも熱誠なる學生の意志を踏にぢつた態度に絶對に不滿であつたが　既に學校當局の態度はあくまで强硬なるを見到底木村講師の復職は不可能なるを知り、且それ以上當局に反對する事は學生の本分として許されぬ事なるを認めて、學校に對する幾多の疑問、

一、學校とは何ぞや？　塾長の學校なるか、生徒が主體なるものか

一、若しも木村講師の講義が宣傳であり、又は塾の堅實なる精神に反するものであるならば、某教師の生徒を婦選獲得なる政治運動に私用する事は果して堅實なる主義に反せざるや否や？　又コロンタイズム、自他一體說を說く事は如何にや

一、學友會とは果して學生の意志を代表するものなるや？　學校當局の意を代表するものにあらざるか？

等々を明瞭に學生各自の胸の中にとけざる

疑問として殘し遺憾ながら復職運動を打切つたのである。
　十一月十日學生委員の名に於て左の如き聲明書がこの問題の終りを告ぐべく發表された。

聲明書

去る十一月一日、我々は學生大會より選出されまして、木村先生復職のために委員として、學校當局に右の如き內容の歎願書を提出したのでありますが、各クラスの切實なる希望も空しく遺憾ながら拒絕の悲報を受けるに至つたのであります。
　それで吾々は學生大會の意志に基きまして再び大會を開き皆樣に報告する義務を有するのでありますが、その運びに至らなかつたが爲に、こゝに私達委員の責任を報告し併せて多少の感想をのべて我々の意志をあくまでも、明らかにしておきたいと思ふのであります。
抑ゝ吾々學生は、學問を愛し正義に燃ゆるの情を禁じ得ざる故にこの度の經過を一貫して見る時、「不當」「不可解」の念に苦しまざるを得ないのであります。
何故ならば、學校當局の木村講師解職理由の說明が不明瞭であり且、不完全なる理由に對する吾々學生の質問に對して當局は更に誠意ある回答を與へる事なく、「一旦決定した事は如何ともする事が出來ません」との言葉を以て簡單に拒絕し吾々先輩であり敬愛する木村先生を解職するに至つた事は如何にしても我々の首肯し難いのであります。
　更に我々が、この度の問題を通じて感じた疑問を左に揭げますならば、
　先づ第一にそれを成就せしむべき第一要案たる學生の一致團結が、全々缺けてはゐなかつたでせうか
第二には、當然學生のものたるべき學友會が果して學生の意志を代表してゐたでせうか、そして最後に、學校の主體たる學生の意志が、かくまで無視されていゝものでせうか、此等未解決の問題を我々はこのまゝ永久に疑問の中に殘しておくべきでせうか
　吾々は常に正しき批判と正しき行動によつてあくまでも正義を追求し、不正と戰つて我々の津田英學をよりよきものにするための努力を惜しまざる事を固く誓ふ次第であります。
こゝに、塾長との交涉の顚末を報告し併せて若干の感想をのべて、

一年二年三年學生大會實行委員一同

以上が大體の眞相の報告であります。

アドバタイザーへの木村講師の手紙

　十月廿三日ジャパンアドバタイザーに出ました私の津田塾よりの免職に關する報導について・色々多くの誤解、論議がある樣ですから、私はこゝに、自己の立場について、述べたいと思ひます。
　私の一週に一時間の社會學の講義に於て、私はいつも社會學的原理を現代の社會問題にあてはめて、生徒が彼等の住み且活動してゐる社會をより良く、明確に理解する樣に、講義しようと勉めてゐるのであります。且、私の社會學を敎へてゐる生徒は專門學校の最上級であり、年齡も廿歲以上を越へてゐるので

ありまず。彼等は、今より半年足らず後には卒業して大部分の生徒は様々な職業に、特に女學校の教職に就かうとしてゐるのであります。私は、友愛結婚、產兒制限の講義を聞くのには餘りに若いとは信じ得ないのであります。

現代日本に於ては、一般の人々はすでに此等の問題に多大な興味をもつて居ります。此等の問題に關する多くの書籍、パン　レットが出版され、雜誌は此等問題の記事を、澤山載せて居ります。そして、女學生さへもこの問題をしば〳〵口にして居ります。この様な狀態にあつて、專門學校最上級生が、しかも女學校の教師として、女學生を導いて行かんとする彼等が、この様な問題に、充分な、はつきりした理解公平な意見を持つ事は最も重要であると思はれます。

私はウェルズレー大學に在學中、二年の時にすでに、產兒制限の問題を講義されたのであります。勿論米國では、產兒制限に關しては、非常に法律がやかましいのであり、教師はこの點に非常に注意します。併し、日本では墮胎を意味しない限り、產兒制限に對しては法律は定められてないのでありますから、教師は、この様な問題を取扱ふのには、自由である。彼自身の

星野塾長は「一般に思想家は其の良否を決定してゐない」故に友愛結婚產兒制限を說く事は良くないと信じて居らつしやる様です。併し、贊否いづれと意見の定まらぬ問題のみが社會問題たり得るのです。私が、社會學のそして社會問題の講師である限り、私は現代様々に論議されてゐる所の問題を取り上げざるを得ないのであります。私は、友愛結婚產兒制限を家族制度に關聯した諸問題の一つとして取上げたばかりであつて、私は決して、確立された學說として此等の問題を講義しなかつたのであります。

星野塾長はかく云つてゐらつしやいます。「塾の生徒は、議論の爲に材料も豐富にもつてゐないし、又その様な重大なる問題を取上げるべく、精神的にも用意されてゐない」と併し、私は生徒を其程、低く評價しては居りません。アメリカの少女、日本の少女と親しく交はつた經驗で判斷して見ても、日本の少女が、理解批判の力ではより劣つてゐる等と云ふ事の證據は見出せないのです。それならば、彼等を公平に取扱つてはいけないでありませうか？津田塾の圖書室がアメリカ大學のそれとくらべて非常に貧弱であるにはちがひないが併し、私は、生徒に總ての參考書を買ひなさいと云ふ事は出來ません。その故に出來得る限り多くの事實多くの說を、常に、書物、思想家を參照に出しつゝ生徒の前に、提出する事は、私にとつて更に非常に重要な事であります。

結局、私が教場で講義した事は自分一個の意見ではないのであります。だから私は星野塾長が、何故「私が話す學說を私がよむにはと云ふ様な輕々しい判斷を下すのか理解に苦しむのであります。私は、定まつた教義（學說）として何物も教へなかつたし、又、宣傳の爲に教室を使用した事等は尙更ないのであります。この點に關して、星野氏は實際の證人ではなく、私の講義を聞いたそーて、星野氏の訴へを否定する三年生が證人なのであります一人三年生のみではない二年生一年生までが全部星野氏の說に反對して居ります。又塾の生徒のみならず、私が教へた卒業生が、私が

教室を宣傳に使用しなかつたと云ふ證人として、立ちつゝあります。私は、星野塾長があまりに輕卒に私を判斷し最後の宣告を下してしまつた事を、遺憾に思ふ次第です。但し私は、只塾長が彼女の意見を否定する所の證據がそんなに澤山ある事を見出した時、氣持よく彼女の意見を變へる程、寛大な心を持つてゐらつしやる事をよく信じてゐるものであります。

女子大騷動

一クラスの一員

目白と云へば通る女大學の私立日本女子大學に學生騷動が持ち上つた。この騷動は大學豫科の昭和四年度に新設された高等學部を、うまく行かない、專門科と似たり寄つたりでお互に相殺して効果をうすめるといふ風な噂で廢止してしまふと云ふはなしが十月十四日に學校の方から洩れて、生徒の耳に這入つて來た。此の高等學部を潰せば本科の大學部も消滅してしまふ事になるので、前成瀨校長の意志であり希望であつた大學令による女子綜合大學にいづれは女子大をひきあげるといふ事が、こゝで廢止される事になる。それに對して現制度存續を叫んだ高等學部・大學部の生徒達の要求が、女子大騷動として世間の目をひいたことになつたのである。

十四日にそのはなしが何處となしに生徒達の耳に入つた時にはまた皆は半信半疑であつたが、十五日の午後四時頃に高等學部長の大橋宏教授が、生徒達を集めて高等學部廢止の原因は三つあつて、一つは、二元論――卽ち女子大學の中に專門科と高等學部とが對立して行つたのでは、學校の統制上面白くない、つまり專門科も高等學部も同じやうなことをやつてゐるのに二つの名前を持つてゐるといふことは無駄なことである。二つは認可問題――大學令による綜合大學の認可が何時文部省から降りるか解らないのに、それを釣の餌にして生徒を募集するのは學校としても面白くない事ではあるし、又認可が何時降りるともわからないのに、それを目標にしてゐる人達が、生徒として集つて來ないのは解つてゐるし……三つは、經濟問題――最近の經濟的パニックによつて學校が經營困難でやつてゆけない。現在の高等學部も專門科もどちらも組織は良くないから、我々はよりベターなニユーシステムを作つて、女子教育の目的に添ふようにする、と云ふ話しをした。

この專門科といふのは四年の修業年限を持

つもので、英文學部、國文學部、家政學部、師範家政學部、社會事業學部の五つで、この內英文、國文、師範家政の三學部は卒業と同時に中等學校教員資格が文部省から出る。

　高等學部は男子の高等學校、大學豫科に相當するもので修業年限三年で、理科と文科に分れ、大學本科の家政學部、化學部、國文學部、英文學部に進む豫備科である。この高等學部を廢止するといふことによつて、現在そこに籍を置くところの學生が、廢止絕對反對を叫んで立つたのである。

　大橋教授によつて云はれたところのニューシステム一元論は、專門科と高等學部を一つに集めてよりよいもの、英文科、家政科、國文科の大學にする。現在の專門部の上に研究科を二年置くといふに過ぎないのである。

　最初の十五日には教授の話しを生徒は別に反駁もせずガヤガヤ騷ぎながら引上げたが、高等學部廢止の主要原因は學校の評議員會と學校の間に存在するのではないかと云ふはなしが出て來た。十六日になると、此廢止案は大橋頭、井上秀子二教授の自分達の勢力擴大に對する策動ではないかといふ噂が出て來た。此日學生は麻生校長に面會を求めたが、はじめ他の先生達が間に立つて「校長は皆に會はなくても皆の氣持をよく知つてゐるから」とか何とか云つて會はせまいとするのを、女獨特の泣いたり騷いだりの結果効を奏して面會が出來た。校長は現制度、卽ち二元論を認めてゐるので、井上派が策動してその爲に生徒達を會はせないのではないかといふ疑ひを持つた。

　高等學部廢止の理由の明示及、ニューシステムに對するよりくわしい說明を要求した。廢止理由は大橋教授のあげた三つの原因で、ニューシステムについては何にも答を得ることは出來なかつた。生徒達は尙その理由には首こう出來ないからもつとくわしく說明されんことをと希望したが、校長の方は返事をせずその態度は煮え切らなかつた。學生は十八日に評議員會があり、その席上に於て廢止案を可決するのだといふ事を聞いてゐたので、その席上で、全生徒の意志は現制度の存續を希望してゐるといふ事を示して吳れるやうにと困願した。校長はそれは云ふ丈は云ふと引受けた。學生はこの日は未だ井上、大橋二教授の勢力擴張運動をみてゐたので更に校長に、井上、大橋、松本亦太郎の三教授に面會出來るやうにして吳れと賴んだ。この三人は何度學生が面會を申込んでも三人一緖には會つて吳れなかつたのだ。

　十七日の朝三教授と會見して高等學部廢止理由の薄弱さをつつこんで反駁した。二元論は鳴瀨前校長の一貫した意志によつて建てられてある限り、專門科、高等學部對立によつてお互の發展性を削ぐと云ふ事によつて高等學部の存續を無駄なものであると認めるといふことは、我々にとつて夢想だにする事は出來ない、專門科、高等學部も各々その目的の完成のために今迄努力して來てゐると、それに、高等學部が專門科と對立して行くといふことは四年前昭和二年度に於て新設せられるときから既に解つてゐることではないか、それに經濟問題に於ても、今迄相當資金も集めてゐるし、それにニューシステムを建てるにはその完成の爲にも同じやうに金は入用であらうし、それならばどちらに用ひても同じわけで、之は學校の云ふところの經濟的理由には當はまらないと思はれる、資格問題の認可

についても我々は綜合大學に我々が在學中になると思つて入つて來たのではないから我々に對して學校が欺瞞した事にはならないか
ら、我々はあくまで現制度を充實させるやうにし、實力を以てせまつて行つたらばいづれは目的を達することになるのではないか。之に對して大橋教授達は、はじめよりよい制度を作ると云つてゐたのにこの時には、我々も今度出來るニューシステムを最上のものとは思はないと云ひ出した。そして大學部を充實させるためには、現在の有樣人數が少くて月謝が集らないではとうていやつてはゆけぬ、しかし高等學部だけならば、やつてゆけるが、大學部がなくての高等學部では、何の目的もない事になりはしないか、それに綜合大學になれば大學部三年高等學部三年すると中等教員の資格がとれると云つてはゐるが、學校としては、このままの有樣の時に、六年も何の當もないのに勉强する人があるとは思はれない、でつまり高等學部大學部廢止を決心したわけであるがと云ふのである。學生が、この三つを反駁すると一つづゝに循環して逃げて仕舞つて、どうしても決定的な返事をしない。井上、大橋の二教授がしどろもどろで眞赤になつて生徒の反對を反ばくしてゐる間中默つてゐた、松本教授は「要するに、廢止の原因を明示しろと云へば、結局は經濟問題に理由の根柢は存在してゐるのだから、諸君が何と云つても、何と騷いでも仕方はないさ、だから騷いだりせずに、なる丈いい要求を學校に出せばいいではないか。」と云つた。

松本教授のはなしてゐる間井上大橋二教授は心配さうに、何を云ひ出すかと云ふ風に松本氏の顏をのぞきこんでゐた。井上秀子は櫻楓會の大幹事で、麻生校長が止めたらその後釜をねらつてゐるといふ評判を持つてゐる。

しかし何度聞いても三つのはなしを循環してゐるだけなので、圓いものをまはつてゐたのではいつ迄たつても終りにはゆかないので、その日はそれであきらめて、評議會で存續を希望して異れとたのむと先生達も、云ふだけは云ひませうといふことになつた。

ここで評議會といふのを説明しやう。評議會の構成は、有力な實業家、教授等でイロハ順に擧げてみると、井上準之助、教授井上秀子、幹事埔茂太郎、村山龍平、久原房之助、男爵久保田讓、教授文學博士松本亦太郎、男爵古河虎之助、男爵藤田平太郎、生徒監藤原千代、江口定條、校長麻生正藏、法學博士男爵阪谷芳郞、男爵三井八郎右衛門、三井高修、子爵澁澤榮一、男爵森村開作、の諸評議員で、之等の人の集まつた會が絶大な勢力を持つてゐるところの評議會なのである。

三井高修の姪が高等學部に來てゐるので、その緣故をたどつて、三井氏に評議會が高等學部廢止を決定しないやうにして貰はうと、代表三人を選んで、評議會の前日十七日に三井氏を訪問させた。

三井氏はその代表三名に對して、自分の女子教育に關する理想を說いたが、それは漠然としたもので、皆なの腑によく落ちなかつたが、現在の制度では充分でないが、しかしこんなに熱心であられる貴女達の希望を入れて明日の評議會に於ける廢止決定は一時延期しませうと云ふことは解つた。この三井氏は評議會での有力者で皆は勿論この訪問の結果、廢止案の可決は一時延期されるものと思つてゐた。

十八日の十一時からいよいよ評議會が開かれたが、皆はどうにかうまくいくであらうと安心してゐたところ、午すぎに麻生校長及び井上、大橋の二教授の評議會はいよいよ高等學部の現制度廢止、ニユーシステムの採用を可決しました、と云ふ報告を聞かされて、ドカンと皆は氣持のくづれるのを感じた。延期されるであらうと信じてゐたので皆はまるで氣が拔けた樣になつてしまつた。そこへ三井氏から學校を通じて、昨日面會に來た代表の方々にも一度お目にかゝりたいと申込んで來た。どつちみち、云ひわけを聞かされてくるにきまつてゐる、かへつて云ひくるめられて欺されるんぢやないかと殘つた者達が云ひ合つてゐると案の定、「三井氏は高等部も專門科も最上のものではないから、よりよいものを作らうときめたまでのことで、大橋氏の云はれたニユーシステムの具體的なことはそんなに決定した事ではない」と云つて女子教育の理想を聞かせて代表者を感心させ、「三井氏はほんとに女子教育に理解と同情を持つてゐる」と云はせるほどの結果になつて歸つて來た。そんな風に少しも判然と生徒には示されないところのニユーシステムは十九日の日には既に具體的な學科の單位まできめられて事務所にまで出てゐたものである。

こゝでこの廢止問題の原因を、一部學生のある有力な方面から探索し得た範圍内に於てみる時のその眞相のより具體的な過程は、評議員中には相當强硬な反對意見が存在してゐたにも拘らず、とも角それ等を抑壓して四年前大學、高等學部の現制度が試驗的に開始された譯なのである。處が果して四年經つた今日、早くも經濟的行詰りに當面して學校當局は、財減に出費を懇願したところ、最近のパニツク等も原因して前述の反對意見は强度に增して來て、財減評議會、櫻楓會は僅か四年前一度可決したそれを容赦もなく一蹴してしまつた。財源の重鎭三井氏は現制度反對、アメリカ的カレツヂ組織の提唱者であり、一方現制度主張の麻生校長は評議員會に於けるその地位は極めて微々たるものであつて、その意見は何等の反應を財閥に生じ得ない、でかうして一徹な校長と評議會の間がうまく行かなくなりかけた時に、比較的包括力の豐富な井上秀子はそれ等兩者の間隔を斡旋して、種々の對策意見の合一を計つて、こゝに折衷案、妥協案であるニユーシステムを案出した、勿論ニユーシステム考案に當つては井上一派が自己の勢力擴張を念頭に置かない譯はない。そこに井上派策動の原因が存在するのである。

大體に於て以上の樣な經過のもとに現制度廢止、ニユーシステム採用に決定したのであらうといふ推定を下した。今度の騷ぎに、直接學校にぶつかつて行つたのは各クラス選出の委員で、一クラス三人づつで高等學部大學部合せて二十名位のものであつた。十九日はこの事件の眞相を新聞に發表する、いやしないとどうするこうするでいたづらにさわいだだけであつたが二十日になると、委員の中で意見が二つに分れて來た。一方は（高等學部側）原因の究極が經濟問題であるならば、その問題は一體何であるか、學校が資金の要求を財閥にした時に、財閥が現在經濟的に行詰つてゐるので金を出さない。それで學校としては仕方がないのでその折衷案としてニユーシステムを作つたのだそれだから學校を攻めてもそれは結局仕方のない事で、新聞に發表

するにしても、現制度廢止理由、學校の態度承認、——しかし我々は女子敎育機關實現のためにあく迄も現制度存續を主張するといふことだ。ところが一方は、(大學部側)、財閥が學校を支持してゐるといふ事がはつきり解らないので、前述の眞相を輕卒に咀嚼してその眞實を疑ひ、一層學校に對する眞相發表を强制して、天降り式の態度に對する當局の陳謝を要求すると云ふことを主張する。ところが、委員間のこの二派分裂に對して之を統一してうまくやつてゆく人がなかつた。で新聞に發表するのも意見の不合でうやむやに終つてしまつた。ところが二十一日の都下各新聞に、女子大學の盟休事件として、日本女子大學生の現制度存續あくまでも要求、及び現制度廢止の眞相不明といふことが發表された。之は高等學部の人は知らず、大學部の連中の意見がそのまゝ出たのである。そこで高等學部の連中は、新聞にこう出た以上我々は如何に行動するかと云ふ事を評議した。二十二日になつて、石川、川田、菊地、中村の四敎授が學校及生徒間の調停を買つて出て來た。彼等は「君達が氣の毒だから僕達が仲に這入つて學校とうまく折衝しやう」と云ふ。そこで問題はそのまゝ進展せずにそこでとまつて仕まつた。二十三日には調停者と委員會を開いた。調停者は「いくら學校をせめても仕方がないからおとなしく今後我々は如何にするかとの要求書をお出しなさい」といふ事になつた。要求の大體を次にあげると、

一、學校の陳謝を求める事。(態度に於て)

一、規則書通りに內容を履行せよ、

一、高等學部三年卒業に專門學校令をおろせ、

一、大學部一年修了書に中等敎員の免狀をおろせ。等々、大體に於て、之位のものがある。ところが四人の調停者は、生徒との委員會が濟むといつも學校と折衝してゐたので、陳謝を要求するなぞと云ふことは公然と要求書として提出するのは不穩當だと云つて、そんな要求をすると、學校をやめて仕まふ人達にはよくてかまわないかもしれないが、學校に殘つていく人達には學校との折合が惡くなるから、そんな要求は止めたがいゝ。それから文部省との問題も、高等學部三年で專門學校令をおろせとか、大學一年修了者に中等敎員免狀の要求は、學校がそれを要求した場合、前に生徒達から提出されてゐては、單なる陳情とみられて、かへつて結果が惡いが、一應は明日はかつてみませうといふ事になつた。二十四日には前日委員會と調停者によつて作つたものを皆にはかつて贊同を得て、そして正式要求として學校に呈出した。要求の中には父兄會を召集せよ、今一度眞相を明示せよといふやうなものもあり、之と同時に新聞社に最後の聲明書を發表するといふ事になり、前に二派に分れてゐたものを一つにしたもので「我々が今度の運動を起したのは單なる學校騷動とは違つて、飽くまでも女子敎育に現在の制度が最上のものと思はれるから、その存續を希望するのために行つたものである。」として二十六日に新聞社に送つたが、もうニュース・バリウがなくなつてゐたとみえて、新聞社は抹殺してしまつた。で高等學部現制度存續(女子綜合大學の完徹)のために運動したのであるといふことは、遂に一般大衆に知られず、單に學校の不當をなじつたといふ狹い態度のみで終了してしまつたのである。

二十五日土曜日にいよいよ學校が陳謝した。校長、大橋、井上の三氏が各々一人づゝ出て「教育者として我々の態度がいけなかつた。もつと皆さんに對してとるところの態度に、よりよいものがあつたのではなかつたかと今更にして思ふのです」としほらしいことを云つた。ここに於て、この言葉を聞くに及んで、自分達から陳謝を要求してをきながら、先生のこの態度、この言葉と、感激して泣いてゐる奴達のあるのには驚いて仕まふ。

正式要求の回答は書面を以てせられたし、といふのに對して、いづれ書面で回答はするが現在の問に合はないので、口答を以てすると、回答を口でした。正式要求と云つても之はたゞ、要するに「規則書通りに學校はいろ〳〵の事を行せよ」といふのに過ぎないので、學校は全部之を承認した。

現在、高等學部、大學部に籍を置くものはそのまゝの形で卒業する事にする。で三人の先生に陳謝されたことによつて、この事件は一先づの形はついたが、自分達の眞實の要求は少しも容れられなかつた人達は、之から以後も、あくまでも綜合大學實現・高等學部現制度存續の目的に向つて完成を期する爲に働くといふ氣休め的な氣持のハリであつけなくも濟んでしまつたのである。ここで考へてみるに、委員間の二派分離。最後に之は合流したとは云へ、それによつて生徒達の努力に絕大なひびの入つたことは事實で、女の仕事につきものの、公と私とを混同した感情のぶつかり、それによつてわざわひされることの意外に大きなことを今更ながら知ります。せつかくの運動を起しながら、せめて生徒の自治權獲得にまでもその口火をみちびき得なかつた不甲斐なさをなげく。要するに學校は最初自分達のきめた通りに事を進行させたが、たゞ、學校のなげきは、三十何年間何一つ傷のなかつた學校の歴史に對し、汚點をつけた、と云ふ事の殘り惜しさより他何でもないのである。しかし女が、今迄の下積みにされて來た女が、集團的に動く事をする事もしなかつた女が、たとへ結果に於ては敗れても、一つのかたまりをなして、自分達の目的に向つて進んで行つたといふことは、めざましい進展でなくてなんであらう。女の感情的軋轢と、個人の感情的興奮をその上淸算し得てこそより良い運動の効果は擧がるのである。

新聞社見學記



小野氏の顏

知識は轉つてゐる。一つピントを合はせた眼で、一つ心をしめた氣持でみまわす時に私達は　達の周圍に、多すぎるその數をどう攝取してよいかと迷ふ程の、云ふだけも愚かしい――を見出す。私達は、でいつも與へられた機會に、一つでも多くの新知識を自分達に取り入れて行こうと思つてゐる。

十一月一日の天氣は至極朗かに晴れて、秋の蒼空が、丸の內のどこかに匂ふ異國情緒のあの並木路の上に澄み渡つて、灰色の、コンクリートの建物と、蒼の對立の中に、傳書鳩が一ぱい輪を作りながら、彼等の、彼女等の仕事の足ならし、ウオーミングアップを盛にしてゐる。

十二時半に日日新聞社の會議室に集合する、と云ふ通知を出してあるので、チコクをしては大變とめづらしい緊張さだ。四階の會議室にエレベータですうつと上つて、飛込と、影まばらな人の中に、見つけたぞ社長さん、美智子さん、川瀨さん、お早い事でとお互の笑ひが、廻轉窓から外に飛んで行つて、お天氣はよくて、ほんとに何よりです。

もつと澤山集るだらうと思つてゐたのに、土曜日でもおひるに歸れるといふおつとめの人達が少ないといふことを、通知の郵便物の返事で恨まれて、なるほどおそまきの感心をしたゞけあつて、集つた方達は三十人たらず、何にせ日日新聞社に居てみてゐると、來るわ、來るわ、何組の見學團だ。女人藝術の見學團が三十人足らずで、早くから大きな會議室をこいつは、秋夜講座に拜借した　て、大いに恨みの殘つてゐる室なのだが、――を占領して講演者小野賢一郎氏を待つてゐるあひだに、隣りの小會議室へは、宗教團體の善男善女のかたまりが、わいのわいので、大さわぎ、古めかしいインバネスの袖をポイとうしろにほうつたおぢいさん、はぐきを出して感心したやうに一々うなづいてゐるおばあさん、橫つらを一ッピシャリとやつてやりたくなるやうな變な說教づらをしてる中年のがむしやら男、そんな連中がずらずら、ぞろぞろ出入りしてゐる。一時半、二時、いよいよ、小野氏の御入來、隣りの部屋で一講演すましていらしたといふはなし。時計をながめて社長さんうらめしさうに、「こんなのならあの葉書に二時つて書いてをけば、もつと來られた人があつたでせうに」と惜しがる。

耳たぼのあたたか相に厚い、下ぶくれな、

福相顔の小野氏のはなしは面白い。なれ切つたやすさと知り切つてゐる强さとの機智で、出て來る一言一言が、みんなを成程と思はせ、お腹の皮をよじらせ、苦笑ひさせ、新聞に對する、なつかしさと興味を起させる。

昔はじめて日日新聞を出した時は一日二百枚から二百五拾枚ほどを木版ですつて、――唐棧の半てんに豆しぼりを手拭で頬かむりをして、はさみ箱の小さいのを背負つた若者が天狗の面のついたその箱の中にこの新聞を入れ、昔瓦版を賣つた時代のやうな呼うりで賣つたといふ。實にいきな、いなせな新聞配達やさんです。それから、昔の新聞の面白いのはみんな一つの事件を發表した後に「評に曰く」がついてゐることで、「評曰く」で各々書いた人のその事件に對する感想、批判を述べてゐる。この一號の新聞の定價は百二十文で今日の物價にくらべてみると米六合五勺についてゐる。米を六合五勺買ふつもりで昔の人は一枚の新聞を買つたので、之を買ふ人はよつぽどのハイカラでよほどの新知識だつたわけだが、人間の氣持がのんびりしてゐたので、一枚の新聞を買ふと村中に廻して讀んでゐるといふ有樣なので、ニュースの必要を今の樣にはかんじてゐなかつた。新聞の意義は日刊であると云ふ事に存してゐるのである。

新聞の發達の背後には常に戰爭がある。戰爭のある度に新聞は段を作つて發達してゆくのである。最初の發達は明治十年の西南役に於て見られた。この戰に從軍した福池櫻痴が、その戰爭の從軍記を名文でかいて、飛脚便で書き送つて、大いに讀者をうならせた。

その次が日淸戰爭、日露戰爭、で、國家の命を賭した時にいよ〳〵ニュースの發達をきたすのである。西南の役の時に上海から始めて活字が入つて來たが、その時は活字のしめ方を知らなかつたので、すつてゐる内にガタガタとゆるんで、さてすりあがつたものは汚くて、消えてゐる字が多かつた。

木版刷は日日新聞が出てからお名殘りになつたが、世界最古の木版印刷と云ふのを調べてみると、それは日本で法隆寺の陀羅尼がそれである。日本人の爪先きの器用さといふものが木版刷を日本で發達させたものらしい。

日日新聞が明治二十三四年に一日三千枚出るやうになつて大變に悦んで、歌舞伎座に名士を招待して、九代目團十郎が日日新聞といふ書降しの新作物をわざ〳〵して見せたものだが、現在に於ては百二三十の出張所が一日各々五千枚位の部數を出してさばいてゐる。

「なれ」と云ふことは恐ろしいもので、德富蘇峰氏は今でも輪轉機の音をきかない、原稿が書けないと云つて、毎日社に出て來て、ザワザワゴウゴウとした中で、あのコチコチの日本國民史をかいてゐるといふ。

新聞社の原稿は皆多く鉛筆で書かれる、それで小野氏もそれが習慣になつてしまつて、何の原稿でも鉛筆でないと書けないし、ザワザワした編輯室で書くのが一番いいと云ふ。

何か書くにしても二十歳から三十歳迄の間が一番盛りで、記事をかくにも、何をするにも此時が一番いい時である。長い事編輯室にゐて、多くの人達の書くのを見てゐると、不思議なもので、速記を書いてゐて、――横がきであるが――そのはじめの一行から次の一行にうつる時にはねかへしてゆく力が、若いものははじめの行と次の行のはじめの字の頭がそろふ力ではねかへすが年をとるに從つて、そのハネル力が、一行一行に弱つて、頭が不揃

ひになつてしまふ。それは誰についても云へる事で、年の力といふものは恐ろしいものだと思ふ。しかし現在の若いものは、この盛りの時を自分に持つてゐる者が、悠々にして老境に入つたものに負けるといふ情ない現象を呈してゐる相だ。

新聞記者として一番適當な人は、ニュースの價値をピンと頭に感じる人が一番である。新聞の價値といふものがそもそもニュースである以上、そのニュースを早く、正確にと同時に、そのニュースが廣く影響する興味及び社會的に善でなければならないといふ事を感じ得る人だ。

頭は六感で、働かさなければならない。しかしこの第六感は刑事の持つてゐるそれとは違ふ、目的は治安であるが、新聞記者は範圍が廣くなくてはならない。ニュースの大きなものに對しては、新聞記者はその生命をかけてゐると云ふ。

小野氏のやうに新聞新聞とその中で生活してゐる者にとつては、朝寢床の中から手をのばして枕元の新聞をつかんだ時に、その手のかんじで朝日か、日日か解るさうである。プンと鼻に來るインキの匂ひ、紙の肌ざわり、で、つかんだ新聞を開ける時は、ナムハチマンダイボサツで、何んなニュースが出てゐるか、他所のに大きなのが出てでもゐやうものなら、その日は一日やり切れない氣持になるが、ないときは、至極ほがらかになるさうである。こんな仕事は競爭意識がなければ、とても馬鹿馬鹿しい事である。

新聞記者は氣持をいつも新鮮にしてをかなければならない。第六感が、いつも意識を持つてゐなければ駄目である。記事を書いてポイントを置くところで頭の良し惡しほがらかさ暗さが解る。新聞記者の書く記事には主觀を出してはいけない、主觀がなくても又いけない。つまり主觀を通した客觀でなければならないわけだ。記事をかくのも机に腰をかけて書いてゐるやうな人は駄目で、大抵自動車の中などで文章は出來上つてゐる。電話で讀む原稿は、一分間に七十行。しやべり、書き、また聞き得る人が必要であつて、記のうまい人は百十行位かく。婦人記者は十何人か使つたが、男子に負けないのは菅野すが子氏だけで、神近市子氏は思想と職業と新聞意識に對して自分の特性を出さなかつた點が偉いと思ふ。多くの人は皆失敗で、健康の關係多くの男性の中にまじると云ふ羞恥の氣持原稿が書ける樣になつたと思ふと結婚、此樣な譯で巧くいかないのではないかと思ふ。

昔の新聞記者は天才教育であつたが現在は事務的である。婦人として最も用途が廣いと思はれるのは速記の方面であると思ふ。之は新聞常識に通じて、慣用の言葉に通じれば、出來る事だと思はれる。

新聞社の一ヶ月の電信電話料は三十萬圓で一割違つても三萬圓である。で電話の原稿であるが、電話はききかへすやうではいけない。で、つまり、いい記者をいい給料でかかへた方がかへつて下手に電話をつかはれるよりも經濟的なわけになるのである。

寫眞は三分半―四分で燒付、引伸しをする、寫眞に五分もかゝるやうではお斷りで、銅版にする迄に二十分あれば充分である。

傳書鳩は八丈島から四時間半で寫眞を持つて來る。萬年筆の軸樣のものにフイルムを入れ、一里を四分でとんで來るのである。仙臺からは五時間と少し、沼津からは五十分富士

山のテッペンからは一時間ちよつとで、鳩三羽來ると新聞一段の記事原稿がとれる。野球等は電話で解るが、青年團の競技等になると何郡の何さんでは、電話では困るので鳩を使ふ。傳書鳩でいいのはベルギー・フランス・イタリーであるが、之等のものに日本の土鳩をあはせたら日本に合ふいい鳩がとれた。

新聞記事は〆切時間にしばられるから名文家でも文章にひつかかつては駄目である。早く、正確に、面白く。汽車の時間毎に〆切が違つて地方に送る。書く人がのろのろしてゐると一版に遲れてしまふ。すると遠い所では二十四時間たたなければその記事は讀めない事になつて仕まふのである。新聞一段の原稿を二十分位で書く。之は十五字づめ八十行で、この中に書きたい事を洩らさずしかも面白くかくのだから頭がいる。いい記事早い記事と心がけなければならない。しかし新聞に出ないで闇から闇に行く記事がどれ程あるかわからない。金のかゝつた記事をパイする（捨てる）事によつて金がかかるのである。

新聞にとつて婦人讀者の御機嫌といふ事がずゐ分重大な事で、婦人の讀者は九星がないと御機嫌が悪いし、小説がつまんないと買つて呉れない。皆なが苦心サンタンして作つた新聞を小説だけ讀んで、ボンと放り出される事を考へると少々物悲しくなつてしまふ。何故婦人よ、もつと讀んで呉れないのですである。



何にせ健康が第一で、新聞社に居るものは皆一種の神經衰弱になつてゐるが、之は病氣の中には入れてゐない。新聞社は明るい 快活な、朗かな人を希望してゐる。――で小野氏のはなしが濟んで、工場見學になつた。先づ屋上の傳書鳩の家をたづねる。鳩達は、白えん豆、とうもろこし、あさのみをたべてゐる。外からおすと這入れて中からは出られない金網の中で御役目いつでも御座んなれと待つてゐる。電光ニュースは二千百六十個の電球によつて組立てられてゐる。スカイサイン室がこのニュースの發行所になつてゐて、字をしかけてモーターをかけると、外の大きなニュース板に字が出るのである。

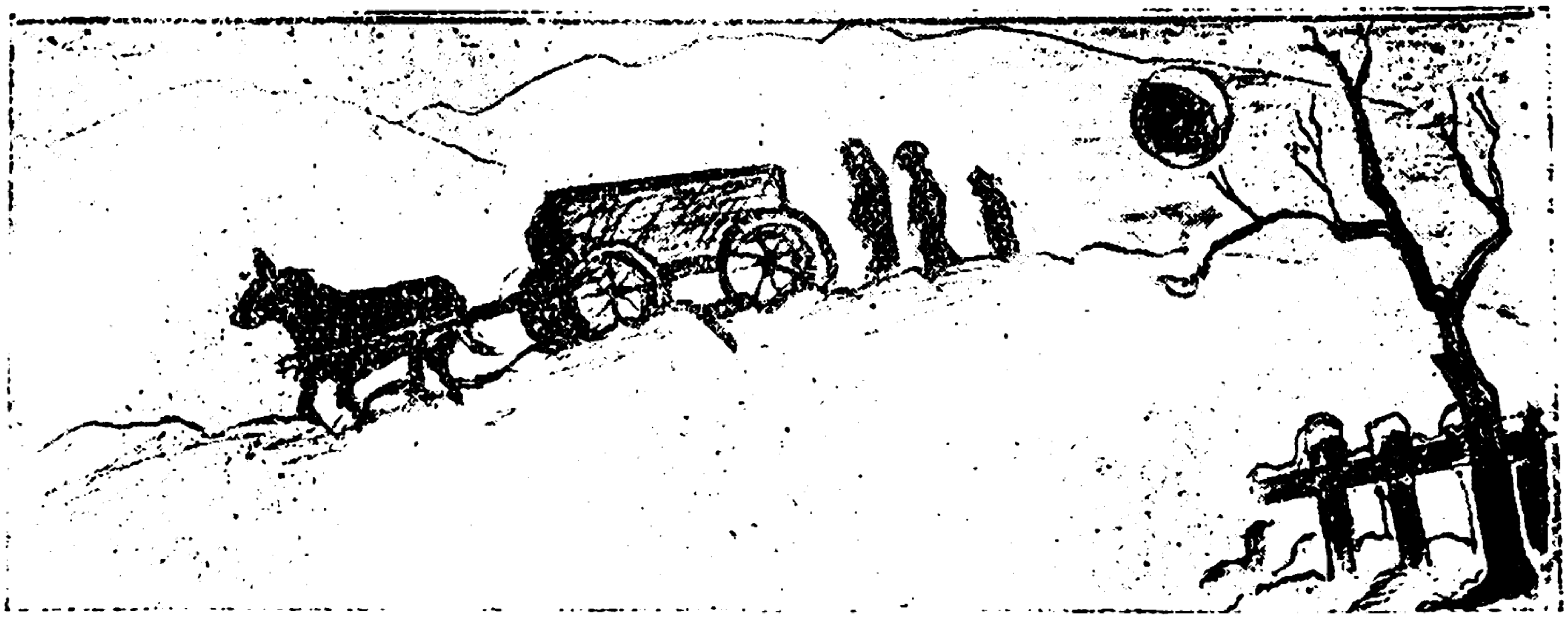
活字を作る部室にゆく、トムソンと云ふ機械が、盛にガツタンガツタンと活字を産み出してゐる。五號のペタで此機械は米國製だといふ。一分間に百二十本から百六十本を産むが和製は百本―百二十本だと云ふ。このトムソンは仕上げ（カッチング）はいらない。字母を取換へれば活字が變る。組込み、植字、木版、校正の一緒な大きな部室をゆく。次が發

送部で下から上つて來る新聞は五十枚目五十枚目がななめにくぎれて出てくる。輪轉機の廻つてゐる部室だ、スル、タタム、五十枚になるとしるしがはいる。輪轉機をみると、ニッポン・ウルトラ・……の字が目にとびこむ。新聞になる紙は一巾兩手を一ぱいにひろげたあたしの大きさと同じだ。之から四面の新聞が出來るのだな。一まき八十貫で全部のばしたものが一里十町―四哩あるといふ。之を一本刷り上げるのには十五分かかつて、二萬枚の新聞がとれるといふ。普通一日之を約百二十本、增頁の時は百五十本この紙まきが出るわけになる。輪轉機は一廻轉によつて一枚づつ出る。五十廻轉すると一枚だけ横むきになる。機械の横についてゐる、靑赤の電氣は信號燈で、赤はまはる靑はとまるの信號である。計算器がついてゐて、それに廻轉數が出る。百といふ數字が出てゐれば の機械は百廻轉して百枚刷れたことになるのである。之は一分間に二十四哩の早さである。

調査課に行く、「上田文子氏の旦那さんの圓地さんが課長さんとこよ」と中島幸子さんが敎へてくれた。殘念ながら圓地課長は出張でお留守で御顏拜見が出來なかつた。こゝは新聞記事の切拔き、寫眞の蒐集、圖書の蒐集、雜誌、パンフレットの蒐集、つまりあらゆる必要なものを集める所、―調べる事の爲にではあるが、―である。各國各地各方面のあらゆる事の必要のものを集めるのであるから、之を仕舞ふといふ事が、最も技術を要することである。で分配學上の十進法を利用して、あらゆる記事を十大別し、それを又細別してあるカードに依てその索引はなされる。

假に二百萬の讀者にどんな印象を與へたかを見ようとすれば切拔き帳をとつてみればすぐに解る。一つの事件の經過は切拔きによるより他はない。その他は實際そこに行つて實地でみるより他仕方のない事である。寫眞は約二十萬程集つてゐる。集める方は、直接目指した人を係員が二人居て絶えずうつしてゐる。外國のは契約して送つて貰つてゐる。記事の內容によつて、笑ひ顏のや泣き顏のや、が要るので、色々なのを必要としてゐる。之はちやんと組織に集めてゐる。で社長さんの寫眞を取出して來て見せて吳れた。あるある、いろんなのがある。若い時のや、變なマントを着たのや、よく〱集めたものだと感心する。此他世界に於ける代表的地圖だとか、何とか一ぱい集めてゐる。

最後に電送寫眞をみる。電送寫眞は大阪から十三分で來る。受信臺と送信架とある、送る寫眞の面を外にしてまいてクリップでとめ、モーターをかけると寫眞のまいてある、棒が廻りはじめる、五分の ミリメーターづゝ移動して、寫眞の面を光がなぜてゆく。光のはやさと電氣のはやさとは同じである。で光の强さが電氣の强さに變つて、―紙からの反射光線で白いところは强く、黑は弱い―線を傳つて受ける方に行く。と線を傳つて來た電氣は弱まつてゐるので、それを强めるために、振動機(バイブルレター)の反射鏡へ光をあてゝやる、と電氣の强弱によつて鏡の動く度がちがひ、反射が違ふ、その反射によつて、光の强弱を、調節して、送られたものと同じにして、ダークボックスの中で、受けたものを印畫にとるのである。一生懸命にきいてはゐたが殘念な事に判然とし い。書きながら少しあやふやだと思ふが、その點許して下さることゝ思ふ(みどり)。



風のなかの悲しみ

渡邊衣子

夕暮はさみしい、
私は思つてゐる、こゝろいためて——
ふるさとに一人の母を。
野の裾に今、
雪を抱きてゐる亡妹を。

戀人はなきとほき夜の下
枯れはてた葡萄園に
ふるさとより黄色い月が出た。
私の木靴は重く
重くそれをふみしめてゐる。

さわさわと風がくる
あゝ、また孤獨のふところに
泣き女の歔欷をもつてきたのだ。
吹雪の丘を黑い柩車がとほつた
私は半ば消える思ひで故郷を呼ぶ。

——淸凉里にありて——


反逆
矢田津世子

1

「天にまします我らの父よ。願はくば御名の崇められんことを。御國の來らんことを。御意の天のごとく地にも行はれんことを。我らの日用の糧を今日もあたへ給へ、我らに負債あるものを我らの免したるごとく、我らの負債をも免し給へ。我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出し給へ…アーメン」

朝の祈りが、嚴かに嚴かに會堂を流れた。

罪に喘ぐ小羊達は、跪き、うなだれた頭を指で支へて、聖なる聖なる父の御名を疲勞れる迄くり返した。

「聖歌　二十四番！」

會師が嚴然と命令した。

信者達は慌てゝ頁をくり始めた。太い、細い聲が、てんでんばらばらに彈けた。調子の外れた銅間聲が、きわ立つてみんなに後れて焦つた。跛なコーラスの終つた後で、信者の中から几帖面な顔付の男が立ち上つて祭壇に近づき、會師の傍にある大型の聖典を開いて早口に創世紀の或る一箇所を讀んだ。

「…宣へり…宣へり…」

男は吃つて、「宣へり」を何遍もくり返し、赤面してます〳〵慌てゝ吃つた。

再びコーラスが始つて、終ると、前から性急に咳拂ひをして喉を慣らしてゐた牧師がおもむろに腰を上げて祭壇に登つた。彼の纏つてゐる白い僧衣は、背景の黒い幕と崇高な對照をして、頸迄ある高いカラーや古風な爪先きだけを包む靴と共に、一層彼を威嚴づけ、神に近いものにしてゐた。

「新約聖書、ヨハネ第一の書の第三章、二十一節。愛するものよ、我らが心みづから責むるところなくば、神に向ひて懼れなし…わたくしは、このみ言葉を味はつてみましてェ非常に教へられるところがあると思ふのであります。現代のクリスチヤンは餘りに憂鬱であります。神様に對して心にやましいところがないならばア、常に快活に明るい生活が出來ると思ひます。何の憚るところなく自由に行動が出來る筈です。舊約聖書の中にこんな話があります。ダビデが、あのイスラエルの大王のダビデが、神の誓約の箱の前で踊りを踊つたといふこと。しかも、ダビデ力をつくして踊れり、とあります。ダビデは我を忘れて無中になつて踊つたに違ひありません。妻のミルカがこれを見て、大王ともあらうものが踊るなんて何事です、と夫を責めたのですが、ダビデは構はず踊つたのです。わたくしは、ダビデの、この子供に近い神様を怖がらない行動が眞當であると思ふのであります。神様に對してやましい心をもつてゐないからこそ踊りも踊れたのです。…」

寛衣の間へ手を入れてハンカチを取り出すと、牧師はそれを指の先きに卷いて、器様に鼻の汗を拭つた。ヘリオトロープの强い香氣

が會堂に擴がつた。
「私の知り人に、最近惡思想に感化せられた學生が居ります。彼は以前私と會つて快活に語り、笑ひいたして居りましたが、ひと度この思想に捕はれるや、最早私と會はふともしません。うつ〳〵と考へこんでばかりゐるのです。ダビデの如く快活に踊れやう筈がないのです。神樣に懼れを抱いてゐる證據です。ところが、神樣を正面に見ることの出來ぬ人が最近次第に增してきました。惡思想が青年諸君を目指してやつてくるのです。みなさアん、これは惡靈です。尤もらしい衣をまとつたサタンなのです。クリスチヤンは神樣の御名によつて、このサタンと最後迄鬪ひ通さねばなりません。社會からこれを追ひ拂はねばなりません。神樣の御言葉に對してあく迄忠實でなければなりません。懼れをもたぬ自由な生活を……」

「畜生！　どこで飮んできやがつたんだ。やつと金を摑めやア　チエツ、茹で蛸になつて歸つてきやがる……」

「當り前よ。俺アの取つた錢は俺アの勝手ぢやねえか。二六時中ゲジ〳〵野郎の相手がでけるけえ、ヘン　醉ばらはなきや　俺アにはこの世の中が暮していけねえよ……」

「……ま、一遍云つてみな、野郎……」

ガチヤン　バタン　ガラ　ガラ　ガラ……

祭壇の壁一重隣りでは亂鬪が始まつた。

居睡つてゐた信者の一人は、慌てすぎて椅子から滑り落ちた。

「……で、ありますから、みなさアんも、この神樣の御言葉をよおく味はつて下さるやうにお願ひいたす次第であります……」

汗を拭き、咳拂ひをし、牧師はひそめた眉を忙しなく伸縮させた。

「獻金！」

前列にゐた毬栗頭が皆の方を向いて野太い聲を張りあげた。

赤い袋の中で銀貨がカチ〳〵音を立てた。

再び聖歌、祈り、最後に人々は長い禮拜をして席を立つた。

「左樣なら牧師樣」

「左樣なら小母さん」

信者達は靜粛に、熱意をもつて若い牧師に別れを述べ、牧師の背後に並んでゐる瘦せた老母に向つて會釋した。

「ほんに　今日の御話は結構でございました。みなさんも大變熱心に聞いてましたよ」

人々の去つた後、「小母さん」と呼ばれた老母は、窓々のカーテンを引き乍ら牧師を振り返つて微笑した。

「……隣りはうるさいんだね。どうしたんだらう。バタ〳〵やつて氣がひけたよ……」

牧師は寛衣を脫ぎ終つて、小さい鏡に向つて髮を撫でつけてゐた。

「亭主がね、何でも失業してゐるさうで。まことに當節は不景氣でございますからね」

「いくら食ふに困るからつて、少しはこつちの手前も考へてくれるといいんだよ。あれぢや信者達に對してもみつともないねえ……」

牧師は、先刻の皺を、再び眉間へ深く刻んだ。

2

十三年前だつた。

その當時、夫に死別したお松は、三人の子供を抱えて生活の最低線上に立つてゐた。食はない日が幾日も續いた。夜になると、死が誘惑の手を擴げてお松親子を迎ひにやつてきた。死ぬ機會を見付ける事だけが問題だつた。或眞夜中、お松は子供達の手を曳いて、宛どもなく街を彷徨つた。氣力の脫け切つた子猫のやうに、子供達は眼だけ光らせて從順しく歩いてゐた。太い丈夫そうな松の木が逞しい腕を延ばしてゐた。併し其處迄行くには高い崖があつた。レールが白く光つてゐた。だが汽車は仲々やつてこなかつた。河淵へ出た。溫かい風が吹いてゐた。青い月の光りが、足元の水を深く見せてゐた。お松はやつと微笑した。その場所に辿りついた事を悅んだ。彼女の手は無意識に長男を突きとばしてゐた。

次に二人の子供を兩側に抱えて、彼女自身が飛び込んだ。呼ばれて、眼を開いて、お松は、白い敷布の上にのび〱と寢てゐた自分に氣が付いた、撥ね上らうと焦つた。兩側には二人の子供が寢息を立てゝゐた。お松は周圍を眼で探した。やさしい笑皺の中に自分を見守つてゐる眼があつた。が、彼女はもう一度廻りを探した。ケン坊は、上の子は一體何處へ行つてゐるんだらう?――

聖ヨハネ教會の澤木教父は、慈しみ深い微笑で先づお松親子を安心させた。人手がないから何時迄もゐてくれるやうに、と彼の方から嘆願した。お松は肚の底から淚をこみ上げさせた。世の中には神様がある、と思つた。その日から、お松にとつては、澤木教父は生きたこの世のキリスト様だつた。ピンピン凍りつくやうな二月の或る朝お松は洗禮を行つた。水の冷たさが針になつて全身を突き刺した。が、お松は聲を放つて祈りを續けた。

三日風邪で臥つた。洗禮をうけてからは、お松は、自分は、神の子である、と堅く信じるやうになつた。重い使命を肩の上に感じた。

教父は說話の度にお松を指差してその再生を祝し、神様の救助と寛大に感謝した。その都度、お松は立ち上つて、「神様と教父様の愛」に對して長い祈りをくり返した。信者連の間には動搖があつた。教父の美しい行爲を讃えないものはなかつた。教會の輝ける誇りだと自慢するもの迄出た。彼の神に近い行爲に報ゆるため、信者達は特別獻金を申し合せた。教父は丁寧に斷つた。が、結局信者達の熱意に動かされて金を納めた。彼はその日のうちに金を貯蓄銀行へ持つていつた。三流新聞は、日曜附錄に、再び澤木教父を寫眞入りで紹介した。彼の善行は三段抜きで紙面の上部に光つた。本部から稱讃の言葉と共に金一封が到達した。信者が増した。教父は滿足げに頷

いた。僧衣の中で、指が算盤をはぢいてゐた。お松達は、一層親切に待遇された。信者達は、「小母さん」の存在を聖母の位に迄引き上げた。これは、彼女の夫が貧しい大工であつた、といふ一事が原因してゐた。併し、心の中でお松は夫を嗤つた。(彼女の知つてる範圍では、夫は始終飲んだくれてゐて、丁半が病みつきで、敗けるときまつて彼女を足蹴にするのが癖だつた)信者達の親愛は日毎に加はつた。そして、お松自身はます／＼神の御座近く進んだ。世話好きな信者の斡旋で息子はやがてメリヤス工場の見習にやられた。暇を貰つて歸つてくる度に、お松は殺した長男を憶つて泣いた。あの入水の時、棒杭で強か腦を打ちつけた娘は、ぼんやり口を開いて、弛んだ視野の中で生きてゐた、お松は、天なる父のみ惠にかけても、此娘の上に奇蹟の現はれる事を今か今かと待ちあぐんでゐた。

澤木教父が本部の指令で中央都市の或る聖公會へ榮轉したのは、お松にとつて悲嘆の極だつた。が、彼女の悲しみは、新規な神樣の移轉して來と同時に消え去つた。此神樣は四年程御座に就てゐられたが、やがて信者の中の美しい人妻と手に手をとつて雲がくれしてしまつた。若い小野牧師がきたのは逐一年前だつた。彼は、神樣のお命じ給ふ所に依て、お松親子を扶養した。何よりもまづ古い正會員達の機嫌を損じる事が彼には恐ろしかつたから……。教會で絶對權力のあるのは古い信者達である。教會の維持費牧師の生活費は彼等の掌中にあるのだ。だから信者達がお松に親しんでゐれば、牧師としても彼等の申出でを快く承諾しなければならない。小野牧師は信者達の間に確實な信頼を得た。白痴の娘は妹の樣に可愛がられた。お松は只管身の幸福を神樣に感謝しなければならなかつた。

3

「おつ母ァ　上つてもいいか？」

臺所口からのつそりと肩の廣い男が首をのばした。

「おや　欽ぢやないか、暫くこなかつたねえ、どうしたんだともつて心配してたよ」

「うん、こられなかつたんだ、それに――」

二ヶ月目の息子の來訪だつた。お松はそわそわとそこいらを片付け始めた。

「親に心配させるやうなお前ぢやないのにねえ、一體、どおしてこられなかつたい？――」

お松はまじ／＼と息子を見た。二ヶ月の間に、全で別人のやうに變つてゐる。この髭面、この服裝、この無愛想。あの模範職工の几帳面はどこへ失せてしまつたらう……。

「工場が忙しいのかい？」

「うん…粂坊はどうしたい。どこへ行つたんだい？」

「先生のお部屋だらう」

「役者のとこか。おつ母ァ　氣をつけなくちやいけねえぜ。粂も十

七だからなアーー」
「役者つて、お前、誰れのことを云ふの」
「解つてらア、此處の教會の狐野郎のことよ。祭壇の上で芝居をやる役者だらうぢやねえか。そだらう。おつ母ア」
「ま、何を云ふの……」
　お松の唇が細かく慄えた。眼が注意深く周圍を見廻した。「お前は、お前は、惡靈に憑かれてゐるんだ。サタンがお前に云はせるんだ。ね、そうだらう。欽や、早く神樣にお赦しを乞ひなさい。おゝ神樣、私の愚かな小羊をお赦し下さいませ。貴方のみ力によつてこの小さきものから惡靈をお取り拂ひ下さいまし……」
「止めなよ。おつ母ア、狐に向つて祈つたところで始まらねえ。狐にァ油揚が一番利くのさ、神樣なんてありアしねえ。坊主なんて手品師にきまつてらア」
「シッ……聞えるよ。お前はまア何といふことを。忘れたのかい、神樣はお前のお父さんだよ。お前はよもやあの御恩を忘れたのぢやないだらうにね。さ、祈りなさい。救ひを求めなさい。詫びて、元のやうにみ力におすがり申すんだよ……」
「手品を見てゐる連中は騙されてる内は熱心なんだ。だが、一旦手品の種を摑んだものにァ　馬鹿〳〵しくて奴等のやる事が見ちやゐられねえ。奴等が後へ廻してる手に何を握つてるか調べて見がいいや。カラクリが判つ切り分らア。全くよ。俺ア、遂此間迄信者樣だつた。騙されたのも知らねえで悦んで奴等の手品に見とれてゐたからなア。だがなおつ母ア、俺ア奴の尻尾を取つ摑えてしまつたぜ、組合さ這入る迄は俺も狐の仲間さ。だけんど、俺ア腦味噌が變つたぜ、世の中の事が表からよりも裏から見れるんだ。判つ切り解らア。そうだ。おつ母ア、お前も眼を開けて、一つ神樣の尻尾を摑んでみな。裏から覗いてみな。俺アおつ母アの眼を開けねえぢやおかないからな。……大體手品師と一緒に暮してるのが間違つてるよ」
　一語一語を叩くやうに述べる欽二を、お松は只呆然と胸に十字を切つた儘聞いてゐた。
「アーメン　アーメン……」
　廊下を、白痴の娘が叫んでゐる。
「兼來う。何だお前白粉なんざ塗るんぢやねえよ。アーメンとこさ行つちやいかねえ。いいか。兄ちやんが今に專門の醫者にかけて必ず快してやるからな。いいか、兼、アーメンとこさ行くんぢやねえよ。……おつ母ア　お前の小使ひ置いてくよ。俺ア急ぐから歸るぜぢや又なーー」
　來た時と同じ樣に、のつそりと音も立てずに欽二は出て行つた。

4

　夏になると毎夜の如く到るところで路傍説教が始まつた。
　聖ヨハネ教會もその例に洩れず、信者達は三班に分れてビラを配

り乍ら街をねつた。今年は特別の熱意をもつて、信者達は寧ろ強制的に聽衆を勸誘した。ひどく眞劍だつた。この熱誠は、彼等の信仰からよりも、より直接的な他の原因をもつてゐた。日曜の度に、牧師が、キリスト敎普及の運動を、それが現代に於ける信者達の早急の任務であることを、熱涙をもつて愬えるからであつた。この牧師の異狀な迄に眞摯な態度がひどく信者達を動かしたのであつた。

「牧師樣は普及運動に御熱心でゐられますな」

「ほんに結構なことでございますよ」

信者の物問ひ度げな口吻に對して、お松は何時もきまつてから返答してゐた。

だが、こんな事實を彼女は知つてゐる。

確實な正會員の一人である陶器會社の社長の息子が足繁く訪ねて來たこと。彼は何事かを低聲に賴みこみ、牧師はそれを承諾した事。敎會へ寄附の名目で相當のまとまつた金を彼が受取つてゐる事。その日から態度が一變して普及運動が喧しく喋られた事等を。牧師自身多忙をきわめ、内密で工場へ出かけて說敎をしてくる事も度々だつた。

併し、お松にはすべてが沒交渉なことだつた、彼女は他の信者達と等しく、只熱心に傳導說敎に骨折つてゐた。神樣のおやり遊ばす事は何事にかゝはらず間違ひのあらう道理がない。

十時が疾つくに過ぎて、その夜の勤めを終つたお松は信者達と途中別れて暗い路地を曲つて歸つていつた。一人つ切りになると、先達の欽二の言葉がキリキリ胸につき上つてくる。だが、お松はそれを憶ひ出す度に十字を切つてキリスト樣のみ名によつて氣持ちを柔らげ樣と焦つた。すつかり封印をしてしまつた筈のあの言葉が何だつて飛び出て私の前を往來し始めるんだらう。…お松は腹立たしい好奇でそれをチョッピリ嚙んでみた。が、直ぐ彼女はそれを吐き出して再び十字を切り、今度は出て來れない樣に重しをのせた。併し、それでもあの言葉がひつきりなしにお松の頭を通過する。…

腹を害ねて臥つてゐる牧師を案じて、お松は氣忙しかつた。近道をして家の前へ出てみると消燈して、窓は黑く寂しい。お松はドアを押した。みんな寢てしまつたのかと思つた。會堂で物音がした。牧師樣が夜のお祈りをあげてゐるのだな、で、お松は、み心を擾き亂さないやうにと、足音を忍ばせて廊下を歩いた。

バタン　椅子の倒れる大きな音がした。

忍び笑ひと、それを叱る低聲が傳はつてきた。床板がキシキシ鳴つた。壁にぶつかる音と、それを追ふ白い影が夢の樣に通つていつた。むせるやうな笑聲とそれを壓しつける聲が稍ゝ高く響いた。

「ハハハハ　もつとこつち來う。アーメンもつとこつち來う。痛い痛い。アーメン」

お松は、黑い血が頭のてつぺんからドクドクと吹き出るやうな氣かした。胸がキリキリ壓迫されて、今にも呼吸が止まりさうに思つ

た。冷やつこい汗が額を流れた。
「…兼ぢやないか。何してンのか？」
「おつ母ァ　ハハハ　アーメンが、アーメンが…ハハハハ…」
母親を目掛て、獣の樣に飛んできた。腰卷一枚の素裸だつた。
「アーメン　來う、アーメン…」
「何處へ逃げ込んだんだらう。お松さんかね？…今ね、鼠が…」
スヰツチを探すお松の手に、男の裸な胸が觸れた。彼女は二三歩跳び退いた。
「電燈つけちや駄目だ。鼠が逃げてしまうからね。折角此處迄追ひこんだんだ。確かこの中だな。素手で捕へてみせるよ。いいか。兼ちやん餘り騷ぐもんだから逃げちやつたかしら…
闇の中で男の身繕が際立つてザワついた。聲が縺れて慄えてゐる。
「アーメン　來うよ。來うつて…」
白い腕が無氣味に動いて男を探し求めた。
「兼！さ、行から。來うよ。」
お松は娘の軀を抱えるやうに曳きづつて行つた。
「そうだ。寢た方がいいんだ。僕が餘りバタバタやつたもんで起き出してきたんだ。それはそうと、お松さん、今夜の傳導說教はどうだつたね。集りはよかつたですかね？」
妙に嗄れた高い聲が、會堂の中からお松を追ひ駈けてきた。
「…はい、萬事都合よく、みな樣は先生の御病氣を案じ申してゐられました…」
鼻の先きへ熱いものが突き上つてきた。
お松は靜脈の突起した手を胸へ置いた儘、明方迄祈りを續けてゐた。

5

眼の鋭い、禿鷲のやうな男が訪ねてきて、欽二の行動について、お松の知つてる限りを鑿のやうな舌の先きでほじくつていつた。
男が歸つた後で、蔭で立ち聞きしてゐたらしい牧師は、眉間へ露骨な縱皺を寄せて、お松を白く睨んだ。
「欽二君もとんだいい所とかゝり合ひを持つてるね。あれでも模範職工かね。ところで、あゝいふ男が教會へ出入りしたとなると、信者間でも問題が起る、引いては教會の名譽にもかゝはる至極迷惑な話だ。お松さん、これは何とかして貰はなければ…とかく、白い壁に付く泥は目立ち易いからねえ―」
裸な言葉がピシヤピシヤお松の頰を叩いた。
――欽二に限つて間違ひのあらう筈がないが。だが、この間來た時の口のきゝやうぢや、萬一そんな事でもあつたら…
併し、お松にとつては、この際息子に對する危惧の念よりも、牧師の何時もと違ふ不當な態度が何よりも肚にこたえた。
あの夜以來の落ちつかない彼の行動、自分達親子を不快視するそ

の瞬間、穩和そのものだつた神樣が、急激に粗暴になつたこの變化を、お松はそゝへ觸れ度くないやうな氣味のわるい原因と結びつけて、極力それを否定してはゐても、時折り不意な恐怖がやつてきて、彼女をおびやかす。いや、神聖な教會で間違ひのあらう譯がない。みな自分の邪推なんだ。神樣がよもや、神樣は正しい事だけしかしないにきまつてゐる。…で、お松は、牧師の不機嫌な他の原因を探さうと焦せる。そして、それは息子の欽二の一身に關してゐるんだ、と結末をつける。

ともかく、お松は欽二に逢つて話を確めやうと家を出た。

裏門は五六人の職工達で固まつてゐた。傾きかけた塀の中にはギツチリ黒い頭が詰つてゐた。誰れかゞ黒い腕を振り上げて怒鳴つてゐた。ウオツ　と、怒濤のやうな地響きが起つた。パンパン手が叩かれた。お松は先づこの光景に愕かされた。目脂を拭つて、再び見直した。耳にまつわる毛を拂ひのけて、男が何を云つてるのかを聞かうと焦つた。腰を伸して塀に摑まつた。

「遠山欽二に逢はれんですかい？」

やつと、職工の一人に問ひかけた。

「遠山？欽二？…あゝ　第二工場の兄貴だ。そうだな、今忙しいが、まア　行つてみやう。お前さんは誰れだい？　え、おつ母アさんかい」

若い職工は、意勢よく飛んで行つた。

「何しろね、この通り今が眞最中なもんだから…。おつ母アさん、こつちへ這入つて待つてて下せえ」

長身な職工は、往來にぼんやり立つてゐるお松を自分の横の空地へ誘つた。

「この騷ぎは一體どうしたといふんです。喧嘩ですかい？」

自分を「おつ母アさん」と呼ぶこの男の親し氣な口調が、お松を知らず〳〵彼へ近づかせてゐた。

どツと喚聲が上つて、續いて足踏みと拍手が起つた。叩きつけるやうな幅つたい聲が後で叫んでゐる。

「昨日からストライキでさア。今度といふ今度は俺アの主張を通さずにアおかねえ。奴等の手になんか乘るもンか。打のめして…」

「お、よく來たな、おつ母ア、どうしたんだい？」

汗でギラ〳〵光つた顏が忙しなく呼吸をくり返した。「俺アの言葉おとなしく入れてくれて、矢張りあの狐穴を出る氣になつたか？」

「…警察から人が來てな、お前のことを根掘り葉掘り訊くもんだから、それでな…」

「何だ！そんなことか、犬なんか、勝手に糞でも嗅がしておけアいいんだ。…俺アまた、おつ母アが分別つけてやつてきてくれたものと思つてゐた…」

口元に浮いてゐた微笑が消て、欽二はやけに爪先きで土を蹴つた

「神様のおめぐみは深いよ、そんな……」
「未だそんなこと云つてる。今に、そうだ、今に、奴等がだらしなく下げてゐる尻尾を摑んだ時、その時だ。おつ母アの眼が開くなア。奴等を注意してみるんだ。な。尻尾を握るんだ。……今日は歸れよ。俺アとても忙しいんだ。おつ母アの坊主臭え香ひを洗ひ落してからやつてきなよ」
欽二は、母親の小さい肩を廣い手で輕く叩いた。
「體を丈夫にしなよ」
お松は變に泪つぽくなり乍ら、後をも見ずに歩き出してゐた。
ワアッ　塀の中でに喚聲がかち合つてゐた。

6

この一週間以來、げつそり瘠せて碌に飯も食はないでゴロ〳〵してゐた白痴の娘は、とう〳〵床についたその夜、激しい腹痛を泣き喚き乍ら母親に訴えた、眞夜中になつて、彼女は黒つぽい液體を何回も吐いた。便所へ行く度にひどい出血をした。悲痛な聲を放つて救ひを求めた。お松は、娘を抱へ、起し、寢かしつけ、彼女自身血まみれになつて介抱した。
この騒ぎに、隣室の牧師は起き出してこやうともしない。だが、お松は寧ろ彼の存在を忘れて無中になつてゐた。
眼を擦り〳〵やつと醫者がやつてきた。
歸りぎわに、彼は難かしい顏の中から囁いていつた。
「儂は専門ぢやないから判つ切り云へんがな、娘さんは飛んでもないことを仕出かしとる、立派に姙娠してゐられたものを墮胎劑を飲んでゐるらしいて。これは恐しいことだ。全くもつて。誰れか専門のお方に診察してもらはんとな。早くですぞ。早くな……」
老醫師は、臆病な鼠のやうに性急に逃げていつた。
大きな金槌で、ガアン　と頭のてつぺんをどやされた形だつた。胸の中を眞紅な焰が燃えた。眼の前が一様に白つぽい布で覆はれた。何も分らない。何も彼もだ……
だが、やがて一條の冷水が彼女の昂奮の中を下つていつた。
「象、象坊、お前は一體何をやつたんだい。おつ母アにみんな云つてみな。な、云つてみな……」
白眼を出した儘、娘は微笑した。
「な、象　云つてみな。どおして……」
「……アーメンだい。アーメン……」
不意にひどい苦悶の中から、娘は人差指を振りあげて隣室を指した。泣き笑ひがその後に續いた。
「……先生かい。象、アーメンかい」
喉に黒い固りが聞えた。
「矢張りだ。野郎、矢張りだ。こんな事をして、こんな……」
白く乾いた唇がカサ〳〵慄えた。老人の眼は火になつて輝い

た。指が虚空を摑んだ。
「狐だ！　狐だ！　狐だ！」
お松の足が襖を蹴開けた。
小野牧師は、寝卷きのまゝ蒲團の上にしよんぼり座つてゐた。
「牧師なんて狐だ。狸だ。みんないゝ加減の代物だ。神樣なんて化物だ。大騙だ。私ア十三年間この娘の上に奇蹟の現はれることを祈つてゐたんだ。ところがどうだ。神樣は娘にどんなことをしてくれたンだ。娘は孕ませられて、それに下し藥迄飮ませられたんだ。娘は死かゝつてゐる。私ア　今になつて始めて飮二の云つたことが解つてきた。あれは間違つた事を云ひやしない。尻尾が出てるぞ。お前さんのそのでつかい尻尾を、私アちやんと摑んでゐるんだ。聖書の蔭にかくれてお前さん達ア惡事をやつてる。安心して、し度い方題のことをやつてる。一番目の牧師ア私達親子をダシに使つて出世して行きアがつた。二番目の奴ア、始終寄附金や獻金をごまかしてゐた。其奴ア女が好きで淫賣を買ふのが道樂だつたんだ。揚句の果が他の妻君と一緒に駈け落ちだ。その次のお前さんはどをだ。私の娘に手をつけて、おまけに殺そうとしてゐる。未だ知つてるンだ。お前さんが傳導說教に身を入れる譯もな。お役人が後で焚きつけてゐるんぢやないか。知つてるんだ。知つてるんだ。金を摑ませられゝば、神樣なんて何でも引き受けるんだ。キリストなんて大嘘だ。役者だ。あの十字架が、十字架が皆の眼をまやかしてるんだ……」
お松は駈け出した。
會堂の中には青い月光が流れてゐた。
祭壇の中央に十字架が金色の輪廓をみせてゐる。
お松は椅子をかきのけて走つた。
幽靈のやうに、蒼白な牧師の顏が戸口に音なく現れた。
「お前さんはよくも私を騙してきたね。甘つたるい聲で人の心へ毒を注射するのがお前さんの仕事なんだ。お前さんの連れていつてくれた樂園にア　狐や狸ばかりが往來してるぢやないか。私達ア　そいつに肉を喰はれるだけだ。お前さんは詐欺師だ。詐欺師だ！」
祭壇を睨んでゐたお松の眼が白く光つた。彼女はその上へ駈け登つた。十字架をはがした。滿心の力を集中して、それを踏みつけた。蹴つた、叩きつけた。ガアン　鈍い金屬音を發してそれはオルガンをしたゝか打つた。
「あゝゝゝゝ」
戸口の蒼い顏が低く唸つて倒れた。
「飮、さ、行くんだ兄さんとこへ行こうよ。おつ母アはな、これから一生懸命働いてお前を病院さ入れて眞人間にしてやるよ。さ、行こうな。飮坊……」
返事のない娘の細い軀を抱えて、星のまばらな空の下を、お松はシヤッキシヤッキ歩いて行つた。



霧が降る

藍川陽

霧が降つてゐるのだ。眠つた碇泊船のマストで蒼い灯が合歡の花のやうに霑んでゐる。夜の港の潮風はギヤソリンの仄な匂ひがした。素肌に着た汚れた印絆纏の背に十月の風が冷い水のやうに浸み通る、空腹に折れ込みさうな胸に兩腕を組んで十九の松公は名案—腹を滿す名案をぼんやり考へてゐた。

空を川のやうに流れた星座が益々蒼く輝き出すと橋の下から、街の公園から秋風に追はれる季節鳥のやうに浮浪者の群れが的もなく散つて行く、野天を家として與へられた彼等は何處かに屋根のある棲家を探さうと云ふのだらう。松公も又夏中の快いベツドであつた公園のベンチから秋風の中に飛び立つた塒の無い鳥の一羽だつた。黑い水面の上を小さい蒸氣船が白い石鹸水のやうな泡を蹴立てて通る。ヅクヅクヅクヅクーエンヂンの鼓動が若い松公の胸を嚙んだ、疼くやうな鄕愁をチツと抑へて目を瞑ると微な魚の匂ひが鼻先に漂つてくる。それは遠い南の島國にある彼の育つた漁村の匂ひだ。空腹に無感覺になつた腹から更に新しい空腹が遣瀨なく喉を這ひ上る、彼は岸の丸太にドカンと腰を下ろすと兩手で顋を支えた。

「歸り度え、だが歸つても食えねえなあ一緖だ」

K縣の太平洋沿岸に五つの漁村が並んでゐる、その內の一つ、R村が彼の故鄕だ、貧しいながらにも食つて行ける村だつた。白い砂濱には大きな芋虫が這つたやうな松原があつて大漁の時にはその入口に赤旗が立つ、砂に積まれた新鮮な魚の山を圍んで村人の心も赤

旗のやうに躍る。夕燒空を映して血色になつた海を疲れた腕で歸りの船を漕ぐ漁夫の一日の喜びは壁の崩れた家で親子揃つて圍む晩食の膳だ、豐漁期の秋の神祭は彼等の一年中の單調な生活に咲く唯一つの赤い花のやうな喜びだ、それを樂しみに村人達は毎日を激しい勞働と粗食に甘んじて暮してゐた、併しこの薄いベールのやうな村の平和が破れる時が來た。大きな手が五つの村の生活を荒し始めた。小數の資本家が地曳網で彼等の海を占領し始めたのだ。周圍に鉛の沈子を持つた地曳網は幼魚稚魚の區別もなく海底を引浚ふ。海の暴君に敏感になつた魚は地曳網を着けた蒸氣船の音に追はれて禁止區域へ逃げ込む、船主と歩合關係で雇はれてゐるこの船の乘組員は漁獲が多ければ多い程收入も多い、彼等は平氣で禁止區域へも侵入した。市場の仲買人は大量生産で安い地曳網業者に媚びて小釣業者の魚の價格も引下げる、海には魚が減る、一つ一つ釣り上げたり手繰り打寄せ網しか持たない小漁民は一年中暴風を喰つた時と同じ不漁續きだ、大量の赤旗はもう村人達の喜びでは無くなつた。小數の資本家は年々に富み、五つの漁村は年々に疲勞した、五萬の漁民は貧困から貧困のどん底へと落ちた、落ちながら彼等は燃えるやうな憤懣を密に積んでゐた。この儘行けば餓死だ、一つの村に爆發した怒の火は燃えて五ケ村を燒いた。彼等は立ち上つた。

――俺等の海を返せ、地曳網撤廢を要求せよ――

――縣廳へ押しかけろ――

要求が通る迄は野宿しても頑張るんだ――この決心を米と味噌と共に積み込んで彼等は出發した。

――確りやつて與れ――

村に殘つた老人と女子供の血のやうな叫びが彼等を叩いた。五つの港から一つの目的地K市に向つて長い船の行列が進んだ。

――漁民一萬大擧して押し寄す――

この報道に恐れたK市は警官の垣だ、市民安全の爲に萬一の場合は――一萬の漁民の暴動化を豫想した警察署長の訓示を白く光らしたサーベルの垣の間を銅色の顏が川のやうに流れる、縣會は流會だ。梢が黄色い木立深いK市の公園、自由を叫んだ板垣退助の銅像の前に立つて民政、政友の議員達は代る代る廣場を埋めた群集に向つて熱のない演説を吐き掛けた。

「諸君の立場には心から同情する、我々は黨派的な利害感情を捨てて諸君達に有利な處置を取る心算だ」

闘つた、だが二日間の戰ひで得たものは矢張口先の同情だけだつた。二百の資本家を生かすか五萬の漁民を殺すか、ブルジョア政黨に必要なものは勿論飢えた五萬の民衆ではない。當局の煮え切らない態度が漁民を狂暴にした、彼等は縣廳の門を破壞した、松公の親父は××を毆つた。××は時期到來とばかり解散を叫んだ、要求はたゞ禁止區域を嚴重に取り締ると云ふ事で胡麻化されてしまつた。廣い海上だ、僅な警邏船は有つても無くても同じなのだ、掃蕩艇で

卅人が檢束された、減稅、彼等の遠慮勝ちな嘆願は問題にされずに葬られた、怒りと失望とに蒼ざめた漁民は犧牲者の家族に悲報を持つて又食えない村へと船を走らした。

未決へ行つた親父、瘦せた背を曲げて煉瓦運びをやつてゐるお袋、褪けた事も無い白粉を涙で斑にしながら街の男に買はれて行つた妹。

「嫌だ行くのは嫌だ、兄や、何とかしてお吳れ、何とか――」

松公は抱きついた妹の髮をそつと撫でゝ云つた、安油の匂ひが彼の手で白く光つた。

「俺らが金をうんと儲けたらな、なそれ迄我慢しろよ」

村を捨てた松公はO市へ出た。金を儲ける、こんなお伽噺しみた夢は來た日から捨てなければならなかつた。せめて親子四人が一諸に暮せる丈でもと思つた、がそれも斷念して一人で食つて行かうと考へて働いた、併し一人でも食えなくなつた、不景氣は彼がやつとの思ひに入つた染料工場を閉鎖してしまつたからだ。彼は職業紹介所へ日參した。何處から集つて來たか、一つの紹介所になんと多い失業者の群だらう、松公は焦燥と突きのめされるやうな失望を毎朝繰り返した。

「金は天下の廻りものか、チェッ大嘘だ」

貧乏人と金持との間には高く厚い鐵柵がある、金は働いても働いても貧乏人の懷には殘らない、勞働者の勞働が鐵柵の向ふに住む人間の腹を肥して金は彼等の間だけをどうどう廻りしてゐるのだから。船の灯が水面で玉虫のやうに碎けてゐる、松公はポンと手を拍いて立ち上つた。

「金の有りさうな奴から相談づくで貰つてやれ」

彼はこれが至極當然の事に思はれて來た、今迄どうしてこの名案に氣がつかなかつただらう。港から町へ續いた原つぱの道を松公はブラブラ歩き出した。人の足音がする、近づいて來た影は老婆だ、松公は擦れ違ひざまに聲を掛けた。

「おいお婆さん」

「なんだい」

立ち止まつた老婆は彼の顏をまじまじと見あげた。大きな風呂敷包みを抱えた老婆の頭髮の垢の臭ひが松公の鼻をムンとついた。彼は首を振つて靜に云つた。

「T町へはどう行けば良いんだい」

「この道を突切つて電車通りを左へ二三丁めがT町だよ」

病んだ蝦のやうな老婆の歪んだ背を見送りながら松公は枯れかけた草の間に蹲んだ。闇の中を白い花の樣な顏がぼんやり浮んで柔い白粉の香がうつすりと漂つて來た。松公はのそつと立ち上つた。

「一寸待ちな、姐さん」

松公は女の心臟がドキンと鳴つた音が聞えたやうな氣がした、彼は出來るだけ優しい聲で云つた。

「俺等、二日も食はねえんだ、金をお呉れ」
眼を大きく見開いた女は彫像のやうに動かない。
「手荒な事なんざしやしねえ、俺等は腹が減つて堪んねえんだ、な頼む、驚いたら勘忍して呉んな」
彼を見つめた儘女はそろ〳〵と財布を出した。銀貨が闇を白く截つて松公の足下に飛んだ。
「ウフッ、五十錢だ」
夢ぢやないか、松公は指先を銀貨のギザギザに擦りつけた。めし屋の暖簾が黒く彼の頭一杯に擴がつた。松公は身體をくの字に曲げて原つぱを大股にぐん〳〵横ぎつた。

隣の卓を三人の男が圍んでゐた、一人一人印の違つた袢纏、汚れた地下足袋と脚袢、風態は自由勞働者だ。
「さあ賣上げの勘定して―飯だ」
藤澤樟腦の廣告にある鍾馗のやうに髯だらけの男が逆にした財布から穴の明いた白銅がざらざら音を立てた。
「ひい、ふう、みつ」
三人は聲を合はして數え始めた。
「廿四」
「一圓廿錢か」
「一人宛四十錢たあ情けねえな、家ぢや米狂人みたいになつた嬶と泣き聲さへよう立てねえ餓鬼が待つてるてえのにさ」
「ぐず〳〵云ふねえ、文無しより優ぢやねえか」
禿頭をサンゼンと光らした飯屋の親父が彼等に近づいた。
「どうだい、兄イ達、儲るかい」
「儲る！ そんな夢見たいな事があるかい、おまんまを滿足に食つてるかつて聞くのが今時の挨拶だぜ、親父さん」
「こいつあ一本參つた。ところでお前さん達や見たところ商賣人ぢや無さそうだが一體何をやつてんだい」
「見えねえ筈さ、俺等は勞働者だつたんだ、御承知の通り不景氣だ、何處へ行つても仕事なんざ有りつこねえ、失業者、失業者、洪水のやうな失業者ばかりさ」
鍾馗は不景氣に呶鳴りつけるやうな高聲で喋り出した。
「そこで食えねえ長屋の連中三人集つて文珠の智慧を絞つたつて譯よ、二錢で卸した磨き粉を一袋五錢で賣つて歩ゐてんだよ、今日がその初日だ」
「フーン磨き粉の行商たあ變つた商賣だね、それでも割に良く賣れるやうぢやないか」
「入らなくても大の男が三人も押し掛けりや恐がつて大概の家ぢや買ふよ、それに高が五錢の代物だ」
廣い額が罪人のやうな男が下顎に生えた無精髯を掩りながら泣くやうに云つた。

「これも何時迄續くか心細い商賣さ、頑丈なこの足が木偶になる迄一日中歩いてそれで四十錢だ、元を差し引いて今日一日食つちまへば明日から商賣は上つたりさ」

「不景氣つて奴あ何處から來やがつたんだらう、何時になつたらなくなるんだ」

「丁度歐洲戰爭の前も不景氣だつたがこれ程ぢやなかつた」

飯屋の亭主は思ひ出したやうに天井を見上げた。

「戰爭つて云や、近い内にあるかも知んねえぞ、俺等が馘になつたM鐵工所、知つてんだらう、ほら川向ふにある今爭議中のでつけえ奴さ、なんでも昔の友達の話によると鐵砲なんぞ、こつそり造つてるつて云ふからな」

「戰爭をしたら不景氣は無くなるつて寸法かね」

「貧乏人は相變らず貧乏人さ、損をするのはやつぱり俺等で儲ける奴は金持さ」

「それはさうと腹がぺこぺこだ、飯としやうぜ」

「親父さん肉丼三つだ、盛りをよく頼むぜ」腐つた葡萄のやうな眼をした老爺、眠つてゐるのか死んでゐるのか分らないやうな子を背負つた中年の男、安煙草の煙にぼやけた電氣の光の中でみんなが食つてゐる、犬のやうに食つてゐる。松公は舌を燒きさうな味噌汁をフウフウ吹きながら豆腐の破らを一つ一つ拾つてなるたけ緩り食つてゐた。

「おい兄さん、一寸その醬油差しを借しとくんな」

彼の横にゐた辻占賣りの女が云つた。

「よし來た、婆さん」

醬油差しを受取つた手は柔かさうで白い、松公はおやと思つて女を見返した。婆さんぢやないのか？ てらてらと頭の中程迄剝げ上つた額、左で絞つたやうに引きつゝた頰、潰された眼、無花果色の唇を抑えてによきり出た前齒が光つて鋭い、お化け―闇夜だつたらかう呼んだに違ひない。見るのは氣の毒だ、かう思ひながらも松公の視線はともすれば女の顏面に流れた。二人を交互に眺めてゐた腐り眼の老爺は齒の無い穴洞の樣な口から傷々しげな言葉を吐いた

「聞いちや惡いかも知んねえけど、姐さんの顏は火傷かね」

「あいよ、お爺さん、十七の時製絲工場でね、肺が惡くなつて血を吐いたんだよ、眞赤な血をね、こんなに澤山」

女は白い兩手で水を受ける格好をした。

「氣を失つて倒れた拍子に繭釜の煮湯が顏をこんなにしたんだよ」

右に殘つた眼は黑い眼だ、泣いて憎んで諦めた眼だ、運命へ投げつける呪詛の眼差しだ。運命は環境が與へる、環境は社會が造るものだとすれば女の呪ひの視線の果は？

「おい金はどうしたんだ」

「無い」

「無い？ 無いのに何故食つたんだ」

「腹が、腹が減つてたんだ」
子供を背負つた男の帶を掴んだ亭主が暖簾の蔭でいきまいてゐる。
「太え野郎だ、食ひ逃げしやうなんて—」
「貸しといとくれ、な頼む、親父さん」
「拂ふ當もねえ奴に一人一人貸してた日にやこつちが干上らあ、交番へ行け、見せしめだ」
　背中で子供が毀れた笛のやうにヒイヒイ泣いた。こんな有觸れた悲劇には無頓着な人々は平氣で食つてゐる。汁が五錢、飯が五錢、俺には金が殘つてゐる、松公は默つて立ち上つた。
「親父、幾らだ」
「えゝとお前さんのは—」
「俺んぢやねえや、その人のだ」
　禿頭をポカンと毆り度いのを松公はやつと我慢してゐた。
「やい親父、この人に高の知れた飯代を貸したらお前が食えなくなるとでも云ふのか、えゝ、人間には情と云ふものがあらあ、それが無い奴あ畜生だぜ、商賣人根性も良い加減にしろ」
「フン、鼻くそ金を拂つたかと思つて威張るない青二才、今の世に金の無え人間一人一人に情をかけた日にや、世界中の金が入らあ、利いた風な事を吐しやがつて笑はせるない」
　松公は男を促して外に出た。
「濟まねえな」
「なあに、貧乏人は相見互だよ」
「お前さんの家もこつちの方かね」
「家なんか無えや、浮浪人さ」
「俺も二年この方失業して女房に養つて貰つてんだ、泊るだけで良かつたら家へ來なよ」
　場末の路次の屈折に沿つて二人の男は歩いて行く。
　港に近い故だらうか、夜毎に降る濃い霧が町を冷く濡らし、朝の町も蒼い霧の匂ひがする、貨物船の絶えず出入する廣い河口の對岸は、工場、工場、工場激しい機械の騒音に息づく工場街だ、油をギラギラ浮した水面で林のやうな煙突の倒影が搖れる、桔梗色の秋空は煙の灰色に蔽れて見えない、風が吹けば黒い吹雪だ、低い家々の屋根を汚す煤煙は又町の人々の肺腑をも菌のやうに浸蝕した。惡い道路だ、砂埃に埋つたレールの上を古風な電車が港へ走る、所々にある原つぱは惡臭を放つ塵埃の山だ、町には目に見えない郷愁がそこはかとなく漂つてゐる、それが遠い殖民地の風景を連想さした。
　カフエ蒼空はこの汚れた町の一隅で汚れた造花のやうな白い顔を持つてゐた、街路樹の葉蔭で蒼い礦石のやうな火が點ると蒼空の女達は盛裝?した衣服の垢を白いエプロンで包んで代る代る入口に立つた。この生きたポスターは腐敗した椿の花瓣のやうな唇を機械

的にほころばして通行の男、男に誘惑を粘い糸のやうに投げ掛けた。尖つたパームの葉蔭では擦れたレコードが流行唄を歌ふ、唄は昨日も今日も夜毎に同じだ。

――知つてしまへばそれ迄よ、知らないうちが――今夜も亦レコードは捨て鉢な明るい調子で喚き出した。

「うるさいね、暫くとめといたらどんなもんだ」

遠近法の無い繪の樣にゴテゴテ塗つた顔を顰めたお君が呶鳴つた

「だつて親父さんに叱られてよ、町に灯が點いたら掛けろつて何時も姦しいぢやないの」

凸凹の多い鏡面が蘭の顔を不具な花に見せる低い鼻をパフで叩いてゐた手を止めて彼女は蓄音機に近づいた。

「蒼空は此處にございつて廣告の心算かも知んないけど、いくら毀れる程ガーガー鳴らしたつて來ないお客は來ないさ、あたしや少し考へ事があるんだからね」

丘陵のやうな胸に二重顋を埋めた彼女の右手で紙卷きが白い灰に變らうとしてゐる。

「蘭ちやん、お前さんこの前の週いくらあつたの」

「私、八十錢よ」

「あたしや一圓廿錢切りよ、お白粉代にもなりやしない」

コックは月給を貰えないので出て行つた。五人居た女給は三人に減りお内儀が危つかしい手付で肉を切り不味い料理を造る店の此の頃だ。昨夜歸らうとした君を捉へて主人は云ふ。

「店もこの向きぢややつてけないし、お前さん達も困るだらう、其處で俺はかう云ふ事を考へたんだがね」

通勤の君を除いたあとの二人が使つてゐる二階の一室を簡單に飾つて客を其處でもてなす、その方の客だつたらどうにか有りさうだ、こんな話だつた。君はヂッと親父の顔を見た、腹が立つた、腹が立つて堪らなかつた。親父の顔ではない、世間が、不景氣が呪しかつた。

「ぢやあんたは私達に淫賣をしろつて云ふんですね」

「まあ早く云へばさうさ、だが別にさうむきになる事あないぢやないか、S通りにある大きなカフエーだつて裏を覗きあ皆やつてんだよ、まともに稼いだつて食つてけねえ世ん中だ、それにお前さんには養はなきあならない亭主と子があるぢやないか」

君は自棄に煙を天井に吹き上げた。場末の煙草屋の二階に寢てばかり居る亭主、夜になつたら眼の見えない子供、店で食ふ晩飯の半分を持つて歸る彼女だ。

「お澄ちやん」

君は入口に向つて呼んだ。

「なんだい姉さん」

蓄音機へ掛けやうとした澄の手を抑えて彼女は二階の話をした。

「それが嫌だと云つて私達やどうすればいゝの、何處へ行つたつて

同じさ、私達や轉つて行く石だ、落ち着く先は泥ん中さ、それでいいよ、どうでもいゝんだよ」

カフェからカフェ、男から男へ、その間に青春を捨てゝ卅に近い澄だ。

「自分では死ねない、殺して呉れる奴があつたらね」

何時も口癖のやうに云ひながら嘆く代りに唄ふ女だ。涙の代りに洪笑する女だ。

「お葬ひに行つた時みたいな顔をしないでさ、唄でも歌はうよ。知つてしまへばそれ迄よか、アハヽヽヽ」

君はふと入口で褪せたオリーブ色のカーテンを抱いた蘭を見た。農村の純眞な娘には都會の男が汚ならしい、汚な過ぎる、安油でべとつく頭を頬に喰つ着けたり、爬虫類の皮膚のやうに濕つた手で身體を撫で廻す。キャフエなんか嫌だと云つて此處へ來た翌日蘭は泣きながら周旋屋へ歸つた。

「蒼空から周旋料以外に十圓と云ふ金がお前さんのものとして出して貰つてあるんだよ、彼處へ行く迄の色々の入費だ、十圓お出し、でなかつたらその金が出來る迄彼處で辛抱するんだよ」

金魚のやうな眼玉を光らした番頭の言葉に蘭はすごく／＼と引返した。白樺の若木のやうな四肢、未だ男の體臭に汚れてない柔く含らんだ胸。

「彼處にも轉んで行く石がある、泥の中へ落ちて行く石が――」

君は白い石の卓にフッと視線を落した。

「いらつしやあい」

客が入つて來た。一粒の粟に集る鳥のやうに女達は卓をぐるつと圍んだ、レコードが唄ひ始めた。

――知つてしまえばそれ迄よ、知らない……―

部屋に入つた君の眼に一番先に映つた者は眠つてゐる若い男だ、汚れた印袢纏の背だ。彼女が口を開く前に起き上つた夫の茂次はおづおづ飯屋の一件を話した。

「この子があまり餓じがつて泣くもんだから仕方が無かつたんだよ、寢るだけだ、な、いゝだらう」

君は默つて寢卷きに着更えると蒲團に潜り込んだ。冷えた足に子供の體温が暖い綿の様に觸れた。君は眠つた子を確りと抱いた。

「お前は不幸な子だよ、生れて來ない方が良かつたんだ、お前にしても私達にしてもね」

君は見も知らない若い浮浪人の寢姿に子の將來を想像した、暗い氣持だ。

「みんな不幸な人間だ、お前は大きくならない内に死んでお呉れ」

「お前泣いてんのか」

夫が聞いた、明日からこの男もこの子も私の身體の肉を生の儘囓るんだ、彼女は涙の中から急に可笑しさが込み上げて來るのを感じ

た、笑つた、聲高く笑つた。笑ふ程悲しみに悲しみが重つた。

「アハ、、。アハ、、、」

「おいどうしたんだ」

「可笑しいぢやないかねえ、世の中の人がよ、食えなくなつたら犬の眞似迄して生きやうなんて――アハ、、、アハ、、」

抉るやうな泣き聲が松公の夢を引き破つた。彼は糸のやうな涙が雫になつて光る唇を、笑ひつゞける女の大きな口を見た。

朝霧の中に街路樹の頭が黒く浮んでゐる、野菜を青々と滿載したトラックが走る、目覺めたばかりの朝の町を松公は歩いてゐた。味噌汁の匂ひがジーンと空つぽの腹に浸み通る。飢えかけた親子三人の姿が飢えかけた彼の背にどつかりと乘つてゐる。

「金さへあつたらなあ」

彼は歩いた、電車が通る、電車は勤人で鈴なりだ、松公は仕事のある人間が羨しかつた。道路工夫が高く振り上げた鶴嘴が朝陽にキラリと光る、彼の腕はムヅムヅ鳴つた。ザクッと力一杯土に打ち込んで――又振り上げて――彼は立ち止まつて工事を眺めた。生活の疲勞と苦痛を泥と一緒に喰つて働く人夫の群を羨しげに見てゐた。何處迄行つても同じだ、この道を、この街路樹の葉蔭を何處迄歩いても秋風があるやうに不景氣がある、飢えた人間の塊りがある。腹が減つて堪らない、それを忘れやうと思つて仰いだ松公の眼に空の蒼色が沁みた。河口の見える原つぱに來た。今日は日曜日なのか、何處かの會社のチームが練習試合をやつてゐる。黄色い草の上に白い選手の姿が點在してゐた。カーン、透明な空氣の中を飛球が黑い直線になつて蒼空を刺した。松公は立ち止まつた、見物人の垣の後には幾つもの自轉車が横たえられてある、周圍をそつと見廻した松公はその一台に手を掛けた。風のやうに走り出した松公の後から無數の叫び聲が追つて來る。

泥棒だ、自轉車泥棒だ!

アッと思ふと松公はハンドルを取り違えた。溝へのめり込んだ車から身體が道路へ鞠のやうに飛んだ、起き上ろうとする所を太い腕がグッと抑えて拳、拳、拳の雨だ。その中から罵る聲。

「交番へ連れて行け」

拳も人聲も意識から消えやうとした時、後頭部を鋲のある靴がガーンと蹴上げた。白い砂埃の中で長くなつた松公を圓に圍んだ群集を押し分けて二人の頑丈な男が出て來た。

「自轉車の損料は俺が拂ふ、持主は誰だね」帶に金鎖のある男は群集を見廻した。

「おいお前、負ぶつてけ」

紺絆を着た男はぐんなりした松公を肩に掛けた。

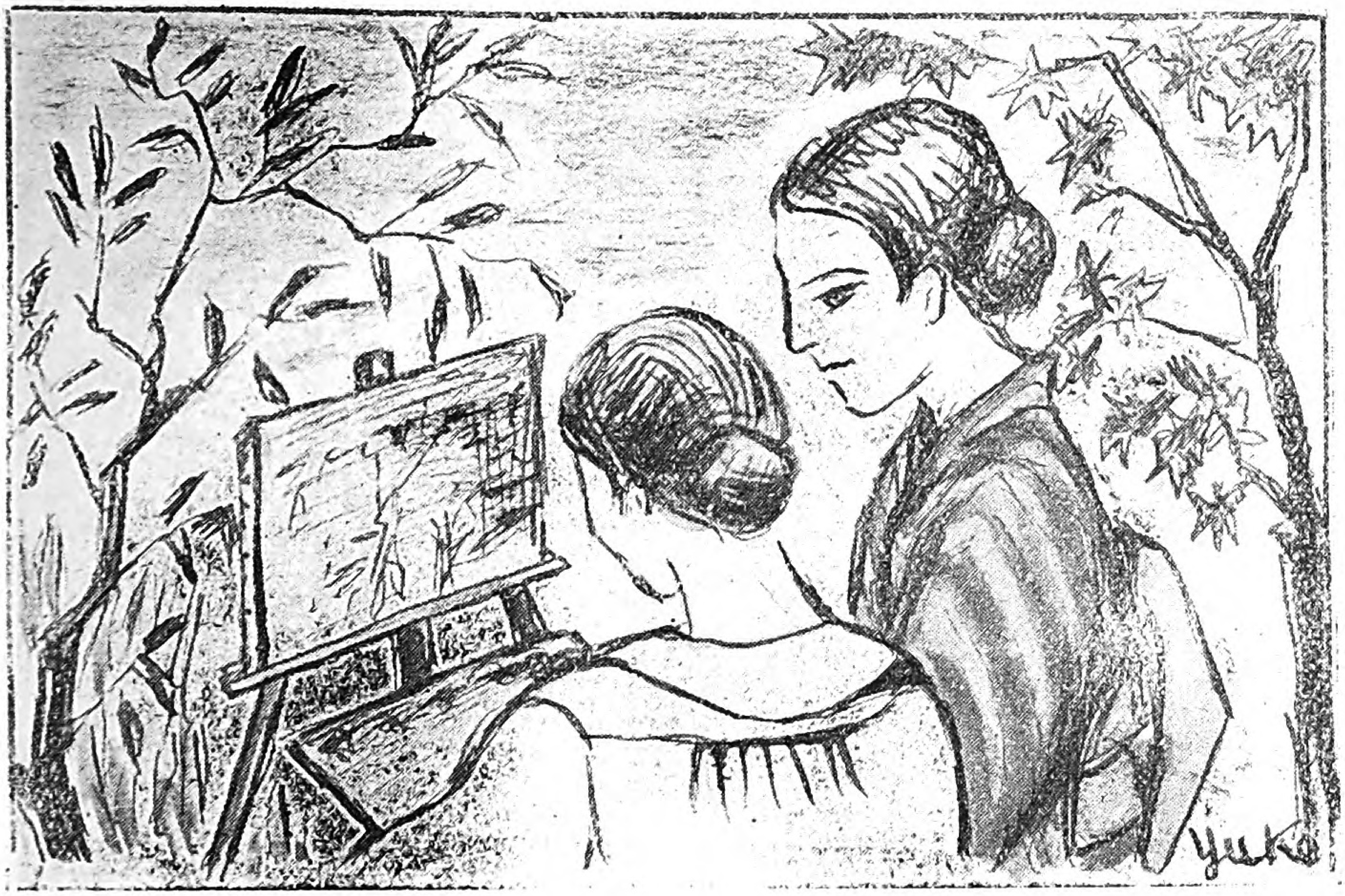
「ありや一體何んだらう」

「昔で云やあ俠客みたいな者だらう」

群集の取沙汰を跡にして男達は去つて行つた。

「おい、若えの、具合はどうだい」
松公が氣が附いた時枕元の男が覗き込んだ、頭も身體も殘つた痛みで變に熱つぽくだるかつた。
「濟みませんが水を一杯」
彼は粘々する唇で云つた。頰から頤へかけて大きな刀創のある男は水差しを傾けながら云つた。
「若いの、おめえさんは運がいゝぜ、その風態で自轉車泥棒をする所を見るとアブれてたんだらう、鐵の草鞋で探したつて見つからねえやうな仕事に有りついたんだからな、運がいゝや、全く」
此處は一體何處だらう、松公は視野に入る部分に注意した、欄間に掛つた金緣の額、枕の下からは新しい青疊の匂ひがした。
「仕事つて一體どんな仕事です」
「ほれストライキの用心棒さ」
「用心棒?」
「此頃よく流行るだらう、賃銀を上げろとか」
「うん賃金を上げろ」
「首を切るなとか」
「ん、首を切るな」
「そんな事を云つて社會主義者に煽られた職工が皆一緖に仕事をサボつて會社と强談判しに來るのを叩き潰すんだ」
「さうだよ、此處の親方に使はれてゐる者あみんなだ。重役の家や會社へ押し寄せる奴を叩き×すんだ」
「××しだね」
「社會主義者なんざ國賊だ、×したつて構ふものか」
馘切り反對、賃金値上げ、それが何故惡い、松公の閉ぢた瞼に磨き粉を賣る三人の男が浮んだ、秋風の中を寒さうに散つて行つた公園の仲間の群れが、朝の紹介所の息づまるやうな人波が――。
「寢るだけだつたら何時でもおいで、私達が此處に居る間はね」
さう云つて呉れたお君さん、子供を背負つて飯屋で倒れた茂次さん、みんな失業してゐるからだ。又彼は知つて居る。彼が働いてゐた染料工場の職工達の豚のやうな生活を――。
「お前程頑丈な身體は賴もしい、確りやつて呉れ」
眞白い繃帶で額を卷いた松公を前にして親分は蜜柑の皮のやうに粗い皮膚を弛せて凄く笑つた。松公は嫌だと云はうと思つた、が二週間の世話になつた恩義と親方の凄い目付が彼を僞らせた。
「助けて戴いた上に色々とお世話になりやして、俺に出來る事ならなんでもします」
荒くれた若者の間に混つて日を送りながら松公は逃げ出す機會を覗つてゐた。
「愈々お前の初陣だぞ、明日からM鐵工所の爭議に雇はれて行くんだ」

子分の言葉に決心した松公は親方に云つた。
「俺にや一人の姉があつて心配してるだらうと思ひます、情深い方に助けられて色々と御世話になつた上身の振方迄ついたつて一走り知らしてやり度えんですが」
親分は應揚にうなづいた。
――××正義團　荒川權三――
こんな看板のかゝつてゐる門を出た松公は長い舌をぺろつと出して停留所へ急いだ。
「幾ら小使を澤山貰はうが嫌だ、俺等の兄弟のやうな勞働者を叩き×すなんて――嫌なこつた」
彼が君の居た煙草屋の門口に立つた時、まるで敵の片割を見つけた時のやうに讀んでゐた新聞を投げ出して親父が飛んで來た。
「やいお前はお君さんの居所を知つてんだらう」
「知らねえ、お君さんがどうかしたんか」
「どうもかうもあるもんか、家賃を半年も貯めた儘ドロンを決めやがつたんだ」
「何處へ行つたんだらう」
「お前ほんとに知らねえな」
「知つてる位なら來やしねえよ」
カフエ蒼空では二階の商賣も思しくなかつた。一番に澄が飛び出した。蘭は彼女の最初の客である中年の男と共に去つて行つた。
汚れた白い扉には臨時休業の貼札が秋風にめくれて朽葉のやうな音を立てゝゐた。その前に立ち止まつてゐる黒い影がある、松公だ。
「お君さん達は何處へ行つた」
彼は歩き出した。歩いてゐる間に彼等の居所が分るやうな氣がした。分らないやうな氣もした。松公が若し二日前の夕刊の三面記事を讀んでゐたら彼は探す事を斷念したに違ひない。
――又もや親子心中、生活苦を悲觀せるものらしく身許不明の親子三人T町の空家で縊死す
――之がお君の行先なのだ。
霧の降る汚れた町、暗い夜空の續く向ふには灯の明るい町がある、勞働者によつて作られた剩餘價値の上に躍る白い踵がある、滿腹した紳士がある。甘美な酒が、豪壯な建物が――併し其處に渦卷くジャズ、それは崩れ行く資本主義社會の挽歌だ、送葬行進曲だ。最後の餘燼で燃えに燃えてゐる社會。その炎の落した灰が失業者だ、無數の失業群だ。
ウワツーウワツー　冷い霧の中を歩く松公の耳に聞える喚聲。
「あれは一體何んだらう」
あれはM鐵工所の職工達のデモだ、灰の中から起る建設への足音だ、進軍だ、鐵鎖を切る爲に鐵鎖のやうに組んだ腕と腕の鳴る音だ
ウワツーウワツー　蒼い街燈の光の中で松公の耳を澄した顏が動かない、大きく見開いた兩眼、組んだ兩腕。霧が降る夜更。



にしき木（一幕）

辻山春子

主人　五十二三歲
主婦　四十七八歲
すさな　廿五歲
千種　廿二歲

秋の或る晴れた日の午後、
洋室　その外に秋の庭、にしき木が數本ある、
庭ですさなが繪を描いてゐる、
千種登場　さつさと室を通り抜け椽とする。

千種（ふと庭のすさなを見る）あら姉さん、繪を描いてるの、
すさな（描きながら）ええ、
千種　何處描いてるの、
すさな　そのにしき木の邊りよ、
千種　にしき木いい色してるのね、
すさな　ええ、今日はことにいい色だわ——多分お天氣のせいよ、

（描き止める、立つて室へ入つて來る）

千種　もう出來たの、

すさな　まだ、でも光線が違つたから今日はもう駄目なの、

千種（空を見上げる）朗らかな空だわ、

すさな　あの空を見てるとてもいい氣持になるわ、あたし今日は頭の中のもだ〳〵してた物が何處へかすつとんじやつたの、

千種　人間なんて天候や何かに隨分支配されるものね、

すさな　ことにあたしなんかその方よ、神經があんまりデリカすぎるのね、

千種　だから姉さんは藝術家なのよ、

すさな　あたしの藝術なんか（笑ふ）

千種　そんな事云ふものじやないわ、春の展覽會以來すつかり新進の女流畫家になりすましたじやないの（笑ふ）

すさな　駄目よ、それよりちいちやんは今日何處へ行つたの、

千種　あたし？さうさう、あたし嬉しい事があるのよ、

すさな　なあに？

千種　姉さん、あてて御覽なさい、

すさな　さあね、——戀人でも出來たんじやない？

千種　あら、いやだわ、あのね、とうとう仕事を見つけちやつたの、

すさな　あらさう、

千種　たつたそれだけ？

すさな　いいえ、あたしも嬉しいわ、本當によかつたのね、一體どんな仕事なの、

千種　あのね、稻田先生の出してらつしやる勞働者農民て雜誌の編輯なのよ、でもそれはサラリーがあんまり出せないんですつて、それで編輯の暇に稻田先生の飜譯をお手傳ひするのよ、そして兩方で四十圓ぼつち（笑ふ）

すさな　じや隨分忙しいのね、

千種　そんなでもないんでせう、雜誌を出した後暫くは暇なんですつて、だからその間に先生のお手傳ひするんでせう、それでねあたしはいよ〳〵此處を出るつもりよ、

すさな　ああ、とうとう出るの、

千種　ええ、實はこんなブルジョア臭い生活をしてるのが今まで氣がさして仕方がなかつたのよ、それにあたしは此の家の雰圍氣が何だかいやなんだもの、

すさな　あたしはちいちやんが仕事を見つけたらさう云ふだらうと思つてたの、

千種　當り前だわ、

すさな　あつさりしてるのね——でもちいちやんはたつた四十圓で食べて行けるつもり、

千種　大丈夫やれるわ、だつてあたし良子さんの下宿に轉がりこむのよ、

すさな　でもやりきれなくなつて又舞ひもどつたり、補助を受けたりするよりも、もう暫く此處に辛抱してゐる方がよかないかしら

千種　姉さんはあたしが又此處に舞ひもどつたり、助けを受けたりするとでも思つてるの、

すさな　でも萬一の事を考へとかなきやどんな苦しい生活が待つてるか分らないでせう、

千種　(笑ふ)そんな事云つてた日には　いつになつたつて出られやしないわ、あたしは姉さんよりずつと澤山みじめな人達の生活を知つてゝよ、

すまな　そりやさうだけど——

千種　これでも大事を取り過ぎて出るのがおくれた位よ、だからもう何も云はないであたしの門出を喜んで頂戴な、

すさな　ええ——そりや喜ぶには喜ぶけれどね——

千種　ああ、あたし嬉しいわ、いよいよこのプチブルインテリの家から解放されるんだもの(テーブルの廻りを一廻り飛廻る)

すさな　ちいちやんは元氣がいいのねえ、

千種　ええ、元氣よ、姉さんももつと進出なさいな、あたし、見ててじれつたいわ、

すさな　さうね、あたしもさうなりたいんだけど——

千種　なつたらいいじやないの、今度作る或る工場の女工さん達の組合の仕事だつて隨分忙しいのよ、手傳つて下さるんだつたら仕事はいくらでもあるわ、あたしと良子さんと高木さんと三人きりなんですもの、

すさな　もしかしたらあたしもその內やり出すか分らないわ、その時は是非手傳はしてもらつてよ、

千種　姉さんは氣が長いのね、

すさな　氣が長いんじやないのよ、とつても氣は短いんだけど——兎に角あたしにはちいちやん程の勇氣と信念がないんだもの、

千種　あるわ、姉さんにはかくれた強いパッションがあるわ、あたしはそれが今は繪に注がれてるんじやないかと思ふの、

すさな　ちいちやんはさう思ふの——あたしの繪なんか唯の逃避に過ぎないのよ、憂欝な氣持のはけ口なんだわ。

千種　さうかしら、

すさな　さうよ、だけどあたしがもし生え拔きのプロレタリアだつたらきつとちいちやんにまけない位のいい鬪士になつてゐると思ふわ、それが生じつかこんなインテリの家に生れたのがいけなかつたのよ、

千種　それは姉さんの逃げ口上だと思ふわ、あたし達階級の正しい進路や使命ははつきり分つてる筈よ、歷史がちやんと敎へてるわ、

すさな　そりやあたしだつて知つてるのよ、あたし達の階級がどうすれば亡び、どう進めば新しい生き方が出來るかつて事はね、そしてもう眼りそれをきめなきやならない危機が近づいてる事もね

千種　近づいてるのではなくもう來てるのよ、

すさな　さうね、さうかも分らないわね。

千種　だから姉さんもさつさときめなきや（笑ふ）支配階級や搾取階級にひつついてて彼等と共に亡びるか、新興階級に飛込んでけわしい道を同志と共に歩くか二つの内の一つだわ、

すさな　だけどね、あたしはちいちやんの云ふ樣にさうはつきりと二つに別れてしまふものぢやないと思ふわ、

千種　あらなぜ？

すさな　だつて——インテリにはどうしても虛無的な暗い氣持があるんだもの、まあいはば世の中つてものは永遠の革命なんだからそんな一時的な事に騷ぐより立派な藝術でも生み出した方がいいつて氣もするし——それにまだ目の前にせまつた事でもないので少しは打算もあるわ、

千種　駄目よ、そんな事、それは多分認識不足か亡びゆく人間の考へ方だわ、だつてこんな不健康な時代にいい藝術なんか出來るものですか、もしそれが姉さんの考へだつたら姉さんはもう過去の時代の人間よ——あたし達若者はどんなけわしい道でも朗らかに歩いて行くだけの元氣がほしいわ、

すさな　ちいちやんの元氣はよく分るけれど今の所あたしにはその元氣がないのよ、でもいつかそんな勇氣が出ないとも限らないわ、

千種　心細い話ね、あたしは姉さんには大いと期待を持つてたのよ

すさな　だけどあたしだつて社會運動に對して大變關心を持つてる事はたしかよ、

千種　でもそれだけじやつまらないわね（話を打切る樣にさつさと窓の方へ歩いて行く）姉さんを逃避させるあんな繪なんか破いちやいたいな、

すさな　破いてもいいわよ、

千種　あら嘘よ嘘よ（朗らかに笑ひながら退場する）

（すさな憂鬱な顏になつて庭に下りる、暫く繪を見てゐる、それからぼつ〳〵片づけ始める、この家の主人杖にすがつて庭に登場、中氣を病んでゐる）

すさな　まあ、お父さんあぶないわ、一人で歩いたりなんか、（急いで父を助ける）

主人　お前は繪を描いてるのだらう、お父さんは一人で大丈夫だよ

すさな　いいえ、いいの、もう光線が駄目になつたんですもの、

（二人室へ入る）

すさな　今日はお加減がよささうですね、

主人　ああ、大層いい樣だから少し歩いてみたのだ、

すさな　お顏の色が大變いいわ、

主人　さうかい——庭の景色がめつきり秋らしくなつた樣だね、

すさな　ええ、とてもいい色ですね、あたし春の飴色の若葉も好きだけど秋の紅色の葉がもつと好きなの、あのにしき木の陽にすき

通つた葉の色なんかとても素的だわ。

主人　お前達の血の色の様だ、

すさな　あたしさつき描きながらちいちやんみたいな感じだと思つたんですよ、

主人　お前だつてさうだよ、

すさな　あら、あたしは違ふわ、あたしはあんなじやないでせう、

主人　さうかね、しかし若い者はあれでいいんだよ、

すさな　さうですわ、だからあたしもちいちやんが羨しいんだけど——

主人　千種はなかなか元氣だね、

すさな　ええ、だけど・・・・

（主婦登場）

主婦　あら、此處にいらしたんですか、

主人　うむ、

主婦　あまり長く起きてらつしちやいけませんよ、

主人　大丈夫だ、

主婦　でも御無理なすつちやあ——

主人　分つてる、

主婦　そりやさうと貴方、昨日の事はもうすさなに御話しなさいましたか、

主人　いやまだ、

主婦　じや丁度いいじやありませんか、今話しませうか、

主人　さうだね、

すさな　何のお話？

主婦　いいお話なの、あててごらん、

すさな　さあ——分んないわ、

主婦　あのね、昨日大塚様の奥さんが、いらしたでせう。

すさな　ええ、

主婦　お前を長田様つて方がほしがつてらつしやるんだつて——

すさな　あら又縁談？

主婦　そんなに云はないでまあ先をお聞きなさい、

すさな　だつて——

主婦　その方はね、外務省に務めてらつして・・・・

すさな　いいのよ、そんなお話、

主婦　いけません、お聞きなさいつたら、

すさな　だつてそんな知りもしない人のお話なんか聞いたつてしようがないわ、

主婦　でもその方は大塚様の親類筋の方で立派に素性は分つてるんですよ、

すさな　だけどあたしは一遍も逢つた事ないわ、

主婦　そんな事當り前ですよ、

すさな　だからそんな逢つた事もない人なんかいやだわ、

主婦　逢つた事がなくつたつてあたし達の信用出來る人のお話ならお前も信じていいでせう。

すさな　だつて――だつてあたしは一度も逢つた事もない人に自分の一生を托する程の勇氣はないわ、

主婦　だからこれからお逢ひしてよく話したらいいじやないの――お母さんなんか結婚前一度もお父さんに逢つた事なんかなかつたんですよ、

主人　もうお止し、

主婦　あらなぜですか、

主人　本人がすゝまなきや仕方がないよ、

主婦　ですけどこんないいお話はもうとてもありませんよ、女の廿五つて云へばおくれた方ですものね、今度のを取逃したらあたし達の氣に入る樣な處はもう一寸駄目ですよ、

主人　しかしお前がさうやいやい云つたつてすさながいやだつて云へば仕方がないさ、

主婦　まあそんな、小さい子供じやあるまいしそんな我儘は通りませんわ、

すさな　ねえお母さん、あたしは結婚したくなつたら正直にさう云ひますからそれまで放つといて下さいな、

主婦　そんな事云つたつて何時の事だか分りやしないでせう、もうそんな我儘はよしておくれ、さうお母さんにばかり氣をもませるものじやないよ、

すさな　だつて――我儘だか知らないけど兎に角あたしはまだとても結婚する氣にはなれませんの、お願ひですからそのお話も斷つて下さいな、

主婦　だけど――じやねえすさな、お母さんに本當の氣持を聞かせておくれ、なぜまだ結婚したくないのかお母さんには得心が行かないんだから、

すさな　なんだつて唯氣が進まないんですもの、

主婦　まだそんな事云つて――ねえ本當の事を云つておくれ、戀人か何かあるならあるでいゝお母さんは決して怒りやしないから：

すさな　あら、お母さん違ふわ、そんな事ないのよ、戀人なんてそんな(笑ふ)

主婦　いいえ、笑ひ事じやないよ、お母さんはどんなに心配してるか分りやしない、

すさな　あら、だつて本當ですもの、

主婦　お母さんは何だか信じられない――お前はもう廿五なんですよ、だのにお話もよく聞かない內から斷るなんて――やつぱりお母さんに何かかくしてるとしか考へられない、

すさな　だつて、そんな事仰言つたつて――お母さんみたいにそんな常識的な見方なすつちや困るわ、幾つになつたつて結婚する氣持にならなきや斷るより外仕方がないじやありませんか、

主婦　だからお母さんだつてこのお話を無理にと云つてるんじやないよ、もしお前に選んだ人があるんだつたら誰でもいいとさへ思つてるんだもの、お母さんはそれ程お前を信じてるんですよ、

主人　それ程すさなを信じてをればさうやいやい云はないで唯じつと見てやつてるだけでいいじやないか、全然放つといてもいい筈だよ、

主婦　まあ、又そんな事仰申つて——

主人　（かまわず續ける）俺は此の頃さう思ふ樣になつた。時代が違ふ樣に思想からほんの細かな神經の先まで若い者と俺達とは違ふんだ、だから生じつかな關渉をするより全然放つといた方がいいと思ふ、さうすれば若い者は自分の行きたい方へさつさと行くだらう。

主婦　ですけどさう突き放してしまつては——

主人　それでいいんだ——俺は此の頃になつてあのAといふ文學者が三人の子供を殘して死ぬ事の出來た氣持が少しは分つた樣な氣がする。

主婦　まあ、そんな事仰申つて——大切な子供を放つといて死ぬなんてどうしてもあたしには分りませんわ、じや貴方はそれが子供にちつとも不幸ではないと仰申るんですか、

主人　不幸とか幸福とかそんな大まかな言葉じやあ…

主婦　（強く）いいえ不幸ですとも、不幸ですわ、子供は幾つになつても親が必要なんです、あたしはさう信じます。

主人　人間てものはどんな鎖でつないでも、どんな箱に入れても心だけは延びる樣にのびるんだからな、——時代の思潮だつてどんな高い塀を築いたつてさつさと洗ひ流して行くんだ。

主婦　でもあたしは何も子供を鎖で繋いだり箱に入れたりなんかしてはゐませんよ、

主人　（舌打ち）例へだよ、

主婦　ですけど——

主人　まあいいさ、お前とそんな議論したつて初まらない、兎に角すさなの氣持はお前には分らないんだからする樣にさせとけばいいんだ、

主婦　そんな事仰申つたつてそれぢや親としての役目が濟ませんよ

主人　——

主婦　貴方はあんまり投げやりすぎますわ——だから此の頃は千種までがあんな人間になつてしまつたんです。

主人　——

主婦　そりやあたしだつて決してマルクス主義が悪いとは云ひませんわ、でもあたし達は勞働者じやないんですからそんなにまでしなくつたつて、唯理解と同情とを持つてをればいいと思ひます、あたし達がどうあせつたつて…

主人　お前にはマルキシズムがどんな物かまだ分つてはゐないんだ

生囓りな批評は止すがいい——要するにそんな事は信念の問題だからお前がどう云つたつて仕方がないんだ、

主婦　まあ、それぢや貴方は千種が主義者になつて檢束されたり、刑務所に入つたりする樣な事になつてもいいと仰申るんですか、

主人　しかし思想的な問題でお前がどう關渉したつて子供達は聞きやしないよ、お前はまあじつと見てやつてればいいんだ。

主婦　じや子供達がどんな事をしても放つておくんですか、いいえ、いけません、そんな事が出來るものですか、あたしは危なくつて見てをれません、

主人　——

主婦　貴方はあたしが子供の事に口を入れると直ぐにさう仰申るんですもの、餘りですわ、

主人　もういい、

主婦　母親が子供の事を心配するのは當り前じやありませんか、馬鹿は馬鹿なりに一生懸命心配してるんですもの、だのに二言目にはお前には分らない、放つておけと仰申る、だけどあたしがどうして放つておけるものですか、

主人　(舌打ち)止せつたら、

主婦　いいえ、あたし今日は云はせていたゞきます、

主人　(劇しく)馬鹿、お前が止さなきや俺が出て行くだけだ(いらだゝしげに立つて歩かうとする)

主婦　まあ、

すさな　あらお父さん、危いわ(立つて助ける)

主婦　そんなにお怒りにならなくつたつて——じやもう申上げませんわ(ハンカチを顔にあて急に出て行く)

主人　(ほつと溜息して又椅子にかける、舌打ち)困つた奴だ、

すさな　お父さんこそどうなすつたの、

主人　驚いたかい、

すさな　いつものお父さんらしくもないわお怒りなすつたりなんか

主人　なあに、あんまり分らない事を云ふのでね(笑ふ)

すさな　でもお母さんの氣持はあたしよく分るわ、

主人　そりやお父さんにだつて分りすぎる程分るけれどね、

すさな　唯あんまり常識的なのであたしはとても——有難いとは思ふんですけれど、

主人　(はき出す樣に)俗だよ、聞いてゐると虫酸が走る、

すさな　まあ、そんなに仰申つたつて(笑ふ)

主人　しかしあれでも世間並より分つた方ださうだからね(笑ふ)

すさな　さうですとも、

主人　そりやさうとお前は全然結婚を否定してるんじやないだらうね、

すさな　ええ、勿論ですわ、

主人　それさえ分つてればいい、

すさな　結婚したくなつたらあたしは自分で見つけるの（笑ふ）

主人――お前も千種の樣にもつと出歩く方がいいよ、

すさな　ええ、

主人　貴家のグループに少しは近づきがあるかい、

すさな　少しはありますわ、

主人　そりやあいい――描く事も大切だけれどまあもつと元氣に出歩くんだね、

すさな　さうですね、

主人　何かはつきりした自分の物を持つてゐなきやならないが、人の繪を見たり考へを聞いたりするのもいい事だよ、

すさな　ええ、

（主婦あわたゞしく登場）

主婦　あなた、千種だ、千種が（泣き出す）

主人　どうしたのだ、

主婦　家を出るんだつて荷物をまとめてますの、

主人　――（表情）

主婦　とうとうこんな事になつてしまつて

主人　――さうか――（溜息）

主婦　貴方がいけないんですわ、あの子がそんな人間になつたのはみんな・・・・

主人　止せ、

主婦　あ、あたし、どうしたらいいか（泣く）さうするだらうと思つてゐた。

すさな　ちいちやんはさつき云つてましたわ、いよいよ仕事を見つけたから此處を出るんだつて――

主人　さうか――なる樣になつたんだ、

主婦　又そんな事を、こんな、こんな時になつてもまだそんな事を仰申るんですか、

主人　しかし――これが當り前なんだ、

主婦　貴方は、貴方は何といふ方ですの、親らしい氣持なんかちつともないんですか、

主人　馬鹿、

主婦　（テーブルに泣き伏す）どうして、どうしてあたしの子供は、皆、こんななんだらう（きれ〴〵に云ふ）

主人　お嫁にやつたと思へばいいじやないか、どうせ子供は親を放れて行くのが本當なんだ、

主婦　いやです、いやです、

主人　兎に角出て行くにしても色々注意しとかなきやならない、お前、手をかしておくれ、

主婦――（無言で立つて主人を助ける）（二人退場）

すさな　（溜息）――さて、あたしはどうすればいいんだらう――

幕



踏みにぢられたもの（みちづれ）

V・マルグリット作
望月百合子譯

第三章

三

　頼りない苛立たしさの中で、ポオルは自分の無氣力さから受け容れてしまつた隷從の嫌惡から、近づいたロヂエの歸國と共に解放されることを思 と、激しい自由の希望に動搖してゐた。日本からの懷しい便りの外は避難所もない彼女は、まだマルチネの卑しい慾情の襲撃を受けなければならなかつた。夫は彼女から金を取られる心配のない快樂を無暗に樂しむのだつた――『惡かつたのかい？』――…そして、彼女はへと〳〵になつてしまつて、この硬い毛と、褐色の皮膚を持つた脂肪の塊を見ることも出來なくなるのだつた。

　ポオルは自分の寢室で、ヂイの寢臺の傍にアニックと腰かけて、最近の苦痛を訴えてゐた。その時不意に玄關の扉が荒々しく鳴つた彼女は重々しい跫音を聞きつけて震えた。

『あのひとだ…』

　マルチネはぶつ〳〵言ひ乍ら入つて來た。

『俺を待つてはゐなかつたのかね？』

　ポオルは口の中で呟いた。

『いいえ、貴方がさう仰有つたもんですから…だから…アニックを招んだところです』

『それはそれは女辯護士樣！ ようこそ…全くの名譽で…』

　彼は呼鈴を押した。たつた一人で何んでもする女中の、フイヌが――（十分の收入があるのに、このブローカーはポオルには一人の女中で澤山だと考へたのだ）――受胎しない牝馬風の骨張つた長い顏を出した。

『俺のために食事の仕度をもう一人分！ 大急ぎで！』

　彼はポタアジュに一杯の葡萄酒を注いで――『貴女方は嫌いでせうな！』と言ひ乍ら――飲み込んでしまふと、どうしてプログラム

を變更したか、同時にまたどうして不機嫌だかを說明し始めた。
『あゝ！　畜生！今夜俺がこゝへ歸つて來たことが、お邪魔かね？あんた達の小さなもくろみが外れるかね？……』

彼は蒸肉の大きな片を切り、皿一杯の野菜を取つて、大皿を次へ廻した。

『俺は今日、運が惡かつたんだ！　第一、小さな眞珠を一つ失くしてしまつたんだ。その眞珠はボンヌ、ヌウヴエル街の寶石商が四千法の値をつけたものだ…四千法の損失さ！　而もその上、明日は約束の四百法を支拂はなければならないんだ…それからレルモがレストオランに俺を招ぶといふので、六時に奴んとこへ迎ひに行くと…寢てゐるつて始末さ！　腫物でね！…そこで、俺や、ひとつボオルをびつくりさせてやらう、と思つたのさ。外にゐるより、家に歸つて飯を食はう…その方がいいし、一文の金もかゝらないからとな』

彼はそのレルモといふ人物が、實はベルタ孃であることを言ひ足すことはしなかつた。彼女は大變な頭痛のために額に鎭痛濕布をのせ乍ら床に就いてゐた。そして灯を一つ殘らず消してしまつて、頑として彼を追ひ返したのであつた。

彼は明日の支拂に困つて額を掻いた。眞珠の穴と四百法の穴埋めだ…月の豫算から？　不十分だ…ボオルはいつでも足りないといつてこぼしてゐる。銀行から自分の預金を引出すか？　貪慾な彼はこの假定にはまゐつた。併し丁度折よく、妻が前日、未拂ひになつてゐた何處かの音樂會のマチネエの出演料五百法を受取つたではないか？…これを彼は欲しいのだ！　この金が一切を片づけるのだ。

彼はフイヌが運び去らうとしたヴアニイルのクレエムの皿をとり返して、妾の分まで先取りするかと思ひの外、それを二人の女達の方に恭々しく差出した。ボオルはびつくりして彼を見た。どうしたといふんだらう？…

彼はボオルとアニックの手に渡つた皿を惜しさうに見まもつてゐたが、いまそれを再び手にして、さも滿足氣に一氣に自分の皿にぶちまけて、その皿一杯いかにも美味さうに舐めた。

『このクレエムは素敵だ。だがフイヌにそんなことを言つてはいけないぞ。彼奴は可成り厄介な奴だからな！　あの大きな痩せ馬奴は自分がなくてはならない人間のやうに己惚れるだらうからな？　近いうちに、もつと感じのいい奴を見つけ次第、おつ放り出してやらう』

『あれは迚もデイを可愛がりますよ。そしてほんとによくお守りをするんですよ！』

『そんなことは召使の仕事ぢやないよ。そのためにや母親つてものがあるんだ…若しお前が始終アルプを彈いたり――笛を吹いたりばかりしてゐなければ…』

ボオルは視線を天井に向けた。アニックは輕蔑的に、指先で食卓掛の上を輕く叩き始めた。彼はやり損つたと考へついた。酢で鯔はとれないからな…

『おゝ！　勿論、お前は自由だよ。それはお前の妹から可成り度々聞かされてゐるからな。女の權利つて奴をね…そしてやがては女の公民權か！…俺はその點反對しないよ。そしてお前が職業を持つてゐるつてことを認めるよ…お前が仕事をするのは尤もだよ。金になるんだからな！』

彼はまた額を搔いた。それは何か屈托がある時必らずする彼の癖だ。ポオルは震えた。彼はナフキンを畳んで、矢車草の花を刺繡した帶封の中に入れた。そして不意に攻擊の口火を切つた。

『若しお前　やさしいならお前はどうすると思ふかね？　明日の約束のその四百法を俺に吳れるんだ…』

『だつて…』

『お前にはそれが出來る。お前は五百法受とつたばかりだ』

『でもそれは…』

彼女は不意打を食つて躊躇つた。彼はいつものやうに納得したものと思つた。そしてアニックとポオルが食卓を離れたので、彼も立ち上つて、親しげに妻の肩に手をかけた。その時、フイヌはサロンの硝子戸を荒々しく引開けた。

『フイヌ、フイヌの奴（上等の）を持つて來てくれ…』と命じた。

そして彼はこの、彼が調子づいてゐる晩は必らず言ふ冗談を裏書するやうに爆笑した。ポオルはルイ十六世式の肱掛椅子――金泥を塗り、型に相應した絹を張り、デュファエルのサインがある――に小さくなつて跼くまつた。その椅子は夫の眼にはブルジョア的優雅と僭越との標しの如く映るものであつた。

アニックは脚臺を引き寄せて、姉の足下に坐つて彼女の脚をかくした。そして自分の體を防禦のやうに傾けて、彼女を庇つた。

マルチネは、檻の中の熊のやうにふら〱する足で、部屋の中を歩きまはつた。フイヌが瓶と小さなグラスを載せた盆を、曳出し卓子の上に持つて來ておくと、彼は自分のコップに滿々と注いだ。

『縁より高く注ぐべからずか！』

そして再び栓を捩ぢ込むやうに深くしながら、エチッケットの上に爪でリカアルの水面の高さを標しづけた。

『かうしておけば安心だ！』と彼は嘲笑ふやうに言つた。

ポオルは肩をすぼめて言つた。

『フイヌは決して飲みませんよ』

『彼奴はさう云ふさ！…だが肉屋の小僧だつて、乾物屋だつて……女共が何をするか分るもんか』

『その女達のためにありがたう！』アニックが言つた。

彼はこの嘲弄を輕蔑した。言ひ爭ふ、いまはそんな時ではない。まづ四百法だ…彼は一息にアルコールの杯を飲み干した、さも滿足げに舌を鳴らした。彼はそれですつかり滿腹だ。その上馴れたパイプがありさへすれば…彼はそれをマリイランドの包みと一緒にポケットからつまみ出した。同時に禁止品の發火器をもとり出した。それは彼の自慢の品だ。…ポオルは勿論煙を好まない。併しそんなこと位で、控える彼だらうか？　彼は火をつけたタバコをいかにも氣持よささうに吸ひ込んで、眼を半ば閉ぢて、濃い煙を吐き出した。さて！これでよし…彼は肱掛椅子の前に立ち塞がつた、

『ぢや、お前、いいか、俺にもその四百法をくれるだらうな、え？お前のためにまだ百法殘つてるんだから』

ポオルはアニックがゐるので強くなつて、勇氣を集めて、はつきりと言つた。

『駄目です。もうその金は費つてしまひましたから』

『何んだつて？』

『その金を貴方に上げたいとたとへ思つた處で、もう私にはさう出來ないんです』

彼女は、もう怒り出してゐる彼の驚ろきには頓着なく、決然とし

た冷たさと、彼の汚なく馴れ〲しい言葉に對して、空々しく叮嚀な言葉を向けた……

『お前は……俺に斷りなしで……それを費つてしまつたのか……』

『さうです』

　彼はあまりのことに息づまる程怒つて途切れ〲に言つた。

『で……どうして費つてしまつたんだ？』

『ずつと前から延び〲になつてゐた仕立屋への拂ひです……家の費用のために貴方が私にお渡しになる金で、着物を買ふんぢやありませんからね……音樂會のための一枚のロオブだつて千五百法以上かゝりますよ……貴方もそれは御存知の通りです！』

　彼もそれは知つてゐた。併し彼はまた、自分が家長であり、主人であるといふことも知つてゐた。自分の妻に屬する金を自由にすることの出來る主人であり、妻を欺すことの出來る主人だ。彼女は彼の物品であり、財産なのだ。彼は叫び出した。

『そんなことがよくも出來たな！……奧樣は大勢の餘でなしの前でオツに澄まして見せるために千五百法のロオブを背中にくつつけてゐる！……そして旦那は、いつでも、商社の借金を返へす爲に汗水たらす！……アルプも貴樣の露はな腕もへし折つてしまふぞ！』

　當てが外れた口惜しさに怒りが混り合つた。その金は、まだ受とつたばかりだと思つてゐたのに、併しそれよりも一層彼を怒らせたのは、彼女の冷然とした返答であり、平氣さであつた。彼は同じ憎惡の眼で妻とその妹をにらみつけた。ポオルが考へてゐるこの氣紛れも、支配され難い地位を築くと同時に、次第に收入は多くなつて行くこの職業も、その一部の責任はアニツクにあるのだ。彼は——希望をひつこめて——この二人の雌共が覺えてゐるやうな怒りを爆發させる好機會だと思つた。……

『靜かにしろ、靜かにしろ！』

　二人は立ち上つた。ポオルは彼の怒りを輕蔑してアニツクの手を執つた。さうして彼女は一層心强く思ふのだつた。

『若し貴方がこのまゝ長つゞきがするとお考へになるなら……第一これからは、計算をしませう！　貴方に一切をお渡してゐた私は間違つてたんです。帳面を造つて、毎日一切を書き込みませう？　會計です。私が家計に入れる額、貴方の收入一切を、そして支出も……五百法を取り上げるなんてあんまり都合がよすぎます！　それから、我まゝ勝手は、もうおしまひです。あんまり濫用なさるから！　いまに貴方は私の言ふ通りになさるでせう。個人教授のだつて何んだつてとり上げてしまふなんて……そんなことをすれば私がいやでも隱さなければならなくなるんですもの！……』

　彼は勝利者のやうに哄笑した。

『それや、女辯護士樣がお前に話して下さるだらうよ。それが俺の權利だつてな！　それが法律だ！……肩をすぼめるがいいよ……そんなことをしたつて何んにもなりはしないから。お前は紐でくゝられて、封印されてゐるんだぞ！……』

『でも、ポオルは貴方の許可がなくても、自分の月給を受取る權利はあるんですよ……』とアニツクが言つた。

『イエス！　だがそれを下らないもののために浪費することは出來ないんだ。家庭といふものは、丁度船のやうなものだ。そこには一人の指導者がゐる。それは船長だ。そしてその船長といふのは、それはこのわつちでさあね……』

『約束が解かれるまではね』とアニツクが言つた。

『フュ…ウウ！』マルチネは口笛を吹いた。

『失禮、御免、法學博士様だ！　貴女は多分離緣のことを仰有りたいのでせうな…有りがてい…大いに話さう！　俺には計略が分るぞ。離緣するには、結婚と同様に二人が『賛成…』と言はなければならないんだ。その時こそ別れることが出來るんだ。若し一人が『否』と言へば、やつぱり結ばれたまゝさ！　自由になる道は一つもない！…さもなければ理由がなければならない…そして裁判官が相當だと思はなければならない…ハハハ！　俺は俺の奥さんがそんな理由を俺にくつつけるとは思はない。それに此女は調子に乘つてゐるんだ！…まあ見てゐろ…ともかく辯護人なんかなくていいんだ。よく分りさへすればいいんだ！　ポオルは迚々その點分りがいいんだ。だから貴女がポオルを靜かにしといてくれゝば俺は助かるんだ。そして以後は決して此處へ來てくれないやうに、これでおさらばだ』

　アニックは傲然と立ち上つた。マルチネが扉を指さした。

『貴方の代議士さんの處へ行つて、いくらでも好きなだけ法律のことをお話しなさい！　だがこゝでは（彼は曳出卓子をどんと叩いた）——服從だ！』

　彼は『生命短かし怒つちやならぬ、俺は怒らぬ、俺は怒らぬ！……』と鼻唄を誦み乍ら部屋中をぐるぐる廻つてゐたが、やがて意氣揚々と出て行つた。

『汚はしい男だ！』アニックは憤慨して嘆息を洩らした。

　服從！…服從！…いいにしろ、惡いにしろ、彼等の口にはその言葉しかないのか！…結婚の合言葉で、奴隷を、情容赦もなく地獄に閉め込んでしまふ言葉だ…彼女は神經的にすゝり泣いてゐるポオルを抱きしめた。激動に震へ乍ら彼女は言つた。…

『私も貴女と一緒に出て行きます。ヂイヌをつれて行きませう！』

…

『お願ひだからそんなことを言はないで、もう暫く我まんしてゐて頂戴。來週はロヂエが歸つて來るだらうから。あんなに待つてゐたロヂエが！…今日のことがどんなに辛らかつたにしても、それも多分無駄ではなかつたでせう…どうしてもつと早く離婚の考へがつかなかつたんだらう？…勇氣を出して、こゝでなくつたつて私達は逢えるんだもの。明日、何時でも貴女の都合のいい時、ラスパイユ街へいらつしやい。分つて？』

『えゝ分つたわ！』

　二人はしつかりと抱き合つた。

四

　妹を送り出して、扉を締めるや否や、彼女はマルチネを見つけた。彼は應接間の入口で彼女を待つてゐた。

『私はもう寢みます』と彼女は言つた。

『こゝにおいで』

　彼はもぢもぢして、指を綟ぢつた。彼は怒つたことを後悔してゐた。だがあの様に振まつたアニックには我まんがならない！　ポオルとなら、話が分るのだ…彼女はきつとまだいくらかの金を持つてゐるに違ひない。彼はおとなしく出た。

『俺を怨んぢやいけないよ。俺はいい人間なんだ。お前の妹が邪魔をしにさへ來なかつたら…ねえお前、その眞珠を失つたことが一切の原因なんだ。俺は明日の朝の拂ひにお前を當てにしていいと思

つてたんだ…それに、その四百法は後でお前に返へすよ』
彼女は呆れて彼の顔を見つめた。分らないのか知ら！　悪意か知ら！　併し彼女は再び口論を始めてはならないと思つて、苦笑しながら逃れようとした。彼は彼女の手首を捉えて押えつけ、無理矢理に腰かけさせた。彼女は涙を拭ひ、體をしやんとして待つた…

『お前は泣いてゐるのか？　何も泣く必要はないぢやないか。全く泉のやうだ！　いや、それよりもだ！…まるで俺が虐待でもしてゐるかのやうだ！　しつかりしろよ。涙を干さなけれやいけない』

彼は彼女の俯向いた顔を上げようと思つた。併しポオルは抵抗して言つた。

『放つといて下さい！』

それでも彼は獲物を放さうとはしないで、却つて彼女の肩に一方の手をかけ、もう一方の手で無理にも彼女の顔を上げさせた。その眼は熱にキラ／＼輝やいてゐた。頰は燃えるやうで、その上に眞珠をつられた涙の條が走つてゐた…奇妙な感情が彼を搖すぶつた。彼は彼女の苦惱に感動したのではなかつた。寧ろ哀れな女が苦しむのを見て、愉快をさへ覺えるのであつた。彼はかうした彼女に煽情的な、新らしい表情を感じたのでつた。

彼女は激しく身を退いた。

『放して下さい、何をなさるんです！』

一切を出來るだけ我慢して來た弱い人々が、思ひもかけぬ時に、不意に怒り出してしまふ、あの怒りを以つて、彼女は不意に、一分間に一年の計劃と、陰忍とを失つてしまふことも考へずに叫び出した。

『貴方はアニックが私の頭を變にしたんだと考へてゐらつしやる……それは貴方です。私がもう長いこと貴方に對して、愛情はおろか、感謝の心をさへ持たなくなつたのは、只貴方自身が原因なんです…愛情だつて、私が貴方の妻になる早々から私に對して亂暴をなさらなかつたら、少しでも私をやさしさで包んで下さつてゐれば、私だつて持つてゐたでせう。それだのに私は最初の晩から、貴方の要求の捌け口としてしか用はれなかつたんです。貴方は四年間といふもの毎日私を、召使としてしか使ひなさらなかつたんです。——女中頭としてしか！…その隷從だつて愛してゐる人とならば何んでもないでせうが…（なつかしい遙かな顔が、この憎らしい男の顔を透して現はれた。彼女は兩手を捩つた。）…あゝ！　愛！……愛と貴方？　貴方の亂暴さ…貴方の低級さ…貴方の貪慾さ！…貴方のお腹の中には、お金に對するたつた一つの愛しかないんです』

『一文の金もないお前と結婚した俺が！』

『今では私だつて貴方と同じだけの收入があります。私は貴方がどれだけ秘密にお儲けになり、外でどれだけお費ひになるか知りません。けれども貴方の二十法に對して私も二十法出します、そして私の收入の全部を…若しさうでもしなかつたら、もうとつくの昔に貴方は私におすゝめなさつたでせう——貴方の御親切な表現に依れば！——アルプも笛も他へ行つてやれと…安心して下さい！　終ひにはさうなりませうから』

彼女は疲れて默つた。彼はおじぎをして言つた。

『御勝手にだ。扉は開かれてゐるよ。碌でなしの母親なんぞ無理にもゐてくれと留めはしないよ。行け。チネットは俺が育てらあ。今の中に言つておくが、フイヌも連れて行け！　二人の口が減れば

全く儲けものだ。』

彼女はこの嘲罵の形で、彼が思ふ通りを言つたのだと感じた。……ヂイをつれずに出て行く！…それを思つただけでも血が凍りついた、不意に首枷の鐵鎖が彼女を締めつけた。彼女の激昂は鎮つた。彼女は力なく、聲もなかつた…

『こんどは俺が、そんな恩知らずにや返事をしてやらねえぞ。若しかりに俺がお前のお氣に召さなかつたにしろ、世間樣ぢや俺の方が正しいと思つて下さるつてことを考へてみろ…お前だつて、まんざらでもなかつただらうぢやねえか！ その證據にやヂネットがゐる…愛と俺と、全く一致だよ。まあきいてもみるがいい…』

『リイズ、ベルタにですか？』

眞赤になつて怒り出す——彼がさうなればいいと思つた（何故なら、この辛らい爭論で、彼女を力づけてゐる唯一の勇氣は、いまは、トンネルの奥の小さな光明、即ち、ちらと頭を掠めた離婚と、ヂイを救ひ出すことでしかないからだ）——と思ひの他、彼は滿足に慢心した。

『彼奴は俺を愛してゐるよ。眞正正銘だ！…彼奴は——お前をびつくりさせるだらうが、事實だからな！——俺と結婚することしか空想しない程なんだ！…まあ見てゐろ、見てゐろ』

それからまた考へ直して言つた。

『だが一寸待て。どうしてまた、お前は彼奴の名前を知つたんだ？ 全くおかしいぞ！…誰が一體そんなことをお前に敎えたんだ？ 言つて見ろ！』

彼女は威脅する拳が迫つてゐるのを見た。ともかくも、すつかり話してしまつた方がいい。若しその結果がうまくないにしてもそれは仕方がない…彼女は息も絶え〴〵だつたけれども、心を引きしめて、あらゆる智力を目標へ向けて集めた。

『貴方のポケットから落ちた手紙を、またそこに入れる前に私が讀んだんです』

『何日？』

『六ケ月前』

『で、それをお前は平氣で一人で今迄覺えてゐたのかい？ 思ふにそれはさ程お前の心を動かさなかつたんだな！…注意は感謝するよ！…ぢや、俺はお前にとつて、たつたそれだけのものなんだな？…』

彼女は彼を拒んだ。

『こいつあ、おかしいぞ！』と彼はある疑ひを以て彼女を見つめ乍ら呟やいた。

これまで彼は、彼女が何んと言つても、肉體的には彼を尊重してゐると確信してゐた。それだのに思ひがけなくも夫の確信を侵されて、彼は一つの疑惑に囚えられた。彼女がこれ程斷乎として彼等の協同と、彼の伴侶者たることを拒絶するには、何かそこに變つたことがなければならない。何んだらう？ 秘密かな？ どんな？…第一に、うんと懲らしめるためにそれを知らなければならない。またそれを利用するために。

彼はお人好しらしく言つた。

『さあそれぢや、何んとかうまく話をしようぢやないか。お前は俺に未練を殘さないと思ふが…それや俺が悪いからさ。少くとも、別れ話がかうして持ち出されたが、若し別れるにしても、お互に憎みつこなしで別れられさうなもんだ。いまゝで伴侶者だつたんだか

らこれからも友達でゐられる筈だ…繰返して言ふが、俺は亂暴者だが心の中は惡かないんだよ…お前は離縁を望んでゐるだらう？　さうしてやらう…ヂネットはどうする？…お前があいつを育てるつていふなら…そして俺がいつでもあいつに會へるなら…どうだ？　なあ、俺や話が分るだらう。只條道を立てゝ話しさへすれやいいんだ。…だがそれだけぢやねえぞ！　行く先がどうなるか分らないのに、喜んで、庇護所を捨てはしないもんだ！　家庭をおつぽり出して行つても妹と一緒に住むのでもあるまい…えゝ！　何處に行くつもりだね？』

『私、まだそんなことまで考へなかつたんです。でもきつとアニックが…』

『まさかあのひとの事務小舍にや、お前とヂネットは住めまい。なあおい、可愛い奴…昔はよくお前をかう呼んだものだが…少しや俺を信じろよ！…ともかく、俺やお前を引き止めておくことを知らなかつたんだから、全く馬鹿だつたよ…だからかうなつたつて當然さ！…だが、假りに俺がいい亭主でなかつたとしても、これからは俺程いい友達はお前にはなからうぜ…俺を信用しろよ。そして話して御覽…そして若しお前が誰か他の男を愛してゐるといふなら、いいか！　お前を自由にしてやるぞ』

　自由！　ロヂエは歸途にある…彼女は蜃氣樓に眼がくらんだ。海が輝やかしく擴がつた…未來が開けた。彼女は夫の微笑してゐる父のやうな温情の中に、約束の輝やきしか見なかつた。そして、卒直に彼女は告白した。えゝ！　彼女は他の男を愛してゐた。彼がリイズ、ベルタに對して愛情を持つてゐると同樣に、彼女も彼よりも若い男に心を奪はれてゐる…その男は親切や、優しさで彼女を包んだ…彼は次第に彼女を征服することを知つてゐたのだ。彼は六ケ月前に巴里を去つた…日本への、事業上の長い旅のために、そしていま歸らうとしてゐる。彼女は一生懸命に告白してゐたのとそのために氣も輕々となつたのとで、相手の顏にその打ち明け話から生じた反感の色が現はれたのも氣がつかなかつた。彼女は何の氣もなくに、訊かれるまゝに答へた…金持ちか？…いいえ、けれど生活には十分な收入がある…彼の名は？　彼女がその名を言ふか言はないうちに、彼女は思はず叫んだ。

　夫は彼女をめつたやたらに撲りつけた。彼女は拳の雨の下で呻つた。彼は彼女の咽喉を摑んで、絞り殺すまでに締めつけた。彼は彼女の眼がひきつり、顏が赤くなるのを見た…そこで咽喉を離して言つた。

『ばいた奴！　死ねると思ふな。自由だつて！　いやなこつた！……だが拳固でも喰へ。ここに幽閉だ。あんな碌でなしの妹と出歩く奴のためにや、丁度いい懲らしめだ。彼奴に會ふことは禁止だ…分つたか？　貴樣あもうヂネットを育てる價値もねえ奴だ…明日になつたらさつそく乳母を探すのだ。田舍に、その方がずつとあの子のためにやいい。彼奴あ、いい空氣の中で育つだらうよ！…そして貴樣あ！　貴樣あ！　外へ音樂をやりにゆく代りに——若しよかつたら此處でやれ…だがアルプなしにだぞ…そして誰にも、フイヌにさへも聞えないやうにな…それに、フイヌはお拂ひ箱だ！　あんな奴あもう澤山だ…彼奴とヂイが行つてしまへば貴樣あ、づゝと落ついて俺の靴下が繕へるぞ…』

　彼女は叫び出した。

『いえ！　いえ！　私の娘を取り上げることは出來ません。貴方に

そんな權利はありません！…』

『權利だつて？　權利だつて！…女辯護士に聞いて見ろ。ヂイは俺の子か、子ぢやねえか？　父親は一切の權利を持つてゐるんだぞ』

『ヂイは貴方の子供ぢやありません』

『何んだつて？』

『ヂイは…』

　狂人のやうに、マルチネは子供が眠むつてゐる部屋の方へ飛んで行つた。ポオルは言ひかけたまゝ彼を引きとめようとして追ひかけた。併し、彼はまつ先きに搖籃の傍にかけつけた。…彼は、この騷動も知らずに、薔薇色の頰をして、規則正しい呼吸をしながら眠りつゞけてゐる幼子に掴みかゝらうとした。

　その時ポオルが追ひついて、彼の手に噛みついた。マルチネは血をみて、目標を變へて、敵の顏と言はず、胸と言はず處かまはず怒りを打ちつけた。ポオルはくら／＼して、一方の眼は腫れ上らせて寢臺の上に倒れた。彼女は半ば意識を失つて、兩脚をぶら／＼させたなり倒れてしまつたのだ。亂鬪のためにロオブはまくれ上り、薄い暗茶色の靴下に輝やくふくらはぎを露はにしてゐた。そして、圓い膝こぶしの上部には白襦子のやうな××がのぞいてゐる…

　彼は抑え難い××××××飛びついた。この暴行の間に、戀するポオルの姿態や、情人の侮辱された幻やが漠然と彼の頭腦を掠めた。それは單に、さつき彼が、彼女の涙顏を見て感じた變態性慾的衝動ばかりではなくて、その上更らに苦惱の中に新らしい魅力が感じられたのだつた。そしてまたそれは、殊に、欺かれた夫の復讐であり、逃げた雌を再び掴えた雄の誇りであり、盗まれた所有物を取り戻した所有者の本能であつた。…

　盲目の塊になつて、彼は打ち倒した獲物の上にのしかゝつて××を滿した。ポオルは意識を失つてゐた。子供は眼を覺まして火のつくやうに泣き出した。それでもマルチネはぶつぶつ言ひ乍ら尚も、次第に官覺と恐怖とをとり戻して來る、無氣力の肉體をもみ碎き、もみ碎きしつゞけた…

誤植訂正

素子

　女人藝術十一月號素子の通信記事について、湯の花澤を見ると血が云々…といふ私の全く知らない言葉が二行入つてゐます。あの通信は、私が神經衰弱だか肺病の初期かのやうな變な病狀で、衰弱が劇しく、苦しさの餘り療養さして貰ふ事になつて、長谷川さんのすゝめもあり、二十日ばかり芦ノ湯へ行つてゐる時に社へ出したものです。もと／＼雜誌へのせる可き性質のものではないと思ひますが、聞けば長谷川さんの御好意でお入れ下すつたとか、何にせよ私たちが見て血を躍らしたり、心を引しめたりするのは湯ノ花澤の景色などではない。もつと別のものでなくてはなりません。つまり階級の敵と階級運動の敵に對してでなくては！

　それについては實賤がもつともよくそれを示すでせう。私の覺えのない箇所は誤植だといふ事ですが、誤植とすれば實に偉大？なる誤植で、訂正の價値は充分あると思ひますから、他のことについては機會があれば正面からはつきり書くつもりですが、とりあへず誤植訂正をします。この訂正文にはあんな大した誤植などありませぬやうに。

　右誤植は下段四頁前の讀者通信小菅氏の四行目が間違つて（同文）はひりました、もとより校了には消取てあつたのが工場の手落で入つたのです。ある親しみであゝした書信を今迄入れてゐた例でしたのに妙な訂正で讀者に對しても手落を恥入ります（時）

一

氣紛れ

小寺菊子



自動車が濱町へさしかゝつたのは夕方六時ごろだつた。待合奇樂の前でとまるとすぐ、待ちかまへてゐた年增藝者の〆香が、カラ〳〵と濡れた敷石を薄齒で走つて出る。

『ようこそ、さつきから隨分お待ちしてゐましたわ。』

肩からずり落ちさうに黑の羽織を引かけた〆香は、ふつくらした頰にキュッと深い笑くぼを一つ見せて、今車からおりようとする日本畫家の賀川欒州氏にこなしだけは叮嚀な會釋をむける。

『やあ、早いなあ、ご苦勞、ご苦勞！』

賀川氏はちよつとうなづいて微笑する。ぞろ〳〵と皆はそこへ下りた。

『お待ちいたしてをりました。さあ、どうぞ！』

美しい女將が玄關に立つてゐた。待合などいふところへ來つけない光子は、物珍らしげに女將の粋な姿に眼をとめた。少し根下り加減に結つた低い丸髷に、水色の手柄をかけてゐる、そのすつきりとした白い頸脚が耳のうしろに鮮かに流れてゐる。

『すぐお二階へどうぞ！』

一人一人の外套がする〳〵とうしろから脱がされる。とん〳〵と滑らかな梯子段をのぼつて、賀川氏からさきに、眩しいほど明るくした十疊の座敷に通る。床の間よりに紫檀の卓が二つならべられて、紺地の絞り羽二重の坐布團が客の數だけおかれてあつた。光子は端の方へ坐つた。誰の顏にも好奇心に張りつめた微笑が、空氣枕のやうに頰一杯包まれて、ぢつと忍び笑ひをしてゐるのだ。

『吉原へ出かけるなんて、隨分奇拔だわ』

そんなとこへのこ〳〵遊びに行かうとする人たちを、それも飮んだあとでの出來心といふではなし、前もつて計劃的に實行しようとする今夜の連中を、今こゝで野暮くさく批判する氣でもなかつたが、不斷は友達と一しよに廢娼問題を口にしたりして、遊廓といふものゝ滅亡を望んでゐるだけに、目的は見學であつても、表面遊女たちの『お客』の一人となつて、ざわ〳〵した仲間に加つて行くのが、何か心持氣が咎めることだつた。然し、一度は彼女も妓樓といふところを見ておきたい興味を人並に持つてはゐたのである。

皆はお茶をすゝりながら、擽つたいやうな微笑を投合つてゐる。

地味なお召に黒の羽織のよくうつる、ぼつてりした姿の〆香は、床の前に袴の膝をきちんと折つて坐つた賀川氏のそばへ行くと、改めて挨拶をして、それからダイヤのチカ〱光る片手を疊について、ぐいと自分の分厚な膝をすりよせながら、銀杏返しの兩輪をみんなこつちへ見せるほどの角度に首を傾げて、一々こくり、こくりとうなづいては、低聲でひそ〱話し出した。

ちよつと手持無沙汰に坐つたあとの連中は、ふう〱とまづ煙草をふき出したが、〆香の話しぶりに興味をひかれるので、みんなでぢつとそつちを見てゐる。話の進行と共に賀川氏の厚みのある頬の筋肉が自然と布袋のやうにふくらんでくる。二人の話聲がだん〱とはつきりして來た。

『よろしい、よろしい、とにかくお前に任せるから巧くやつてくれ。奴巴の方は萬事都合よく行つてるんだらうね。』

てか〱として童顔が機嫌よくくづれた。

『大丈夫ですわ、ちやんと巧くいつてる筈ですから、お夏つあんもお定さんも來るさうですし、お幇間は忠七つあんに猫八つあん、それから年増が二三人、若い妓が五六人、雛妓が三人ほど、まあそんなことにしときましたが如何でせう？』

つけ根に凹みの出來てゐるむつちりした指を、ひとり、ひとり折り曲げて見せて、〆香は心得たやうに合點合點をしてゐる。

『さうか、ではよからう、よし〱。それにしてもあつさり此方で皆の腹をこさへてく方が好いだらうね。それとも奴巴で食ふことにするか？』

『その方がよござんせう、けど、まだ、あなた、時間がたつぷりございますよ、ともかくも一本つけませうね。』

〆香が皆の方へ笑顔をみせて、さつと立つて行くと、入れ代つてグリーン色の羽織を着て七三に結つた蔦葉と、島田に結つた眼元のほつそりと美しい淡藤色の梅龍とが、ニコ〱しながら上つて來た

『今晩！』

『今晩！』

疊に指さきをついて、上眼で賀川氏の方を見るなり、

『あたい、今晩は嬉しくて爲樣がないわ、先生！』

二人は一かたまりに體を押しつけあつて坐つた。

『さうかい、思ひが叶つたんだからね、はつはつはつ。』

今夜の吉原行きを一番最初賀川氏にねだつたのが、此二人である。光子は珍らしさうに『藝者』といふ昔から存在する『職業婦人』たちの、物にこだはらない姿をながめた。

『これでみんな揃つた譯かな？」

『さうね、一人、二人、三人――とみんなで七人でせう先生！ これで好いんだわ。』

男は賀川氏の外に門弟の新進久保田敏郎、彫刻家の大江信吉と三人、女は信吉の妻の光子と、信吉の妹の照子（ある實業家に嫁してゐる）と、あとは三人の藝者とそれだけだつた。光子は賀川氏の姪である。

『いやな伯父さんね、藝者たちにせびられて吉原へ行くなんて……』

光子は冷笑したが照子に話すと、照子はすぐに贊成した。そして彼女は又良人を誘つたが、

『女房と一しよに女郎買ひに行くなんて、僕あそんな馬鹿げたことは御免だよ。』

それで七人といふ人數になつたのだ。

十幾年前に當時世間から時代の先驅者として注目され、『新しい女』と云はれた女たちが吉原へ行つたとか、五色の酒を飮んだとか云つて、喧ましく問題にされたものだつたが、その頃まだ女學生だつた光子も、何となくそんなことに若い心をひかれてゐた。けれど、まさか今夜のやうな機會が自分にめぐつて來ようとは思はなかつた。彼女はこの二三日氣分が妙にそはそはした。それは、第一に彼女の夫と同行であること、男の客も女の客も華魁を一人づゝ招くこと、そしてその華魁の部屋へ各自に引取ること、そこまで徹底した見學だときいたからである。

『部屋へ入つてからどうするんでせう？』

『何の話でもしてをれば好いぢやないか、とんだ好い材料が得られるかも知れないよ。』

光子は若い文章家だつた。

『女はそれで好いとして、男の方たちはどうなの？　さしづめあなたはどうなさるのよ？』

眞面目とも冗談ともつかない氣持で、光子は擽つたい眼つきで信吉をちつと見た。

『そんな馬鹿なことをきく奴があるもんか、呆れるね。』

『だつて、まさか、そんな變なことなんかありはしないだらうと思ふけれど……』

『では、聞くまでもないぢやないか、獨り者ぢやあるまいしね……』

『でも、ちよつと、なんとか約束しとかうぢやない？』

『約束？　コドモみたいなことを云ふもんだね。』

『丸で、氣にならないこともないんだから』

『馬鹿ッ』

二人は一しよに突拍子もなく、からからと間ぬけに笑つてしまつた。話はそれつきりで切れてしまつたのだが、彼女は初めて見る吉原よりも、今は遊女に對する自分の夫の態度に——一人の男性としての夫の態度に、興味が湧いて來た、と云つていゝほど、不思議な愚さの中に浸つてゆく自分を感じたのである。

二

『あんまり早くあんなとこへ行くのは氣がきかない。』

といふ譯で、奇樂で一時間あまりも酒の時間がすぎた。蔦葉も梅龍も光子や照子のやうな素人の奧さんと一緒であることが幾らか窮屈らしかつたが、然し、彼女らには別の優越感があつた。（世にも氣の毒などん底生活をしてゐる遊女たちよ！）二人はいそいそと樂しさうだつた。

二臺の自動車に分乘して、雨上りの濡れた街を濱町河岸から淺草橋に出て北へ北へと走る。光子の車には照子と蔦葉と梅龍とがゐた。光子は此二人の藝者たちとはたつた二度の顏馴染にすぎないのと、不斷からこういふ女達とは丸きり交際の緣がないので、どう話をしむけて好いものかさへ分らず、爲方なしに默つてクッションによつかゝつてゐるが、蔦葉のちよつと意氣惡げに光る一重眼瞼の眸が夫と同行して吉原へ行く彼女に特殊の觀察を下してゐる。それで光子もちよつと敵愾心のやうなものが起つて、いくら素人だつてあんまり野暮な奧さんに見られたくない見得がある。つれ添つて八年、自分以外の女に指一本ふれたことがない——と盲信してゐる夫が、今夜のやうな機會にのぞんだからつて、彼の情操にみぢんの疑ひをもはさむ餘地がありえない、だから蔦葉に對して寧ろそれほど自分

の夫は高潔な男性であることを吹聴してやりたい位なのである。

『こちらの奥さんは旦那様と御一緒で、ちよいと變つてらつしやるわね、あたし感心しちやふわ。』

『だつて、兄さんはそんなこと大丈夫の人よ、迚も大眞面目なんだから、あつはゝゝゝゝ』

照子は至極明るく陽氣である。彼女は此藝者たちとは、すつかり馴染んでゐるのだつたから。

自動車は昔の十二階裏のぬかるんだ道を走つてゐる。雨に濡れてつやゝゝした灯の輝く田中町からおはぐろどぶのあたりを通るとき、一寸震災當時の話が出たが、今更なんの感傷もなく、彼女らはけろゝゝとしてすぎる。五月初旬の靑葉の微風が、快く車窓を打つて、ときゞゝひどく振動するたんびに、光子と膝頭らを突き合してゐる二人の藝者の方から、濃い白粉の香りが仄かに匂つてくる。

以前なら吉原行の人力車が威勢の好い掛聲で、輕快に駈けてゆく通りだつたが、今は圓タクが風を切つて疾走してゐる。光子は東京へ來たてに、まだ十七の小娘だつたが、世話になつてゐた賀川の叔母と一しよに、根岸からわざゝゝ淺草の酉の街へ出かけて、序に吉原見物して以來、もう久しく近よつたことのない場所である。そのころ吉原では遊女が眞紅なあくどい打掛姿で、しやぐまの大きな髷を結び、ずらりと浮世繪を見るやうに店を張つてゐたが、ある者は裾をひいて格子戸につかまり、キイゝゝ聲で客をよび招き、傍へよるものに行成長烟管を貸してゐた。もし客が素氣なくそこを放れると彼女らはあたり憚らぬ卑しい罵詈を背後から浴せかけた。

妓樓の入口に立つてゐるポストみたいな箱の中からは、下劣な一人の男が貧相な顔を出して、いきみ聲を枯らしながら、輕業見物の客でも引くやうに、頻りと叫んでゐる。その妓夫とよばる男に摑つて、否でも應でもするゝゝと無理矢理引摺り上げられてゆく男！　店を張つた彼女らの背後にときゞゝ『初見世』の紙片がぶら下つてゐること、それらの光景が光子の純眞な處女性を極度に傷つけた。世の中にはなんと不思議な稼業もあるものだ――恐るべき罪惡、由々しき人道問題――として、光子は戰慄したものだつた。

然し、今夜の光子はそんな若々しい公憤よりも、無智な彼女らをそこまで逐ひ込む社會制度の矛盾が呪はれる時代になつてゐる。

大門の入口の明るい外燈の下に、柳の嫩芽がゆらゝゝと悩ましくゆれてゐる。昔の見返り柳が焼けて、新に植えつけられたものだらうか。奴巴は右側から四五軒の引手茶屋である。廓の中は道路の中央にぼんぼりが澤山ついて、菖蒲の花が一杯咲いてゐる――それはみんな造花だつたが――非常に賑はつて素見が可なり出てゐる。茶屋の軒にも可愛らしいほゝづき提灯が吊されてお祭りのやうだ。

『今晩はちやうどお節句でございまして、ほんとに好い折でございましたこと、さあ、どうぞ……』

今時珍らしく眉あとを靑々と剃り落した四十五六の美しい女將が出迎へた。みんなはお尻でもはたかれたやうな氣持で、とんゝゝと二階へ駈けあがつて行く。

三

――粋な丸髷、浮氣な島田、もとは無邪氣な、蝶々まげに……

幫間忠七の咽喉は聽手を恍惚とさせるに充分な魅力を持つてゐる。

『あの咽喉に惚れて小勝姐さんがたうとう今のおかみさんになつた

のよ、奥さん！』

柳橋の名妓小勝の艶話を蔦葉はそつと光子にさゝやきながら、今の都々逸を紙片に書きつけてゐる。

『さ、こんどは旦那いかゞです、一つ唄つて、うたつて陽氣にやりませう。今夜はちやうどお節句鯉のぼり、戀に上下はないわいなあこれ、もうし、こちの人え…ハイお酌を…』

つんと衣紋をぬき、首を左右に振つて、お召の袂を輕くつまみあげてお酌をする忠七のおどけたしぐさが皆を悦ばせた。小扮りな彼は八字眉をさげてしな／＼とよく踊り、よく唄つた。年増の藝者たちも唄ふ、彈く、雛妓たちも踊る、背の高い猫八が活辯のまねをする、落語をやる。彼等は一生懸命につとめるのだつた。けれど、賀川氏を除いた外、信吉も敏郎も吉原は初めての場所なのと、なんて云つても先輩の大家であり、一人は妻の伯父に當る人の同行であるところへ、おまけにぞろ／＼と女づれまで一緒なことが、若い彼等の遊戯本能を滿足させないものがあつた。それで、容易に浮いた空氣が醸されなかつたのだが、一時間もたつと、大分醉もまはつて調子がそろつてくる。

敏郎が初心な坊ちやんらしく扇子で赤い顏をかくして、音羽屋の假聲を出して、若い妓たちによう／＼とはやされなどした。然し、追分の一つも唄へる信吉が一向うたはうともしないで、只ニヤ／＼してゐるだけなのが、光子にはちよつと物足りなくもあり、又そんな空氣に到底融け合へさうもない彼の生眞面目さに、彼女の信頼を保證される安心もあつた。その一方では、こんな場所で人並に浮かれてみせる乾燥いだ彼を眺めたのしんでみたい――そんな年増じみた氣持もないではなかつたのだが…

臺の上にならべられた大平鉢の料理を、女たちは少しづゝ小皿にとつてはたべてゐる。光子は二つ三つ飲んだ酒に頰がぽつぽつと上氣した。

『お節句のお祝菖蒲をむすびませう。』

お定の娘といふ年増の痩せぎすな藝者が、女たちのうしろへ廻つて、一人一人の髮に細く裂いた菖蒲の葉を蝶々に結んだ。光子もオールバックの髷のはしに結んでもらふ。蔦葉も梅龍も此郞の藝者たちの前では立派に『お客』になりすまして酌をうけてゐる。世話役のメ香はこゝでも貸座敷との交渉や何かで忙しかつた。

昔、紅葉山人が贔負にしたといふので、今でも毎年秋の紅葉祭にいつも招かれてゆくといふ老妓お夏は、七十とも見えぬ元氣さで、お定と一しよに上つて來た。二人とも吉原きつての唯一の名妓だがお夏はさすがによく見ると可なり老ひ込んでゐるけれども、お定の方はまだ六十そこ／＼か、しやんとした素晴らしい體格を持つてゐる。二人は客の方にちよつと挨拶をすると、ずらりとならんだ藝者たちのまん中へ割り込んで坐つた。いつのまにか二十人近くの藝人がそろつてゐるのだつた。

光子は猫背の一人の雛妓にさつきから感傷的な眸をそゝいでゐた。病身らしく脆弱さうなその少女は、壁のやうに濃い白粉を顏一面から首にかけて塗られ、飾り人形みたいに胸高々と堅い帶をしめあげられ、眠さうな眼を無理にあいて客の前に突き出されてゐる――風に弄ばれる木の葉のやうに、そのいたいけな弱々とした姿が、光子の感傷を誘ひ出すに充分なものだつたから。

『こんな感傷はもう古い／＼。』

と我から拂ひのけようとしても、營養不良らしい窶れたその少女が、やつとはあ〱と呼吸をしてゐるので、もしか肺病なのぢやあるまいかとさへ疑はれて、物悲しくなるのだ。

　お定の音頭で廓名物木やり節がはじまるお定の聲量は實に豐富なもので、一糸亂れない美事な調子を保ち、流れるやうなリズムで、高く低く息のつゞく限り長く〱唄ひつゞけられる。

　お客は感に堪へて謹聽した。おそろしくしんみりした氣分を醸し出す。それが可なり長いことうたはれた。お客の氣分が廓情緒といふのか、妙にうらさびしい哀愁の中に、强ひて沈ませられて行くのだ。何か泣き出しでもしさうな氣持でさへあつた。光子はもう此儘で引擧げてもよい、と考へてゐた。

『先生！　どこにいたしませうか、大きいとこつていふと、不二樓か稻辨、それから角えび、とこの三軒のうちですが……』

　〆香は賀川氏と忠七のあひだへ坐つて、そつと相談をはじめる。

『なるだけ別嬪の多いとこがよからうなあ、どうだ？』

『さうですね、それだと、やつぱり不二樓ですわね。』

『さうです、さうです、まあ美人揃ひつて云へば、不二樓ですな、こゝならまあ大丈夫粒よりですよ。』

『ではそこにしようぢやないか、お前、巧くやつてくれ！』

『ハイ、よろしうございます。』

　〆香は又とん〱と階下へおりて行つた。それを聞くと、光子は忘れものをふつと思ひ出したやうにハツとした。彼女はぽつ〱とほてる顏に風をあてようと、手摺りへ出て見た。廓の街には人がぞろ〱歩いてゐる。紅い軒提灯がなまめかしくゆらめいて、三味線や太鼓の音がそちこちから聞える。自分の背後にもまだ盛んに彈いてゐる。藝者たちが代る〲に唄つてゐる。いよ〱妓樓へ乘り込む前景氣なのだつた樽の底でも叩いてゐるやうなその埒もない空騒ぎが、變に人生を暗く佗しくさせてゐる。信吉の顏にもそんな表情が浮んでゐる。

　お定は殆んど一人でまだ唄つてゐた。彼女の娘である藝者の方は病身らしいけれども、お定は血色もよく、でつぷりと脂肪肥りにふとつて、利かぬ氣らしく强さを眉間に現はしてゐる。六十になつても七十になつても、客の坐敷へ出て商賣の出來る藝者といふ『職業婦人』の面白さを、光子はつく〲と眺めた。

四

　もう足取りも大分危なつかしくなつてゐる老妓お夏の手を片方にとり、片手を牡丹の花のやうに着飾つた例の脆弱な雛妓と握り合はして、光子は仲の町通りを歩いてゐた。さうやつて妖しくもざわざわとした色町の夜を表面だけでもふら〱した夢ましい氣持で歩いてゐると、これから色の修業を積まうとするまだ戀の芽もろくに吹かないやうな幼ない美少女の掌からさへ、何か操られるやうなむづ〱とした性的官能をそゝり出す遊戯氣分の刺戟を感じて、光子は思はずキユッと彼女の薄つぺらな手を握り〆めてみたが、片手は握つてゐるもう血の氣をすつかりなくした、七十年の生涯を色町に浸つて、一代の名妓と唄はれ、愛も情も浮かれ男のためにから〱に枯れつくした、カサ〱と萎びきつたお夏の老手の冷つこい感觸に浮氣稼業の一代記を今歴然と兩方から見せられたやうで、悲壯な哀感が光子の胸に湧きおこるのだつた。光子はお夏の皺苦茶な手をもしつかりと握つて、心から勦はりたい思ひだつた。お夏は腰を屈

めて光子に凭れるやうにして歩いてゐる。

三人の男たちは若い藝者たちにそれ〴〵案内されて、もう疾にずん〳〵行つてしまつた。光子はだん〳〵と妙に緊張して來た。不二樓まで行く道をあつちからもこつちからも、皆別れ〳〵に歩いてゐるのだが、昔の張店時代と同じに、今夜は人出が一杯で、エロチックな肉慾の香が鼻にしみてくる。甘酸つぱい、しつとりした空氣が廓中に漂つてゐた。ほゝづきや、線香花火や、飴(あめ)やなどの夜店も出てゐる。遊女たちの寫眞を覗きに入る若い男の群が、げら〳〵ふざけてはもつれ歩いてゐる。

不二樓は素敵に大きな妓樓だつた。ピカ〳〵光る大玄關に紅鼻緒の麻裏草履がずらりと向ふむいて列んでゐる。皆はそれを穿いてしやあ〳〵と二階へ上つた。

二室打通しにして、客は窓際に陣どつたが、光子の右手に敏郎が坐り、その先が信吉だつた。敏郎は若いだけに迚も愉快でたまらないといふ風である。一緒に全部ついて來た藝者達は、向ふ側にならび、そこで又賑かに唄つたり踊つたりして座興をすゝるのだつた。然し、賀川氏が皆を遊ばせるために、頻りと無駄口等をきいて努めて見せるだけで、敏郎も信吉も實に野暮臭く照れてゐる。仲居が入つて來て〆香と囁いては出たり入つたりはじめる。そんな事に殆んど無關心な調子の老妓お夏やお定は、聲だけ無暗と張りあげて、商賣なればこそ單なるお務めに馬鹿景氣を添へてゐるに過ない。

『華魁は殿方の相方にしか出られないつて云ふんですけれど、ねえ先生！　どういたしませう、御婦人がたの方は……』

〆香がそつと賀川氏に云つたのが聞えると、

『あら、それぢや初めの約束とちがふぢやないの？　どうしていけないのよ。』

『つまんないわねえ、あたしたち、それが目的で來たんですもの……先生、なんとか仰しやつて頂戴よう！』

『ねえ、つまんないわ、それぢや……そんなんなら、何もわざわざ先生にお願ひしないんだわ、ねえ姐さん！』

照子の不平につれて、蔦葉も梅龍も急に眉をさげて駄々をこねはじめる。梅龍は細い首を伸したり縮めたりして肩を提振り出す。光子は然しそこまで無理を云ふ氣紛れもなかつた。

『もう一遍掛合つてみたらどうだ、ちよつと部屋へ入つてみたいといふんだらう、只それだけの事なんだからね、構はないだらう。』

『さうして頂戴よ、ねえ姐さん！』

『こゝの家ぢや、まだ一人一人の部屋つてものがないんですつて、何しろまだバラックみたいなんですからね、皆一緒のたまりにかたまつてるんださうですよ。』

『そんなら。自分〳〵の定まつた部屋でなくたつて好いぢやないの爲方がないから。たゞ一寸から話でもしてみたいだけなんだから』

歌舞伎芝居で見る昔の白拍子や、世話劇に出て來る小春や夕霧などの濃艶な部屋の情緒を聯想して來た女たちは、お互ひに顔を見合はせて微笑した。つや〳〵とした飾り簞笥があつたり、紅い友仙のかゝつた鏡臺があつたり、磨き立てられた長火鉢、てか〳〵とした紫檀の茶棚、衣桁にかけられたきらびやかな打掛、白粉よごれのした縮緬の夜着、媚めかしい男女の姿態を描いた屛風、あらゆる淫樂を恣にそゝり出す話術、技巧、あらゆるエロ的尖端を描いたそんな空想の捕虜になつて來た女たちは、その部屋のヒロインである、立膝をついて紅い長烟管をくはへた色の世界の女王と、まづどんな

會話を交はしたものか？　そしてどういふことをすればいゝのか：
　鈴木主人の妻が男裝して白糸の許へ行つたことまで幻に浮べるのだつた。それは悉く自分たちの同性の誇りを傷つけ虐げるものであることさへも忘れたやうに、今はその憐れむべき同性を慰み弄ばふとでもするかのやうに、藝者たちは振舞ふのだ。
　三人の男はクス〳〵笑ひ出した。まもなく仲居のしらせがあつてそれは丸で錦繪からぬけ出して來たかのやうな大きな髷の華魁が三人、裾を引き摺つてしやなり〳〵と部屋へ這入つて來た。みんなはびつくりした。紅い打掛の小褄へ輕く片手をかけ、片手を懷にして肘を張り、馬鹿げた大盡遊びをして騷いでゐる今夜のお客を物色するやうな眼つきで、客と藝者たちの方を一目で見られる正面の席へずらりと坐つたものだ。
　第一がお職女郎で小紫といふ二十七八の、さう優れた容色ではないが、どこか確りとした氣性が現はれてゐる。二番目は糸錦といふ二十三四の、お職よりはずつと好い顏で、鼻筋の美しい女である。三番目は花奴といふ二十前後の、これは一番容色よしである。
『ちよいと、三番目のひと小原小春にどつか似てるわね、どう？』
『さう、よく似てるな、こんなとこにおくの惜しいなあ。』
　光子は隣りの敏郎とさゝやいた。敏郎の視線が花奴につよくそゝがれると、向ふでも凄まじく妖艶な默契の一瞥を此方にむけて、幇間忠七を介して、すぐに敏郎にビールのコップをまはしてよこした。面白がりの照子は、光子のうしろから手を伸して、キユツと敏郎の二の腕を捻りあげた。
『あつ痛ッ、燒いちやいけないなあ。』
　敏郎はわざと醉漢らしくよそほひ、行儀をくづしはじめる。
　糸錦――これは當然、信吉の相方と見られ、お職(しよく)は賀川氏につとめることは明白だつた。
『敏郎さん、あんたあのひと氣に入つちやつたんでせう？　夫(うち)に讓りなさいよ！私もあのひと好いと思ふわ。』
　光子はちらつとそんな冗談を云つてみた。
『うゝむ。』
　敏郎はわざとらしく首をふつてみせた。調子外れの異常な昂奮が、光子を一時仕立の粹人にしようとしたのだ。彼女は不思議な錯覺におちてゆかうとする自分を感じて、頭がすこしふら〳〵つとした。氣の毒な同性を辱めてゐるかのやうな自分と、それを樂しまうとするかのやうな自分と、二つの醜く憎むべきプチ、ブル的な自分を意識することは、なんとしても不快な、たまらないことだつた。
　然かも、夫の信吉が、あの遊女の職業的に強ひられた無智な媚を、潔よく紳士的に斥けてくれることを心から希ひ、そして、同時に又、一日も早くこんな泥沼の生活から浮び上ることをもとめ、優しい態度で勦はつてやつてくれるであらうことを願ふ光子だつた。
　然し、彼女は痛ましくもあまりに露骨にケバ〳〵しい遊女たちの姿を眺めてゐるに堪へられない。彼女らは單に資品としての我身を、我姿を、我顏を、色情の捕虜になつた、男どもに見せるために、あまりにも人形のそれの如く、只おとなしく從順に、今はなんら人間としての抵抗力をも持たないものゝやうに、あまりにも諦めきつたかのやうに、押し默つて坐つてゐるのだもの。オヽ、誰がなんとして正氣で、彼女たちのその慘めすぎる姿を正視出來ようぞ！
　十分ほどの時がそのまゝですぎる。
　仲居がちよつと部屋をのぞき、華魁たちに眼配せをした。すると

三人の生人形は自動器械のやうにすつと立つた。そして、再び錦繪の中からぬけ出してゆくやうに、しやなり〳〵と肘を張つたまゝのポーズで、靜かにそこから消えていつたのである。

變にうつろな濕つぽい、けれどそゝられるやうな雰圍氣があとに殘つた。

『では、先生、どうぞ……』

〆香が顏を出した。三人の男はニタ〳〵と妙な笑ひを浮べながら立ちあがつた。

五

光子はドキンとした。と、すぐに刑務所へでもひかれてゆく夫を仰ぎ見るやうな哀願的な眸をさへ凝らして彼を見上げた。彼は妻の方にわざと眼もくれないで、窈な微笑をのこしたまゝ廊下へ出て行つてしまふ。異樣なショックが彼女の胸を打つた。洋服にしないで着物で來させたことにまで、今は一つの皮肉を持つて感じられ、自分を嘲けられる。

光子はふら〳〵と立ちあがつた。その拍子に蔦葉が驚いて彼女を見上げた。

『奧さんは、まさか、旦那さんの跡を追つて華魁の部屋へ行くんぢやないでせう!』

蔦葉の眼がさう揶揄つてゐる。光子はなんとなく跋がわるく、暗い夜空を見あげて太息を吐いた。五月の新綠の匂ひが濕つぽい夜氣と一しよに、たまらないエロ聯想を誘つて官能にしみついて來る。

『ほんとにつまんないわね、私たちはどうするのよ!』

照子と、藝者たちもそれに合槌を打つて鼻を鳴らす。

『奧樣のお對手は憚りながら、不肖わたくしめがつとめまする、ハイ、奧樣、お一つお酌をさせて頂きます。』

『あんたぢや、駄目よ、忠七ッあん!』

照子に睨まれて、

『イヤ、これは痛み入ります。まつぴらどうぞ御免を……』

蜘蛛の子のやうにピタッと壘に額をつけて、兩肘を張つて見せる。滑稽な忠七を白々しいと思ひながら、笑はずにはゐられない。

『變な商賣もあるもんだ、こんなものも遠からず娼妓たちと一しよに影をなくすことだらう……』

光子はさう思つて眺めてゐる。

『さあ〳〵、こちらはこちらで一つ暢氣にやりませう、さあ、彈いて、唄つて……』

忠七が立つて踊り出す、三味線がじやん〳〵彈かれる。女客を相手に間のぬけた變に淋しい馬鹿騷が徒らに繰り返されるものだ。

『たうとう、あの人は華魁の部屋へ行つてしまつた、あんなに平氣で、私をこゝにおきながら……』

キリつと鼻筋の通つた、少し唇の厚い、放埒な血で燃えた眸で、ぢつと職業的手管の流し目を信吉にそゝぎながら、糸綿はあの白い腕を彼の首に卷きつけて、どんな艶話をしかけるのか? 男はわざと好い氣持さうにそれをきいてゐる……そんな舊式な殺し文句なんか聞えないよとかなんとか云つて、ぢらすまねでもしてゐることだらうか?

あんなに生眞面目な人でも、そんな場合にのぞんだら、性道德を無視してちよいと男並に浮氣根性が起るものだらうか?

夫婦して今夜は何と愚しく馬鹿〳〵しい試煉にあつてゐる事！

光子はぞつと惡寒を感じた。三分と五分と、時がすぎてゆくほど、光子の胸を不穩にした。

さつぱりした我儘な性質の照子は光子のそんな氣持に丸で頓着なく、自分たちにはせめて家の中だけでも見せてくれないか、と〆香を責めてゐる。

『ほんとだわ、ねえ奧さん、でなきやあんまりつまんないんですもの、よう姐さん、も一遍交渉して來てよう、早くさあ…』

蔦葉は卷烟草を片手にしながら、〆香の膝を突つきはじめた。

『さうですね、ではちよいと待つて下さいな、なんだか面倒のやうですけれど――今夜はまあ特別のお客樣のこつてすから…』

〆香は爲方なしといふ風で廊下へ出ると仲居と改めて相談しはじめた。

『ではね、家の中だけ御覧になつて好いといふことにしましたから…』

『まあ、よかつたわね。』

女たちが悦んで立つたときに、出て行つてからまだほんの十分ほどしか經たないのに、賀川氏が微笑をふくんでもう戻つて來た。

『あら、先生！ もう歸つてらしつたの？ なんてお早いのよ！』

『きつとあのお職さんにお祝儀だけで退却してらしつたのね』

『さすがに先生だわね、お見上げ申してあげますわよ。』

『さう來なくてさ…』

凱旋の將校を迎へる兵士のやうに、女たちはから〳〵と快く笑ふのだ。

『野暮なお二人さんはまだ歸つて來ないのね、どうしてらつしやるんでせう？』

『では、どうぞこちらへ！』

仲居は女たちを案内した。廊下は長くつゞいて、一度出ると中庭があつたり、橋が架つてゐたり、瀧が落ちてゐたり、燈籠が見えたり夜目にははつきりしないけれども、なんだかさも幽邃な庭園にでも圍まれてゐるかのやうだつた。兩側の部屋〳〵にとき〴〵紅鼻緒の高い麻裏草履と客の草履とが、向ふむきに揃へてある。藝者たちはお互ひに肘を突つき合つては苦笑する。舌を出す。

一體どの部屋に信吉と糸綿とがゐるのか、敏郎と花奴とがゐるのか、それは分らう筈がない。光子は自分の夫を今まで神樣のやうに盲信して來たお人よさがひし〳〵と痛感されたり、今夜の彼の圖々しさが憤慨されたり、草履のならんでゐる部屋〳〵を、一々亂暴に開けつ放してやりたい激情が起つたりして、他の女たちのやうに、此社會に對する單純な觀察だけではすまされない。氣がしてくるのだつた。

この部屋の戸をコツ〳〵叩いてやらうか？ 大切な夫を穢ない泥沼へ突き落してしまつた？

もう二度と元の氣持で夫婦生活がつゞけられはしない！

如何に粹興だからつて、衆人環視の中をよくもしやあ〳〵と行けたものだ！

破廉恥！ けだもの！ 嘘つき！

だが、然し、光子は自分の夫を勿論本氣で疑ふ氣持などみぢんもないのである。彼女は變な歪められた硬直した感情で、皆と一しよに斜めに渡された狹い板を踏んで行くのだ。

ふと向ふから、思ひがけなくも花奴が、ちよいと小褄をとつた花

奴が、ニッコリと美しい媚笑を、それは忍びやかな思ひ出し笑ひでゞもあらうか、なよ〳〵としたしなを作つて、下頬に笑ひを浮べながら、今ぞろ〳〵と敵の陣屋を遠征に行くとでも云つた調子の女たちを認めると、すぐにつゝましく眼を伏せ、恥ぢらふ風情で歩いて來た。一枚の狭い踏板を渡るのだから、こちらは一人一人、體をわきへねぢるやうにして、さもそれは忌むべき黴菌のかたまりにでもふれるかの如き潔癖さで摺れちがふのだつた。

花奴は然し、あでやかな笑みを湛へたまゝ、この嬌慢な女たちに對し、心からの憤りをおさへるやうにして、おとなしくしとやかな輕い會釋を殘して行つた。光子は逢つてはならない氣の毒な人に逢つた氣持で、花奴のしとやかな態度に同情が湧いて來た。

『一日も早く自由廢業してしまひなさいな、あなたもさぞ苦しい事情からこんな所へ來たんでせうからね……』

さう云つて心から慰めてやりたい氣持で一杯だつた。反感など少しも起らない。

然し、他の女たちは花奴に出會しただけで、もう幾分かの復讐？を果しでもしたやうな快感でお互ひにをかしさを怺え、手を握り、肩を押しつけ、兩頬を一杯の嘲笑で風船玉のやうにふくらまし、揚句に咽喉の奥で、くつ、くつ、くつ、くつくゝゝゝとさも仰山らしく打笑ふのだつた。あるものは袖口を唇にあて、あるものは半巾で口をおさへてゐる。光子はむしろ此女たちの無遠慮さに怒憤を感じるのだつた。勿論笑ふことも泣くことも出來ない氣持だつた。

『あのひと、どうして今頃こんなとこを歩いてゐたんでせう？　をかしいわね。』

蔦葉が云ふ。敏郎の相方であつた筈の彼女だつたのに、ひとごで何をうろついてゐるのだらう！それは光子もさう思つた。

と、その時、向ふの廊下にどてらを羽織つた信吉の姿が見えた。

『あら、兄さんがあんなとこにゐてよ、どうなすつたの！　あつはつはつはつ。』

快活なブルジョア夫人照子は、いきなり笑ひ出した。

『ぞろ〳〵お出でなすつたね、さうだらうと思つてさつさと城を明け渡した。さあ御覧なさいだ、實に殺風景なもんだよ、こゝだ！』

女たちはかたまり合ふやうにして左へ曲り、少し行くと開け放たれた一室の前に來た。兩側とも壁に仕切られた四角な部屋に、仄暗い電燈がぽつんとぶら下り、色彩の乏しい衾が一つ侘しげに卷くられてある。何一つエロチックな媚めかしい裝飾も調度もあるわけではない。極めて冷やかな事務的すぎる硬直な感じである。恐らくどんなに猛烈な情慾に駈り立てられて來た青年であつてさへも、此陰慘な空氣の漲る冷たい部屋へ打込まれたら最後、忽ちぞつと腦天から冷水を浴せられ、激しい侮蔑と自己嫌惡の反省に縮み上つてしまふであらうほどの、あまりにも乾燥しきつた部屋であるのだつた。

『まあ、こんな部屋なの？驚いちやつたわね、へい！』

女たちはおそろしく幻滅を感じてがつかりした。彼女たちが勝手に想像を逞ふしたやうに、今のさつき、此冷たさうな部屋で、あのあくどい扮裝の遊女と、あの眞面目な信吉とが、心にもない徒らな愛慾の場面を展開してゐたであらうなどとは、誰にそんなことが信じられよう！　光子の頭腦からさつきの我にもなく愚な邪推が霧のやうに快く霽れていつた。

信吉はぬいであつた袴を急いで穿き、羽織に手を通した。

『ちよいとお話ぐらゐなすつたの？』

蔦葉はそれでも藝者らしく、まだ信吉をいくらか疑つて、氣紛れなこの夫婦に何か彼女らしいユーモアを投げようと試みたが、結局あとはひとりでクス〳〵笑つてしまつた。

『あの花奴ね、どうしたんでせう、兄さん！ 今ごろこんなとこ歩いてゐたのよ。敏郎さん一體どこにゐるの？』

照子が云つた。

『仲居の奴が、まちがへて僕んとこへあれをつれて來たんだ、はゝはゝはゝ、敏郎君、どこにゐるかな』

『あら、ぢやあ大江さん、あなたんとこのとあべこべになつちやつたのね、あのひとの方美人ですもの、ちやうどよかつたんぢやないま？あ、憎らしいッ』

蔦葉は蓮つ葉らしく、ぽんと信吉の背を打つた。みんなは聲をあげてどつと笑ふ。一番美しい、あのしとやかな花奴が、それでは信吉のそばにゐたのか？ 道理でクス〳〵忍び笑ひして行つたつけ。

光子は又もや不愉快な聯想に囚はれさうになつて、ハッとした。

『勝手に想像するさ……』

彼はわざと面白さうに、只ニヤ〳〵して女達を焦らせるのだつた

六

やがて再び揚茶屋へ引取つて歸り支度にかゝつた。もう十二時に近い。敏郎が二人の雛妓と一しよにふら〳〵と歸つて來た。

『吉原土産』の紅い袋がいくつも自動車の中へ投げ込まれて、若い妓や、雛妓たちが大門外の交番の前に立つて見送つた。

『あゝいふ人達から見たら、私達はほんとに仕合せなもんねえ。』

自動車が走り出してから、蔦葉がしんみりと獨り言した。

一時間の後、郊外東中野の夜がしん〳〵とふけてゐた。寄葉の香りが快くのぼせた頭腦にふれた。光子夫婦は變に沈んだ調子で、お互ひに默つたまゝ家へ歸つた。

寢床へ這入つてもなほ、二人は口を利かなかつた。然し、光子はその儘いつものやうに平和な氣持で眠りにつくことも出來ないやうな氣持だつた。なんとか一言夫に云つて見たかつた。

『どてらなんか着込んで、なんだか少し變だつたわね。花奴とまちがへられて、あなたほんとに悦んぢやつたの？』

『…………』

『お袴はぬいであつたし……どうもなんだかをかしいわ……』

『…………』

『なんとか、ちよいときかせてよう！』

『話せないんなら、やつぱり少々變でしたの？』

『…………』

『どうして、そんなに默つてらつしやるのよう？』

『…………』

『云へないの？ 返事が出來ないの？』

『馬鹿！』

『では話して……』

『眠い〳〵、明日、明日。』

『うゝむ。』

『うるさい！』

そして、彼はそれ以上にいつ迄經つても一向進まないのである。

光子の方でもそんな謎は解く必要もないと、だん〳〵に訊くのも馬鹿〳〵しくなり。そのうちに自然忘れていつてしまつた。

婦人彙報

◇東京市電氣局の大整理決行

東京市電氣局では、十一月五日昭和六年度豫算の大綱を、發表した。それによると電氣局經濟は、最近極度にひつ迫し、電車、バスの乘車減收額は三百七八十萬圓に上るので、六年度には、思ひきつた賞與手當の減額、人員整理を行ひ、六年度の歲入額を二千八百餘萬圓に落す事になつた。即ち五年度の三千百四十萬圓に比し一割强の緊縮であるが、この豫算案の發表は、一萬五千の從業員に非常な刺戟を與へ、そのなりゆきは甚だ憂慮されてゐる。

◇木材の引火點調べ

いよ〱、火事季節になつたが、日本のやうな木造建築の多い所では木材の引火點を、調べておく必要があると云ふので、理化學研究所の眞島工學博士が木材を、一ミリ位の厚さにして、試驗した結果によると、一番引火しやすいのは、米松で新聞紙よりも早くもえるさうで、一番火の付きにくいのは、モミ、ついで杉、桂、ケヤキの順序である。

◇下級官吏に甚大の痛棒

昭和六年度の豫算編成に當り大藏當局では、その窮餘の一策として、既定經費の天引的削減を行ふ事になつたが、その中、各省人件費の天引的五分節約は、下級官吏のみの減俸に等しい結果を招くもので、奏任官、勅任官、親任官等上級官吏は、これによつて何の影響も受けぬに反し、その以下の多數下級官吏の蒙る打擊は大きく、かうした人件費の節約は、頗る不合理極はまるもので、各省會計當局のみならず社會の各方面で、その不當をならしてゐる。

◇農民の悲痛な訴へ

農村不況のため、二十餘箇村にわたる小學校敎員俸給不拂ひの事實や、"米一升で、敷島一個の物々交換等で、世間を驚かせてゐる新潟縣では、去る十月廿三日農會の代表者藤田才治氏等四十名が上京し午後四時半三班に分れて首相代理鈴木書記官長並に、町田農相、井上藏相に面會し、生產者から、米五百萬石以上を買上げ、農家の米の投賣を防ぐため、簡易な方法で一億圓以上の低利資金を融通した上で、從來農村に融通されてゐる各種低利資金の返濟をしばらく、猶豫を願ふ旨の陳情を提出した。

◇全國農會長大會

農民の窮狀打開の目的で全國農會長大會は、十一月一日午前十時から青山會館で開催され、近縣はもとより、遠く北海道沖繩の端しから馳せ參じた全國農會長は、二千五百に達し、全國道府縣農會長及び全國評議員會で作成した、主催者側の宣言、決議に基き、午後二時から、濱口首相、井上藏相を訪問陳情し、つゞいて、政民兩黨を訪問、その實現運動を試みた。彼等の回答を五千萬の農民代表は、聞くため、二日も退京せず、午前十時には數百名が丸の內帝國農會に、參集の結果、首相以下委く、その答辯要領を、得ずとして、政府の不誠意をこき下し、悲痛な農村救濟の叫びをあげた後實行委員八十餘名は、町田農相と會見し、政府に米の買上時期方法數量の明示を迫つた。

◇日本綠茶の誇り

ウラジオストツクからの、電報によれば、ソヴエート化學研究所は、今回日本茶から身體機能促進成分の摘出に成功した。この內容は未だ發表されないが、不老若返り劑として、顯著な效能のある事が、立證され、全身的機能の復活に效を有する點では、ホルモン劑を、凌ぎ、生產費は、ホルモン劑に比し、二十四分の一の安價であるとの事である。

◇學校騷動時代の現出

最近、全國的現象として學校騷動が非常に殖えあたかも學校騷動時代が出現したかの"奇觀がある。現在、東京においても、早大、日本女子大、女子英學塾、東京女子醫科醫專における、學校騷動が、世間の視聽を、あつめてゐる。中でも日本女子大の盟休事件は、去月十月二十五日解決したかの如く見へたが、學校當局の要求案に對する、不誠意な回答に、大學、高等學部の學生の"三分の二以上は、不滿を、もつてゐた所から、去る五日午前中に、學生大會を、ひらきこれを大會にかけた上、學校當局に突きつける事になつた。學生側ではこれをもつて、單に一女子大問題ではなく、全國女子專門學校の問題なりとして、これを機會に大學令による女子大學昇格を目的に、汎女子大學昇格運動聯盟を設立して運動をつゞける事になり、女高師、東京女子大其他にメツセージをおくり、應援參加を申込んだがこれは、女子敎育界の、重大事と目されてゐる。

◇國際聯盟婦人部の新設

國際聯盟協會では十一月二日國

際聯盟協會內に、婦人部を、新設する件について協議したが、多年の懸案の事とて、萬場一致で可決し、同部の規約を、決定し、部長は、本野久子夫人に決定、常務委員は、部長指名によつて、吉岡彌生、山脇房子、井上秀子、石井たま子、ガントレット恒子の五女史に決定した。

◇混亂した勞農議會

全國的無產勞農大衆動員の序幕戰として、各方面から注視されてゐた全國大衆黨主催の、勞農議會は十一月二日午前十一時から、芝協調會館に開かれ、全國の代議員、約六百名出席、官憲側の嚴重な警戒裡に開催され、開會の辭をのべた三輪書記長以下、登壇する者四十五名中三十六名まで中止を食ひ、十數名の檢束者を出した後提出議案の審議につゞいて、霧社事件に關する、緊急議案が、上程されると同時に、解散を、命ぜられ、議場は大混亂に陷つた。中ノ島中央公會堂において開催された、大阪における同議會も又、議會終了間近く、解散を命じられ檢束者數十名を出した。

◇除隊兵の就職を保證する法律案

除隊兵の就職問題は、失業者續出の折柄、重大な社會問題として陸軍當局でも、頭をなやましてゐる、當局では、出來るだけ歸農を奬勵し、又入營前の職業に、復歸を從慂してゐるが、近來事業の不振と、官業方面の缺員不補充とに祟られて、復職不可能の結果更に、圓滑に行かぬものである事が解つた。そこで陸軍省內の、兵役義務者及び擬兵待遇審議會では、此際を期し將來除隊兵の就職保證を設ける必要を認め、この程いよいよ具體案を同委員會に於て決定するに至つた。

◇鑛工業縣福岡の橫顏

百五十八の鑛山と、千五百五十四の工場を抱擁する福岡縣は、全國的鑛工業地帶として、第一流の位置を占めてゐるが、今年の世界的不況の渦中にあつて、特に工場鑛山不振の折柄、本年一月一日から、十月廿一日までの同縣當局の調べに、よると他の自然淘汰は別として、工場、鑛山の不況のため閉鎖、休業、操短を、行つたものが、百十ケ所あり、この馘首者は、男工四千七百二人女工三千三百三十人、合計八千三十二人と云ふ數字を示してゐる。

◇恩給法の合理化

緊縮政策による削減に、削減を加へられた來年度實行豫算約十四億圓のうちに、全然削減、整理を加へられず、その一割を占めてゐる恩給が、不景氣の折柄最近特に問題視され、合理化改正の機運が各方面に濃厚に動きはじめた。恩給法は、大正六、十、十二年と三度大改正を加へられたが、結果においては、增加への改正で、現在すでに、明治廿三年に比して、その額約二百七十六倍に達して居り、五十年後には、更にその倍額に、達するものと、みられてゐるので、行政刷新委員會では、恩給法改正法律案を第五十九議會に、提出する事に決定した。

◇東京市人口概數

國勢調査による東京市の人口概數は、男は百十一萬一千三百人女九十四萬一千百人合計二百五萬一千四百人であつて、前回（大正十四年）に比して、七萬一千三百人を增加したに過ぎず、大阪市の二百四十五萬人に比して、四十萬も少く、人口增加の點では全く一般豫想を、裏切つたものであるが、之は、地方からの出稼人が財界不況の影響を受け多數歸鄕したゝめであると見られてゐる。

◇ソヴエート流行をつくる

資本主義國の流行品は、斷然排擊せねばならないと云ふ見地から、今回ソヴエート國營既製トラストではソヴエート一流の流行品を、生產する事になり、モスクワに一年二回流行品選定大會を、開き流行品を、票決する事によつて、徹底的にブル流行界に反擊を、加へやうと云ふ方針である。

◇脫退者續出に勞藝の危機

勞農藝術家聯盟幹部の專制と反動化を鳴らして文戰劇場員卅一名は、十一月四日夜勞藝を脫退、新に眞正コムミユニズム演劇運動を標榜して無產者劇場を創立したが、更に五日勞藝聯盟員、黑島傳治、伊藤貞助、山內謙吾氏他三名等は、公然勞藝の解體と、文戰叩きつぶしを、聲明して脫退、前記六名の名で各方面へ宣言書を、配布したが、この爲再び勞藝內に分裂の危機が釀された譯である。

◇籾の自力貯藏奬勵

町田農相は、各地方長官に命じて、積極的に、農民自力による籾貯藏の確定案の作成を、奬勵させる事としてその旨十一月十日通牒を發した。尙農相の下へ同日までに自力保管の見込のついたと報告のあつたところは數縣に上り、約百五十萬石であるが、農林省としては五百萬石に達せしめる意向である。

編輯後記

山茶花の花が、咲きこぼれてゐる、しんめりした晩秋の午後、もう今年も、最後の編輯後記を、かゝねばならなくなつたと、今更の如く驚ろく。この一年間、日毎に高揚しつゞけて來た一つの波の中で、様々の試練と、困難に、戰ひながらも、女人藝術は、こゝまで歩んで來た。精算されるべき様々の夾雜物もあるであらう。又これを最善としない觀方もあるであらう。しかしすべて「いのち長ければ、のぞみ多し。」である。様々の希望にむかつてすゝむ女人藝術も又命長きものであらねばならない今年から來年のその長い歩みの途上で、感深く、私は、一九三〇年に別れをつげたい。（美子）

一九三〇年の最後の號だ。まだ紅葉しはじめたばかりの木々の葉を美しいものに眺めながらいつも繰返すくりごとの、もう今年も終しまひだ——十二月號、と云ふ字をみる度にそぞろ寒いものを背すぢに感じる。

回顧——に伴はれて思ひ出されるいろいろな出來事、第三年目に女人藝術が身に持つたところの確信と不安と緊張と大きな動き、あらゆる世の中の動きの渦の中にどう生きてゆく事が最適であるか、女人藝術をどう生かして行くのがほんとうであるか、世の中の人達は各々の氣持を無責任な希望の言葉の中に表はす。しかし女人藝術は決して同人雜誌ではないと云ふ事を知つて戴きたい。人生に對して目的を持つてゐるものが、その目的に對して邁進する時にあせるといふ事はどんなに無駄な精力を消耗させる事になるかといふ事はあまりにもはつきりと解り切つてゐることではなからうか、それを女人藝術に對してもみんなは感じて呉れていいだろうと思ふ、今度の秋の學生騷動その中にも女性の動きの多かつたといふ事は何か力强いものを私達に感じさせる。英學塾、至誠會、女子齒醫專、女子大學、みんなこん度の誌上に發表されてゐる。女の動き、之だけでも今號を意味深いものにするのではなからうか、と肩に力を感じる。（みどり）

最早や、今年の最終號を世に送り出すのだ。健やかに、力强く進展して來た我等の「女人藝術」は今年の後半期に大きな打擊を受けたが、益々意氣軒昂明日への飛躍にピチ〳〵してゐる。色んな經驗は、眞の强固な羅針盤を作りあげる根になるのだ。過去の一切を破棄して盛んなる意圖のもとに進まう。まだ〳〵山國に、野良に、同志が居るであらう。全國各地の聯盟員諸氏、どうか熱烈な御支持に加へて、倚一層の愛讀者倍加運動をやつて戴きたい。「女人藝術」を眞に生かして行くには皆さんの力によるのです。（美智子）

一九三〇年の最後の雜誌をもう出す時になつてしまつたのだ。この一年間、女人藝術にとつては多難な一年であつた。早くよいものとしたい、無産大衆の友として力强い存在でありたいと努力して來た私達の雜誌は九月に大きな打擊を受けた。重ねて十月に。その位の事でくぢけてたまるものかとその都度力んでみてもやつぱり出來るだけしか出來ない。それはくやしい事だ。早くもり蹄へしたいものだと思ふ。ここで一つ氣持をひきしめて一月號に取かゝりたいものだ。（優子）

今年の感想は？ と問はれたならば、鞘をはぢけて飛ぶ豆のやうに、何か止度もなくころげだしさうだが、拾つて見れば小さなつぶで、必きよう自分だけの小感概にすぎない。幸に「女人藝術」は多難多幸な中に健實な歩みを進め、誠意を認められて來た。これはみな貫き團結の力だ。微々たる一人の力ではなしあたはぬ、何人にもひれ伏したい忝けなさである。一九三一年には猶一層の進出と機運をとらへなければならない。みなさんの上にも女人藝術にも、よき年のくるやうに——（時雨）

聯盟員及愛讀者諸氏、年末年始の贈答を利用して、目覺めたる女性の心の糧である「女人藝術」を「女人大衆」を、他の品に代えて本誌を知らぬ人に贈つて下さい。

昭和五年十一月十五日印刷（毎月一回一日發行）
昭和五年十二月一日發行

送料一部壹錢五厘

定價	
1部	……40錢
6部	….2.40錢
12部	….4.80錢

▢誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
▢郵便切手代用は一割增の事。

發行者 編輯者 印刷者——長谷川ヤス
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂 東海堂 大東館 北隆館

發行所 東京市牛込區左内町三十一番地 女人藝術社
振替東京七五八二五 電話牛込(24)一七八九

昭和三年九月六日
昭和五年十一月
昭和　年十二月一日發行
第三卷 第十二號
定價金四十錢（送



ウテナクリーム

舶來品を凌ぐ最優秀の國産ウテナクリームの三種

輕快な淡化粧に、ヒゲ剃り後に雪印（乾性）
淡化粧用　肌の榮養美白用に月印（中性）
濃化粧、アレ止め夜の美肌に花印（油性）

バニシングクリーム	¥	·60
ハイゼニツククリーム	¥	.70

肌色ウテナ白粉

白粉は肌色時代です、其筈です最も自然なフレッシュな色合の喜ばれる一九三〇年です、純無鉛でノビツキのよい最も優れたウテナ白粉の各種類之こそあなたの求められる最高最上のものであらねばなりません。

水白粉	¥	.50
粉白粉	¥	.50
固煉	¥	.60

東京本郷
ウテナ本舗
久保政吉商店